九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—13—

小郡市所在薬師堂東遺跡の調査

上　巻

1988

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—13—

小郡市所在薬師堂東遺跡の調査

上　巻

薬師堂東遺跡（中央部）（北から）

序

福岡県教育委員会では日本道路公団の委託を受けて，昭和54年度より九州横断自動車道の建設工事に伴う発掘調査を行って参りました。本年度ですでに９年目を迎えておりますが，この間，関係諸機関・各位のご協力を得て小郡市・大刀洗町・甘木市・朝倉町・杷木町の遺跡の発掘調査が進捗し，一昨年度末までに調査の終了した鳥栖・朝倉間の一般供用が既に開始されましたことは，私共にとりましてもまことに慶賀の念にたえません。

本書は，昭和59・60年度に調査を実施した小郡市薬師堂東遺跡についての調査報告書であります。この報告書が，文化財に関する社会教育的活用において一端の役割を果たし，加えて学術的側面での発展に寄与するところがあれば望外の喜びであります。

調査および報告書作製の過程で，地元の方々を始めとする関係各位の皆様のご協力が得られましたことに深甚なる謝意を表します。

昭和63年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　竹井　宏

例　　言

1．本書は，九州横断自動車道路線内の遺跡について日本道路公団から委託されて，福岡県教育委員会が発掘調査を実施した，13冊目の報告書である。

2．本書に収録した遺跡は，昭和59年度から60年度にかけて発掘調査を行った薬師堂東遺跡（第6地点）である。なお，同遺跡内で同時に調査を行った近世高松家墓地の分については，今回は割愛し，別冊にすることとした。

3．発掘現場での遺構の実測には，中間研志・森山栄一・小田和利・日高正幸・平嶋文博・田中康信・宮田浩之・向田雅彦・高田一弘・木村幾多郎・樋口秀信・武田光正・高山浩一があたり，遺構の写真撮影には，中間・森山・平嶋・小田があたった。なお，空中写真はフォト・オオツカ撮影による。

4．遺物の整理は，発掘作業員及び岩瀬正信の指導のもとに文化課甘木事務所・九州歴史資料館の整理作業員が行った。出土遺物の写真撮影は九州歴史資料館の石丸洋・藤美代子が担当した。

5．出土遺物の実測は，平田春美・原富子・松岡生子・鬼木つや子・若松三枝子・小田・田中・中間が従事し，図面の整理浄書等は，豊福弥生・鶴田佳子・関久江・塩足里美・大田育子が行った。

6．本書で使用する方位は，すべて真北に統一している。

7．本書の執筆は，中間・森山・小田・平嶋が分担し，各文末に記名した。また本書の編集は中間と小田が担当した。

本 文 目 次

〈上　　巻〉

頁
Ⅰ　調査の経過 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 5
Ⅲ　調査の内容 …… 9
A　竪穴式住居跡 …… 14
B　掘立柱建物 …… 152

〈中　　巻〉

C　土　　壙 …… 175
D　落し穴状遺構 …… 296
E　土　壙　墓 …… 305
F　溝 …… 317
G　井　　戸 …… 338
H　道路状遺構 …… 342
I　円形周溝遺構 …… 344
J　埋　　甕 …… 345
K　馬歯埋納遺構 …… 346
L　風倒木痕 …… 347
M　その他の遺構と遺物 …… 348
Ⅳ　各　　論
A　集落の構造と変遷 …… 391
B　落し穴状遺構 …… 401
C　道路状遺構 …… 405
Ⅴ　結　　語 …… 410

図　版　目　次

本文対照頁

巻頭図版　薬師堂東遺跡全景（北から）……5
図版　1　薬師堂東遺跡周辺航空写真……5
図版　2　薬師堂東遺跡発掘調査前全景（南西から）……9
図版　3　(1)　中央部分全景（北から）……9
(2)　中央北半部分全景（西）……9
図版　4　(1)　中央北半部全景（中央）……9
(2)　中央北半部全景（東）……9
図版　5　(1)　東半部全景（西から）……9
(2)　東端北半部全景（西から）……9
図版　6　(1)　東半部全景（東から）……9
(2)　東端部全景（西から）……9
図版　7　(1)　中央南端付近全景（西から）……9
(2)　高松家墓地近辺古代遺構全景（西から）……124
図版　8　(1)　中央部南端住居集中部分（北から）……32
(2)　中央部南端住居集中部分（西から）……32
図版　9　(1)　第２号掘立柱建物周辺（南から）……156
(2)　遺跡最西南端付近（西から）……237
図版　10　(1)　東半部第18号溝周辺（西から）……342
(2)　作業風景（南から）……9
図版　11　(1)　南側側溝部分西端（北から）……298
(2)　南側側溝部分西寄り（西から）……298
図版　12　(1)　南側側溝部分東半（西から）……18
(2)　中央部南端深掘り部土層（北から）……11
図版　13　(1)　南西付近全景（東から）……18
(2)　横なぐりのみぞれの中での発掘作業（北から）……18
図版　14　(1)　南西端付近（西から）……18
(2)　第１号住居跡土層断面（北から）……15
図版　15　(1)　第２・３号住居跡（北西から）……16
(2)　第２・３号住居跡下層（北西から）……16
図版　16　(1)　第３号住居跡北半下層（南から）……19
(2)　第４～９号住居跡下層（西から）……21

本文対照頁

図版 17 (1) 第4～8号住居跡（西から）……21
(2) 第4～9号住居跡（東から）……22
図版 18 (1) 第4～8号住居跡下層（西から）……21
(2) 第4号住居跡カマド……22
図版 19 (1) 第4号住居跡北端（南から）……22
(2) 第4号住居跡北端下層（南から）……22
図版 20 (1) 第5号住居跡北端（南から）……23
(2) 第5号住居跡北端下層（南から）……23
図版 21 (1) 第5号住居跡カマド……25
(2) 第7・8号住居跡（西から）……26
図版 22 (1) 第7号住居跡（東から）……26
(2) 第7号住居跡下層（東から）……26
図版 23 (1) 第8号住居跡北半（南から）……28
(2) 第8号住居跡北半下層（南から）……28
図版 24 (1) 第8号住居跡カマド……29
(2) 第9号住居跡（東から）……28
図版 25 (1) 第9号住居跡下層（東から）……29
(2) 第10号住居跡（東から）……31
図版 26 (1) 第10号住居跡下層（東から）……31
(2) 第11号住居跡（南東から）……32
図版 27 (1) 第11号住居跡カマド（南東から）……33
(2) 第11号住居跡カマド（南西から）……33
図版 28 (1) 第12～20号住居跡（北から）……34
(2) 第12～14号住居跡・第15号土壙（南から）……34
図版 29 (1) 第12・13号住居跡（南から）……34
(2) 第12号住居跡カマド……35
図版 30 (1) 第14号住居跡（北東から）……35
(2) 第14号住居跡カマド……37
図版 31 (1) 第15号住居跡下層（南から）……38
(2) 第16～23号住居跡（西から）……40
図版 32 (1) 第16・17号住居跡（北東から）……40
(2) 第16号住居跡（南西から）……40
図版 33 (1) 第16号住居跡カマド……40

本文対照頁
(2) 第17号住居跡（南から）……41
図版 34 (1) 第17号住居跡カマド……42
(2) 第18号住居跡（南から）……45
図版 35 (1) 第19・20・69号住居跡（北東から）……47
(2) 第19号住居跡（南から）……47
図版 36 (1) 第20号住居跡カマド……49
(2) 第21号住居跡・第23号土壙（南から）……51
図版 37 (1) 第21号住居跡下層（東から）……51
(2) 第21号住居跡カマド……50
図版 38 (1) 第22号住居跡下層（南から）……53
(2) 第24・25号住居跡発掘前（北西から）……54
図版 39 (1) 第24・25号住居跡（北西から）……54
(2) 第24・25号住居跡下層（北西から）……54
図版 40 (1) 第24号住居跡カマド発掘前……55
(2) 第24号住居跡カマド（南から）……55
図版 41 (1) 第24号住居跡カマド（南東から）……55
(2) 第26・27号住居跡（南から）……57
図版 42 (1) 第26・27号住居跡下層（南から）……57
(2) 第26号住居跡カマド（東から）……58
図版 43 (1) 第26号住居跡カマド（瓦転用）……58
(2) 第28・32号住居跡（南東から）……65
図版 44 (1) 第28・32号住居跡下層（北から）……65
(2) 第29号住居跡（南東から）……68
図版 45 (1) 第29号住居跡下層（北から）……68
(2) 第30号住居跡（西から）……71
図版 46 (1) 第31号住居跡・第31号土壙（南から）……72
(2) 第31号住居跡下層（南から）……72
図版 47 (1) 第31号住居跡カマド……73
(2) 第33号住居跡（南から）……74
図版 48 (1) 第33号住居跡下層（南から）……74
(2) 第33号住居跡カマド……75
図版 49 (1) 第34・35号住居跡（南から）……78
(2) 第34・35号住居跡下層（南から）……78

本文対照頁

図版　50　(1)　第35号住居跡カマド……81
(2)　第36～38号住居跡下層（南東から）……83
図版　51　(1)　第36号住居跡カマド……84
(2)　第39号住居跡（南から）……88
図版　52　(1)　第39号住居跡下層・第19号掘立柱建物（南から）……88
(2)　第40・41号住居跡（南から）……89
図版　53　(1)　第40号住居跡（南から）……89
(2)　第40号住居跡カマド……90
図版　54　(1)　第41号住居跡（南から）……92
(2)　第40・41号住居跡下層（南から）……92
図版　55　(1)　第41号住居跡カマド……93
(2)　第42・43・44号住居跡（南から）……94
図版　56　(1)　第42・43・44号住居跡下層（南から）……94
(2)　第45～48号住居跡・第45・46号土壙……98
図版　57　(1)　第45号住居跡（北から）……98
(2)　第45号住居跡下層（南から）……98
図版　58　(1)　第46・47・48号住居跡（南から）……99
(2)　第46・47・48号住居跡下層（南から）……99
図版　59　(1)　第46号住居跡カマド…… 100
(2)　第49・50号住居跡（東から）…… 106
図版　60　(1)　第49・50号住居跡下層（東から）…… 106
(2)　第49号住居跡カマド…… 108
図版　61　(1)　第50号住居跡カマド…… 109
(2)　第51号住居跡（北から）…… 111
図版　62　(1)　第51号住居跡下層（北から）…… 111
(2)　第51号住居跡カマド…… 112
図版　63　(1)　第52号住居跡（北から）…… 113
(2)　第52号住居跡下層（北から）…… 113
図版　64　(1)　第53号住居跡下層（北から）…… 114
(2)　第53号住居跡カマド…… 115
図版　65　(1)　第54号住居跡（南東から）…… 117
(2)　第54号住居跡下層（南東から）…… 117
図版　66　(1)　第54号住居跡カマド…… 118

本文対照頁
(2) 第55号住居跡（南東から）…… 119
図版 67 (1) 第55号住居跡下層（南東から）…… 119
(2) 第55号住居跡カマド…… 120
図版 68 (1) 第56号住居跡（南から）…… 122
(2) 第56号住居跡下層（南から）…… 122
図版 69 (1) 第57号住居跡（南東から）…… 123
(2) 第57号住居跡カマド…… 124
図版 70 (1) 第58号住居跡（南東から）…… 126
(2) 第58号住居跡下層（南東から）…… 126
図版 71 (1) 第58号住居跡南西コーナー土壙…… 126
(2) 第59～62号住居跡（高松家墓地周辺）(西から）…… 128
図版 72 (1) 第59号住居跡（東から）…… 128
(2) 第59号住居跡下層（東から）…… 128
図版 73 (1) 第59号住居跡カマド…… 129
(2) 第60号住居跡（東から）…… 130
図版 74 (1) 第60号住居跡下層（東から）…… 130
(2) 第60号住居跡カマド…… 131
図版 75 (1) 第61号住居跡（東から）…… 132
(2) 第62号住居跡（東から）…… 133
図版 76 (1) 第61・62号住居跡下層（南東から）…… 133
(2) 第63号住居跡（南東から）…… 134
図版 77 (1) 第63号住居跡下層（南東から）…… 134
(2) 第63号住居跡カマド…… 135
図版 78 (1) 第64号住居跡（南東から）…… 137
(2) 第64号住居跡下層（南東から）…… 137
図版 79 (1) 第64号住居跡カマド…… 137
(2) 第65号住居跡（南から）…… 139
図版 80 (1) 第65号住居跡下層（南から）…… 139
(2) 第65号住居跡カマド…… 140
図版 81 (1) 第66号住居跡（南東から）…… 141
(2) 第66号住居跡下層（南東から）…… 141
図版 82 (1) 第66号住居跡カマド…… 142
(2) 第67号住居跡（東から）…… 144

本文対照頁

図版　83　(1)　第67号住居跡土層断面（南から）…… 144
(1)　第67号住居跡下層（東から）…… 144
図版　84　(1)　第68号住居跡（南東から）…… 145
(2)　第68号住居跡下層（南東から）…… 145
図版　85　(1)　第68号住居跡カマド…… 146
(2)　第１号掘立柱建物（北から）…… 154
図版　86　(1)　第１号掘立柱建物（南から）…… 154
(2)　第１号掘立柱建物Ｐ－２柱痕…… 154
図版　87　(1)　第１号掘立柱建物Ｐ－７柱痕…… 154
(2)　第２号掘立柱建物（南から）…… 155
図版　88　(1)　第３号掘立柱建物（南西から）…… 157
(2)　第４号掘立柱建物（南から）…… 157
図版　89　(1)　第５号掘立柱建物（南から）…… 159
(2)　第６号掘立柱建物（南から）…… 159
図版　90　(1)　第７号掘立柱建物（東から）…… 161
(2)　第８号掘立柱建物（南から）…… 161
図版　91　(1)　第９号掘立柱建物（南から）…… 162
(2)　第10・11・12号掘立柱建物（西から）…… 163
図版　92　(1)　第10号掘立柱建物（南から）…… 163
(2)　第14号掘立柱建物（南から）…… 166
図版　93　(1)　第15号掘立柱建物（南から）…… 167
(2)　第16号掘立柱建物（南から）…… 168
図版　94　(1)　第17号掘立柱建物（南から）…… 169
(2)　第18号掘立柱建物（西から）…… 170
図版　95　(1)　第21号掘立柱建物（北東から）…… 172
(2)　第１号土壙付近（東から）…… 177
図版　96　(1)　第１号土壙（東から）…… 177
(2)　第１号土壙遺物出土状態（東から）…… 177
図版　97　(1)　第１号土壙丸瓦・土器出土状態（南から）…… 177
(2)　第１号土壙軒丸瓦出土状態…… 177
図版　98　(1)　第１号土壙完掘後（南から）…… 177
(2)　第３号土壙（南から）…… 196
図版　99　(1)　第４号土壙（西から）…… 196

本文対照頁
(2) 第5号土壙（北西から）…… 196
図版 100 (1) 第6号土壙（西から）…… 197
(2) 第7号土壙（南から）…… 197
図版 101 (1) 第8号土壙（南から）…… 197
(2) 第10号土壙（西から）…… 198
図版 102 (1) 第11号土壙（南から）…… 199
(2) 第11号土壙土層（南から）…… 199
図版 103 (1) 第12号土壙（北東から）…… 199
(2) 第13号土壙（北東から）…… 204
図版 104 (1) 第14号土壙（南西から）…… 204
(2) 第15号土壙（北から）…… 206
図版 105 (1) 第16号土壙（南西から）…… 206
(2) 第17号土壙土層（東から）…… 208
図版 106 (1) 第17号土壙（北東から）…… 208
(2) 第18号土壙（北から）…… 211
図版 107 (1) 第19号土壙（南西から）…… 212
(2) 第20・21・22号土壙周辺（北西から）…… 213
図版 108 (1) 第20・22号土壙（南から）…… 213
(2) 第20号土壙遺物出土状態（東から）…… 213
図版 109 (1) 第20・22号土壙土層（南から）…… 214
(2) 第20号土壙遺物出土状態（南から）…… 214
図版 110 (1) 第21号土壙土層（南から）…… 225
(2) 第21号土壙完掘後（南から）…… 225
図版 111 (1) 第24号土壙（南から）…… 229
(2) 第25号土壙土層（南から）…… 233
図版 112 (1) 第33号土壙（西から）…… 237
(2) 第36号土壙（南から）…… 237
図版 113 (1) 第36号土壙土層（北から）…… 237
(2) 第37号土壙（南西から）…… 243
図版 114 (1) 第36・37・38号土壙（北東から）…… 237
(2) 第37号土壙土層（西から）…… 243
図版 115 (1) 第38号土壙（南西から）…… 247
(2) 第38号土壙土層（西から）…… 247

本文対照頁
図版 116 (1) 第42号土壙（北から）…… 258
(2) 第43号土壙（北から）…… 261
図版 117 (1) 第43号土壙（西から）…… 261
(2) 第43号土壙棰先瓦出土状態…… 261
図版 118 (1) 第44号土壙（南から）…… 267
(2) 第45号土壙（南東から）…… 267
図版 119 (1) 第47号土壙・第53号住居跡…… 269
(2) 第47号土壙（南から）…… 269
図版 120 (1) 第47号土壙土層東半部（円形井戸状遺構）(南から）…… 269
(2) 第47号土壙土層西半部（南から）…… 269
図版 121 (1) 第50号土壙（東から）…… 289
(2) 第51号土壙（北東から）…… 289
図版 122 (1) 第52号土壙・第57号住居跡下層（南東から）…… 291
(2) 第56号土壙（南東から）…… 291
図版 123 (1) 第１号落し穴状遺構（北西から）…… 296
(2) 第２号落し穴状遺構（南から）…… 298
図版 124 (1) 第３号落し穴状遺構（南西から）…… 298
(2) 第４号落し穴状遺構（北東から）…… 298
図版 125 (1) 第５号落し穴状遺構（北東から）…… 298
(2) 第６号落し穴状遺構（東から）…… 298
図版 126 (1) 第７号落し穴状遺構（北から）…… 303
(2) 第８号落し穴状遺構（南から）…… 303
図版 127 (1) 第９号落し穴状遺構（東から）…… 303
(2) 第10号落し穴状遺構（西から）…… 303
図版 128 (1) 第11号落し穴状遺構（東から）…… 303
(2) 第12号落し穴状遺構（西から）…… 304
図版 129 (1) 第１号土壙墓（西から）…… 305
(2) 第２号土壙墓（西から）…… 306
図版 130 (1) 第３号土壙墓（南から）…… 306
(2) 第３号土壙墓副葬品出土状態…… 306
図版 131 (1) 第４号土壙墓（南から）…… 310
(2) 第５号土壙墓（北から）…… 310
図版 132 (1) 第６号土壙墓（北東から）…… 310

本文対照頁
(2) 第6号土壙墓副葬品出土状態…… 310
図版 133 (1) 第7号土壙墓（西から）…… 311
(2) 第7号土壙墓副葬品出土状態…… 311
図版 134 (1) 第8号土壙墓（西から）…… 313
(2) 第9号土壙墓（南から）…… 315
図版 135 (1) 第10号土壙墓（南から）…… 316
(2) 第11号土壙墓（南から）…… 316
図版 136 (1) 第2・3号溝（北から）…… 319
(2) 第5・45号溝土層（北から）…… 320
図版 137 (1) 第5・45号溝土層（北から）…… 320
(2) 第16号溝周辺（北西から）…… 326
図版 138 (1) 第18号溝・道路状遺構東半（西から）…… 327
(2) 第33号溝（南から）…… 329
図版 139 (1) 第34号溝（西から）…… 329
(2) 第34号溝土層（西から）…… 329
図版 140 (1) 第34号溝土層（西から）…… 329
(2) 第35号溝土層（南から）…… 330
図版 141 (1) 第37号溝土層（西から）…… 330
(2) 第39号溝土層（西から）…… 331
図版 142 (1) 第39号溝（東から）…… 331
(2) 第39号溝（西から）…… 331
図版 143 (1) 第1号井戸（南から）…… 338
(2) 第1号井戸土層（南から）…… 338
図版 144 (1) 第2号井戸（南から）…… 341
(2) 円形周溝遺構（東から）…… 344
図版 145 (1) 第1号埋甕（北から）…… 345
(2) 馬歯埋納遺構（東から）…… 346
図版 146 (1) 第2号風倒木痕（南西から）…… 347
(2) 第1号風倒木痕（南から）…… 347
図版 147 (1) 北西部落ち込み土層（南から）…… 377
(2) 雪の中での発掘作業…… 377
図版 148 第2～17号住居跡出土遺物……18
図版 149 第17・26・27号住居跡出土遺物……43

本文対照頁
図版 150　第27～35号住居跡出土遺物……59
図版 151　第36～66号住居跡出土遺物……85
図版 152　第１号土壙出土遺物①…… 180
図版 153　第１号土壙出土遺物②…… 180
図版 154　第１号土壙出土遺物③…… 180
図版 155　第１号土壙出土遺物④…… 180
図版 156　第１号土壙出土遺物⑤…… 180
図版 157　第11・12・17号土壙出土遺物…… 201
図版 158　第20号土壙出土遺物①…… 216
図版 159　第20号土壙出土遺物②…… 216
図版 160　第21・36号土壙出土遺物…… 226
図版 161　第37・38・42号土壙出土遺物…… 246
図版 162　第38号土壙出土遺物…… 249
図版 163　第38・43・46号土壙出土遺物…… 249
図版 164　第47号土壙出土遺物①…… 272
図版 165　第47号土壙出土遺物②…… 272
図版 166　第３・６・７号土壙墓出土遺物…… 308
図版 167　第７・９・11号土壙墓，第５・37・39・41・53号溝出土遺物…… 312
図版 168　第52号溝，第１号井戸，埋甕出土遺物…… 336
図版 169　柱穴群出土遺物…… 350
図版 170　柱穴群出土遺物…… 350
図版 171　包含層，高松家墓地下層出土遺物…… 380
図版 172　包含層，高松家墓地下層出土遺物…… 380

挿　図　目　次

〈上　　巻〉

頁
第　1　図　九州横断自動車道路線図……1
第　2　図　薬師堂東遺跡発掘調査工程図（1/2,500）……2
第　3　図　周辺遺跡分布図（1/50,000）……6
第　4　図　薬師堂東遺跡周辺地形図（1/5,000）……8
第　5　図　薬師堂東遺跡地形図（1/2,000）……10
第　6　図　遺構配置図（1/600）……10～11

頁

第 7 図　発掘区中央南付近土層断面実測図（1/80）……11
第 8 図　発掘区南西付近土層断面実測図（1/80）……12・13
第 9 図　集落支群グルーピング図（1/1,800）……14
第 10 図　竪穴式住居跡付帯カマド模式図……15
第 11 図　第1号住居跡断面実測図（1/60）……16
第 12 図　第1号住居跡出土土器実測図（1/3）……16
第 13 図　第2・3号住居跡実測図（1/60）……17
第 14 図　第2号住居跡出土土器実測図（1/3）……18
第 15 図　第3号住居跡出土土器実測図（その1）（1/3）……19
第 16 図　第3号住居跡出土土器実測図（その2）（1/3）……20
第 17 図　第4号住居跡実測図（1/60）……21
第 18 図　第4号住居跡カマド実測図（1/30）……22
第 19 図　第4号住居跡出土土器実測図（1/3）……23
第 20 図　第5・6号住居跡実測図（1/60）……24
第 21 図　第5号住居跡カマド実測図（1/30）……25
第 22 図　第5号住居跡出土土器実測図（1/3）……25
第 23 図　第7号住居跡実測図（1/60）……26
第 24 図　第7号住居跡カマド実測図（1/30）……27
第 25 図　第7号住居跡出土土器実測図（1/3）……27
第 26 図　第8・9号住居跡実測図（1/60）……28
第 27 図　第8号住居跡カマド実測図（1/30）……29
第 28 図　第8号住居跡出土土器実測図（1/3）……30
第 29 図　第10号住居跡実測図（1/60）……31
第 30 図　第11号住居跡実測図（1/60）……32
第 31 図　第12号住居跡出土紡錘車実測図（1/2）……33
第 32 図　第11号住居跡カマド実測図（1/30）……33
第 33 図　第12・13号住居跡実測図（1/60）……34
第 34 図　第12号住居跡カマド実測図（1/30）……35
第 35 図　第14号住居跡実測図（1/60）……35
第 36 図　第12号住居跡出土土器実測図（1/3）……36
第 37 図　第14号住居跡カマド実測図（1/30）……37
第 38 図　第14号住居跡出土土器実測図（1/3）……37
第 39 図　第15号住居跡実測図（1/60）……38

頁
第 40 図　第15号住居跡出土土器実測図（1/3）……39
第 41 図　第16号住居跡実測図（1/60）……40
第 42 図　第16号住居跡カマド実測図（1/30）……40
第 43 図　第16号住居跡出土土器実測図（1/3）……40
第 44 図　第17号住居跡実測図（1/60）……41
第 45 図　第17号住居跡カマド実測図（1/30）……42
第 46 図　第17号住居跡出土土器実測図（1/3）……43
第 47 図　第17号住居跡出土瓦実測図（1/3）……44
第 48 図　第17号住居跡出土紡錘車実測図（1/2）……44
第 49 図　第18号住居跡実測図（1/60）……45
第 50 図　第18号住居跡出土土器・瓦実測図（1/3）……50
第 51 図　第19号住居跡実測図（1/60）……47
第 52 図　第19号住居跡出土土器実測図（1/3）……48
第 53 図　第20・69号住居跡実測図（1/60）……49
第 54 図　第20号住居跡カマド実測図（1/30）……49
第 55 図　第20号住居跡出土土器実測図（1/3）……50
第 56 図　第21号住居跡カマド実測図（1/30）……50
第 57 図　第21号住居跡実測図（1/60）……51
第 58 図　第21号住居跡出土土器実測図（1/3）……52
第 59 図　第22・23号住居跡実測図（1/60）……53
第 60 図　第22号住居跡出土土器実測図（1/3）……53
第 61 図　第24・25号住居跡実測図（1/60）……54
第 62 図　第24号住居跡カマド実測図（1/30）……55
第 63 図　第24号住居跡出土土器実測図（1/3）……56
第 64 図　第24号住居跡出土鉄器実測図（1/2）……56
第 65 図　第26・27号住居跡実測図（1/60）……57
第 66 図　第26号住居跡カマド実測図（1/30）……58
第 67 図　第26号住居跡出土土器・瓦実測図（1/3）……59
第 68 図　第26号住居跡カマド転用瓦実測図（その１）(1/3）……60
第 69 図　第26号住居跡カマド転用瓦実測図（その２）(1/3）……61
第 70 図　第27号住居跡出土土器実測図（1/3）……63
第 71 図　第27号住居跡出土紡錘車実測図（1/2）……64
第 72 図　第28・32号住居跡実測図（1/60）……65

頁
第 73 図　第28・32号住居跡カマド実測図（1/30）……66
第 74 図　第28号住居跡出土土器実測図（1/3）……67
第 75 図　第28号住居跡出土鉄器実測図（1/2）……67
第 76 図　第29号住居跡実測図（1/60）……68
第 77 図　第29号住居跡カマド実測図（1/30）……69
第 78 図　第29号住居跡出土土器実測図（1/3）……70
第 79 図　第30号住居跡実測図（1/60）……71
第 80 図　第31号住居跡実測図（1/60）……72
第 81 図　第31号住居跡カマド実測図（1/30）……73
第 82 図　第31号住居跡出土土器実測図（1/3）……73
第 83 図　第33号住居跡実測図（1/60）……74
第 84 図　第33号住居跡カマド実測図（1/30）……75
第 85 図　第33号住居跡出土土器・石器実測図（1/3）……76
第 86 図　第33号住居跡出土鉄器実測図（1/2）……77
第 87 図　第34号住居跡実測図（1/60）……78
第 88 図　第34号住居跡出土土器・瓦実測図（1/3）……79
第 89 図　第35号住居跡実測図（1/60）……80
第 90 図　第35号住居跡カマド実測図（1/30）……81
第 91 図　第35号住居跡出土土器・瓦実測図（1/3）……82
第 92 図　第36号住居跡実測図（1/60）……83
第 93 図　第36号住居跡カマド実測図（1/30）……84
第 94 図　第36号住居跡出土土器実測図（1/3）……85
第 95 図　第37・38号住居跡実測図（1/60）……86
第 96 図　第37号住居跡出土土器実測図（1/3）……87
第 97 図　第38号住居跡出土土器実測図（1/3）……87
第 98 図　第39号住居跡実測図（1/60）……88
第 99 図　第39号住居跡出土土器実測図（1/3）……88
第 100 図　第40号住居跡実測図（1/60）……89
第 101 図　第40号住居跡カマド実測図（1/30）……90
第 102 図　第40号住居跡出土土器実測図（1/3）……91
第 103 図　第41号住居跡実測図（1/60）……92
第 104 図　第41号住居跡カマド実測図（1/30）……93
第 105 図　第41号住居跡出土土器実測図（1/3）……93

頁
第106図　第42～44号住居跡実測図（1/60）……94
第107図　第42号住居跡出土土器実測図（1/3）……95
第108図　第43号住居跡カマド実測図（1/30）……95
第109図　第43号住居跡出土土器実測図（1/3）……96
第110図　第44号住居跡カマド実測図（1/30）……96
第111図　第44号住居跡出土土器実測図（1/3）……97
第112図　第45号住居跡実測図（1/60）……98
第113図　第45号住居跡出土土器実測図（1/3）……98
第114図　第46・47号住居跡実測図（1/60）……99
第115図　第46号住居跡カマド実測図（1/30）……100
第116図　第46号住居跡出土土器実測図（1/3）……101
第117図　第47号住居跡出土土器実測図（1/3）……102
第118図　第48号住居跡実測図（1/60）……103
第119図　第48号住居跡カマド実測図（1/30）……104
第120図　第48号住居跡出土土器実測図（1/3）……106
第121図　第49号住居跡実測図（1/60）……106
第122図　第49号住居跡出土土器実測図（1/3）……107
第123図　第49号住居跡カマド実測図（1/30）……108
第124図　第50号住居跡実測図（1/60）……109
第125図　第50号住居跡カマド実測図（1/30）……110
第126図　第51号住居跡実測図（1/60）……111
第127図　第51号住居跡カマド実測図（1/30）……112
第128図　第51号住居跡出土土器実測図（1/3）……112
第129図　第52号住居跡実測図（1/60）……113
第130図　第53号住居跡実測図（1/60）……114
第131図　第53号住居跡カマド実測図（1/30）……115
第132図　第53号住居跡出土土器実測図（1/3）……116
第133図　第54号住居跡実測図（1/60）……117
第134図　第54号住居跡カマド実測図（1/30）……118
第135図　第54号住居跡出土土器実測図（1/3）……118
第136図　第55号住居跡実測図（1/60）……119
第137図　第55号住居跡カマド実測図（1/30）……120
第138図　第55号住居跡出土土器実測図（1/3）……121

頁

第 139 図　第56号住居跡実測図（1/60）……122
第 140 図　第57号住居跡実測図（1/60）……123
第 141 図　第57号住居跡カマド実測図（1/30）……124
第 142 図　第57号住居跡出土土器実測図（1/3）……125
第 143 図　第58号住居跡実測図（1/60）……126
第 144 図　第58号住居跡カマド実測図（1/30）……127
第 145 図　第58号住居跡出土土器実測図（1/3）……127
第 146 図　第59号住居跡実測図（1/60）……128
第 147 図　第59号住居跡カマド実測図（1/30）……129
第 148 図　第59号住居跡出土土器実測図（1/3）……129
第 149 図　第60号住居跡実測図（1/60）……130
第 150 図　第60号住居跡出土土器実測図（1/3）……131
第 151 図　第61号住居跡実測図（1/60）……132
第 152 図　第61号住居跡出土土器実測図（1/3）……132
第 153 図　第62号住居跡実測図（1/60）……133
第 154 図　第62号住居跡出土土器実測図（1/3）……133
第 155 図　第63号住居跡実測図（1/60）……134
第 156 図　第63号住居跡カマド実測図（1/30）……135
第 157 図　第63号住居跡出土土器実測図（1/3）……135
第 158 図　第63号住居跡出土石鏃実測図（実大）……135
第 159 図　第64号住居跡実測図（1/60）……137
第 160 図　第64号住居跡カマド実測図（1/30）……137
第 161 図　第64号住居跡出土土器実測図（1/3）……138
第 162 図　第65号住居跡実測図（1/60）……139
第 163 図　第65号住居跡カマド実測図（1/30）……140
第 164 図　第65号住居跡出土土器実測図（1/3）……140
第 165 図　第66号住居跡実測図（1/60）……141
第 166 図　第66号住居跡カマド実測図（1/30）……142
第 167 図　第66号住居跡出土土器実測図（その１）(1/3)……143
第 168 図　第66号住居跡出土土器・瓦実測図（その２）(1/3)……144
第 169 図　第67号住居跡実測図（1/60）……144
第 170 図　第67号住居跡出土土器実測図（1/3）……145
第 171 図　第68号住居跡実測図（1/60）……145

頁
第172図　第68号住居跡カマド実測図（1/30）……146
第173図　第68号住居跡出土土器実測図（1/3）……147
第174図　掘立柱建物配置図（1/1,200）……153
第175図　第1号掘立柱建物実測図（1/60）……154
第176図　第2号掘立柱建物実測図（1/60）……155
第177図　第3・4号掘立柱建物実測図（1/60）……157
第178図　第5・6号掘立柱建物実測図（1/60）……159
第179図　第7・8号掘立柱建物実測図（1/60）……161
第180図　第9号掘立柱建物実測図（1/60）……162
第181図　第10・11号掘立柱建物実測図（1/60）……163
第182図　第12・13号掘立柱建物実測図（1/60）……165
第183図　第14号掘立柱建物実測図（1/60）……166
第184図　第15号掘立柱建物実測図（1/60）……167
第185図　第16号掘立柱建物実測図（1/60）……168
第186図　第17号掘立柱建物実測図（1/60）……169
第187図　第18号掘立柱建物実測図（1/60）……170
第188図　第19・20号掘立柱建物実測図（1/60）……171
第189図　第21号掘立柱建物実測図（1/60）……172
第190図　各掘立柱建物出土土器実測図（1/3）……173

〈中　　巻〉

頁
第191図　土壙配置図（1/1,200）……175
第192図　第1号土壙・第1号土壙遺物出土状態実測図（1/60，1/30）……177
第193図　第1号土壙出土土器実測図（その1）（1/3）……180
第194図　第1号土壙出土土器実測図（その2）（1/3）……181
第195図　第1号土壙出土土器実測図（その3）（1/3）……182
第196図　第1号土壙出土土器実測図（その4）（1/3）……183
第197図　第1号土壙出土土器実測図（その5）（1/3）……184
第198図　第1号土壙出土土器実測図（その6）（1/3）……185
第199図　第1号土壙出土土器実測図（その7）（1/3）……186
第200図　第1号土壙出土土器実測図（その8）（1/3）……187
第201図　第1号土壙出土土器実測図（その9）（1/3）……188

頁
第202図　第1号土壙出土土器実測図(その10)(1/3)……189
第203図　第1号土壙出土土器実測図(その11)(1/3)……190
第204図　第1号土壙出土土器実測図(その12)(1/3)……191
第205図　第1号土壙出土土器実測図(その13)(1/3)……192
第206図　第1号土壙出土瓦実測図(その1)(1/3)……193
第207図　第1号土壙出土瓦実測図(その2)(1/3)……194
第208図　第2～10号土壙実測図 (1/60)……196
第209図　第3号土壙出土土器実測図 (1/3) ……197
第210図　第7号土壙出土土器実測図 (1/3) ……197
第211図　第8号土壙出土土器実測図 (1/3) ……198
第212図　第10号土壙出土土器実測図 (1/3) ……198
第213図　第11～14号土壙実測図 (1/60)……199
第214図　第11号土壙出土土器実測図 (1/3) ……201
第215図　第12号土壙出土土器実測図 (1/3) ……202
第216図　第12号土壙出土瓦実測図 (1/3) ……203
第217図　第13号土壙出土土器実測図 (1/3) ……205
第218図　第14号土壙出土鉄器実測図 (1/2) ……206
第219図　第15～19号土壙実測図 (1/60)……207
第220図　第15号土壙出土土器実測図 (1/3) ……208
第221図　第17号土壙出土土器実測図(その1)(1/3)……209
第222図　第17号土壙出土土器・瓦実測図(その2)(1/3)……210
第223図　第18号土壙出土土器実測図 (1/3) ……212
第224図　第19号土壙出土土器実測図 (1/3) ……213
第225図　第20～22号土壙実測図 (1/60)……214
第226図　第20号土壙出土土器実測図(その1)(1/3)……216
第227図　第20号土壙出土土器実測図(その2)(1/3)……217
第228図　第20号土壙出土土器実測図(その3)(1/4)……218
第229図　第20号土壙出土土器実測図(その4)(1/3)……220
第230図　第20号土壙出土土器実測図(その5)(1/3)……221
第231図　第20号土壙出土土器実測図(その6)(1/3)……223
第232図　第20号土壙出土土器・瓦実測図(その7)(1/3)……224
第233図　第20号土壙出土紡錘車・鉄器実測図 (1/2) ……225
第234図　第21号土壙出土土器実測図 (1/3) ……226

頁
第235図　第21号土壙出土鉄器実測図（1/2）……227
第236図　第23・24号土壙実測図（1/60）……228
第237図　第23号土壙出土土器実測図（1/3）……229
第238図　第24号土壙出土土器実測図（その1）(1/3)……230
第239図　第24号土壙出土土器・瓦実測図（その2）(1/3)……232
第240図　第24号土壙出土鉄器実測図（1/2）……233
第241図　第25・26号土壙実測図（1/60）……233
第242図　第25号土壙出土瓦実測図（1/3）……234
第243図　第26号土壙出土土器実測図（1/3）……234
第244図　第30～33・57号土壙実測図（1/60）……236
第245図　第36号土壙実測図（1/60）……237
第246図　第36号土壙出土土器実測図（その1）(1/3)……239
第247図　第36号土壙出土土器実測図（その2）(1/3)……240
第248図　第36号土壙出土土器実測図（その3）(1/3)……241
第249図　第36号土壙出土土器実測図（その4）(1/3)……242
第250図　第36号土壙出土紡錘車実測図（1/2）……243
第251図　第37・38号土壙実測図（1/60）……244
第252図　第37号土壙出土土器実測図（その1）(1/3)……246
第253図　第37号土壙出土土器実測図（その2）(1/3)……247
第254図　第37号土壙出土土錘実測図（1/2）……247
第255図　第38号土壙出土土器実測図（その1）(1/3)…… 249
第256図　第38号土壙出土土器実測図（その2）(1/3)……250
第257図　第38号土壙出土土器実測図（その3）(1/3)……253
第258図　第38号土壙出土土器実測図（その4）(1/3)……254
第259図　第38号土壙出土土器実測図（その5）(1/3)……255
第260図　第38号土壙出土土器実測図（その6）(1/3)……256
第261図　第38号土壙出土土器実測図（その7）(1/3)……257
第262図　第38号土壙出土鉄器実測図（1/2）……258
第263図　第42・43号土壙実測図（1/80）……259
第264図　第42号土壙出土土器・瓦実測図（1/3）……260
第265図　第42号土壙出土土錘実測図（1/2）……261
第266図　第43号土壙出土土器実測図（その1）(1/3)……262
第267図　第43号土壙出土土器実測図（その2）(1/3)……263

頁

第 268 図　第43号土壙出土瓦・砥石実測図（1/3）……264
第 269 図　第43号土壙出土鉄器実測図（1/2）……265
第 270 図　第44～46号土壙実測図（1/60）……266
第 271 図　第44号土壙出土土器実測図（1/3）……267
第 272 図　第45号土壙出土土器実測図（1/3）……267
第 273 図　第46号土壙出土土器・軽石実測図（1/3）……268
第 274 図　第47号土壙実測図（1/80）……270
第 275 図　第47号土壙出土土器実測図（その１）(1/3)……272
第 276 図　第47号土壙出土土器実測図（その２）(1/3)……273
第 277 図　第47号土壙出土土器実測図（その３）(1/3)……275
第 278 図　第47号土壙出土土器実測図（その４）(1/3)……276
第 279 図　第47号土壙出土土器実測図（その５）(1/3)……279
第 280 図　第47号土壙出土土器実測図（その６）(1/3)……280
第 281 図　第47号土壙出土土器実測図（その７）(1/3)……281
第 282 図　第47号土壙出土土器実測図（その８）(1/3)……282
第 283 図　第47号土壙出土土器実測図（その９）(1/3)……284
第 284 図　第47号土壙出土瓦実測図（1/3）……285
第 285 図　第47号土壙出土砥石・鉄器実測図（1/2）……286
第 286 図　第49～51号土壙実測図（1/60）……287
第 287 図　第49号土壙出土土器実測図（1/3）……288
第 288 図　第51号土壙出土土器実測図（1/3）……289
第 289 図　第52・56号土壙実測図（1/60）……290
第 290 図　第52号土壙出土土器実測図（1/3）……291
第 291 図　第56号土壙出土土器実測図（1/3）……291
第 292 図　第57号土壙出土土器実測図（1/3）……292
第 293 図　落し穴状遺構配置図（1/1,500）……296
第 294 図　第１・２号落し穴状遺構実測図（1/30）……297
第 295 図　第３・４号落し穴状遺構実測図（1/30）……299
第 296 図　第５・６号落し穴状遺構実測図（1/30）……300
第 297 図　第７・８号落し穴状遺構実測図（1/30）……301
第 298 図　第９・10号落し穴状遺構実測図（1/30）……302
第 299 図　第11・12号落し穴状遺構実測図（1/30）……304
第 300 図　土壙墓配置図（1/1,200）……306

頁

第 301 図　第 1 ～ 3 号土壙墓実測図 (1/30)……307
第 302 図　第 2 号土壙墓出土土器実測図 (1/3) ……308
第 303 図　第 3 号土壙墓副葬土器実測図 (1/3) ……308
第 304 図　第 4 ～ 6 号土壙墓実測図 (1/30)……309
第 305 図　第 6 号土壙墓副葬土器実測図 (1/3)…… 311
第 306 図　第 7 ・ 8 号土壙墓実測図 (1/30)……312
第 307 図　第 7 号土壙墓副葬土器実測図 (1/3) ……313
第 308 図　第 8 号土壙墓出土土器実測図 (1/3) ……313
第 309 図　第 9 ～11号土壙墓実測図 (1/30)……314
第 310 図　第 9 号土壙墓出土土器実測図 (1/3) ……315
第 311 図　第11号土壙墓出土土器実測図 (1/3) ……316
第 312 図　溝配置図 (1/1,200) ……317
第 313 図　溝土層実測図 (1/30)……318
第 314 図　第 1 号溝出土土器実測図 (1/3) ……319
第 315 図　第 3 号溝出土土器・瓦実測図 (1/3) ……319
第 316 図　第 4 号溝出土土器実測図 (1/3) ……319
第 317 図　第 5 号溝出土土器実測図 (1/3) ……321
第 318 図　第 5 号溝出土瓦実測図(その 1) (1/3)……322
第 319 図　第 5 号溝出土瓦実測図(その 2) (1/3)……323
第 320 図　第 5 号溝出土石器・土錘等実測図 (1/2) ……323
第 321 図　第 7 号溝出土瓦実測図 (1/3) ……324
第 322 図　第10号溝出土瓦・磁器実測図 (1/3) ……324
第 323 図　第14号溝出土瓦実測図 (1/3) ……325
第 324 図　第15号溝出土瓦実測図 (1/3) ……326
第 325 図　第16号溝出土土器実測図 (1/3) ……326
第 326 図　第17号溝出土瓦実測図 (1/3) ……327
第 327 図　第18号溝出土土器実測図 (1/3) ……328
第 328 図　第18号溝出土瓦実測図 (1/3) ……329
第 329 図　第28号溝出土土器実測図 (1/3) ……329
第 330 図　第33号溝出土瓦実測図 (1/3) ……329
第 331 図　第34号溝出土瓦・青磁実測図 (1/3) ……330
第 332 図　第37号溝出土石戈実測図 (1/2) ……330
第 333 図　第38号溝出土土器実測図 (1/3) ……331

頁
第334図　第39号溝出土土器・瓦実測図（1/3）……332
第335図　第41号溝出土土器実測図（1/3）……333
第336図　第42号溝出土瓦実測図（1/3）……334
第337図　第43号溝出土土器実測図（1/3）……335
第338図　第45号溝出土土器実測図（1/3）……335
第339図　第48号溝出土土器実測図（1/3）……335
第340図　第50号溝出土土器・瓦実測図（1/3）……336
第341図　第52号溝出土土器実測図（その1）（1/3）……336
第342図　第52号溝出土土器実測図（その2）（1/4）……337
第343図　第53号溝出土土器実測図（1/3）……337
第344図　第1・2号井戸実測図（1/60）……339
第345図　第1号井戸出土土器実測図（1/3）……340
第346図　第1号井戸出土石鏃実測図（実大）……340
第347図　第2号井戸出土土器実測図（1/3）……341
第348図　道路状遺構実測図（1/120，1/900）……343
第349図　円形周溝実測図（1/60）……344
第350図　埋甕出土状態実測図（1/30）……345
第351図　第1号埋甕実測図（1/3）……346
第352図　馬歯埋納遺構実測図（1/15）……347
第353図　第1・2号風倒木痕実測図（1/60）……348
第354図　柱穴群出土土器実測図（その1）（1/3）……350
第355図　柱穴群出土土器実測図（その2）（1/3）……352
第356図　柱穴群出土土器実測図（その3）（1/3）……353
第357図　柱穴群出土土器実測図（その4）（1/3）……355
第358図　柱穴群出土土器実測図（その5）（1/3）……356
第359図　柱穴群出土土器実測図（その6）（1/3）……357
第360図　柱穴群出土土器実測図（その7）（1/3）……359
第361図　柱穴群出土土器実測図（その8）（1/3）……360
第362図　柱穴群出土土器実測図（その9）（1/3）……362
第363図　柱穴群出土土器実測図（その10）（1/3）……363
第364図　柱穴群出土土器実測図（その11）（1/3）……365
第365図　柱穴群出土土器実測図（その12）（1/3）……366
第366図　柱穴群出土土器実測図（その13）（1/3）……369

頁

第367図　柱穴群出土土器実測図(その14)(1/3)……370
第368図　柱穴群出土土器実測図(その15)(1/3)……372
第369図　柱穴群出土土器実測図(その16)(1/3)……373
第370図　柱穴群出土土器実測図(その17)(1/3)……375
第371図　柱穴群出土土製品・石製品実測図 (1/2) ……376
第372図　柱穴群出土石器実測図 (2/3) ……376
第373図　北西部落込み土層実測図 (1/120) ……377
第374図　北西部落込み出土遺物実測図 (1/3) ……378
第375図　高松家墓地周辺出土土器実測図(その1)(1/3)……380
第376図　高松家墓地周辺出土土器実測図(その2)(1/3)……381
第377図　高松家墓地周辺出土瓦実測図(その1)(1/3)……382
第378図　高松家墓地周辺出土瓦実測図(その2)(1/3)……383
第379図　高松家墓地周辺出土瓦実測図(その3)(1/3)……384
第380図　包含層出土土器実測図(その1)(1/3)……386
第381図　包含層出土土器実測図(その2)(1/3)……387
第382図　包含層出土土器等実測図(その3)(1/3)……388
第383図　包含層出土土器等実測図(その4)(1/3)……389
第384図　包含層出土石器実測図 (2/3) ……390
第385図　薬師堂東遺跡集落変遷図 (1/1,800) ……393
第386図　溝に囲まれた平地住居 (1/400) ……399
第387図　カマド築造序模式図 ……400
第388図　落し穴状遺構の分類 ……401
第389図　第11号落し穴状遺構概念図 ……402
第390図　各地の落し穴状遺構例 ……403
第391図　薬師堂東遺跡落し穴状遺構の群 (1/2,500) ……404
第392図　下原遺跡落し穴状遺構の群 (1/800) ……404
第393図　立野遺跡落し穴状遺構の群 (約1/3,300) ……404
第394図　道路状遺構集成図 (1/720) ……407

付　　図　薬師堂東遺跡遺構全体図 (1/400)

表　目　次

〈上　　巻〉

頁

第 1 表　各遺構グループ一覧表…… 13

第 2 表　薬師堂東遺跡竪穴式住居跡一覧表…… 148

第 3 表　薬師堂東遺跡掘立柱建物一覧表…… 173

〈中　　巻〉

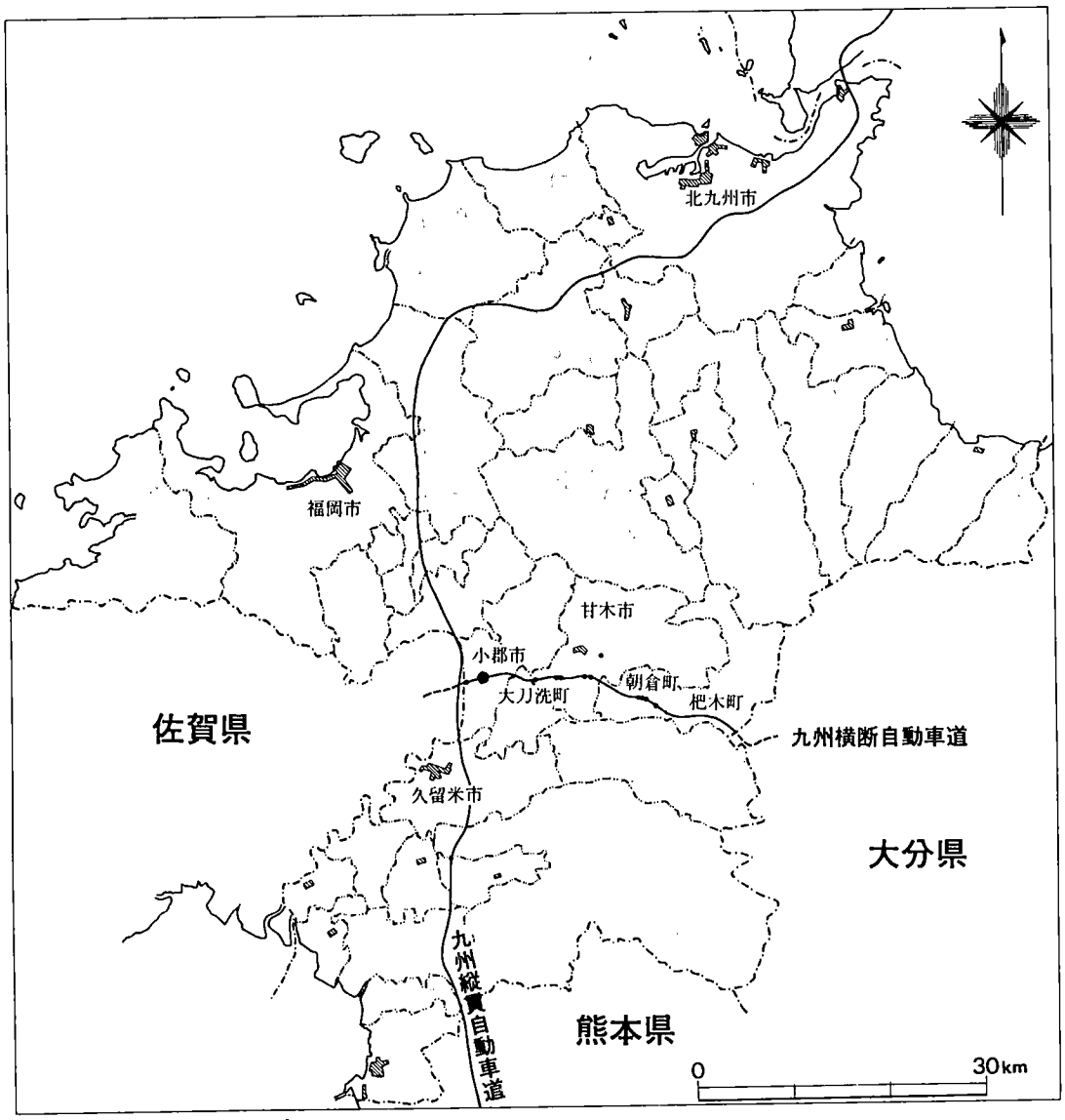
第 4 表　薬師堂東遺跡土壙一覧表…… 292

第 5 表　薬師堂東遺跡落し穴状遺構一覧表…… 305

第 6 表　薬師堂東遺跡土壙墓一覧表…… 316

Ⅰ　調査の経過

昭和54年度に開始した高速自動車道九州横断自動車道建設に伴う事前の発掘調査は，本年度で9年目を迎えた。この間，昭和59年10月16日に着手した横断道第6地点（薬師堂東遺跡）の調査は，あくる昭和60年10月12日までの1年間継続して行われ，大した事故も無く，多大の成果



第 1 図　九州横断自動車道路線図

を得て完了することができた。

昭和58年７月，県道久留米筑紫野線の東側までの800m 間（ＳＴＡ37～45間）が第６地点として遺跡に掲げられていたため，重機による試掘調査を行った。その結果，ＳＴＡ40以東は遺跡ではないことが判明し，それ以西を調査対象地域とすることとなった。

この調査対象範囲内には，カルパートボックス２基が計画され，また西端の谷側には重要な水路を含む構造物が予定され，それらの建設を先行させたいとの道路公団側の意向に沿った調査順序が協議された。また，この範囲内に工事用道路を常に確保したい旨も配慮された。更に南北両側の側溝工事の優先施工という事情もあり，結果的に発掘調査は不規則なこま切れの過程をたどった。以下第１図に従って，順を追って記してゆきたい。

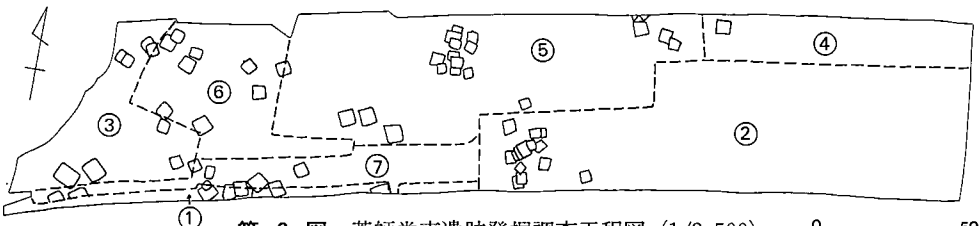
①の調査は，昭和59年10月28日から11月９日まで行った。南側の側溝工事を優先させるためのもので，それ以前に10月16日から②の部分の調査を開始しており，それを一時中断して①の方にかかった次第である。幅４ｍ，長さ140ｍに及ぶひょろ長い調査区で，各遺構の全容が摑めないために，切り合い等の確認作業に苦労した。

②の調査区は，当初北側にあった工事用道路を南側へ付けかえるためと，Ｃ.Ｂ.構築を優先させるためであった。10月16日から10月27日まで行い，その後①へ移って，11月10日に再開して翌昭和60年１月19日までで終了した。この間幾度か積雪にみまわれ，みぞれの横なぐりの中で作業を続行したこともあった。

③の調査区は，西側谷の工事が出水の少ない初夏までの間に着工したいとの意向に沿って，薬師堂谷遺跡の調査と併行して実施されたものである。１月22日から３月15日に及び，この間厳寒の中で多数の調査員・補助員の来援を得た。また，この南半を工事用道路として早急に引き渡してほしいとの意向により，雨の降りしきる中で遺構実測を敢行したことも度々であった。

④の調査区は，３月16日から４月27日に及んだ。これはＳＴＡ39＋30のＣ.Ｂ.構築を急ぐためのものであった。この間に，高松家墓地の樹木伐採が行われ，合い間をみて墓石そのものの個別実測や写真撮影を実施した。そして，墓地の現状のままの写真測量を依頼して，４月25日には，墓石を北隣路線外の用地に移転した。また，この間には福岡県の文化財行政に欠くことのできない人であった前文化課課長で九州歴史資料館副館長の藤井功氏が急逝された。

⑤の調査区は広く，遺構が密集する範囲で，４月29日から７月12日まで実施した。この梅雨



第 2 図　薬師堂東遺跡発掘調査工程図（1/2,500）

にかかる頃は連日の大雨で，常に水揚げポンプをかけっぱなしという有様であった。朝来てみると完全に調査区が水没していたことも度々あった。この調査区の西南半は小ピットが密集しており，この部分の遺構実測に調査補助員諸氏の多くの来援を得た。

⑥の調査区では，高松家墓地とそこに重複した古代遺構，及びその周辺の住居群等を発掘した。発掘作業は７月10日から開始し，類例の少ない近世の重要な墓地ということで慎重な調査を行い，９月24日に終了した。この間７月には別府大学賀川光夫教授の来訪を得たり，また，臨時職員として本遺跡調査を担当してきた森山栄一氏の筑紫野市教育委員会への移動ということもあった。更には，８月30日には高松家墓地を主眼とする現地説明会を催して，300名以上の参加者となり，この地域の人々の関心の深さを示すところとなった。これに先立って，その前日には新聞・テレビへの発表も行った。９月に入り，強い台風にも見舞われた。

⑦の調査区は，南端の細長い部分で，最後まで工事用道路として残してあった範囲であった。この部分だけを残して周辺の構造物・盛り土工事もかなり進展していた段階である。この調査区の東半は，南側路線外の植木畑への進入路を確保するために，この細長い部分を更に南北に２分して反転しての調査となった。９月30日から，10月12日までで，すべての本遺跡の調査を完了した。最後の慌しい調査ではあったが，ここで検出された第１号土壙からは，本遺跡最多の土器や瓦が出土して，貴重な資料となり，最後の花を咲かせてくれたという感じであった。永い調査も終った。

以上のような経過であったが，２万㎡に及ばんとする広い調査範囲であったとはいえ，それを上記の如く不規則な調査工程をとらざるを得なかった結果は，かなり効率の悪い調査となったことを深く反省している。調査区移動のたびにユニットハウス・テント・器材・トイレなどの移動を行い，更には基準測量杭の打ち直しも伴って，かえって時間のロスを生み出す結果となった。このような経過の中で日常的に現地にて配慮いただいた五洋・東亜共同企業体の寺田宝氏には特に謝意を表したい。

また，高松家墓地の管理をされてきた憶想寺の方々には常に暖かい御支援を受けた。地元の土地所有者の方々には，多くの御迷惑をおかけし，その度に深い御理解を示して下さった。更に，作業員の募集や，高松家墓地に関する事を初めとする地元との交渉に奔走していただいた小郡市教育委員会の方々にも深い感謝の意を表したい。最後になったが，現場にてみぞれの降りしきる中でも，常に苦労を共にした地元作業員の方々には，心から御礼を申し上げたい。

なお，薬師堂東遺跡の昭和59・60年度の調査関係者は次のとうりである。

日本道路公団福岡建設局

局　　長　　今村　浩三

総務部長　　菱刈　庄二(前任)　　安元　富次

管理課長　森　宏之
管理課長代理　野口　利夫(前任)　佐伯　豊

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所　長　乗松　紀三
副所長　西田　功
副所長(技術担当)　中村　義治
庶務課長　松下　幸男(前任)　徳永　登
用地課長　岩下　剛
工務課長　山口　宗雄(前任)　後藤二郎彦
小郡工事区工事長　友田　義則
甘木工事区工事長　猪狩　宗雄
朝倉工事区工事長　平沢　正(前任)　小手川良和
杷木工事区工事長　前田　雄一(前任)　山中　茂

福岡県教育委員会

総　括

教育長　友野　隆
教育次長　安部　徹
管理部長　伊藤　博之(前任)　大鶴　英雄
文化課長　前田　栄一
文化課長補佐　中村　一世(前任)　平　聖峰
文化課長技術補佐　宮小路賀宏
文化課参事補佐　栗原　和彦

庶　務

文化課庶務係長　松尾　満(前任)　平　聖峰(兼任)
文化課事務主査　長谷川伸弘

調　査

文化課調査第2係長　栗原　和彦(前任)　宮小路賀宏(兼任)
同　技術主査　井上　裕弘
同　主任技師　木下　修
同　主任技師　高橋　章(現京築教育事務所技術主査)
同　主任技師　児玉　真一(現北筑後教育事務所技術主査)
同　主任技師　新原　正典(現筑豊教育事務所技術主査)
同　主任技師　中間　研志(調査担当)

文化課主任技師　佐々木隆彦
同　主任技師　小池　史哲
同　技　師　伊崎　俊秋
同　技　師　小田　和利(調査担当)
同　技　師　緒方　泉
同　文化財専門員　木村幾多郎
同　臨時職員　日高　正幸
同　臨時職員　森山　栄一(調査担当)(現筑紫野市教育委員会)
同　臨時職員　宮田　浩之(現小郡市教育委員会)
調査補助員　高田　一弘　佐土原逸男
平嶋　文博　武田　光正
田中　康信　向田　雅彦
樋口　秀信

調査作業員

古賀忠次郎	三池　清水	野田　敏子	野田　松子	野田アキノ
野田スミカ	重松キクエ	臼井シメノ	大判　留子	辻　美都愛
古賀フサエ	古賀ツヤノ	草垣イオリ	溝田アヤ子	西岡サダ子
牟田チヅ子	高木スギノ	野田トヨ子	野田スエ子	樋口　スミ
中島　都	佐藤スギヲ	藤戸ナツヨ	井上　弘子	重松　幸恵
重松サツキ	重松クニ子	平田エミカ	木村キヨカ	高松キヨ子
井上ヒロカ	平田　保子	後藤トキエ	石本ナツエ	永利ナヲミ
棚町知江子				

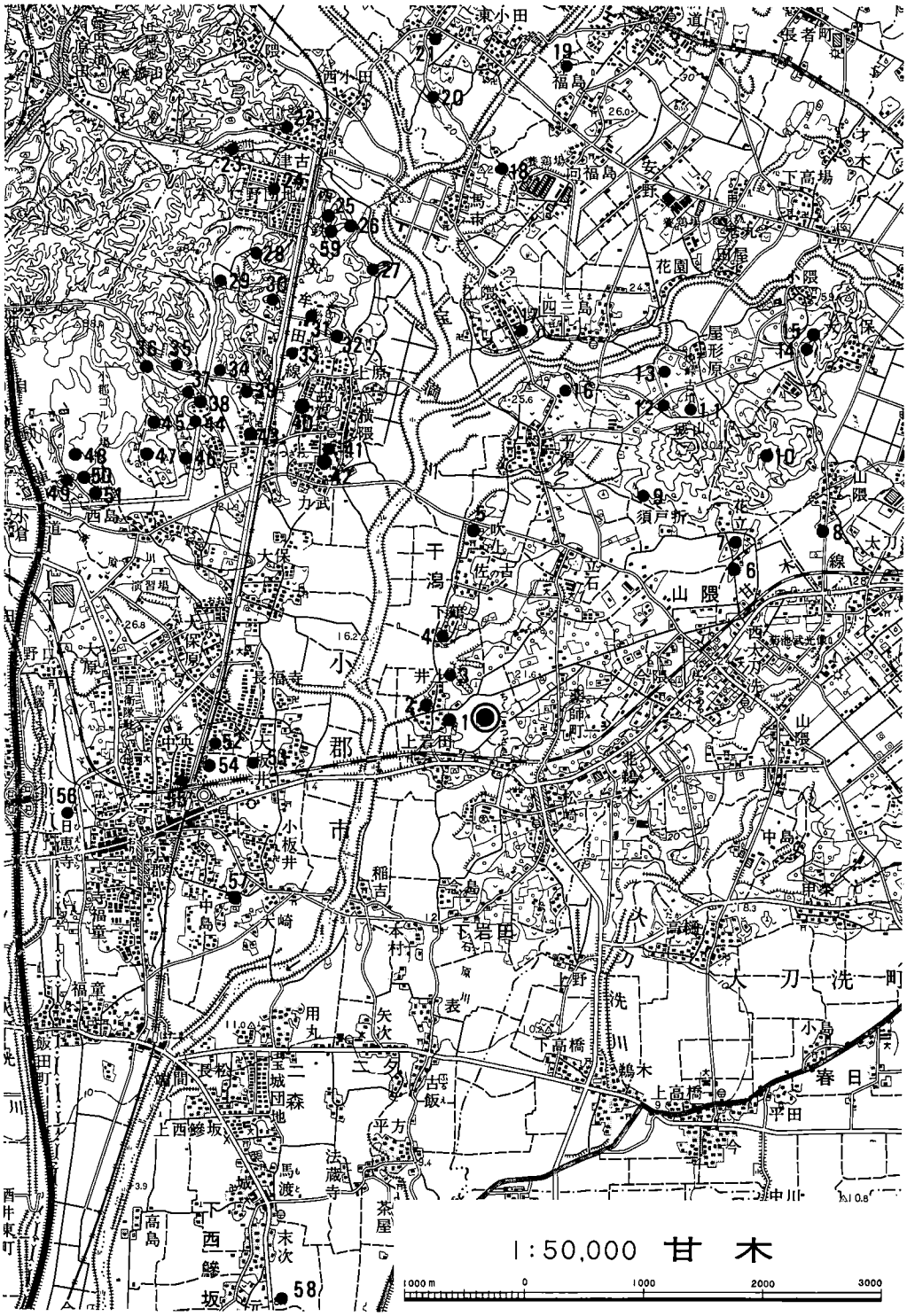
Ⅱ　位置と環境

遺跡の位置

薬師堂東遺跡の所在地は以下の如くである。

福岡県小郡市大字井上字東山ノ後985～990，字西道南945－２，字西野口1142～1144・1149，字東野口938～943，字口937

国土調査法第Ⅱ座標系　X＝44.313～44.441，　Y＝－38.651～－38.949



第 3 図　周辺遺跡分布図（◉印が薬師堂東遺跡）

本遺跡の呼称を如何ように決めようかという時になって，基本的に字名を遺跡名とする予定であったが，上記の如く，５つの字に渡るために，まずこれを断念した。次に近世高松家墓地が本調査区域内に所在することから，これに関する名称を思案したが，本遺跡の大半の遺構・遺物は古代のものであり，江戸時代遺跡の名称を使用するのは，時代的にそぐわないということになった。そして，西隣の第５地点が字南薬師堂で，井上薬師堂遺跡という名称を付けたので，本遺跡はその東に所在する一連の遺跡であるという観点から「薬師堂東遺跡」と命名するに至った。

本遺跡は，筑後川及びその支流宝満川によって形成された洪積世の低位段丘上に占地している。この低位段丘は筑後川北岸では，広く朝倉町西半あたりまでみられ，各所の大小支流により開析されている。この段丘上縁辺部には，多くの古墳時代から奈良時代の集落遺跡が形成されている。今回の九州横断自動車道建設に伴って調査された朝倉町西半部までの遺跡の大半は，この立地の大集落跡である。

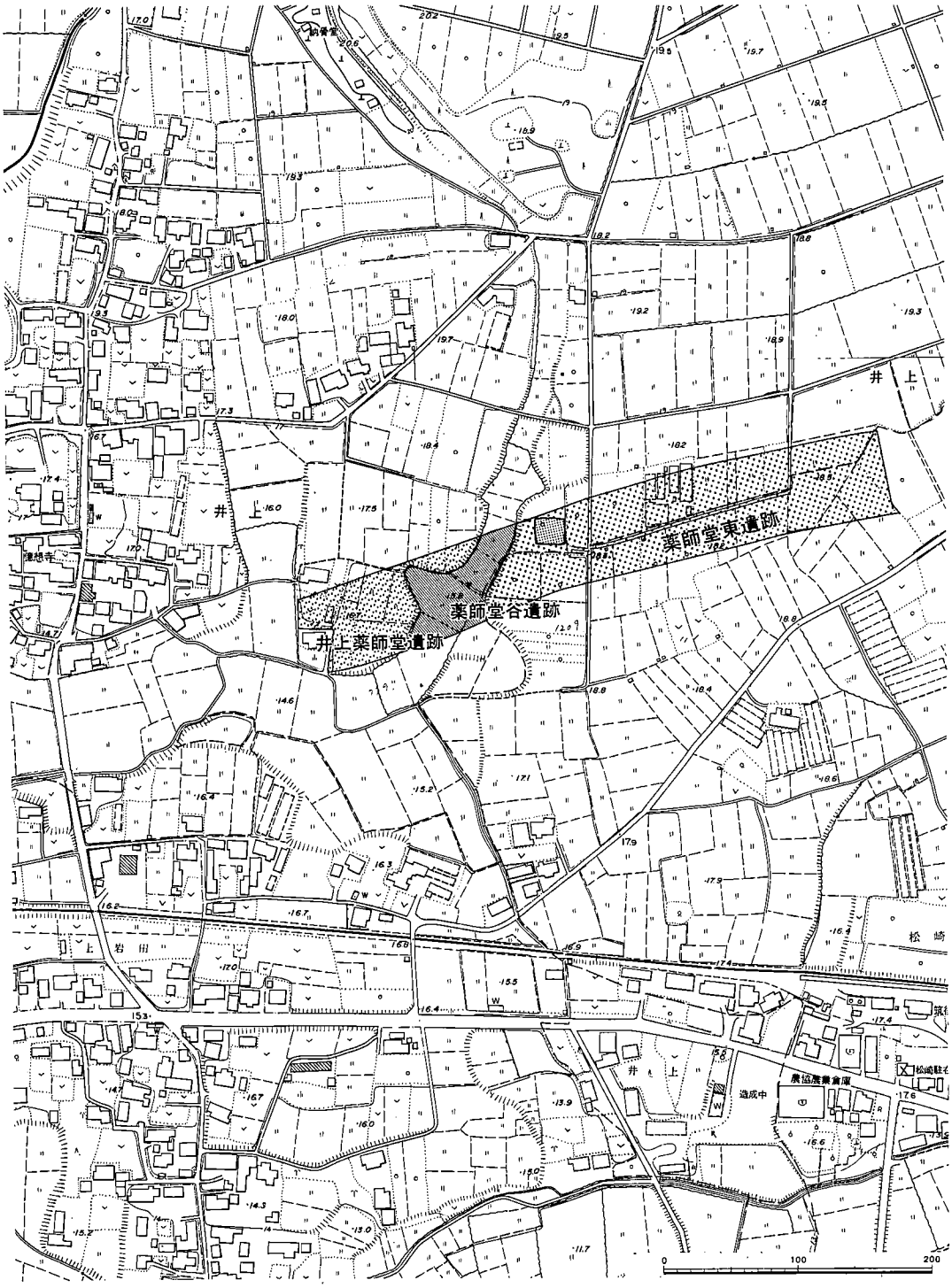
歴史的環境

本遺跡は，何よりも井上廃寺と呼ばれる，山田寺系古瓦を有する遺跡との関連を考えねばならないだろう。本遺跡からはこの井上廃寺から持ち込まれたものと考えられる瓦片がかなりの量出土している。本遺跡内に瓦葺建物の在った可能性は無い。

そのような事から，本遺跡で発見された古代集落は，何よりも井上廃寺を支えた人々の，或いはその建造・修理に実際的に携わったかもしれない人々の村落であったと考えられる。いずれにしろ，井上廃寺自体の本質的性格の調査解明がまたれるところである。

７・８世紀の同時代の遺跡として，北方には干潟遺跡があり，古代の御原郡日方郷に比定されている。ここでも椎先瓦の完形品が住居跡床面から出土しており，井上廃寺に対して労役を提供した集落と解釈されている。

以上の他に周辺には関連する遺跡が多々在るが，既に第５・７・10・11集の中に極めて詳細に記載してあるので，重複をさける。なお，第３図の遺跡番号は第10集のものと同一であるので，そちらを参照されたい。　（中間）



第 4 図　薬師堂東遺跡周辺地形図 (1/5,000)

Ⅲ　調査の内容

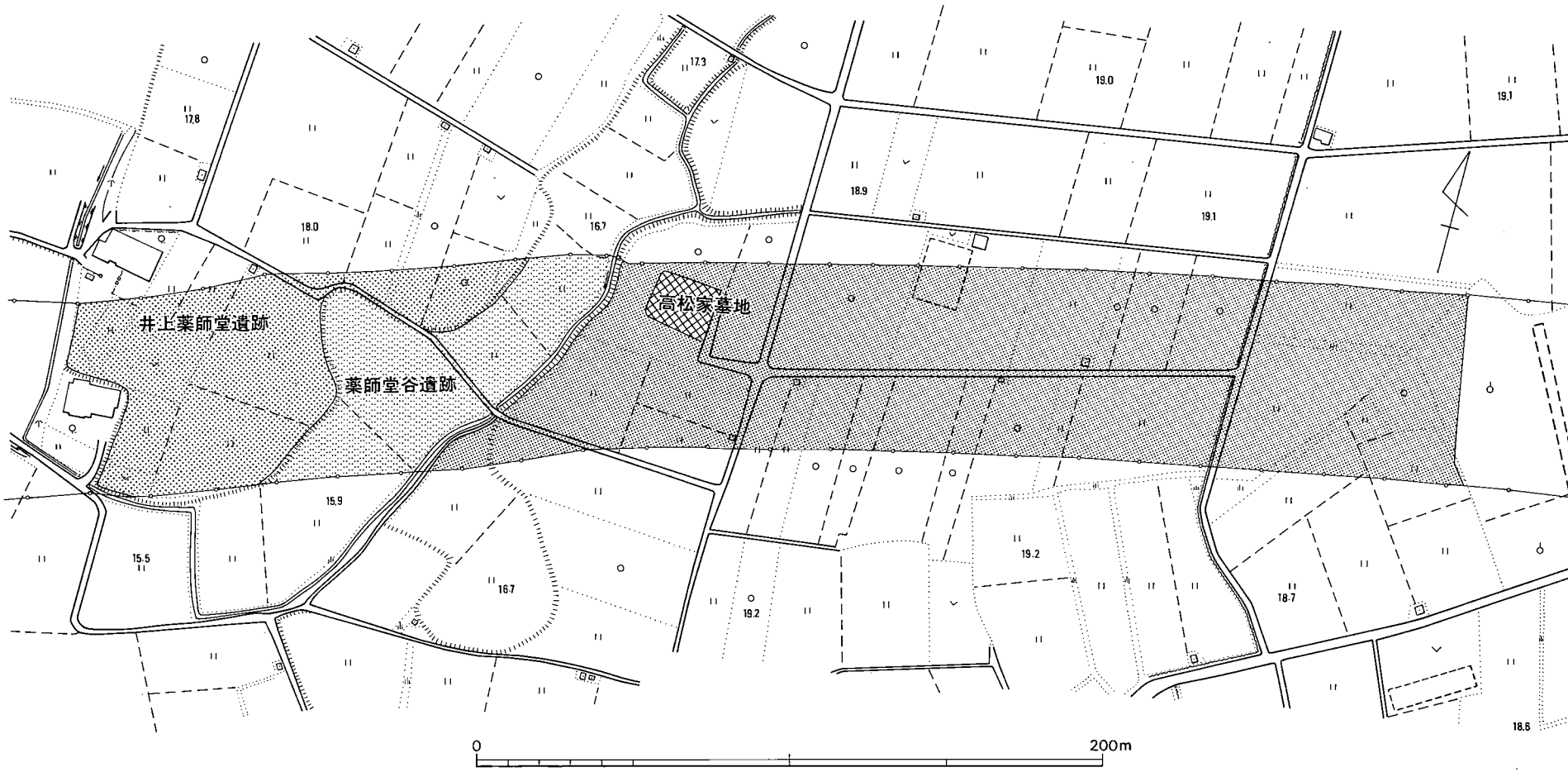
薬師堂東遺跡では，次のような遺構を検出し得た。ただし，高松家墓地の分については次回の報告に譲ることとした。

竪穴式住居跡	69軒		（6世紀末～8世紀末）
掘立柱建物	21棟		（6～8世紀）
土　壙	45基		（6世紀末～平安時代）
土壙墓	11基		（7世紀中葉～9世紀中頃）
溝	7・8世紀	13条	
	14世紀	1条	
	近・現代	35条	
井　戸	3基		（7世紀中葉～8世紀末）
円形周溝遺構	1基		（古　代）
埋　甕	1基		（8世紀）
道路状遺構	2本		（7・8世紀）
馬歯埋納遺構	1基		（古　代）
落し穴状遺構	12基		（縄文時代？）
風倒木痕	3個		（縄文時代）
近世高松家墓地	26基		（江戸時代）
その他柱穴群等	極めて多数		

以上の各遺構からは各々の時期に属する多量の土器・鉄器・石製品・土製品などが出土している。ただ本遺跡の主体は7～8世紀の竪穴式住居と掘立柱建物で構成される集落である。

また，量は少ないが，縄文時代早・前期の遺物が出土しており，付近に有力な遺跡の存在が推定される。これについては，次項の土層の説明で詳述する如く，遺跡中央南端にトレンチを設けて，深掘りしてはみたが，成果は得られなかった。

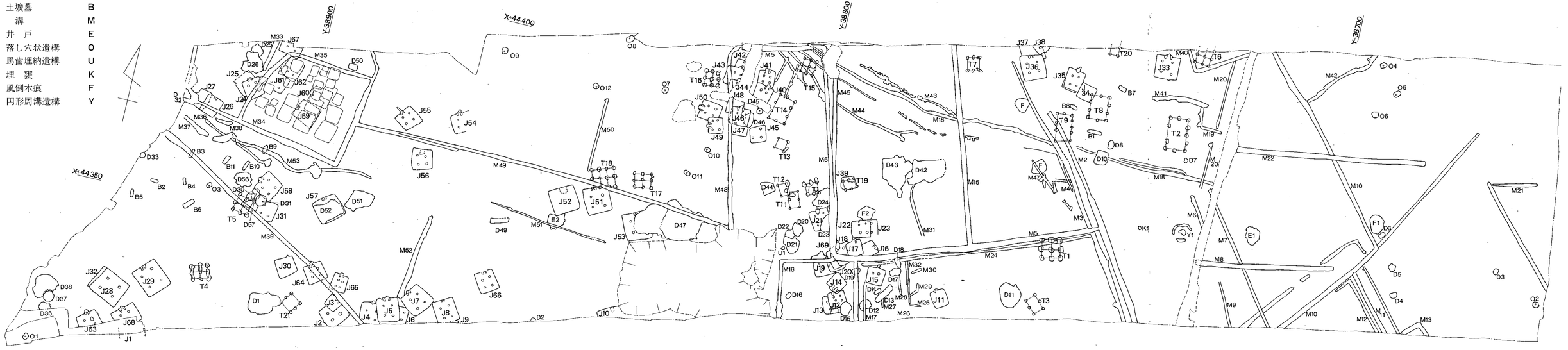
更に，弥生時代の遺物も少量出土しているが，他時期の遺構に混入したものであり，弥生期の遺構は存在しない。西側の井上薬師堂遺跡で弥生時代住居が若干検出されており，それらから持ち込まれたものであろう。



第 5 図　薬師堂東遺跡地形図 (1/2,000)

凡　例

竪穴住居跡	J
掘立柱建物	T
土　壙	D
土壙墓	B
溝	M
井　戸	E
落し穴状遺構	O
馬歯埋納遺構	U
埋　甕	K
風倒木痕	F
円形周溝遺構	Y



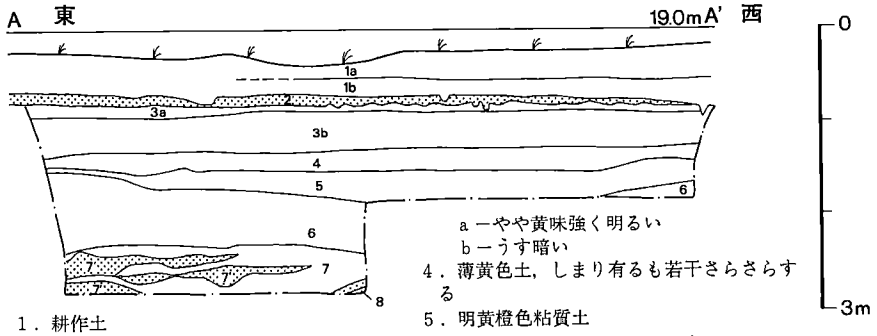
第 6 図　遺 構 配 置 図 (1/600)

地形と層位（第５・７・８図）

薬師堂東遺跡の古代遺構面は，低位段丘上に在り，標高17.3～18.5mの，大きくみればほぼ水平に近い平坦面である。より詳細にみてみると，座標軸Y＝－38.82のあたりから，Y＝－38.70のあたりまでの北半部が最高所で，それから西へ次第に低くなっている。また，Y＝－38.83からY＝－38.87あたりまでの北半が僅かに10～20cm程度微低地となっている。つまり，D・F・C″住居群に囲まれた遺構空閑地がそれである。更に，Y＝－38.68から東北調査範囲までの幅で，南端のY＝－38.70までの南北方向に帯状に低い部分がみられる。約30cmほど低く，浅い谷状を呈しており，遺構は落し穴状遺構を除いて皆無である。以上のような，ごく僅かな高低差が集落遺構の立地に大きく影響していることは見逃せない。即ち，少しでも高い部分を選択して，住居群が占地している訳である。

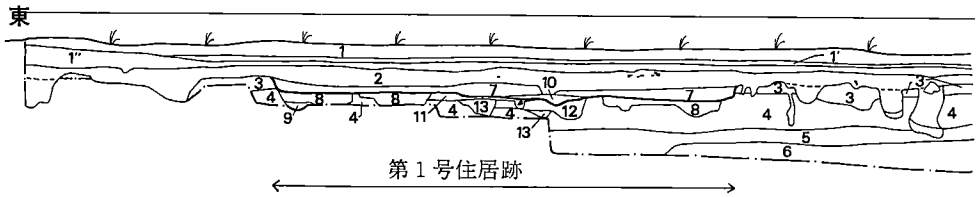
本遺跡の層位を記述しておこう。発掘調査開始当初，南側に沿った側溝工事先行に伴って，南西端の第１号住居跡付近が深掘りされ，その際に土層観察を行った。(第８図) 基本的には，耕作土・床土が約30cm被り，その下に15cm厚さで黒色包含層（第２層）が拡がっている。この土が古代遺構の殆んどを覆うものである。この下に第３～５層のローム質の黄褐色系粘質土が60cm堆積している。古代各遺構はこの第３層上面から切り込んでいる。この下の第６層は，黄橙色砂質土と灰色粘質土の混合層で，滞水状況下での水成層となる。

更に，遺跡東端近くの，第２号溝と現代導水管埋設部とに挟まれた遺跡南端に，長さ７m，幅３mのトレンチを入れて土層の観察を行った。これは，この周辺の第１号井戸から縄文早～前期の打製石鏃が出土したり，黄褐色粘質土にくい込んでサヌカイト剥片等が採集されたりしており，あわよくば縄文～プレ期の層位を摑みたいとの意図があったからである。トレンチ発掘による遺物の出土は皆無で，もくろみは破れ去ったが，土層をより深く確認することができ



1．耕作土
　中位に鉄分薄く堆積し上下(ａ・ｂ)に分かれる。ｂ－床土でしまりあり
2．黒色土，遺構特にピットなどの埋土と同じ。
3．黄褐色粘質土
　ａ－やや黄味強く明るい
　ｂ－うす暗い
4．薄黄色土，しまり有るも若干さらさらする
5．明黄橙色粘質土
6．明黄橙色縞状文様の暗橙灰色粘質土，５から７への混合層
7．灰色粘質土，しまり弱し
　間に砂(２mm以下)の堆積層あり(７′)
8．砂利層，⑦の砂より大きい(２～10mm)

第７図　発掘区中央南付近土層断面実測図（ＳＴＡ.39付近）(1/80)



1．灰褐色耕作土
1′．暗赤色鉄粒集中堆積灰褐色土
1″．暗灰褐色耕作土，１層に比べ締まり強く固い(床土？)
2．混黄褐色粘質土粒・赤色土粒・炭化粒黒褐色土・住居跡・ピット群などを覆う包含層と考える

ローム層
3．淡褐色粘質土(チョコレート色)
4．明黄褐色粘質土
5．多混黒色岩石塊(３～５cm)・石粒・明黄褐粘質土
6．灰色やや粘質土及び黄橙色砂質土混合層，詳細には分層できるものと思うが上下入り組んでいるので分層しない。部分的に黒色岩石粒を含む

第 8 図　発掘区南西付近土層断面実測図 (1/80)

た。基本的には西南端部の土層と同じである。ここは，既述した如く，遺構面が低い部位にあたり，表土が50～60cmと厚い。第３～５層の黄褐色系粘質土層も１m近く厚く堆積している。第６層の下にはしまりの弱い灰色粘質土層(第７層)があり，その中には砂層が縞状に入っている。更にその下の，現地表面から約2.6m下に，２～10mm大の砂利層が確認できた。

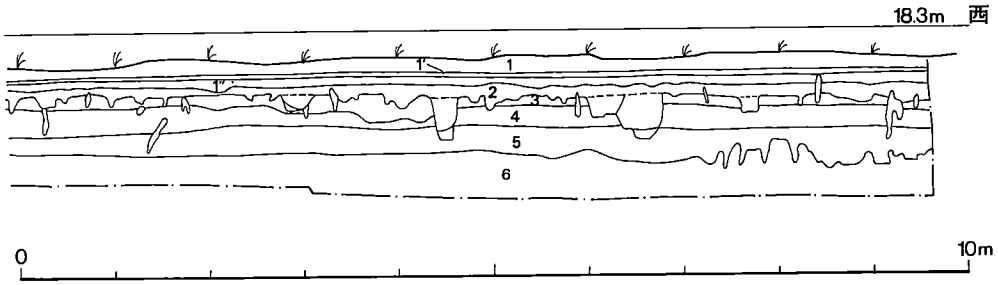
以上の土層のうちで，第３層の中に縄文早～前期と考えられる石器類がくい込んでいたのは確実で，この層がこの地域における同期の包含層であることを確認できた。このような例は各遺跡でも確認されている。即ち，本遺跡の北方約2.5kmの干潟遺跡では，この黄褐色粘質土に貼りついた状態で押型文土器が検出されており，甘木市柿原遺跡では明黄褐色土中から押型文・無文土器が出土している。また，杷木町天園遺跡では，１m近い黄褐色土系粘質土層の上・中位に轟式土器が多量に包含されている。以上の他にも横断道関係調査分の朝倉町・杷木町所在の多くの遺跡で，このような状況が確認されつつある。今後，自然科学的分析をも加味してゆく中で，遺跡相互の層位のつき合わせによる検討が重要な課題となろう。

集落のグルーピング（第９図）

以下の各遺構の説明の中で，本遺跡の住居跡を主眼においた配置上のグループ名を使用しているので，ここで，簡単にその主旨と具体的区分法を記しておきたい。

本遺跡で検出した遺構の主体は，７・８世紀を中心とする竪穴式住居と掘立柱建物とで構成される集落である。今回調査分全体は，一つの集落のうちの何分の一かを占めるにすぎないのかもしれない。しかし，遺構の密集度からみると，主要な部分のうちのかなりが含まれているように思われる。

さてこれらの遺構群は，単純に配置図を眺めていても，小支群に分かれることが判断できる。そして，各グループが，それぞれ密集する竪穴式住居と倉庫的な掘立柱建物及び土壙を持っていることが観取される。更に，各グループ内における竪穴式住居・掘立柱建物の主軸方位が，



7．多混黄褐色粘質土粒黒褐色土・住居跡埋土
8．著多混黄褐色粘質土塊・土粒黒褐色土
9．黒色土・壁溝埋土
10．多混焼土粒暗褐色土，下位に砂質土堆積
11．淡褐色(チョコレート色)粘質土，やや硬質であるので貼り床の硬化層と考える
12．混黒色土粒黄褐色粘質土，④の明黄褐色粘質土地山と思ったが③もやや混じり，全体に濁っており掘ってすぐ埋ったものと考えられる
13．混黒色土粒・淡褐色及び明黄褐色粘質土混合層，⑫同様地山のローム塊多く混じるが⑫より暗い

（ＳＴＡ.37～38付近）

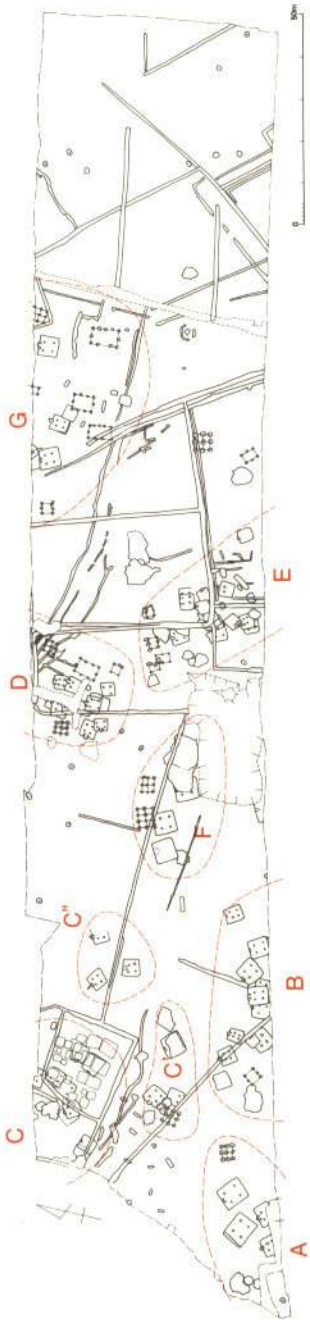
ほぼ一定していることも判かる。つまり，各グループ内での主軸方位の規制が認められるのである。例えば，G群とE群，E群とD群間における主軸方位の違いは歴然としている。

以上のような主旨とともに，遺構の位置を説明する際の便宜をも考慮して，A～Gの７つの支群にグループ分けした。これは，土壙をも含めたもので，また，時期的変遷からの視点は全く配慮していない。具体的には以下の如くである。（数字は各遺構番号を示す。）

第 1 表　各遺構グループ一覧表

群	住　　居　　跡	掘立柱建物	土　　壙
A 群	1・28・29・32・63・68	4	36・37・38
B 群	2・3・4・5・6・7・8・9・30・64・65・66	21	1
C 群	24・25・26・27・59・60・61・62		25・26・32・50
C′群	31・57・58	5	30・31・51・52・56・57
C″群	54・55・56		
D 群	40・41・42・43・44・45・46・47・48・49・50	13・14・15 16	45・46
E 群	11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・39・69	10・11・12 19	12・13・14・15・16・17・18・19 20・21・22・23・24・42・43・44
F 群	51・52・53	17・18	47・井戸２
G 群	33・34・35・36・37・38	2・6・7 8・9・20	7・8・10

このようにグループ分けしたが，これに含まれない第10号住居跡や，第１・３号掘立柱建物・第11号土壙などは，更に南方に拡がる１群のものなのか，独立した配置を示すものなのか，判断し難いので，今回は除外した。また，C′群としたものは，C群との間に東西に走る当時の溝が横たわっており，B群に入れた方が良いのかもしれない。或いは，西側の谷に面する一群としてC～C′～Aをひとつの群にまとめるべきなのかもしれない。



第9図　集落支群グルーピング図
(1/1,800)

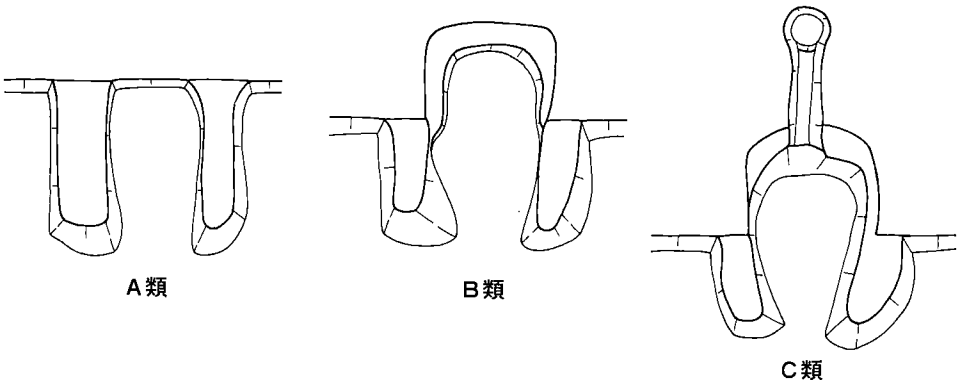
これらの各グループは，まとめの項で詳述する如く，時期的な片寄りもみられ，全体の盛衰は一様ではない。更に，各グループ間の同時存在は，住居の多いグループでもせいぜい2～3軒程度と考えられる。そして，それらの各グループは，とりも直さずごく身近かな血縁集団の単位グループを示しているものと考えられる。

以下，各遺構について，このA～G住居群の配置分けを用いて，説明してゆきたい。　　（中間）

A　竪穴式住居跡

本遺跡では，総計69軒の方形竪穴式住居跡を検出した。（第2表）　各々大小あり，時期的にも7世紀初頭～7世紀末前後まで連続して営まれるが，7世紀後葉期が多数を占める。全体としての竪穴式住居の群としての配置は，5～6の小ブロックに分かれ，大きくは環状に配置されているようでもある。この群の構成については後論で集落の変遷を含めて詳さに検討したい。ただ，それぞれの小ブロック内においては新旧の切り合い（最大が第17～20・69号住居の5回の重複）がかなりみられ，各ブロック内での建て替えが続いたことがわかり，この時期のある程度の定住性の強い母集落を構成したことが考えられる。これは，各々の小ブロックに伴なって総柱の倉庫と考えられる掘立柱建物が数棟づつ検出されていることからも，本集落の構成が基本的に，井上廃寺創建の背景を支えた農業基盤の母集落であることを示唆している。

本遺跡検出の竪穴式住居跡は，すべて一辺のほぼ中央に粘土等で作り付けた住居付帯施設としての竈（以下カマドと記す）を有している。（ただし小規模の住居では認められないものも数例ある。）その形態も大き



第 10 図　竪穴式住居跡付帯カマド模式図

く３種に分類できる。(第10図)　A類・・・住居掘方壁を崩さずに，その内側に袖を含むカマド本体を構築するもの。B類・・・住居掘方壁を崩し外側まで掘りくぼめて，燃焼部を壁ラインより外方まで拡げたもの。C類・・・B類に長く延びる煙道部を付けたもの。このC類は少ないが，遺跡全体に削平が著しいので，既に残っていないとしたら，B類のものの一部もC類となる可能性もある。以上の形態別の類別の他に，土師器小甕を倒立して転用した支脚もかなりみられる。カマド内に小礫が数点検出されたことも少例ながら気になる。ここでは以上の如くA，B，C類に便宜上分類したが，基本的にはあくまでも，煙道そのものは存在するわけであり，残存状況としてのC類でしかないのである。つまり，住居跡の壁外方に掘り込むB類であるのか，そうでないA類であるのかが，本来的な当を得た分類となるのではなかろうか。

本遺跡の竪穴式住居跡はすべて方形ないし長方形掘方を呈し，その床面に４本の主柱穴を有する。ただし，小規模住居では不明瞭なものが多い。

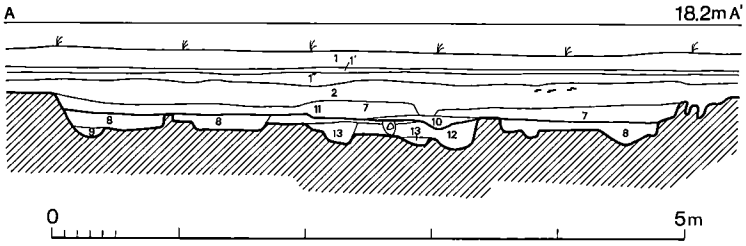
竪穴式住居のカマドを含めた詳細については，考察篇で検討を加えることとして，以下，簡略に各住居毎に説明してゆきたい。なお，各住居の法量等の細かい数値については一覧表（第２表）を参照されたい。

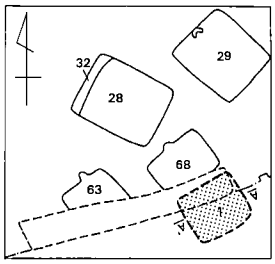
第１号住居跡（図版14，第11図）

A群の中で南端に位置する。調査当初南側に路線に沿って設けられる側溝工事の掘削の際に，土層断面のみで確認されたものである。

北に隣接して第68号住居跡があるが，部分的に切り合うものかは定かではない。ただその近接状況から両者の同時併存は考え難い。

土層から観察すると，床面中央と壁沿いに下層（当初）の掘込みがみられ，その上に貼床を施している。カマド等明瞭でない。





1．灰褐色耕作土
1'．暗赤色鉄粒集中堆積灰褐色土
1''．暗灰褐色耕作土
　1に比べ締まり強く固い(床土？)
2．混黄褐色粘質土粒・赤色土粒・炭化粒黒褐色土,住居址,ピット群などを覆う包含層
7．多混黄褐色粘質土粒黒褐色土
　住居址埋土
8．著多混黄褐色粘質土塊・土粒黒褐色土
9．黒色土
　壁溝埋土？
10．多混焼土粒暗褐色土
　下位に砂質土堆積
11．淡褐色(チョコレート色)粘質土やや硬質であるので貼り床の硬化層と考える
12．混黒色土粒黄褐色粘質土，4層の明黄褐色粘質土地山と思ったが，3層もやや混り全体に濁っており掘ってすぐ埋まったものと考えられる
13．混黒色土粒淡褐色及び明黄褐色粘質土混合層，12層同様地山のローム土塊多く混るも12層より暗い

第 11 図　第1号住居跡断面実測図 (1/60)

第12図　第1号住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土遺物（第12図）

須恵器杯蓋で，口径12.2cm，器高3.5cmを測る。内面は灰かぶりして，天井外面中央はナデており，その周縁のみ回転ヘラ削りを施す。

この土器は本住居跡断面図での第12層，即ち床面より下層の貼床下から出土したもので，住居跡の時期そのものを示してはいない。よって，この第1号住居跡は，7世紀初頭を上限とする時期に営まれたと考えられる。（中間）

第2号住居跡（図版15，第13図）

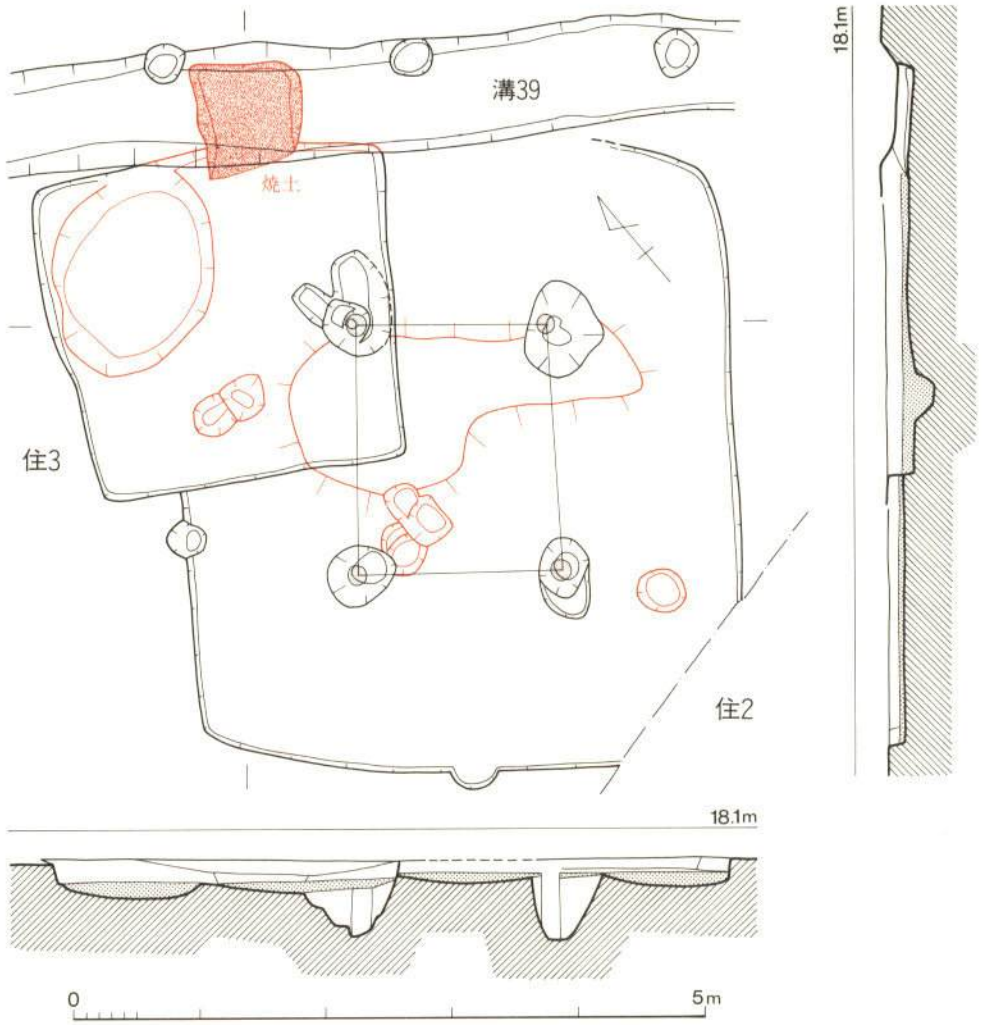
B群の中央南端に位置し，第2号住居跡→第3号住居跡→溝39（古→新）と切り合う。カマドは北西辺を第3号住居，北東辺を溝39に切られるため，全く痕跡を残さないが，同辺の状況よりおそらく北東辺に位置したと考えられる。

明瞭な4主柱穴を残し，柱痕跡も良く確認できた。直径15～18cmの太さである。床面中央を掘り残す形で，4柱周辺部を掘り下げて後，貼り床を施している。

出土遺物（第14図）

床面直上より須恵器杯類が出土した。

須恵器（1～8）1は口径11.8cm，器高3.7cmを測る杯蓋で，天井外面はヘラ削りを施している。2は口径10.8cm，器高3.7cmの杯蓋で，4主柱穴の1つであるP.2内から出土している。天井外面は横ナデの上を部分的にナデツケている。端部が丸味を持ち，口縁上位で屈折をみせる類である。3は，床面出土杯身で，口径10.4cm，器高3.5cmを測る。底部外面は粗い回転ヘラ削りで，中央部分はナデている。4は杯身底部で，底部外面は未調整状を呈する。5は高台

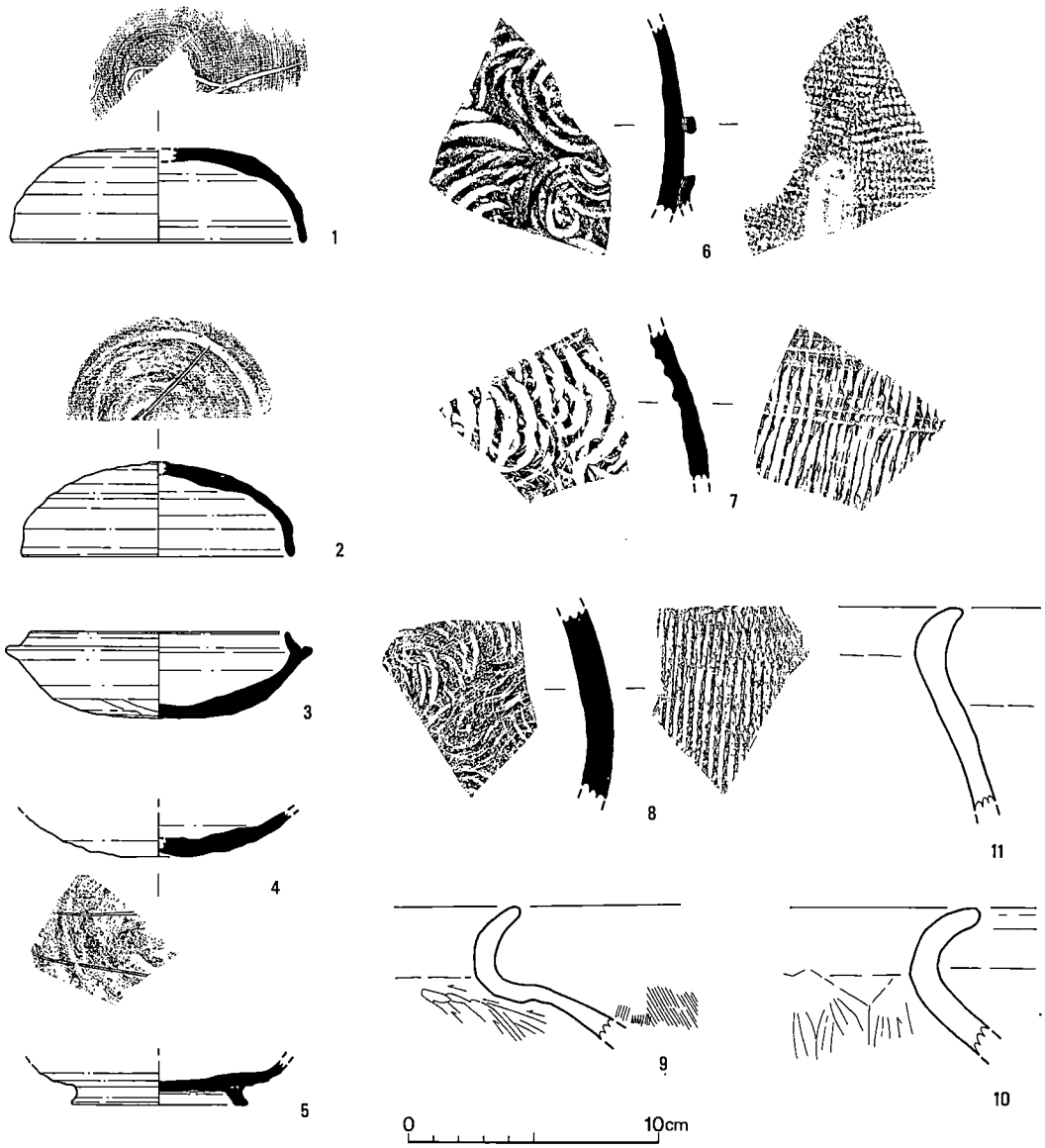


第 13 図　第２・３号住居跡実測図（1/60）

径７cmを測り，全体に薄手で，外方に踏ん張る形状の高台を付ける。体部外面は下端まで横ナデ仕上げを行っている。底外面はナデている。

６～８は甕胴部片で，６の外面には焼成時に他器種が付着している。内面は青海波，外面には条痕状叩きが施される。７は外面に平行条線状叩き，内面には粗大な青海波が施されている。８は外面に条痕状叩き，内面には青海波が施されている。

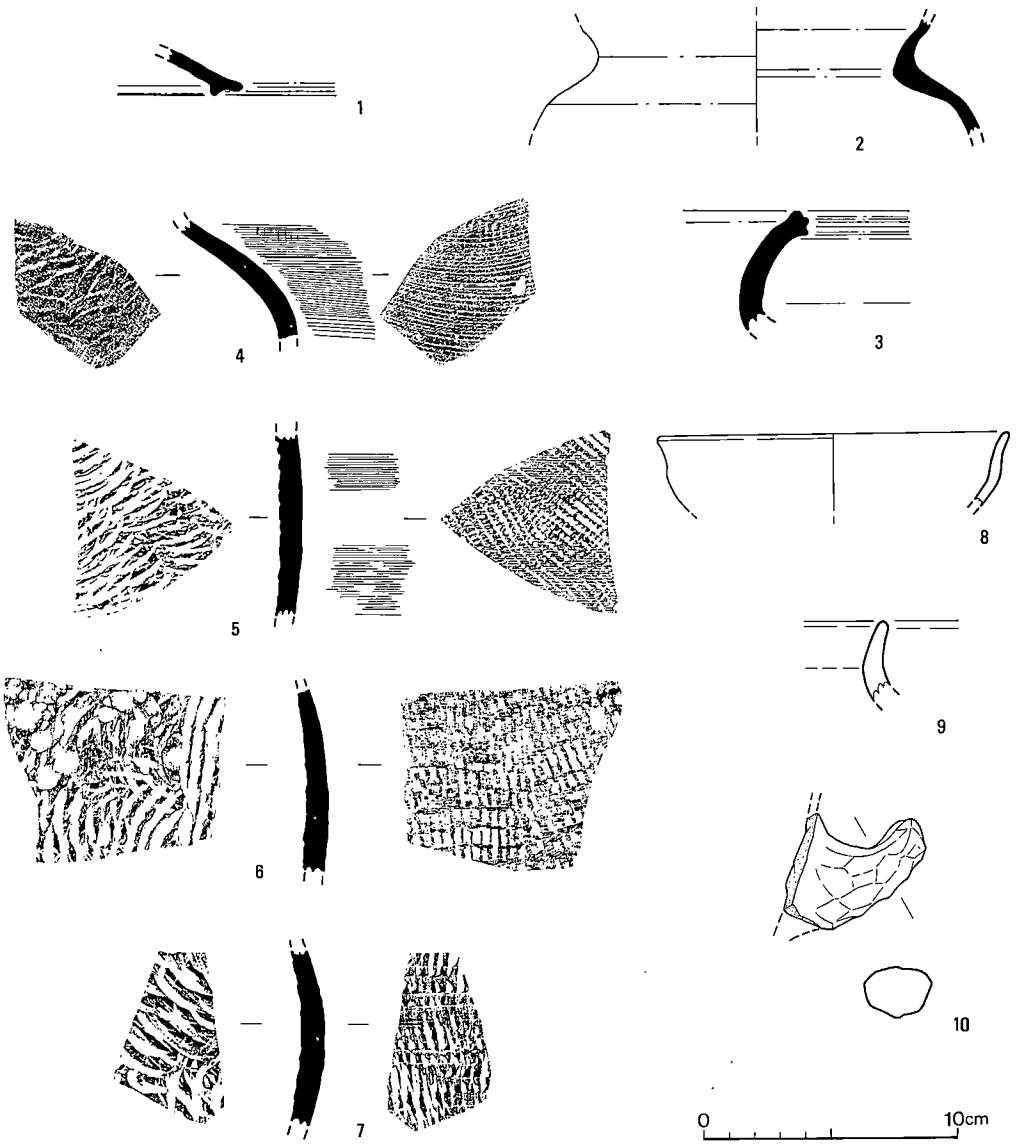
土師器（９～11）９は胴が肩部で強く張り，丸く屈曲して外反する口頸部となる甕である。10も胴が強く張るタイプであるが，９よりも口縁部が長めに外反する。いずれも頸部は肥厚しな



第 14 図　第 2 号住居跡出土土器実測図（1/3）

い。11は，住居内 4 主柱穴のうちのP. 3 から出土したもので，胴部中位で張り，頸部内面に稜をつくり，短かく外反する口縁となるものである。

以上の出土遺物は，大旨 3 期に分けられる。即ち，1・9 が示す 6 世紀末～ 7 世紀初頭期と，2・3・11が示す 7 世紀の初葉期と，5 の 7 世紀後葉期とである。ここでは 3 の床面直上出土の状況を尊重して，この第 2 号住居跡は 7 世紀初葉に営まれたものと考えたい。　（中間）

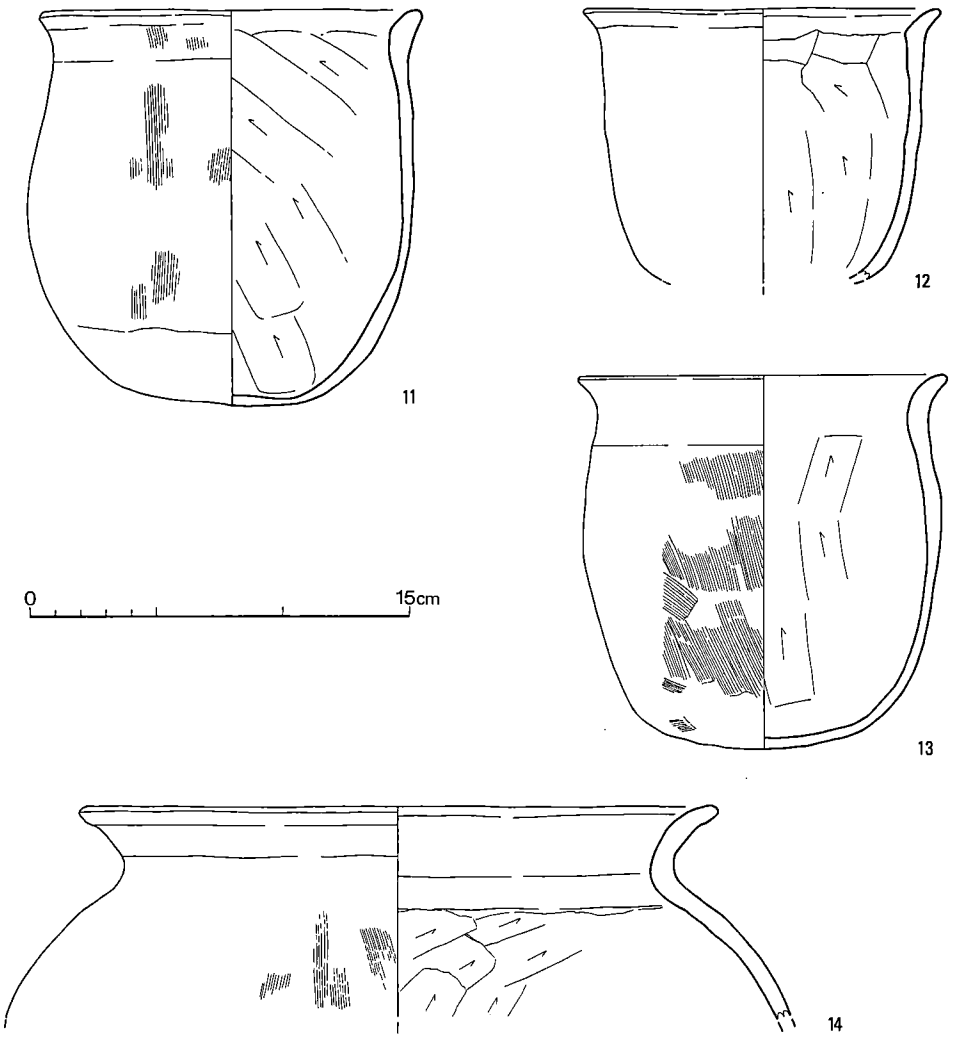


第 15 図　第３号住居跡出土土器実測図（その１）(1/3)

第３号住居跡（図版15，第13図）

Ｂ群に属する特小型住居で，第２号住居を切り，溝39に切られる。面積 6.8 ㎡と特に小さく，主柱穴は床面には見られない。床面下層は北端部で大きく掘られている。

カマド（図版16，第13図）北東壁辺の中央よりやや東に片寄った位置に設けられている。掘方が壁辺より外側へ突出するＢ類であるが，上半の殆んどを溝39で削平されているため，詳細は明らかでない。燃焼室部分には焼土がつまっていた。袖は残らない。



第 16 図　第3号住居跡出土土器実測図（その2）(1/3)

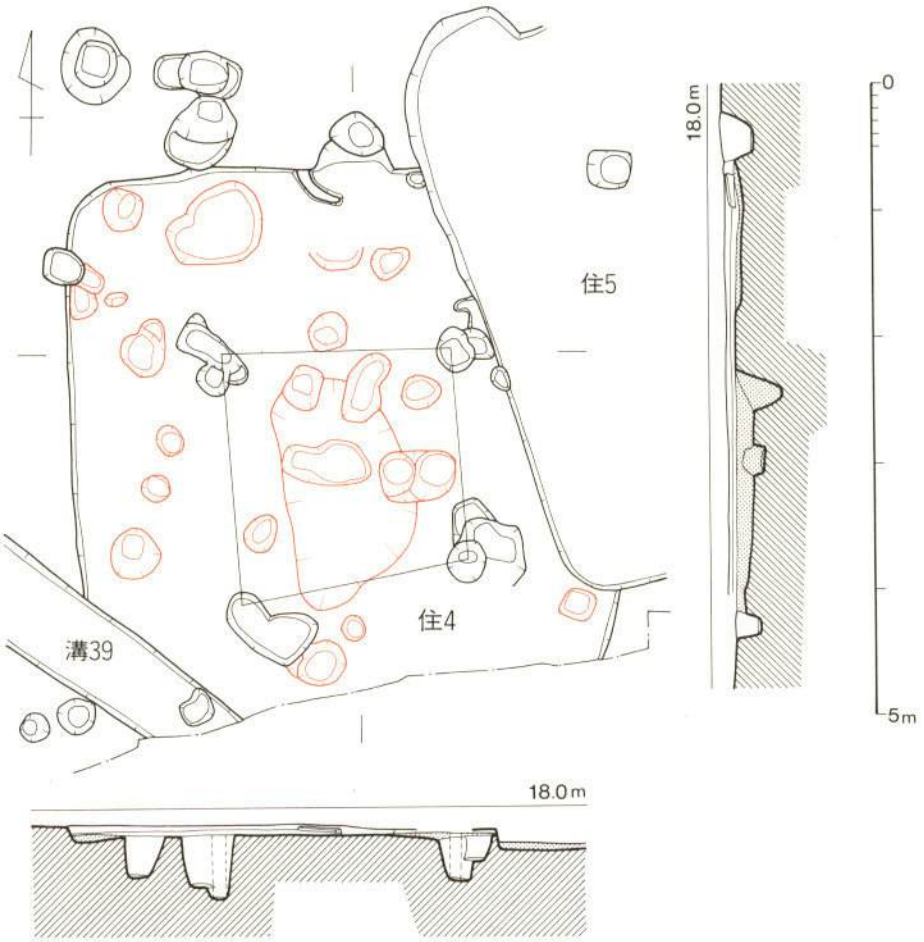
この第3号住居は既述の如く特に小型で，主柱穴もはっきりせず，カマドのみが目立つ類で，通常の住居とは一線を画しており，特殊な用途を考えねばなるまい。

出土遺物（第15・16図）

須恵器（1～7）1は短かい返りを有する杯蓋片で，内外面横ナデを施す。2は広口の壺で，肩が張り，全体に薄手である。頸部内面に鋭い稜をつくり，内外面ともに横ナデ調整を施す。内面上辺と外面は灰かぶりしている。3は甕口縁で，内外面とも横ナデを施す。内面は灰かぶりしている。4は壺・瓶の胴部片で，外面は叩きの上をカキ目で消し，内面は青海波の上をナ

デ消している。5～7は甕胴部片で，5の外面は細い条蔀状叩きの上をカキ目調整する。内面は細身の青海波が施される。6は長方形気味の格子目叩きを施し，内面には粗雑な青海波くずれのあて具痕がみられる。7は，外面に平行条線状叩きをみせ，内面には粗い青海波が施されている。

土師器（8～14）8は復原口径14cmとなる杯であるが，全面磨滅して調整は不明である。9は短頸の甕片で，胴の張る古いタイプとなろう。10は小ぶりの把手部分である。11は，口径15.2cm，器高15.7cmを測り，頸部で肥厚して短かく外傾する程度の口縁となる。外面には黒斑部が見られ，底外面はナデていると思われる。12は，復原口径14.1cmの薄手の小型品である。全体に二次火熱を受けて赤変し，外面は磨滅している。13は，口径14.6cm，器高14.8cmの小甕で，頸内面に稜をつくらず，ゆるやかに外傾する口縁となる。胴外面には黒斑部がみられる。14は，



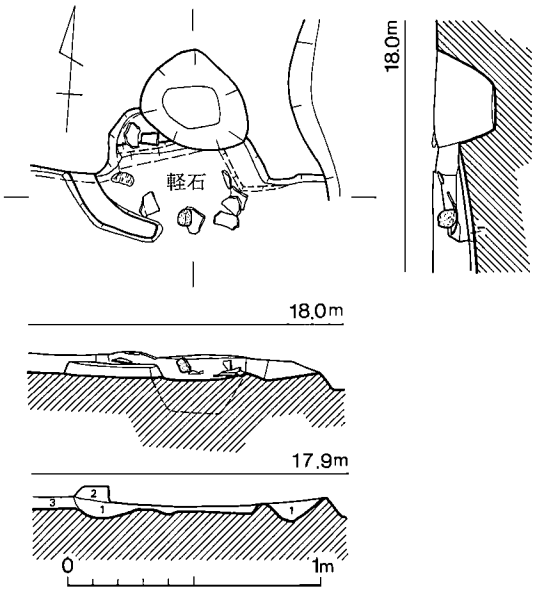
第 17 図　第 4 号住居跡実測図（1/60）

口径25.2cmで強く張る胴部につくる甕で，頸部であまり肥厚せず，長く外反して開く口縁となる。6世紀代の特徴をよく示している。

以上の出土土器は，1が7世紀後葉代で，6・7もそれに近い様相を示し，土師器小甕類もほぼそれを前後する時期と考えられる。ただ，他の多くは7世紀前葉期以前の古い様相を示している。遺構の切り合いからみて，この古い様相の土器群は，第2号住居跡を切って掘り込まれた際の混入品とみられる。よってこの第3号特小型住居跡は，7世紀後葉代の所産と考えられる。（中間）

第4号住居跡（図版17～19，第17図）

B群の中央に，第5号住居跡と溝39に切られて位置する。南辺が未調査のため全容はいまひとつであるが，ほぼやや縦長に近い方形住居となろう。主柱は4本と思われるが，南西端の1柱穴が不明瞭である。床面下層は中央部を大きく掘り込んでおり，他はわずかに貼り床を施す程度である。



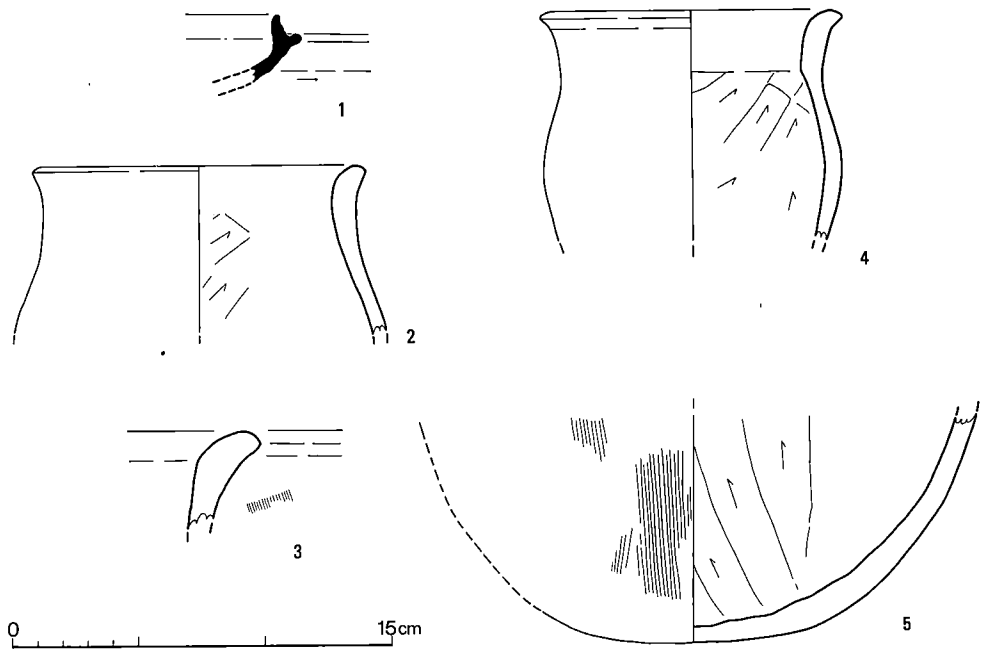
1．炭・焼土粒子(0.5～1cm大)混りの暗褐色土
2．灰が混った1
3．焼土があまり混らない暗褐色土(貼床)

第18図　第4号住居跡カマド実測図（1/30）

カマド（図版18，第18図）北壁中央部に設置され，壁外方へ燃焼部が張り出すB類である。袖の残りは良くない。中央に軽石が立っているが，埋め込んだ形跡もなく，下に土師器片もあり，支脚に使用したとしても原位置ではなかろう。煙道側は新しい穴で切られる。カマド内には土師器甕片が散在し，カマド支脚に転用された可能性もある。

出土遺物（第19図）

1は，須恵器杯身で，立ち上がり部はまだ長めに立ち，深い形状をなすと考えられる。底部外面は回転ヘラ削りが施される。床面4主柱穴のうち，P.1から出土したものである。2は土師器小甕で，口径13.1cmを測る。外面は磨滅しており，頸部内面に稜をつくらず，胴下半でゆるやかに張る器形をなす。3は土師器鉢乃至甕の口縁で，外面は赤変し，内面には煤が付着する。胴内面はヘラ削りを施している。4はカマド内出土の土師器小甕で，支脚に転用されたものであろう。復原口径12.0cmを測り，頸部内面に稜をつくる。胴部外面は丁寧にナデており，胴中位でふくらむ特異な形状をなす。5もカマド内出土品



第 19 図　第 4 号住居跡出土土器実測図（1/3）

で，丸底の土師器甕である。

以上の出土遺物は，全体に古い様相を持ち，1 の杯身が 6 世紀末ごろで，出土状況からみてその上限を示すと考えられるが，他の土器もそう年代の下降するものは無く，ほぼこの時期がこの第 4 号住居跡の営まれた年代と考えたい。これは当住居を切る第 5 号住居の出土土器からみても矛盾は無いと考えられる。（中間）

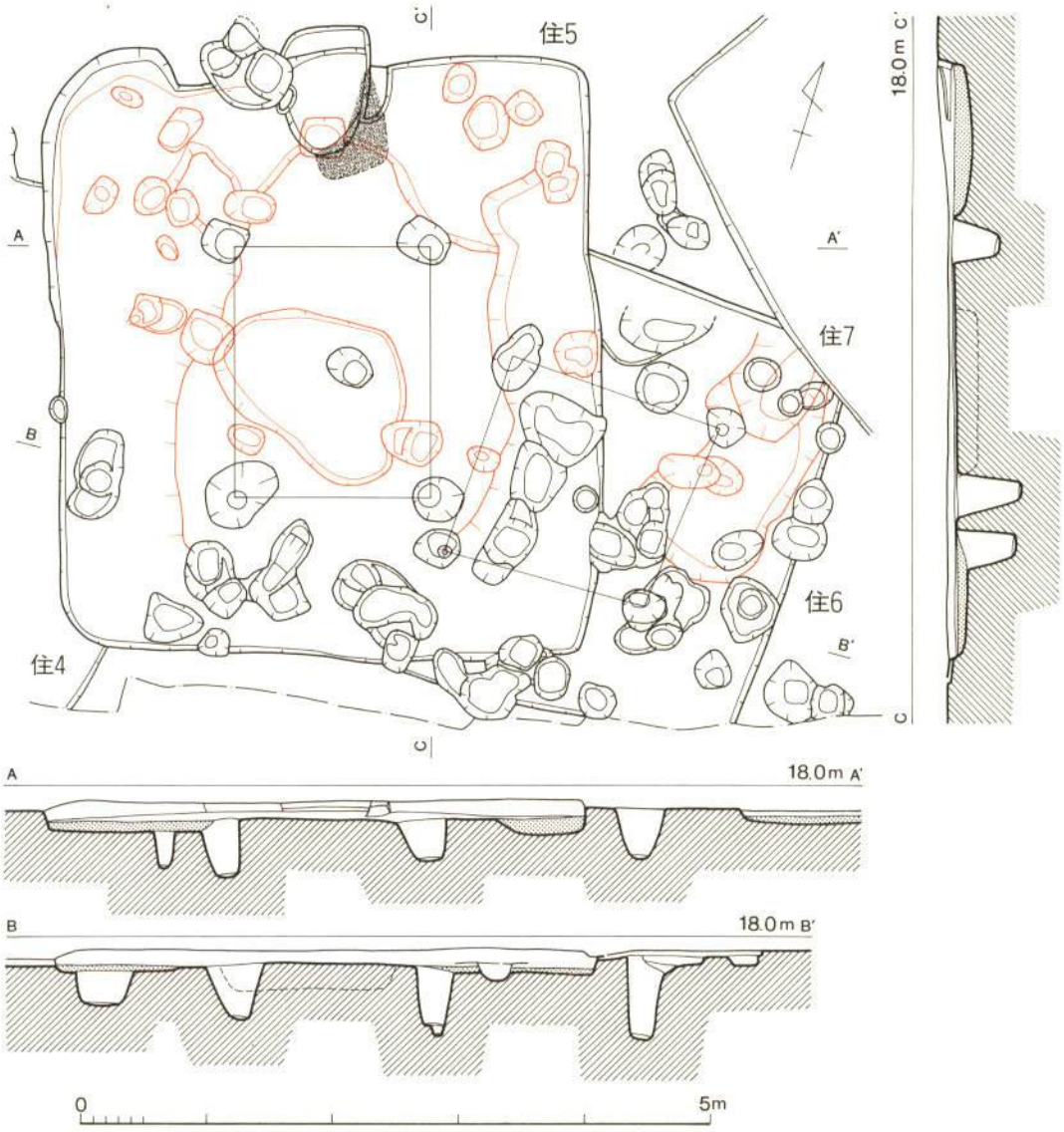
第 5 号住居跡（図版20，第20図）

B 群の中央に位置し，西側で第 4 号住居跡を，東側で第 6 号住居跡を切る。4 主柱穴で柱間は縦方向が長くなる。床面下層は中央部を大きく掘り込み，壁寄りも全体に掘り込んでその上に貼り床を施している。

カマド（図版21，第21図）北辺中央部に設置され，壁外方へやや張り出す B 類である。両袖の残りは良くないが，暗黄褐色粘土を用いている。燃焼部は全体に掘り込まれており，その中央に胴部中位以上の土師器甕を据えて，支脚としている。焚き口部から前面の床面は赤く焼けている。

出土遺物（第22図）

1 は土師器杯で，全体に薄手で磨滅が著しい。カマド内出土品で，底部は赤変している。2



第 20 図　第 5 ・ 6 号住居跡実測図（1/60）

は土師器甕で，胴中位で張り，頸部内面に稜をつくらず，ゆるやかに外反する口縁となる。口径17.8cmを測り，カマド内に据えられて支脚として用いられたものである。3 は短かい口縁が外方に開く土師器小甕片で，口縁内面には煤が付着している。

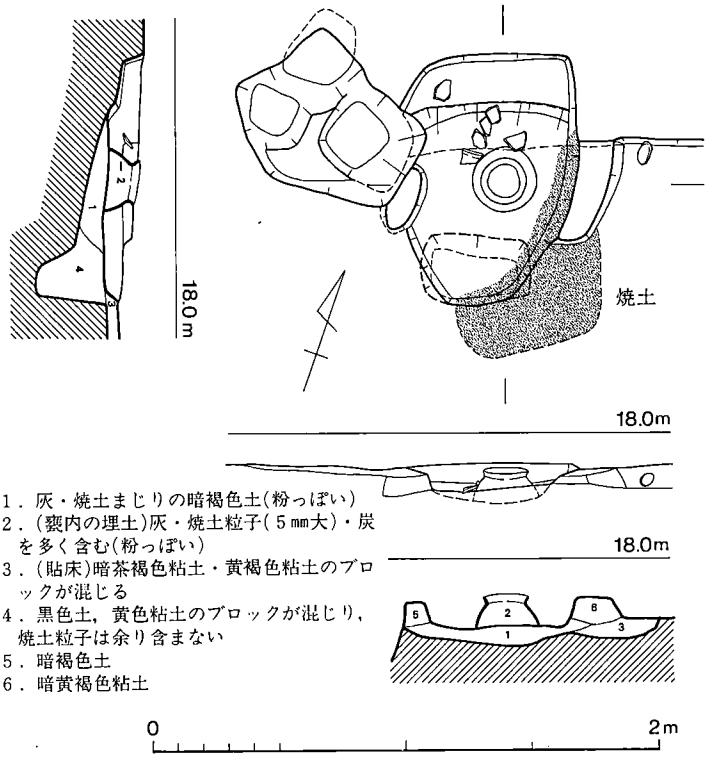
以上の出土土器は，7 世紀も中頃以前のもので，切り合い関係から，6 世紀末とした第 4 号住居跡よりも新しく，7 世紀初～前葉の時期が考えられる。（中間）

第6号住居跡

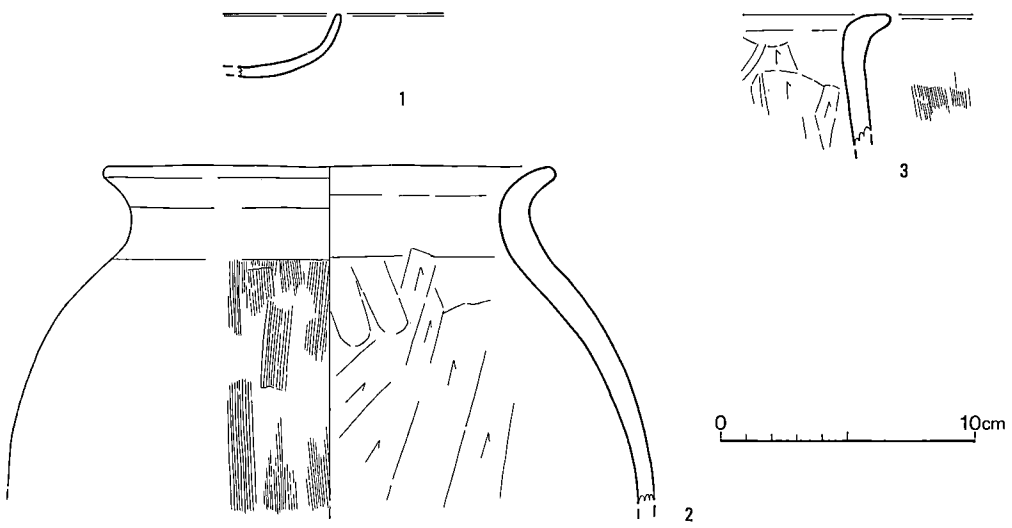
（図版17，第20図）

B群中央に位置するやや小型の住居である。第5号住居と第7号住居に切られ，全容は明確ではないが，カマドは西或いは北と推定される。4主柱穴の配置は幾らか平行四辺形気味に歪つである。床面下層は北東隅で掘り込みがみられる。

実測に供し得る出土遺物が無く，年代を決定し得ない。切り合い関係からみて，7世紀初頭～前葉とした第5号住居跡よりも古く，



第21図　第5号住居跡カマド実測図（1/30）



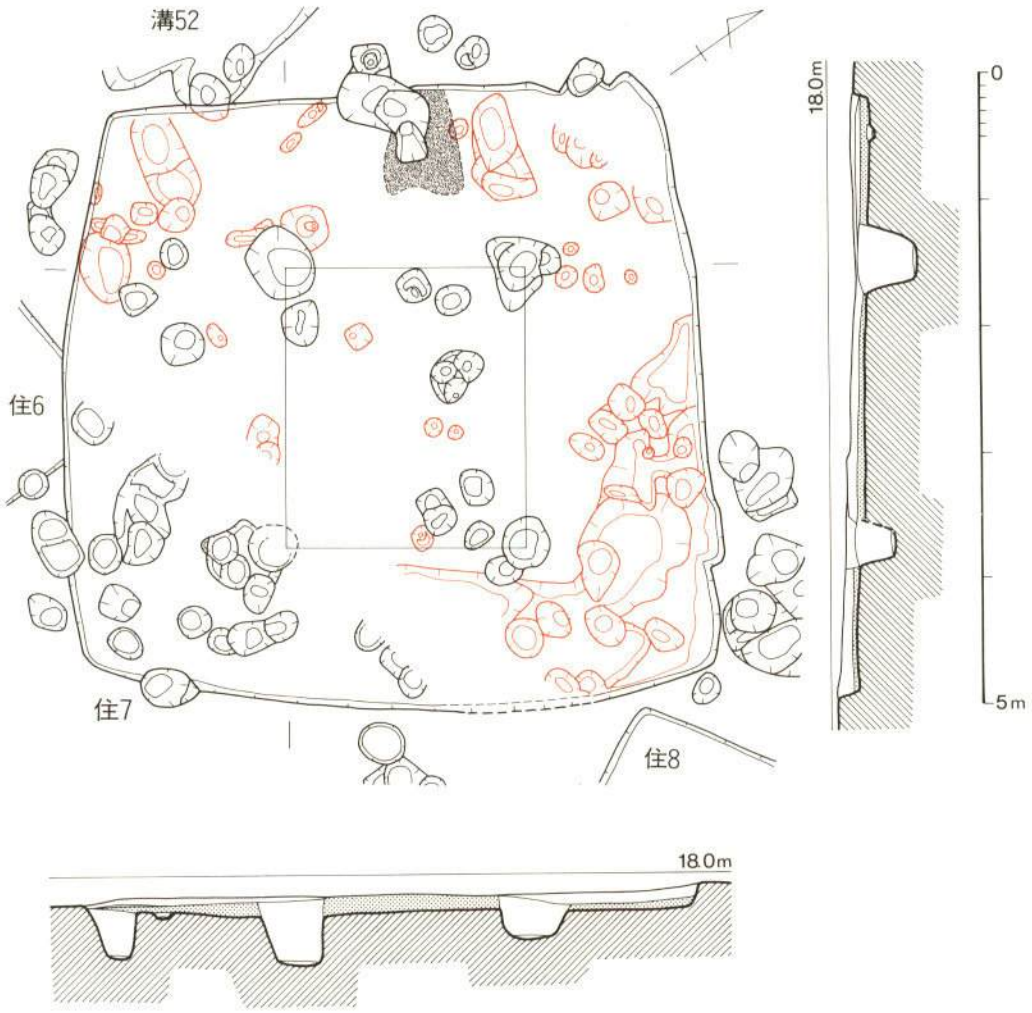
第22図　第5号住居跡出土土器実測図（1/3）

それを下限とする年代が，第６号住居跡の営まれた時期と考えられる。　（中間）

第７号住居跡　（図版22，第23図）

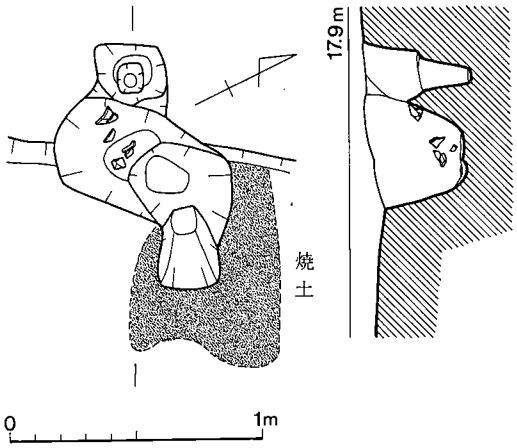
Ｂ群の中央に位置し，第６号住居跡を切り，東端で第８号住居跡と接するが，上屋構造を考えると両者が併存する状況は考え難い。また西端で溝52を切っている。平面形はカマドと反対側の壁辺が拡がり，全体にやや歪つな形態を呈する。４主柱穴を有し，縦方向の柱間がやや長い。床面下層の掘り込みは全体にみられ，やや厚めに貼り床が施される。

カマド（図版22，第24図）北西辺の中央に認められるが，極めて残りは悪い。周辺床面は焼土が散在し，壁際からその外方に深い掘り込みがみられる。この上層部分は黒色土（焼土粒混



第 23 図　第７号住居跡実測図（1/60）

入）で，下半は赤味の白灰色土の焼土混入土であった。中からは土師甕片が出土土した。この掘り込みが直接カマドに伴うものは疑問であるが，焼土の状況などから，この部位にカマド本体が設置されたことは間違いなかろう。



第 24 図　第７号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（第25図）

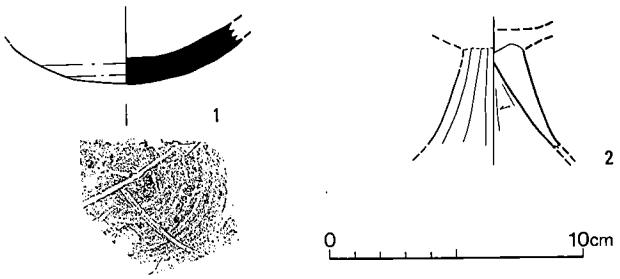
１は，須恵器の瓶或いは小型壺の底部片で，外面は回転ヘラ削りで，ヘラ記号を施している。２は土師器高杯脚部片で，脚柱径の小さい，小型品である。脚柱外面は縦方向ヘラ削り，内面は横方向のヘラ削りが施される。

以上の出土遺物は，２が７世紀前半代に小型化したもので，この住居跡の上限をこのあたりに求め得る。また，７世紀前葉を上限とする第52号溝を当住居跡が切っていることからも，この第７号住居跡は７世紀前葉を上限とする時期と考えて矛盾は無い。　（中間）

第８号住居跡

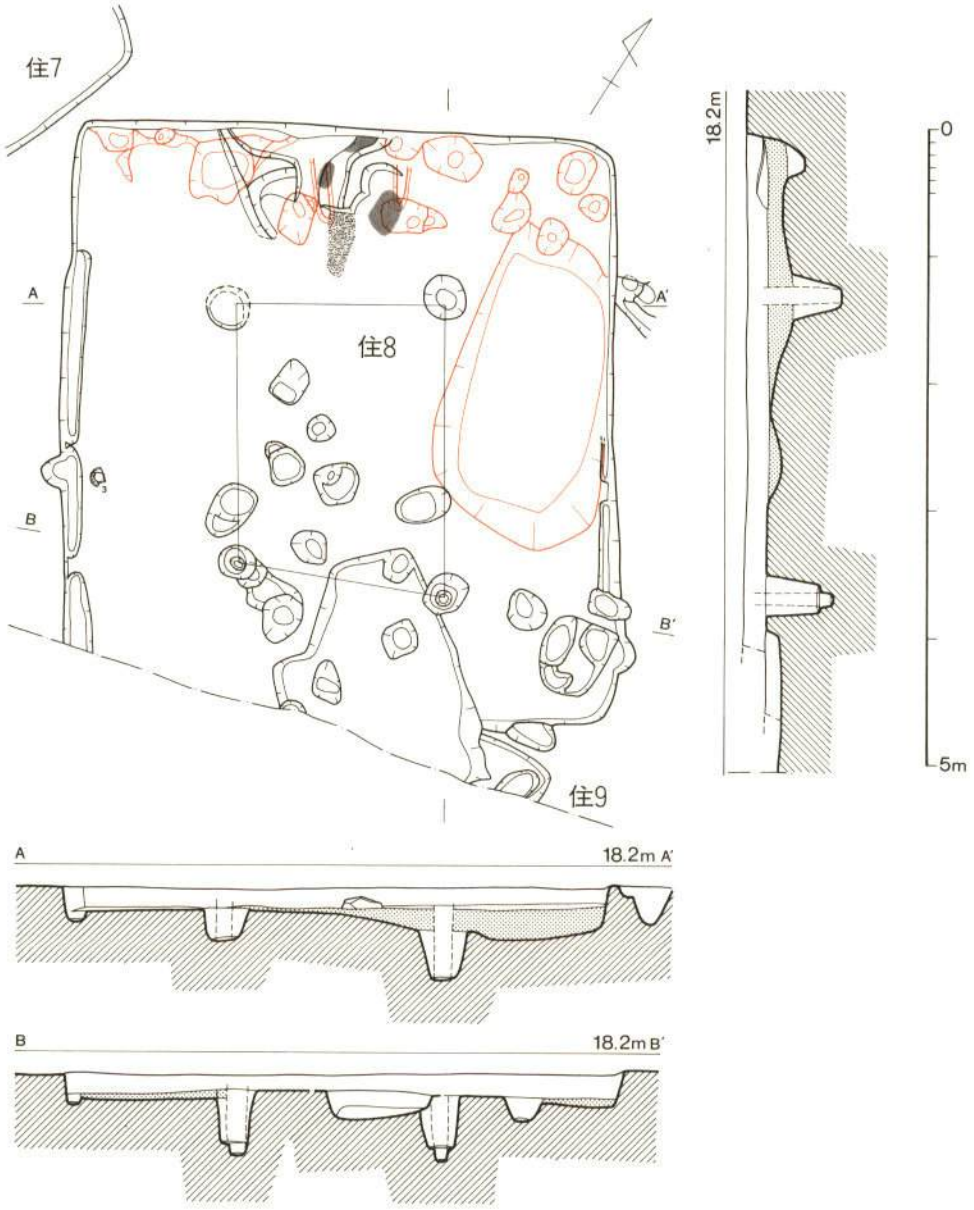
（図版23，第26図）

B群の東寄りに位置し，第９号住居跡と切り合うと考えられるが，その間に大きな穴があり，新旧関係は明らかでない。やや縦長気味の方形プランを呈し，４主柱穴を有する。縦方向の柱間が１～２尺分長い特徴を示す。本遺跡検出の竪穴式住居例では珍しく，当住居跡の左右両壁際には板材打ち込みの周壁溝が認められる。床面下層は北東側で大きく掘り込まれている他は，薄く貼床を施すのみである。



第 25 図　第７号住居跡出土土器実測図（1/3）

カマド（図版24，第27図）北西辺の中央に設置され，壁外方への掘り込みのないA類である。残りは良くないが，検討の結果，上下２層の袖跡を検出した。即ち，当初のカマドが北西辺の中央に黄色粘質土を袖に用いて構築されている。（図中赤色表示の袖部）このカマド内堆積中からは土師器甕片，杯片が出土した。上層のカマドは中央よりやや西に片寄って作られ，灰味黄色粘質土で袖を構築している。カマド前面及び周辺から軽石が少量出土しているがどちらの

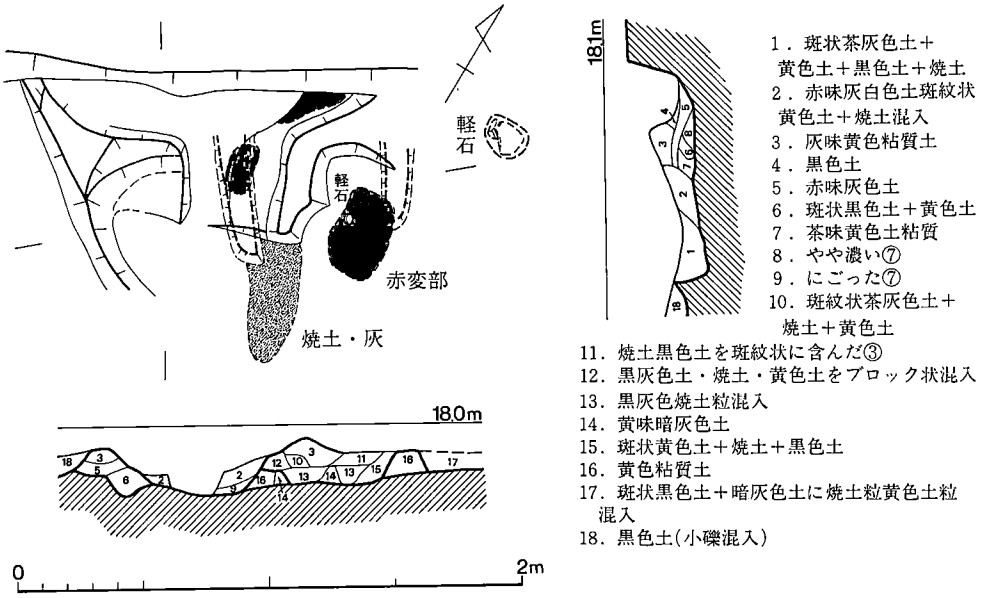


第 26 図　第８・９号住居跡実測図（1/60）

カマドに伴うものか定かではない。

出土遺物（第28図）

１～５は，須恵器杯身である。いずれもまだ立ち上がり部が長めで，３は口径 9.2 cm，器高 3.3cmを測る。底外面に曲線気味の長い１本線のヘラ記号がみられる。４は口径10.2cm，５は口



第 27 図　第８号住居跡カマド実測図（1/30）

径10.1cm，器高 3.6 cmを測る。３の底外面はナデており，５は横ナデを施している。

６は，須恵器甕胴部片で，外面は細い条蓆状叩き，内面は細身の青海波を施している。

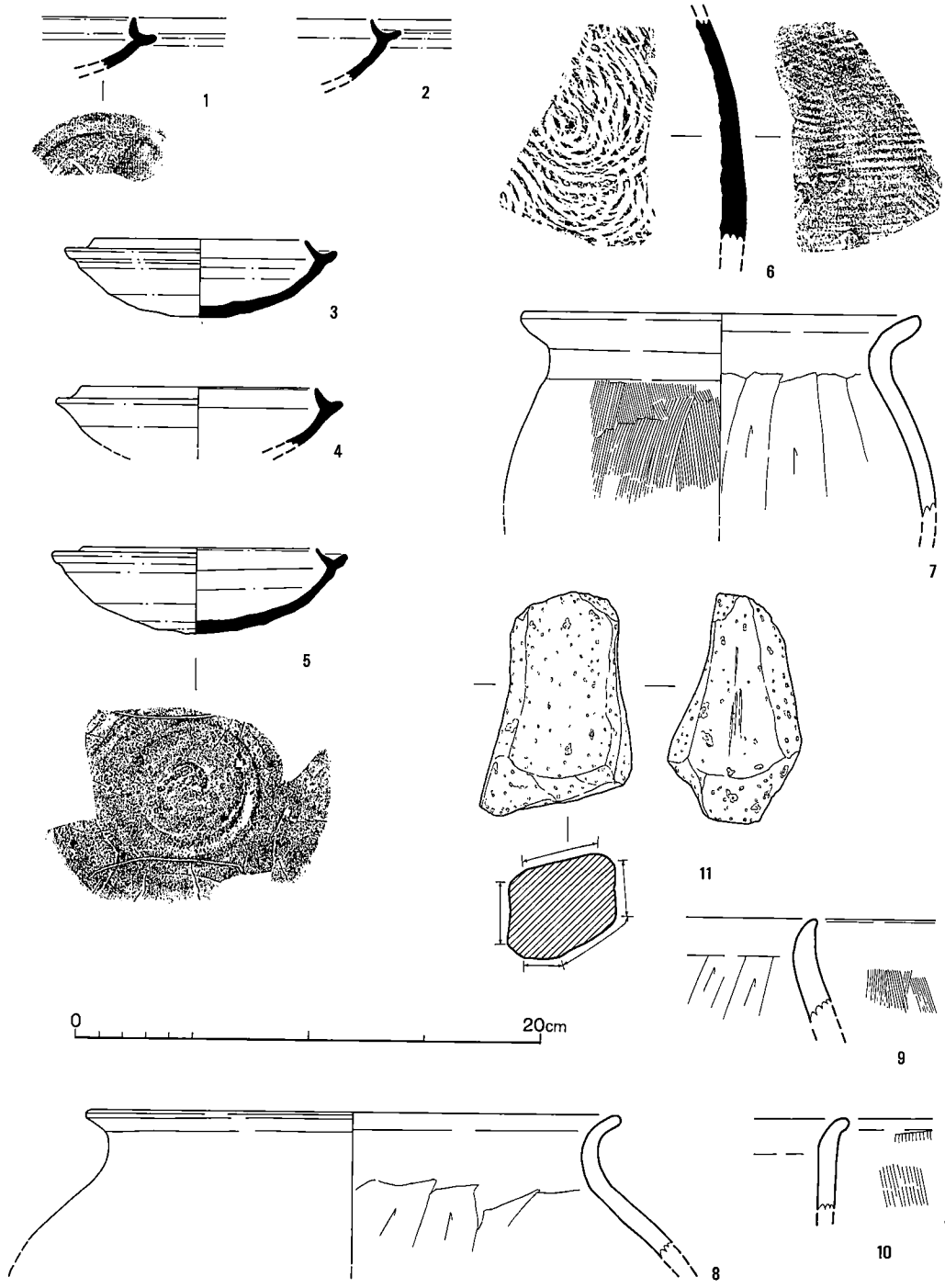
７は土師器小甕で，カマド前面出土品である。復原口径17.2cmを測り，外面には煤が付着する。頸部は肥厚せず，胴部もゆるやかに張る形状をなし，古様を示す。８は，復原口径23cmで，口縁端へと薄くなり，胴が強く張る形状をなす。外面は磨滅している。９は全く外反しない口縁となり，下部の古いカマド内から出土したものである。10も同じ部位から出土した小甕片で，張らない胴部となっている。

11は，カマドに立っていた軽石で，４側面を擦っている。右側面には刃物によるキズが見受けられる。

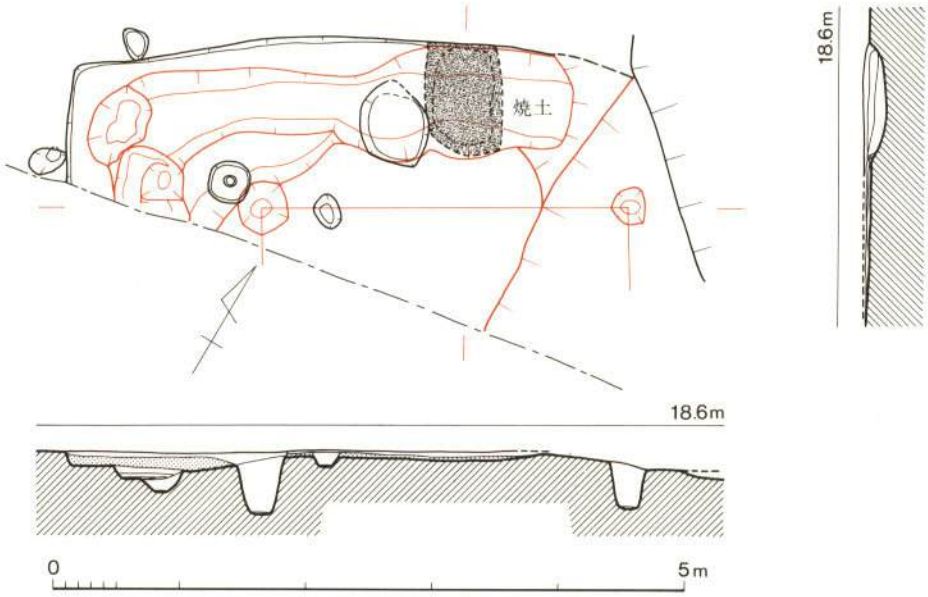
以上の出土遺物は，土師器にしてもすべて６世紀代の古い様相を示している。須恵器杯身の年代観から，この第８号住居跡は６世紀末に営まれたと考えられる。（中間）

第９号住居跡（図版24，第26図）

B群の第８号住居跡の南側に位置する。発掘範囲すれすれのところで検出したので，その北東コーナー部分のみしか確認していない。第８号住居跡との新旧関係も明らかでない。その規模，様相等全く不明である。（中間）



第 28 図　第 8 号住居跡出土土器実測図（1/3）



第 29 図　第10号住居跡実測図（1/60）

第10号住居跡（図版25・26，第29図）

B群の住居グループから20m以上離れた東方に位置する。この住居はB群が帯状に東方へ延びてB群に属するものなのか，或いは北側のF群と同グループに含まれるものなのか，いずれれにも判別し難いところである。主軸方位や，大型住居であることを考えるとF群に近い感触もする。

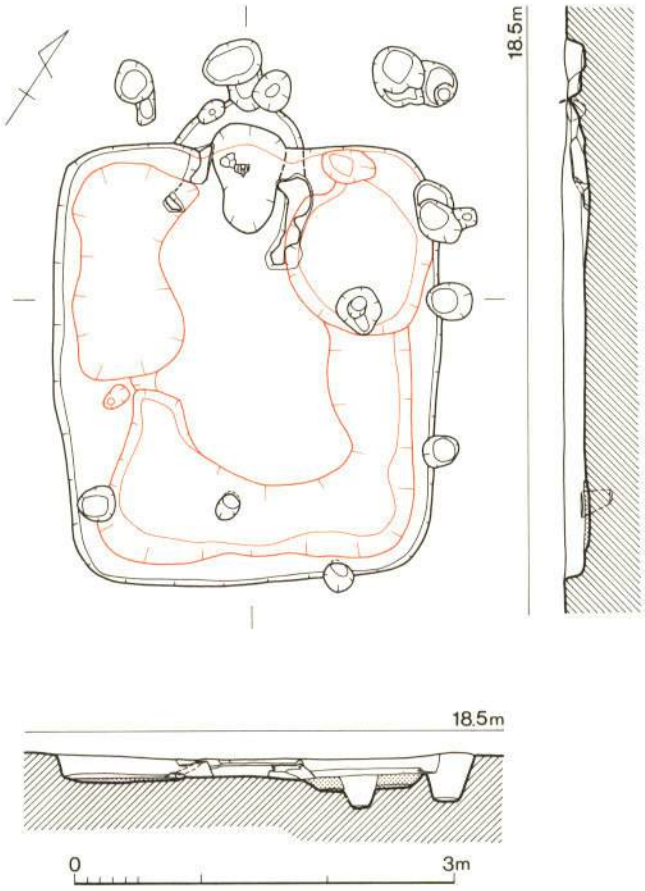
一辺が6m近い大型住居と推定され，横方向の柱間は2.93mもある。床面は壁沿いに下層が掘り込まれている。

カマド（第29図）北面辺のほぼ中央に設置されたと考えられる。焼土を多く含む掘り込みだけが検出され，袖等の他部位は残らない。壁外方に掘り込まないA類となろう。　（中間）

第11号住居跡（図版26，第30図）

E群の東南付近のややはずれた所に位置する小型縦長方形の住居である。小さな柱穴様ピットは壁際や内外に散在するが，まとまりをみせず，床面の通有の4主柱穴もみられない。これは小型住居の第3・34・39号竪穴式住居にも共通する特徴である。床面下層は中央部分を残して壁沿いに掘り込まれておりその上が貼り床となる。

カマド（図版27，第32図）西北壁中央に設置されるB類である。袖部分は残りが良くないが，黄灰色粘質土を用いて構築しており，燃焼部の奥の方の火床面は赤く焼けて硬化著しい。煙道



第 30 図　第11号住居跡実測図（1/60）

に相当する部位に小ピットが見られるが，煙道部とは考え難い。カマド内には土師器甕片若干が残存していた。

実測に耐え得る遺物が無く，時期不明である。

（中間）

第12号住居跡

（図版28・29，第33図）

E群の南西端に位置する小型方形住居である。西側で第14号住居に切られ，東端で第15号土壙に切られ，南西側で第13号住居を切る。主柱穴は4本であるが，カマド側の2本は床面に在り，反対側の2本は壁際に存在する。或いはこの壁際の2本が，入口部分の柱穴を兼ねているのかもしれない。他の小型住居同様，変則的な柱穴の在方を示している。床面下層は東隅付近の壁沿いと南寄りの2ケ所に掘り込みがみられる。

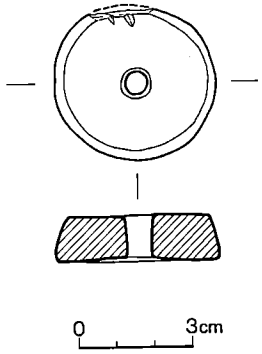
カマド（図版29，第34図）北西壁の中央やや西寄りに設置され，第14号住居のカマドに一部切られる。壁より外方に掘り込むB類となる。燃焼部を一段掘り込んでおり，袖には黒色土と明黄褐色粘質土を用いる。

出土遺物（第36図）

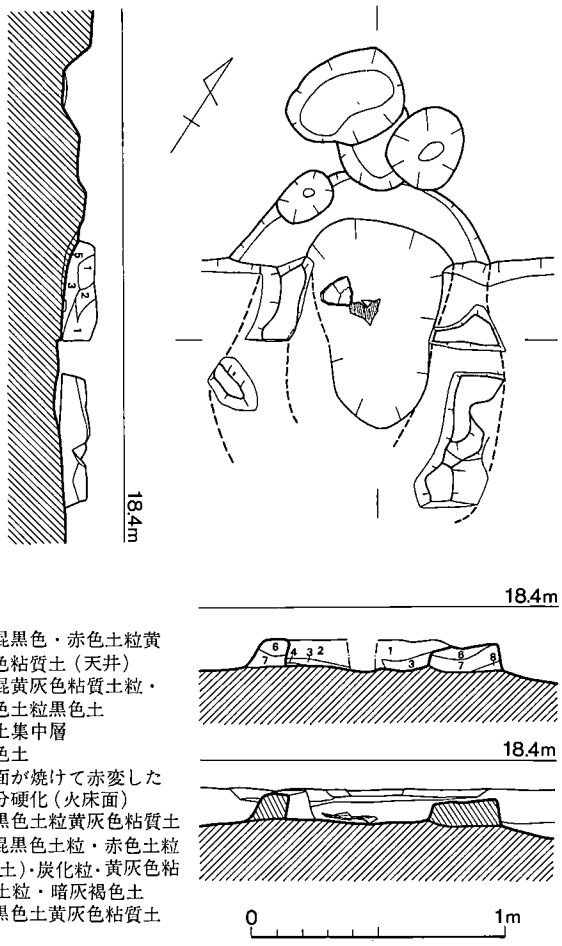
1は，須恵器杯蓋として図示したが，高台の付く杯身の可能性も強い。口径14.0cmで，天井外面には回転ヘラ削りが施される。2は須恵器杯身で，1とともに床面下からの出土品である。3は復原口径14cmを測る須恵器杯身で，高台が付くものとなろう。4は，須恵器甕片で，外面は平行条線状叩きを縦位に施し，その上から粗雑なカキ目仕上げを行っている。内面は太い青海波を施す。5は土師器小甕片で，口頸部で全く肥厚せず，口縁もわずかに外傾する程度の開

き方である。内面は磨滅しているが，ヘラ削りを施すと思われる。6はカマドから出土した土師器甕で，復原口径38cmを測る大型品である。胴はほとんど張らない。

第31図は床面直上から出土した紡錘車で，暗灰緑色をした結晶片岩製である。径4.2cm，厚さ1.2cmの断面台形をなす類である。重さ27.7gとなる。



第 31 図　第12号住居跡出土紡錘車実測図(1/2)



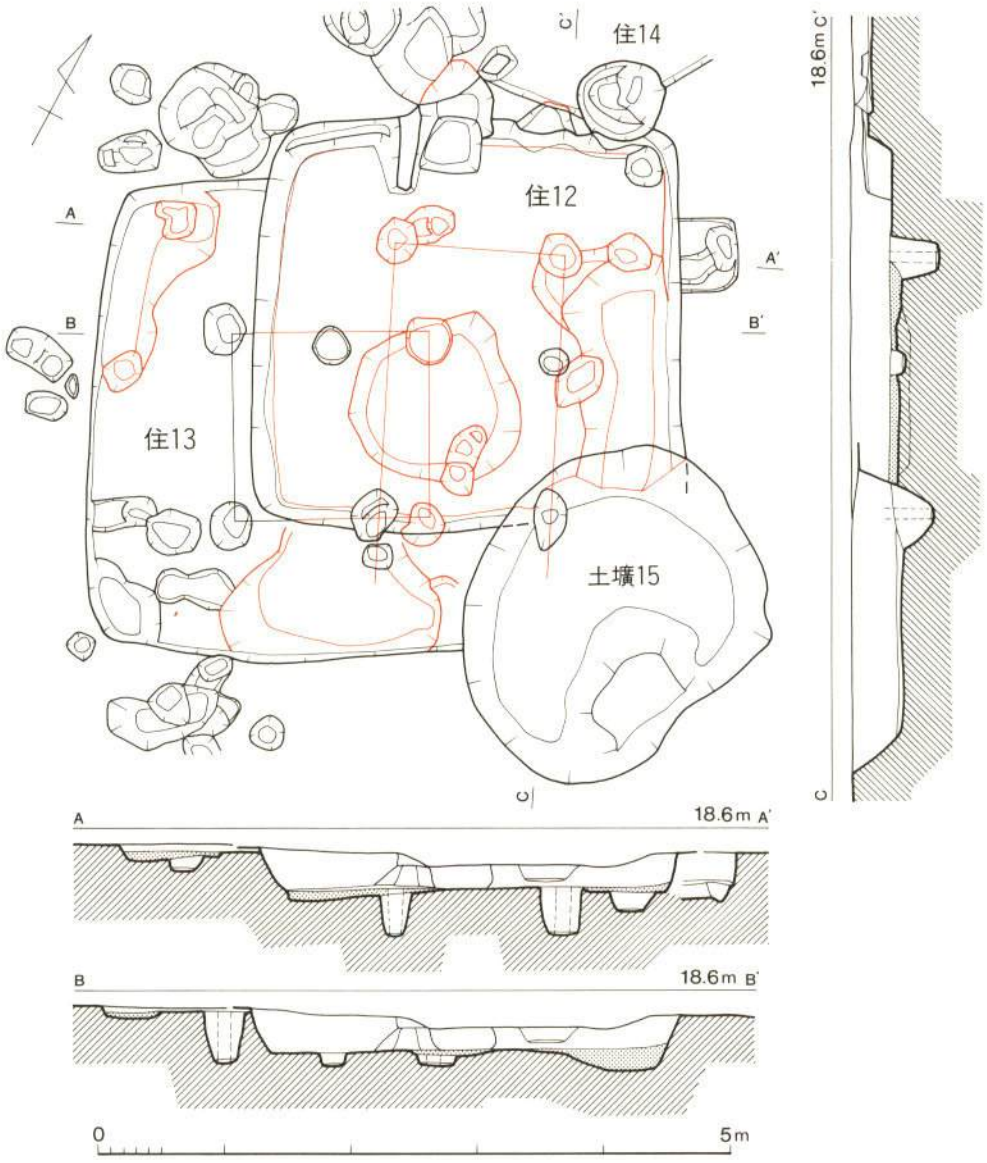
第 32 図　第11号住居跡カマド実測図（1/30）

以上の出土遺物から，新しいものを抜き出してみると，この第12号住居跡は7世紀の中頃に近い後葉代に営まれたと考えられる。（中間）

第13号住居跡（図版29，第33図）

E群の南西端に位置する方形住居で，床面積はやや小型の部類に近い。第15号土壙と第12号住居に切られる。4主柱穴を有し，柱間は1.5mを測る。第12号住居跡床面と当第13号住居跡の床面とは30～35cmのレベルの差があり，前者がぐっと低い。床面下層は，西隅と南辺寄りでいくらか掘り込みがみられる。カマドは北西辺中央と考えられるが，第12号住号跡に深く切られるため，全く残存しない。

出土遺物は全く無く，時期決定不能であるが，第12号住居跡に切られることから，下限を7

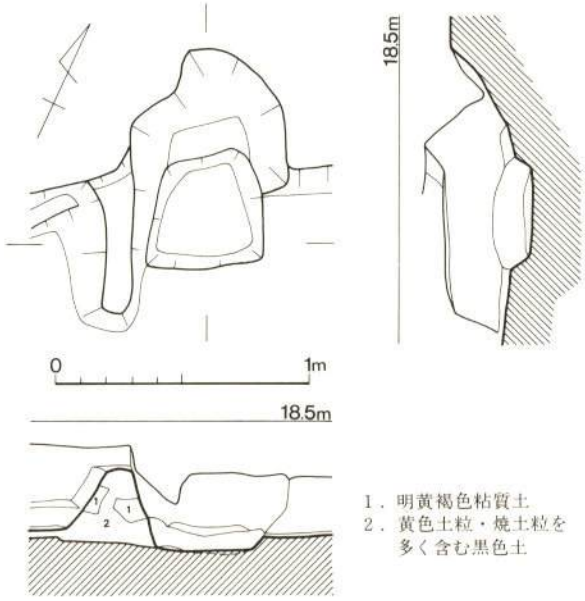


第 33 図　第12・13号住居跡実測図（1/60）

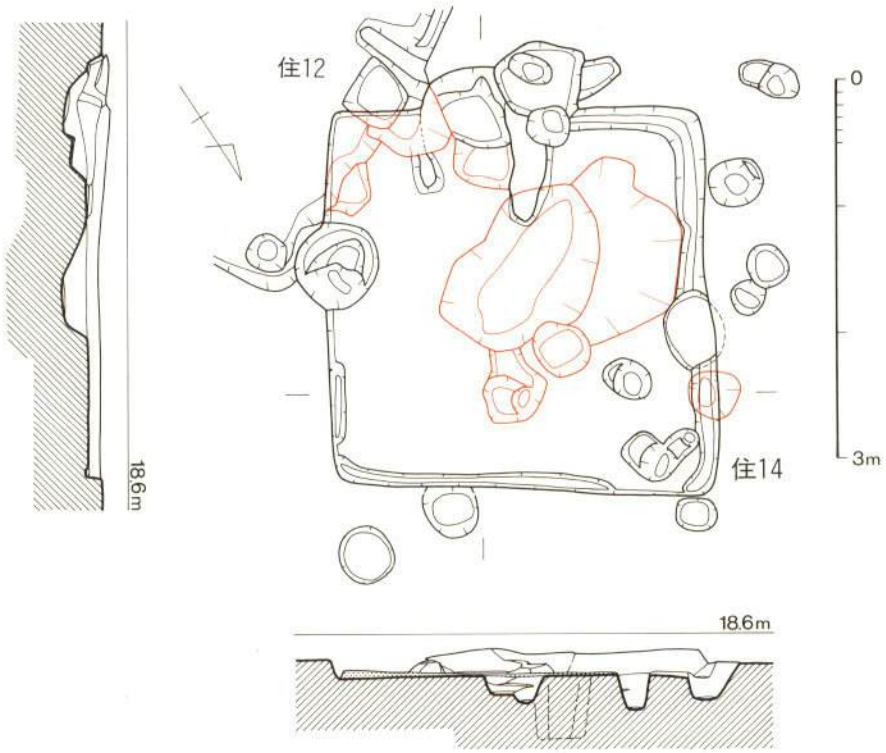
世紀後葉としておさえられる。更にこのE群において当住居跡の規模・方向などがほぼ同様であることを考えると，時期的にもそう古くなるとは思えず，7世紀中頃以前に溯るものとは考えられない。（中間）

第14号住居跡（図版30，第35図）

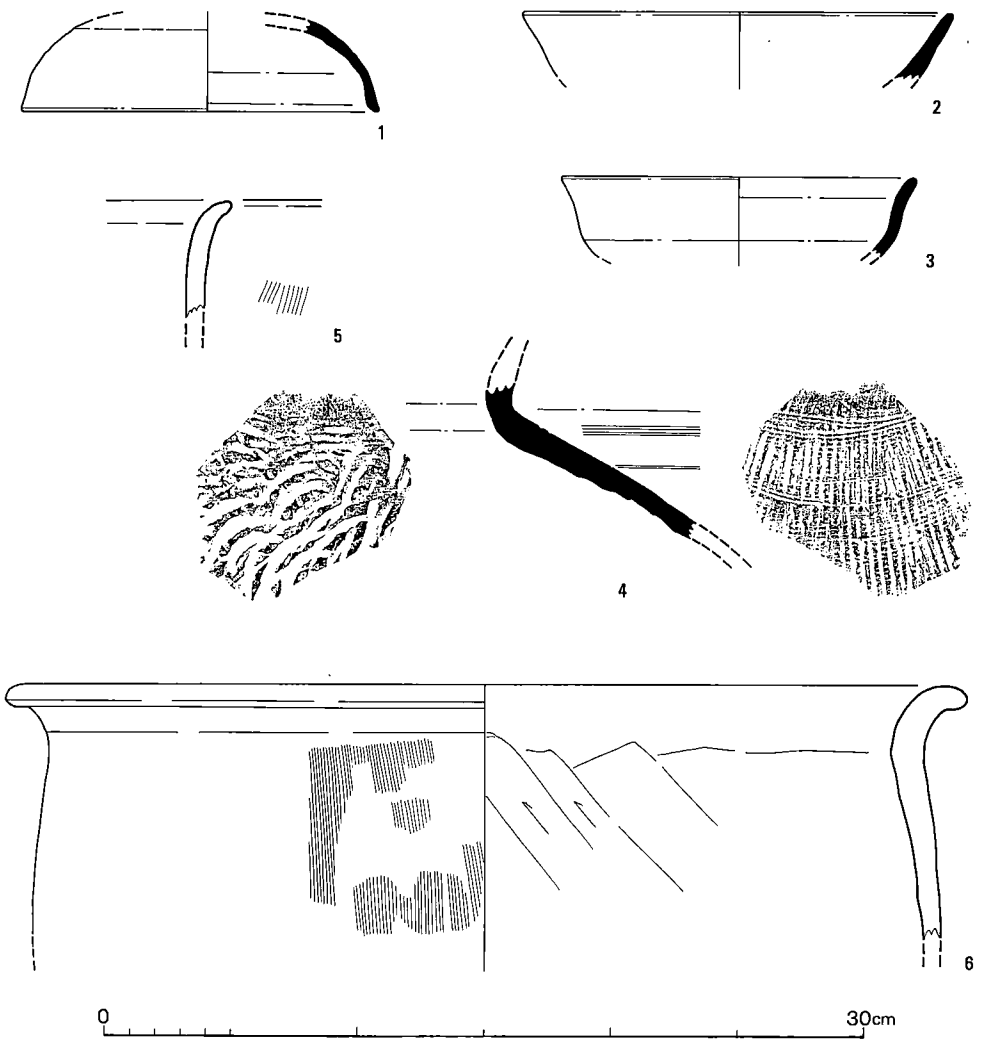
E群の西南端近くに位置する小型方形住居で，9.0㎡しかない。カマドの位置が，本遺跡例では極めて例外的に南西壁側に設けられている。また，周壁溝が巡る。柱穴は，通有の床面上の4主柱穴がみられず，住居掘方外方に散在するものが柱穴となる可能性もあるが，まとまりは認められない。床面下層は中央付近でのみ大きく掘り込まれている。第12号住居跡のカマド部分を切っており，明らかに時期差が認められる。



第 34 図　第12号住居跡カマド実測図（1/30）



第 35 図　第14号住居跡実測図（1/60）



第 35 図　第12号住居跡出土土器実測図（1/3）

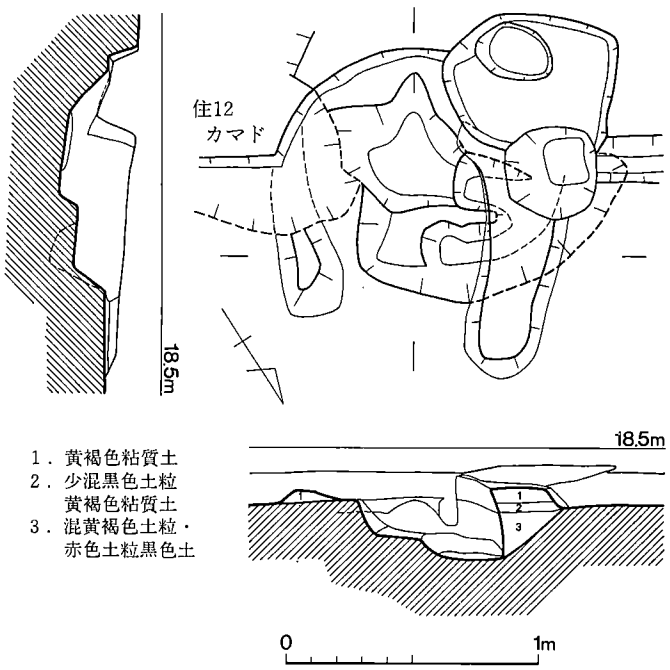
カマド（図版30，第37図）南西壁中央部よりかなり東へ片寄った位置に設けられている。第12号住居跡のカマドを切っている。燃焼部床面は20cm強全体に掘り込まれている。右袖は壁より90cmほど長く残り，黄褐色粘質土を用いている。

出土遺物（第38図）

1は，土師器杯で，口径13cm，器高4.2cmを測る。全体に薄手で，体部外面下半から底外面にかけては，手持ちのヘラ削りが施されている。2は土師器甕で，復原口径36cmとなる大型品である。頸部がやや肥厚し，内面に稜をつくり，口縁は一旦立ち上がってから更に外方へ開くタイプである。1は床面下，2はカマド内出土品である。

以上の出土遺物は，７世紀後葉代でも末に近い頃の所産と考える。これは切り合いからみても，７世紀の中頃に近い後葉代とする第12号住居跡よりも新しい遺構であり，時期的に矛盾が生じることは無い。

（中間）



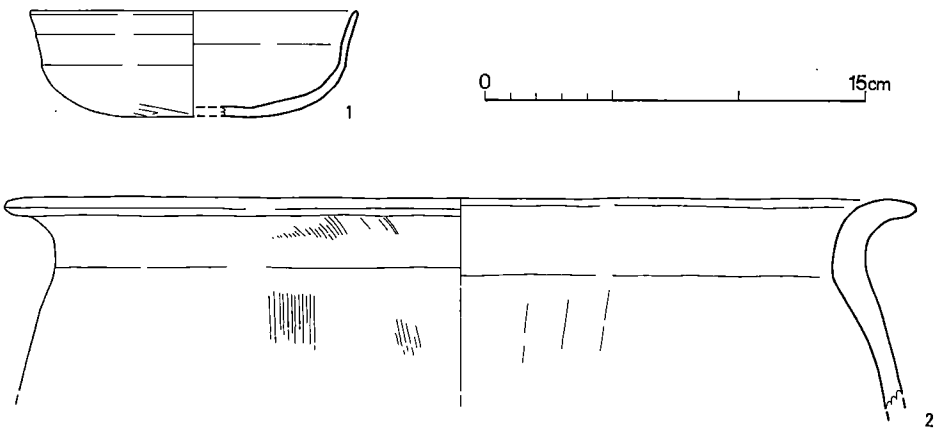
第 37 図　第14号住居跡カマド実測図（1/30）

第15号住居跡

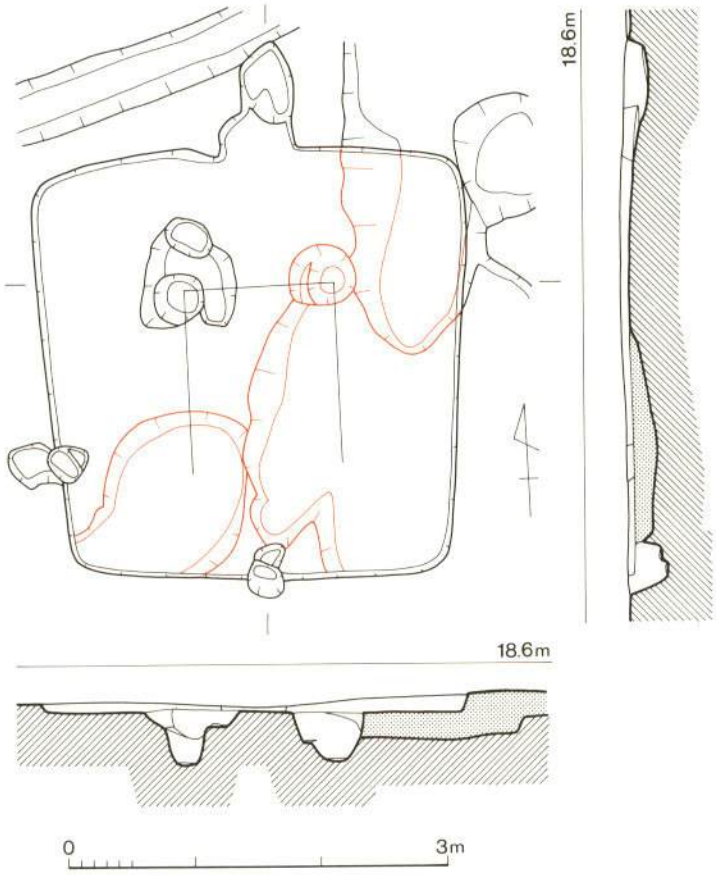
（図版31，第39図）

Ｅ群の南寄り中央に位置するやや小型の方形住居である。東半側で，浅く南東側へ拡がる黒色土の土壙状包含層を切る。柱穴は４主柱と考えて精査したが，カマド寄りの２柱穴を検出したのみで，南壁寄りの２柱分は認められなかった。小型住居での不規則な柱穴配置の一様相と理解したい。

カマド（第39図）北壁中央に設置されているが，残りは全く良くない。壁を幅60cm，奥行き40cmほど掘り込んで作るＢ類であるが，更に外方へ60cmほど掘り込んだ部分がみられ，或いは



第 38 図　第14号住居跡出土土器実測図（1/3）



第 39 図　第15号住居跡実測図（1/60）

煙道部と考えても良いかもしれない。

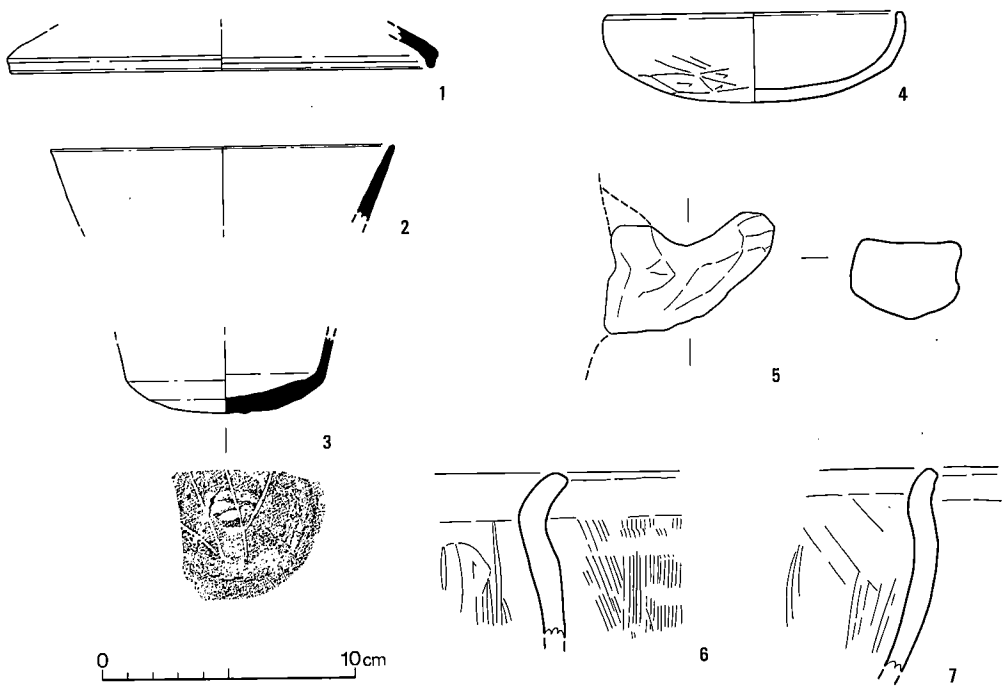
出土遺物（第40図）

1は須恵器杯蓋で，復原口径17cmを測る。2は口径13.6cmで，高台を付ける須恵器杯となろう。体部は直線的に開いている。3は須恵器杯身で，底外面は雑にナデており，ヘラ記号がみられる。4は小ぶりの土師器杯で，口径11.9cm，器高3.5cmを測る。外面下半は手持ちヘラ削りを施している。5は土師器甕の把手部分で，上端が平たく，やや扁平状をなしている。6は土師器小甕片で，短かく外反する口縁となる。7は口縁が開かない土師器小甕片で，胴部外面は磨滅している。以上のうち，1・2は床面下，3・4・6はこの第15号住居跡と第18号土壙との間の黒色土落込み部から出土したもの，5・7は当住居跡上面での遺構検出時に出土したものであって，1・2以外は直接には関係ない遺物である。

以上の出土遺物から当住居跡の年代を見てみると，1・2は8世紀前葉代と考えられるが，いずれも床面下出土品であり，これらを上限とする年代が，この第15号住居跡の時期と考えられよう。（中間）

第16号住居跡（図版32，第41図）

E群中央部の第16～20・69号住居跡が複雑に切り合う部位の東端に位置する。これらの切り合い関係は以下の如くである。（古→新）



第 40 図　第15号住居跡出土土器実測図（1/3）

住19→住20→住69→住18→住17→（溝16→溝５）
　　住16↗

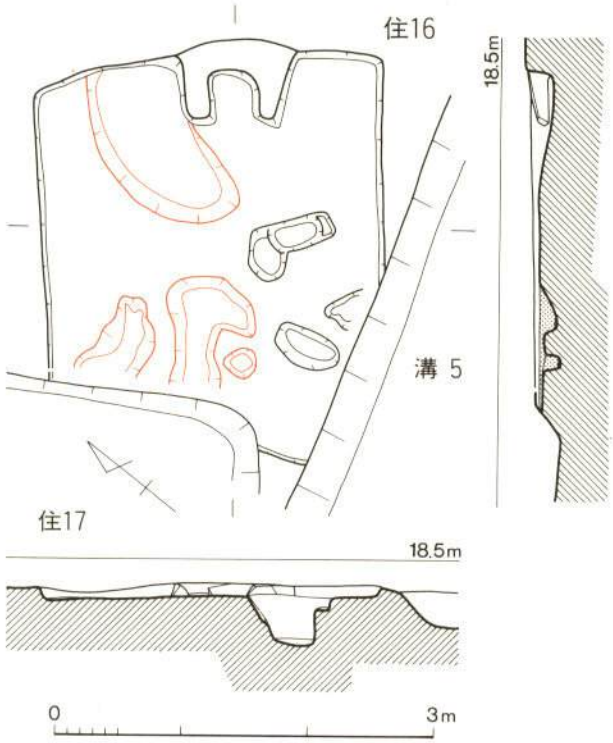
床面積 8.4 ㎡の縦長の小型方形住居である。柱穴は，他の小型住居と同様，明瞭でない。床面下層はいくらか掘り込みがみられるが，規格性は認められない。

カマド（図版33，第42図）北東壁の中央に設置される。両袖の残りは良く，地山土である黄色粘質土を用いて構築している。住居跡壁から10cm強外方へ掘り込んでいるが，顕著なB類ではなく，一応A類と考えておく。

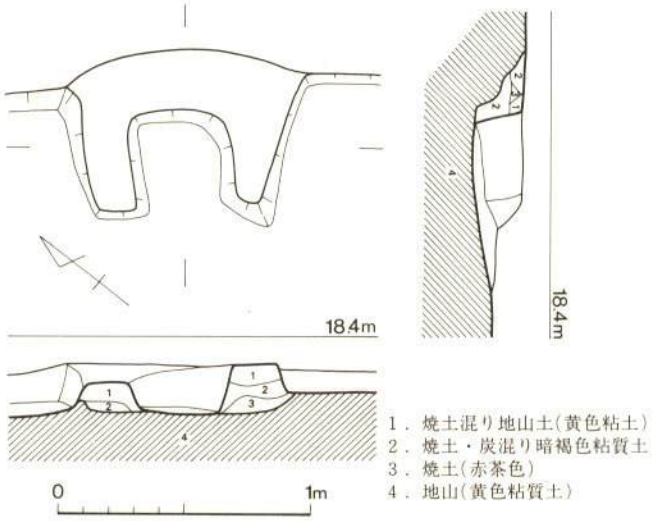
出土遺物（第43図）

１は，須恵器杯蓋で，返り端径 8.1 cmを測る。外面は灰かぶりしており，調整はわからない。２は土師器小甕小片であるが磨滅して詳細はわからない。

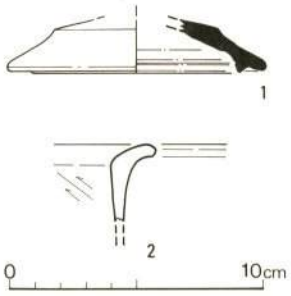
以上の出土土器から，この第16号住居跡は７世紀中葉に営まれたものと考えたい。このことは，E群の他の殆んどが７世紀後葉～８世紀代であり，主軸方向がこの住居跡のみ強く東へ振れている特殊状況からも，納得される処である。　（中間）



第 41 図　第16号住居跡実測図（1/60）



第 42 図　第16号住居跡カマド実測図（1/30）



第 43 図　第16号住居跡出土土器実測図（1/3）

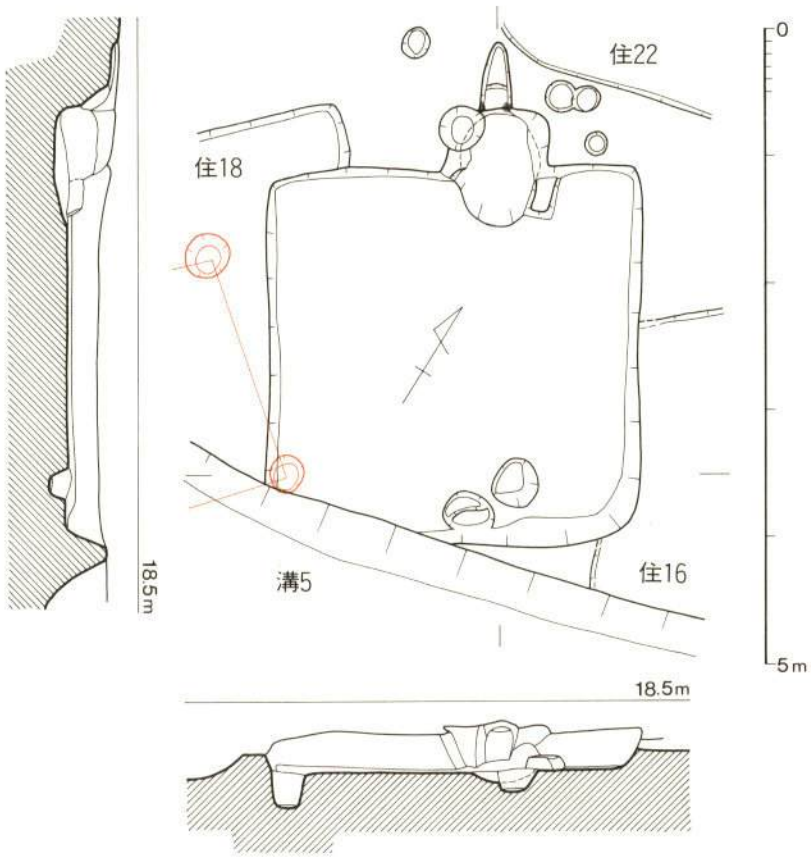
第17号住居跡（図版33，第44図）

E群中央に位置する小型方形住居である。東側で第16号住居跡を切り，西側で第18号住居跡を切っている。床面は掘り込みがみられず貼床されていない。柱穴も他の小型住居同様，床面中央の4主柱穴は認められず，他の柱穴もまとまりがない。

カマド（図版34，第45図）北西壁の中央よりかなり北へ片寄った位置に設けられている。煙道が長く延びるC類である。焚き口付近から燃焼部全体に掘り込まれており，燃焼部最奥から煙道部入口付近は地山壁が焼けて赤変硬化している。袖部は残り良くないが，焼土混りの黄色粘質土を上にかぶせて構築している。

出土遺物（第46図）

須恵器（1～5）1は杯蓋で短かい返りを付ける。返り端部径10.2cmを測る。2は第19号住居跡カマ

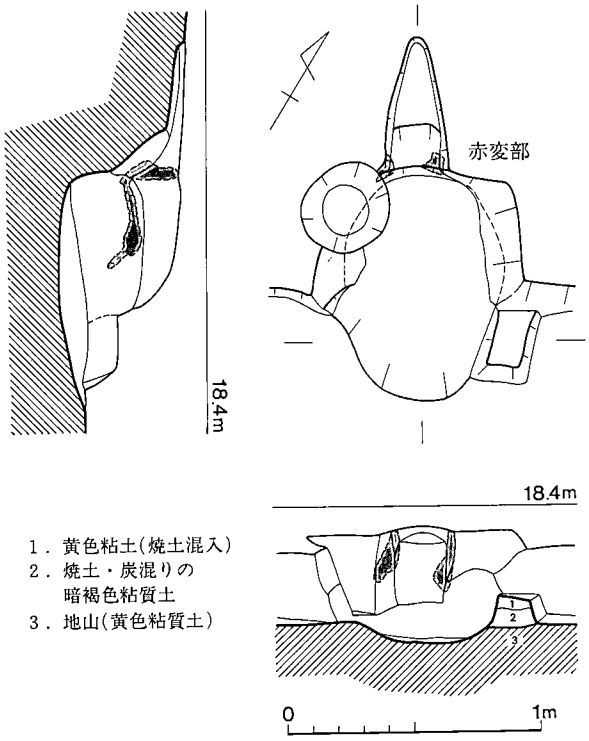


第 44 図　第17号住居跡実測図（1/60）

ド内出土品で，そちらの項で説明する。3は復原口径17cmの須恵器杯蓋で，胎土精良で，内面には墨の痕跡があり，硯として転用されたものと思われる。口縁は鳥嘴状とはかけ離れた形状でかなり退化が進んでいる。4は，短かい高台を付ける須恵器杯で，底部は大きく穿孔されたものと思われる。体部外面下端には回転ヘラ削りを残す。5は，外端で接地する低い高台を付ける。体部外面下端はナデている。

土師器（6～13）6は高台を付ける杯で，全体に磨滅している。カマド内出土品である。7は口径11.6cm，器高2.8cmを測る杯である。外面下半は手持ちのヘラ削りが施されている。8は口径14.0cm，器高3.0cmで，須恵器杯模倣の形状をなす。内外面とも磨滅しており，調整はわからない。

9・10は小甕で，9は口径14.0cm，器高10.7cmの小型品である。口縁は寸詰りの形状をなしている。カマド内出土品で，支脚に転用されたものかもしれない。10は，復原口径16.6cmとなり，外面は赤変している。内外面ともに磨滅が著しい。11は復原口径23cmを測り，内面はヘ



第 45 図　第17号住居跡カマド実測図（1/30）

ラ削りを行う。外面は磨滅している。胴が張り，丸く屈曲反転して開く口縁となる。12は，或いは全体にもっと外傾して開き，鉢となるものと考えられる。胴部外面は器表磨滅して調整不明である。13は頸内面に鋭い稜をつくり，短く外へ開く口縁となる。

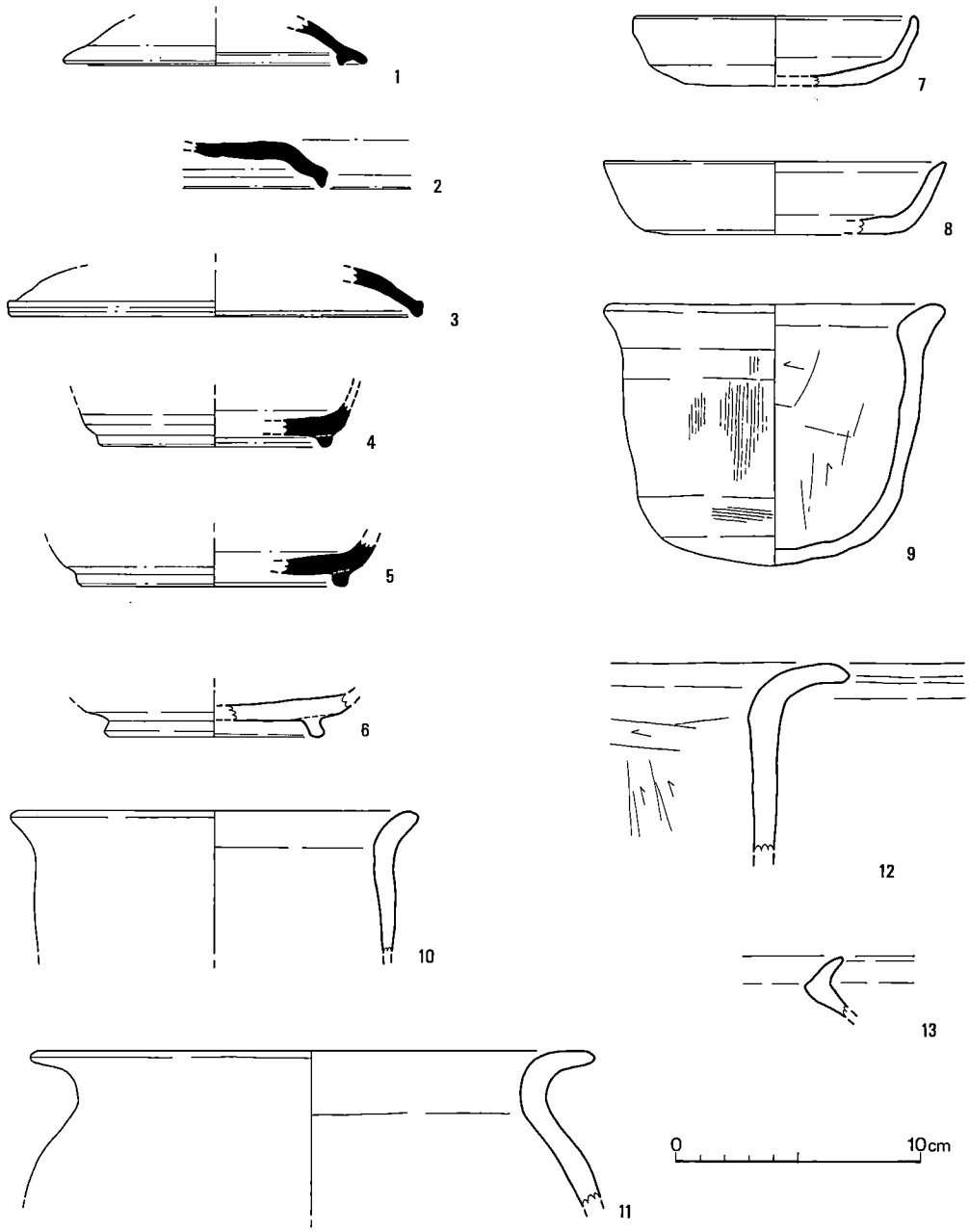
瓦（第47図）１は平瓦片で，凸面に正格子の叩きを施し，部分的に縦ナデが行われる。凹面は布目の上を部分的にナデ消している。側面は両面側からヘラ切りして面取りを行っている。胎土精良でやや軟質である。２は，薄手の平瓦片で，凸面はナデており，凹面は布目を部分ににナデ消している。

紡錘車（第48図）土製紡錘車２点であるが，各々タイプが異なる。１は直径5.7cm，厚さ2.1cmの厚手円盤形で，胎土精良で淡褐色を呈する。２は直径4.2cm，厚さ1.1cmで，重さ14.7ｇとなる。側縁が丸味をもつ薄手円盤形となる。粗石英・長石粒をかなり含み，二次火熱を受けている。

以上の出土遺物は，古いもので７世紀中頃に近いもの，新しいもので８世紀後葉代に至るまでの各時期を示している。それらのうち，3・8や，カマド内出土の９などの新しい一群の遺物を当住居跡の年代と考えたい。即ち，この第17号住居跡は８世紀後葉代に営まれたものと考えておきたい。　（中間）

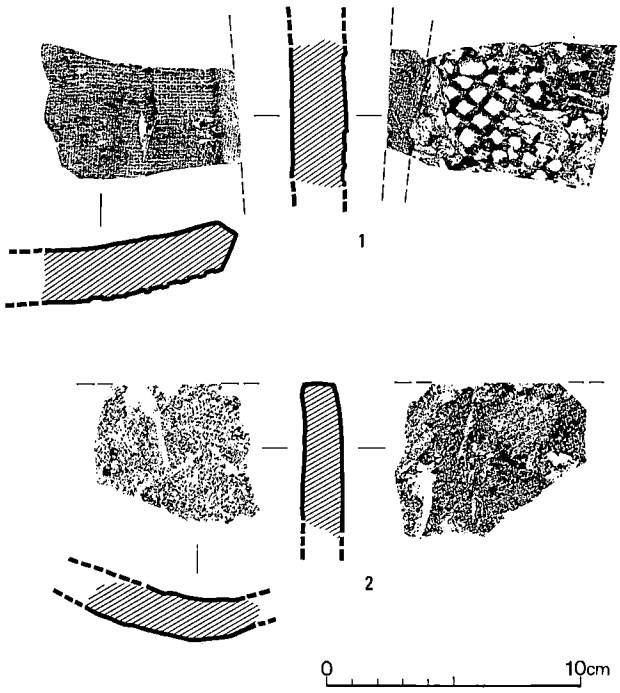
第18号住居跡（図版34，第49図）

Ｅ群の中央に位置し，第17号住居跡に切られ，第69号住居跡を切る。西，南側を大きく近世溝５から切られるため，西隅及び東隅は定かでない。４主柱はかろうじて検出し得たが，その配置はやや台形気味となり，カマド側の２柱間が短かくなる。南東壁際に周壁溝が見られる。床面下の掘り込みは南隅でいくらかみられるが，他は認められない。



第 46 図　第17号住居跡出土土器実測図（1/3）

カマド（第49図）北西壁中央に設置されているが，残りは良くない。袖は全く残らない。焚き口部付近から燃焼部全体に浅い掘り込みがみられる。燃焼部は壁ラインより60cmほど外方へ

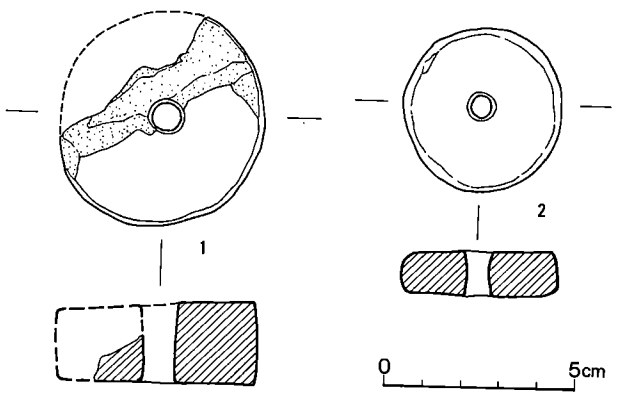


第 47 図　第17号住居跡出土瓦実測図（1/3）

掘り込まれており，更に外方へ小さな掘り込みが認められ，煙道となるかとも考えられる。

出土遺物（50図）

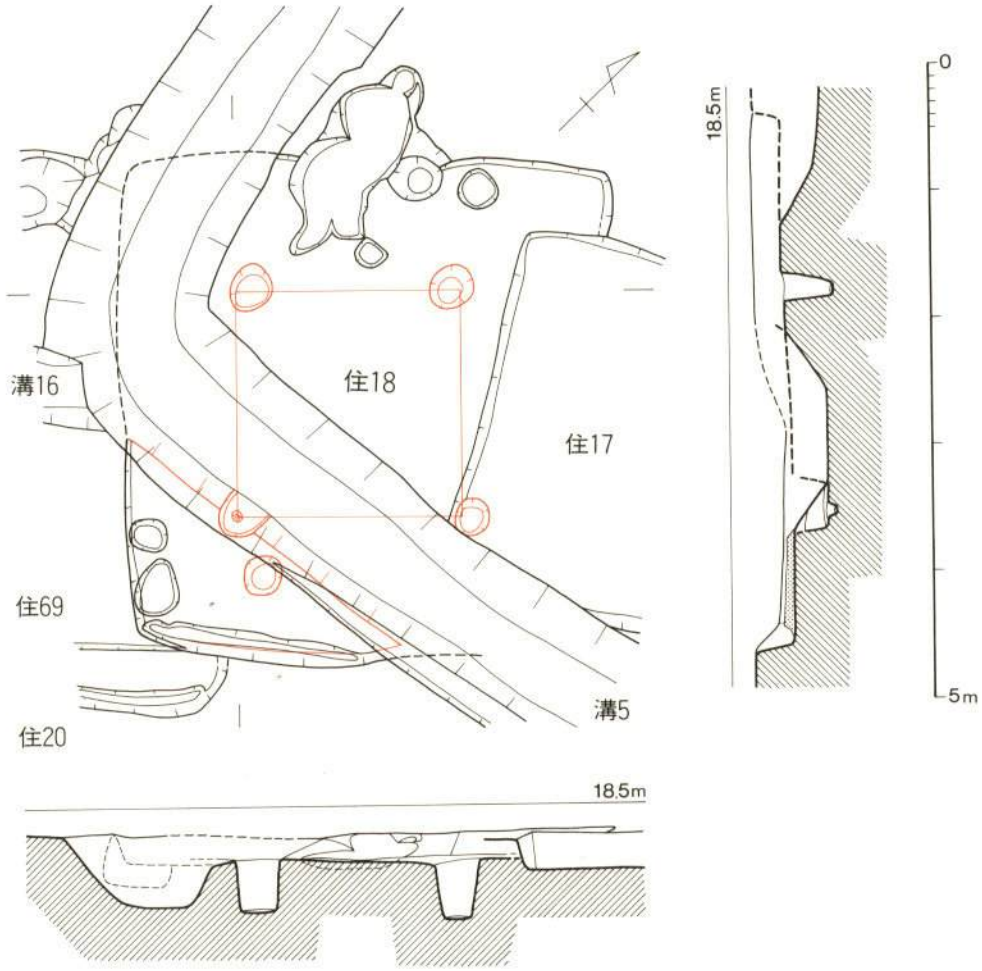
1は須恵器杯蓋で，短かい返りが付く。返り端部径13.7cmを測る。2は土師器杯口縁片であるが，内外面ともに磨滅しており，調整はわからない。3は，全体に磨滅著しく，どのような形状になるのか，判断し難い。4は，口径14cmの土師器小甕で，口縁部は僅かしか開かない。カマド内出土土器で，内面には煤が付着し，外面は赤変している。5は口径14cmの土師器小甕で，胴は張らず，口縁は僅かに外傾するのみである。4と同じカマド内出土品で，外面は赤変している。6は口径17cmの土師器小甕で，寸詰まりの口縁をなす。7は口径26cmを測り，頸内側にシャープな稜を作り，外方へ折れて開く口縁となる。内面上縁にはハケ目が残り，口縁内外面には煤が付着する。



第 48 図　第17号住居跡出土紡錘車実測図（1/2）

8は薄手の平瓦で，凸面は正格子叩きを斜位に施し，凹面は，縦方向ヘラ削りで布目を殆んど消している。焼成やや軟質で灰色をなす。

以上の出土遺物は，7世紀後葉から8世紀に至るまで各種みられるが，この第18号住居跡の営まれたのは，新しい



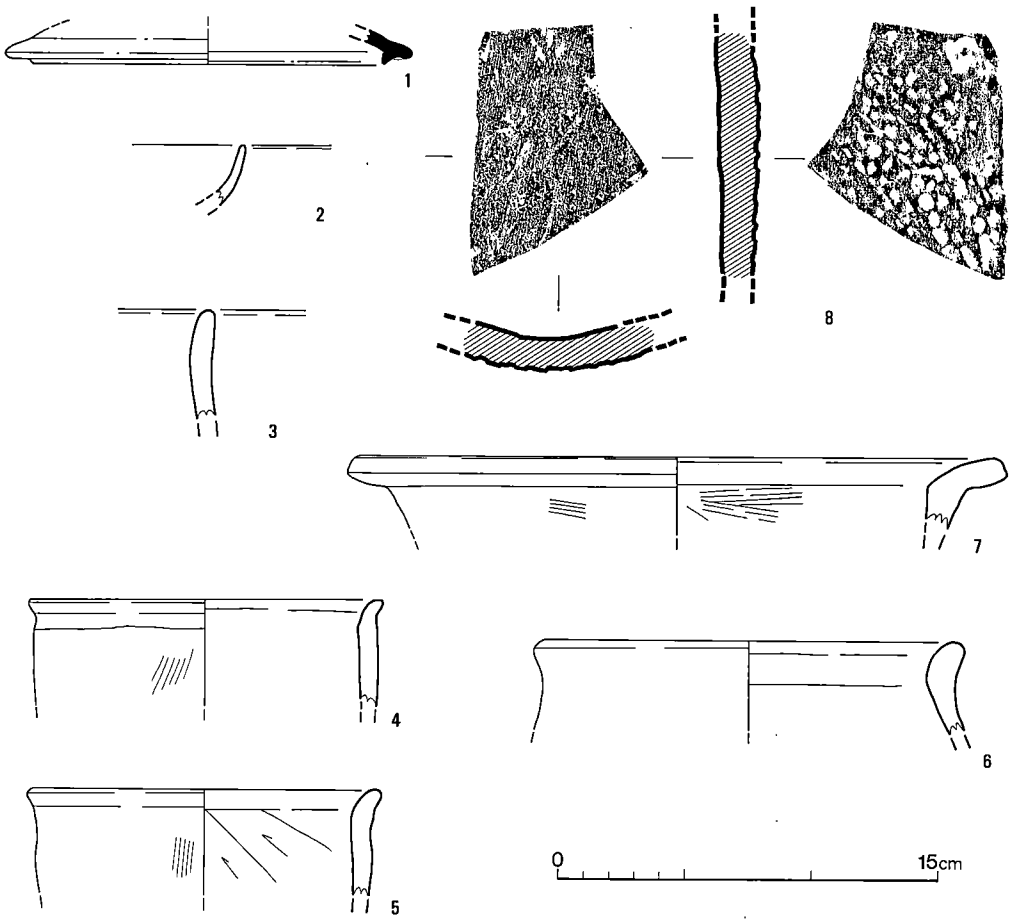
第 49 図　第18号住居跡実測図（1/60）

遺物と切り合い関係から，８世紀中葉前後の時期と考えられる。　（中間）

第19号住居跡（図版35，第51図）

E群中央に位置し，住19→住20→住69→溝16（古→新）となる。また，第14号住居跡と南側で隣接するが，上屋構造を考えると両者の同時併存は考え難い。４主柱穴を有する中型方形住居である。４主柱穴の位置が全体にカマドの反対側へ寄っており，カマド側の住居壁ラインが若干乱れていることを考えると，北西側への拡張が行なわれたことも推定できる。床面は全体に薄く貼り床が施され，床面下層は周壁沿いに掘り込みが認められる。

カマド（第51図）北西壁のほぼ中央に設置されるが，残りは良くない。焚き口付近から燃焼

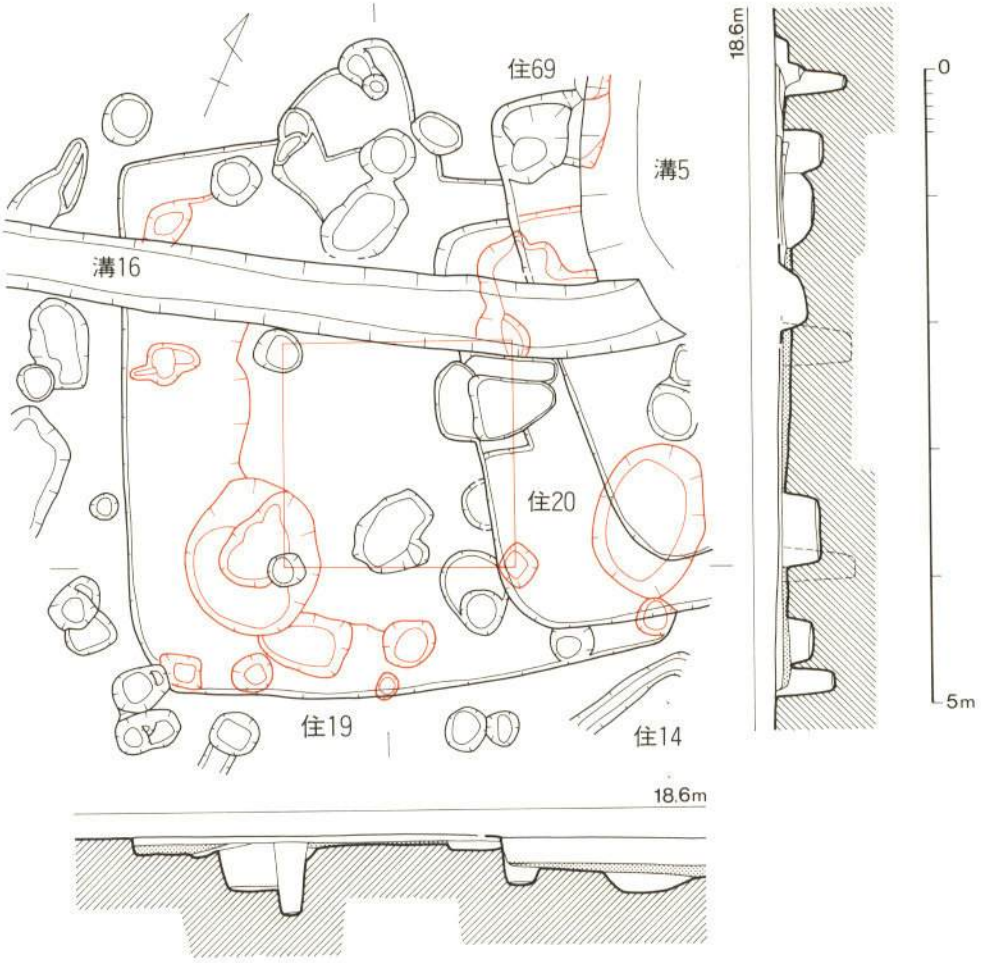


第 50 図　第18号住居跡出土土器・瓦実測図（1/3）

部にかけて浅い掘り込みがみられ，壁ラインより80cm強外側へ張り出すが，その先端が煙道となるか否かは定かでない。袖等も全く残存しない。

出土遺物（第52図）

第46図２は，カマド内出土の須恵器杯蓋で，端部はシャープに尖り，器高も高く，古い様相を示している。天井外面は回転ヘラ削りが施されている。また，黒灰色の自然釉が付着している。１は床面下出土の須恵器杯或いは高杯で，外面下端にカキ目が施されている。２は須恵器高杯脚部片で，低く開く類である。脚部内外面は横ナデを施す。これも床面下出土品である。３は須恵器模倣の土師器杯で，復原口径15.4cm，器高 3.6 cmを測る。４は土師器杯口縁片で，内外面ともに磨滅している。５は土師器小甕で，口径14.5cmを測る。外面は磨滅しており，カマド内出土品である。６は口径17.2cmを測り，外面は磨滅している。カマド内出土品である。

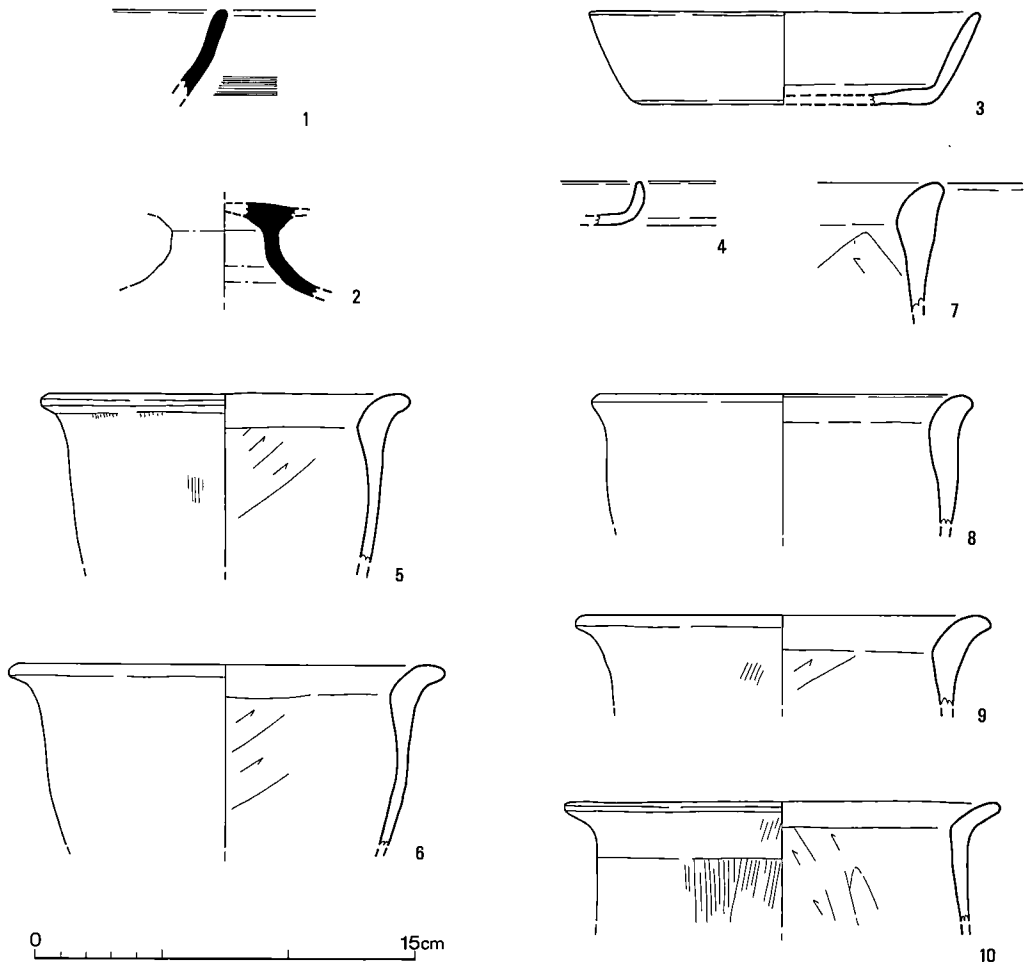


第 51 図　第19号住居跡実測図（1/60）

7は同じくカマド内出土品であるが，短かく寸詰まりになるタイプである。8は口径15cmを測る土師器小甕で，全体に磨滅著しく，赤変している。9は口径16.4cmの土師器小甕片で，5・6と同類品である。10は全体に薄手の土師器小甕で，口径17.1cmを測る。

以上の出土品は，7世紀後葉～8世紀中頃ぐらいまで混在している。当住居跡はこの近辺の5段階に重なり合う切り合い関係の中で最古の段階となっている。この意味からも，より古い遺物をとり上げると，カマド内出土の第46図2の杯蓋や，5・6の小甕が，ほぼ7世紀末の時期を示しており，これが第19号住居跡の営まれた年代と考えられる。

また，この最古段階の7世紀末から，最新段階（第17号住居跡）の8世紀後葉までのうちに，両者を含めて5段階の重複がみられることは，単純に割り算すると1軒の住居が約20年弱の幅

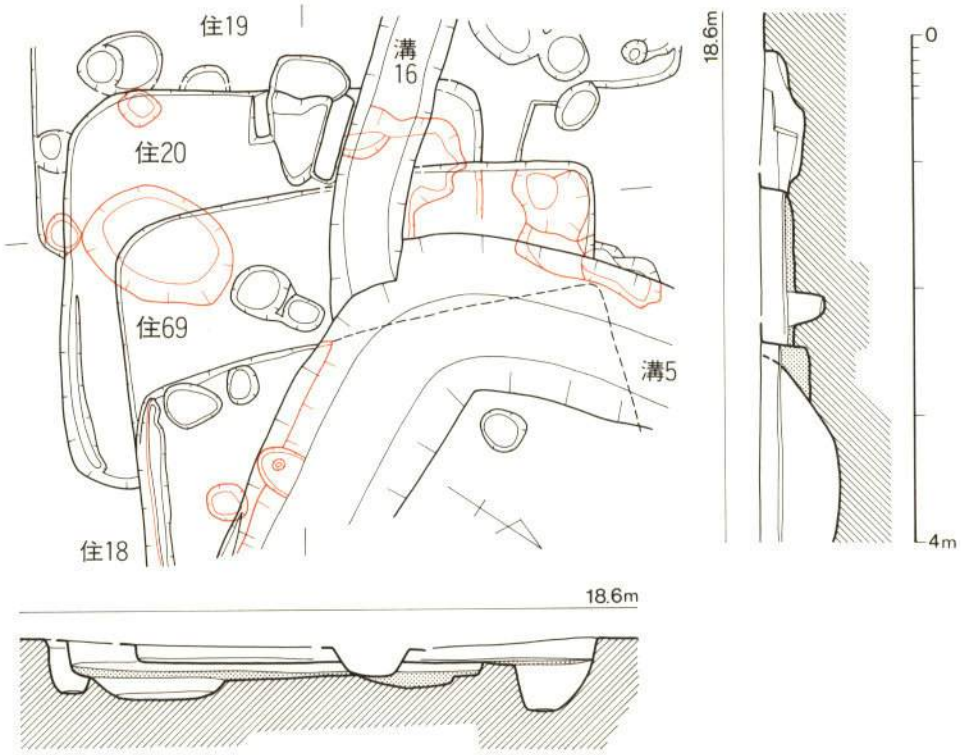


第 52 図　第19号住居跡出土土器実測図（1/3）

を持つこととなり，この時期の竪穴住居の寿命を考える上で重要な資料となり得る。（中間）

第20号住居跡（図版35，第53図）

E群の中央に位置し，第16号溝と第69号住居跡に切られ，第19号住居跡を切る。その大半が第69号住居跡に切られ重複するので，全容は明らかでない。床面積が10.2㎡前後となるやや横長の小型住居である。本遺跡では珍しく，第14号住居跡と同様西南側にカマドを有する。主柱穴は通有の4主柱ではなく，他の小型住居同様，明らかでない。床面は西側の第19号住居跡床面より20cm程段差があり，更に東側の第69号住居よりも10cmほど低く，孰れとの切り合いも明瞭である。床面全体に貼り床がみられる。

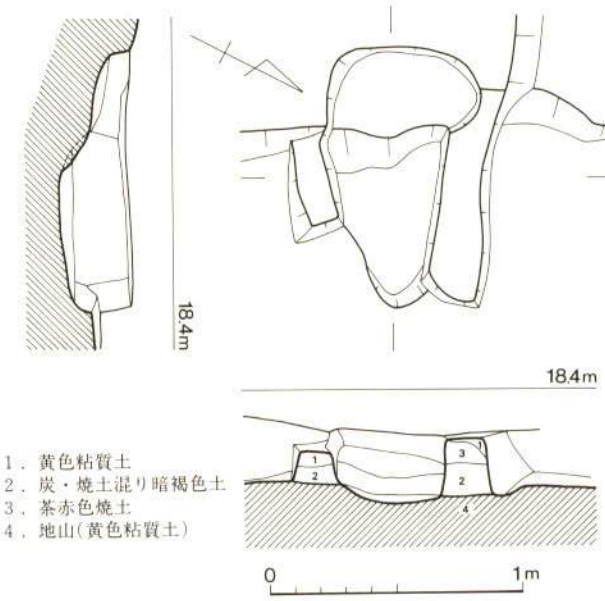


第 53 図　第20・69号住居跡実測図（1/60）

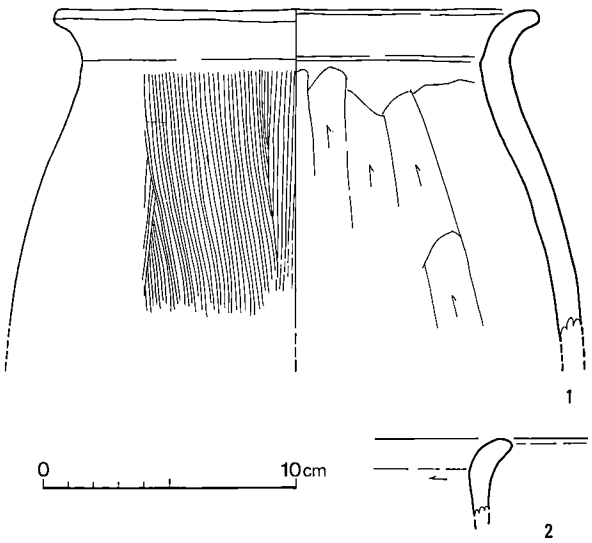
カマド（図版36，第54図）南西壁の中央よりやや北側に片寄って設けられている。住居跡壁から30cmほど外方へ掘り込まれるB類である。燃焼部は浅く掘りくぼめられ，壁ラインから外方へ張り出す部分の床は一段上がっており，煙道へと続く可能性もある。袖は70cm程長く延びており，地山土の黄色粘質土をかぶせている。

出土遺物（第55図）

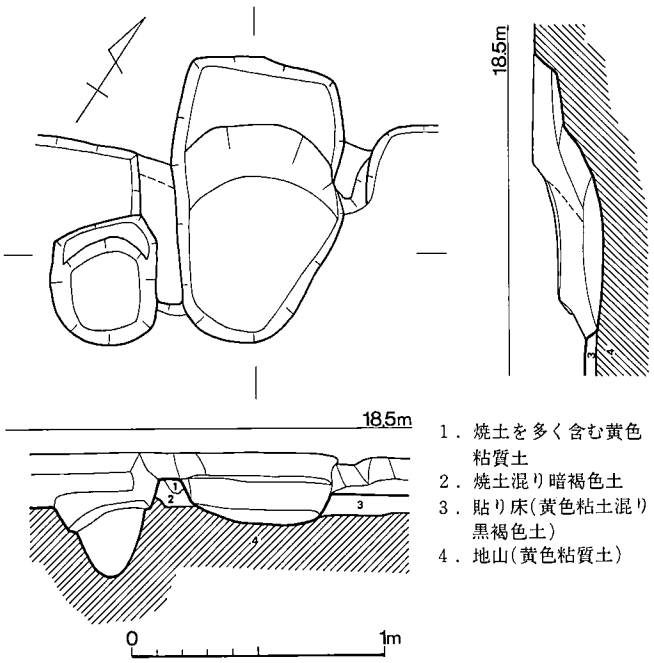
1は胴部が強く張らない土師



第 54 図　第20号住居跡カマド実測図（1/30）



第 55 図　第20号住居跡出土土器実測図（1/3）



第 56 図　第21号住居跡カマド実測図（1/30）

器甕で，床面下出土品である。口径19.2cmで，頸部で肥厚せずにゆるやかに外反する口縁となる。2はカマド内出土の土師器小甕で，口縁内面に煤が付着している。やや寸詰まり気味の口縁につくる。

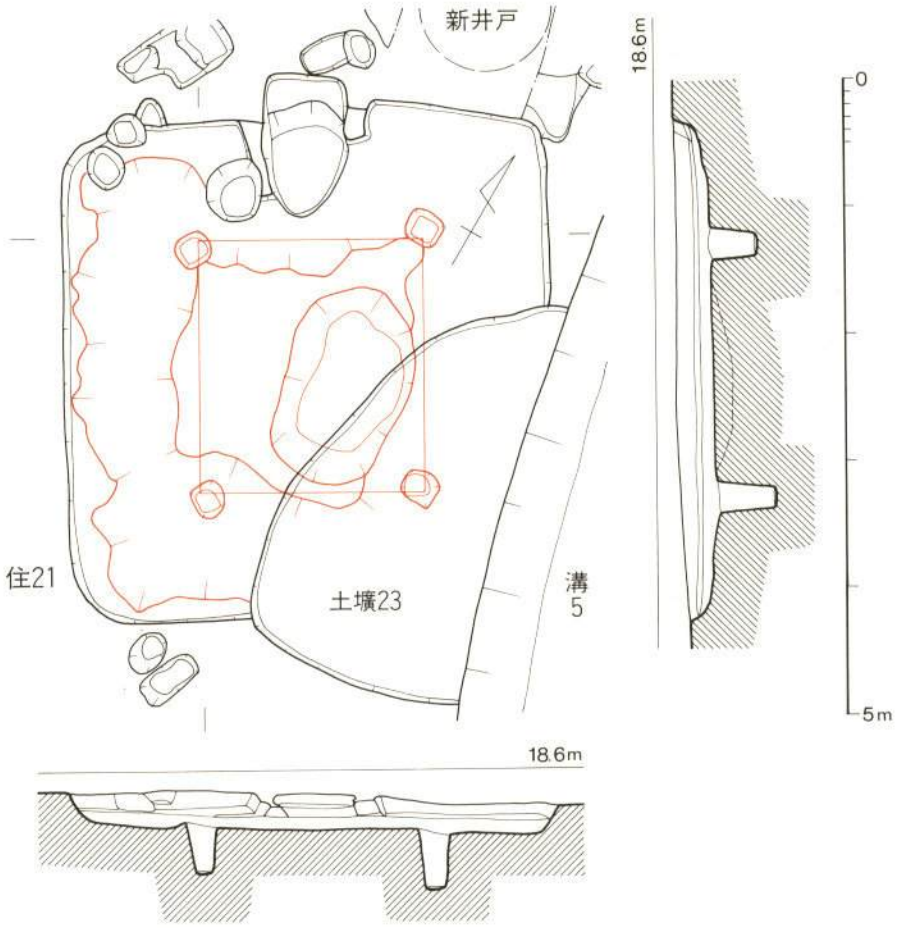
以上の出土土器は，1が古い様相を呈しており，床面下出土品でもあり，その上限を示すところである。しかし，切り合い関係の上からは，カマド内出土の2の小甕が8世紀前葉段階の特徴を示しており，都合が良い。よって，この第20号住居跡は8世紀前葉代の所産と考えておきたい。　　（中間）

第21号住居跡

（図版36，第57図）

E群の北端近くに位置する。中型の平均的な方形住居である。東隅側を土壙23に切られ，北端で土壙24を切る。4主柱穴を有する。床面下層は，周壁沿い全体と，中央部が大きく掘り込まれ，典型的な下部構造を示す。

カマド（図版37，第56図）北西壁中央に設置される。残りはあまり良くないが，袖は地山土の黄色粘質土をかぶせて構築している。燃焼部は全体に住居床面貼床から掘りくぼめられ，そ



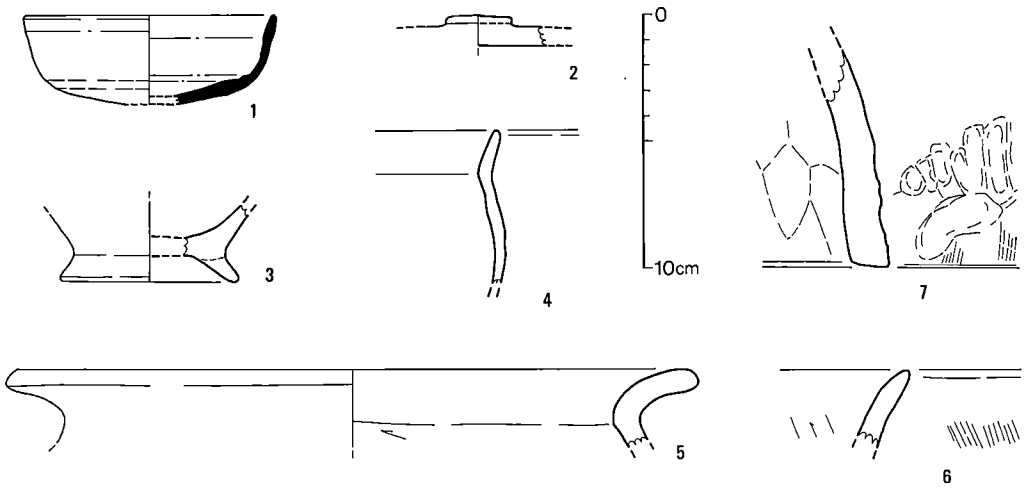
第 57 図　第21号住居跡実測図（1/60）

の外側の張り出し部分は一段高くなり，煙道へと続く。左袖の外側に接して深いピットがみられるが，如何なる性格のものか定かでない。

出土遺物（第58図）

1は，復原口径10cmを測る須恵器杯身である。底部外面はナデており，その周縁に僅かに回転ヘラ削り部分を残す。2は；土師器蓋で，極めて低い扁平な撮を付ける。3は，高台が長く外方へ張る土師器杯である。4は床面下出土の土師器鉢で，薄手で全体に磨滅著しい。5は復原口径27.3cmを測る土師器甕で，口縁が長く外反する形状をなす。6は鉢状をなす土師器で，内面はヘラ削りと思われる。7は床面下出土品で，土製カマドの下端片である。指頭圧痕が多くみられる。

以上の出土遺物は7世紀中葉のものから，8世紀末に近いころまでのものがみられる。1の



第 58 図　第21号住居跡出土土器実測図（1/3）

ような古いものはこれ１点のみで，７世紀後葉から８世紀末までの遺物を含む第24号土壙を切るという関係からみて，おかしくなる。よってこの第21号住居跡は８世紀末に営まれたものと考えておきたい。　（中間）

第22号住居跡（図版38，第59図）

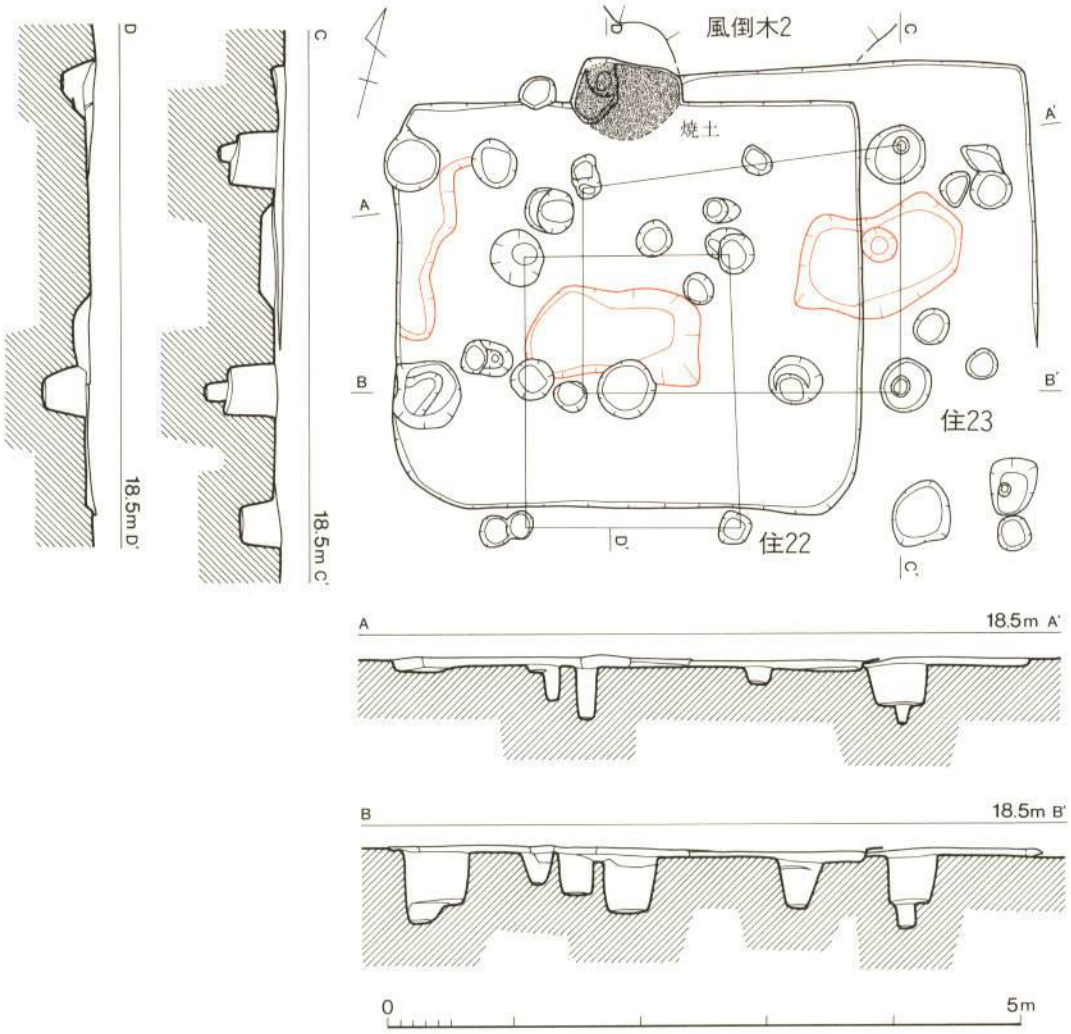
Ｅ群中央に位置する。やや小型の横長方形タイプ住居である。柱穴は，カマド側の２柱は明瞭であるが，その反対側は床面には認められず，その延長線上の南壁際の小２柱穴と関連すると考えられる。この不規則性は小型住居共通の様相である。床面は中央部で下層の掘り込みがみられるが，全体には貼り床は認められない。

カマド（第59図）北辺の中央にわずかに残存している。袖等全く残らず，燃焼部床面とみられる範囲が赤く焼けていた。住居壁ラインから40cm程外方へ張り出したＢ類である。

出土遺物（第60図）

復原口径22.5cmを測る土師器甕である。全体に薄手で，丸く屈曲反転して，外方へ開く口縁となる。内外面ともに磨滅著しく，調整不明である。

この出土土器は，新しくみても７世紀初頭を下るものではなく，とてもこの住居がＥ住居群の中で特別古い形態を示すとは考えられない。ここでは，取り敢えず，この第22号住居は上限を７世紀初頭とする時期としておく。　（中間）

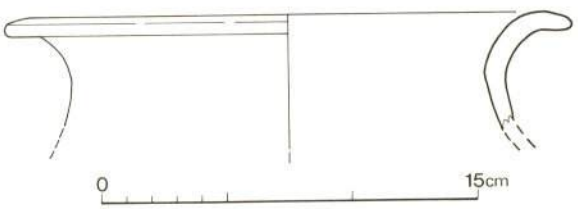


第 59 図　第22・23号住居跡実測図（1/60）

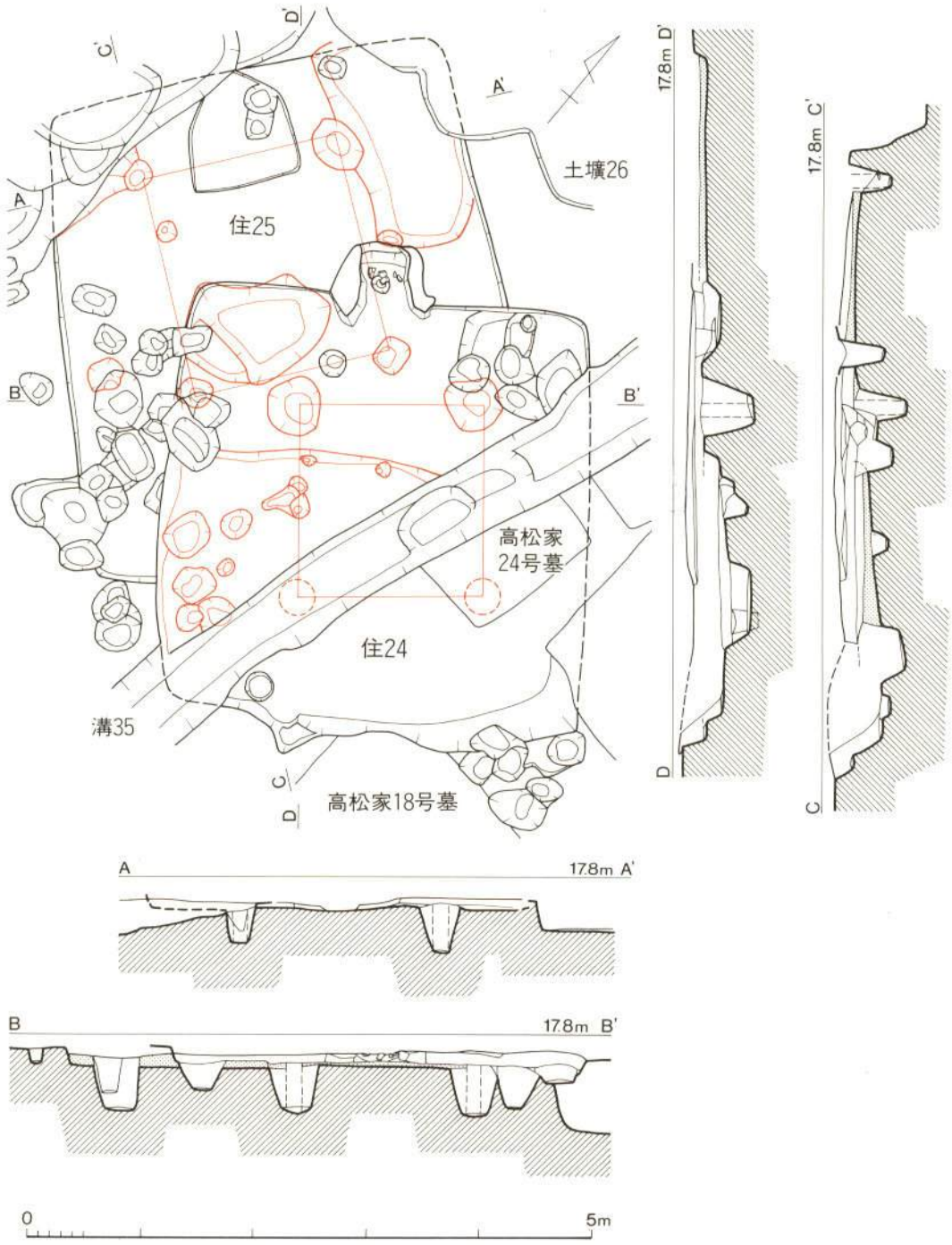
第23号住居跡（図版38，第59図）

E群の中央部に位置し，第22号住居跡にその大半を切られる。浅く，残りは良くない。北側に第2号風倒木痕が検出されたが，それを切って営まれる。

主柱穴の配置は通有の4本の方



第 60 図　第22号住居跡出土土器実測図（1/3）



第 61 図　第24・25号住居跡実測図（1/60）

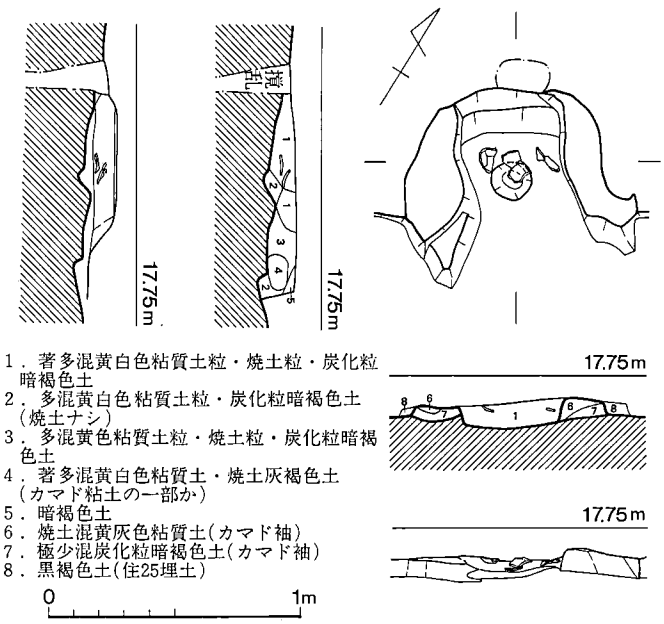
形配置は確認されず，やや台形気味の横長配置となる可能性もあるかと考え図示した。この配置から住居掘方平面プランを推定すると，横方向の東西辺が１ｍも長い横長のものとなる。ただカマドも北辺，東辺には検出されておらず，全体の様相は確定的ではない。また，床面下層の掘込みも東寄りに一部みられるものの，第22号住居跡同様に貼床も殆んど認められない。

出土遺物は皆無で時期決定はできない。切り合い関係から第22号住居跡より古いことになるが，これからも時期の推定はなし得ない。（中間）

第24号住居跡

（図版39，第61図）

Ｃ群にあり，第25号住居跡を切っている。東側半分は近世の高松家墓地の第８・18・24号墓および第35号溝によって著しく削平されている。平面形は隅円の縦長方形で，長軸3.95ｍ，短軸 3.6ｍで，面積 14.22 ㎡を測る。主柱穴は４本と思われるが，南・東側の２本は不明である。主軸方向はＮ39°Ｗに取る。

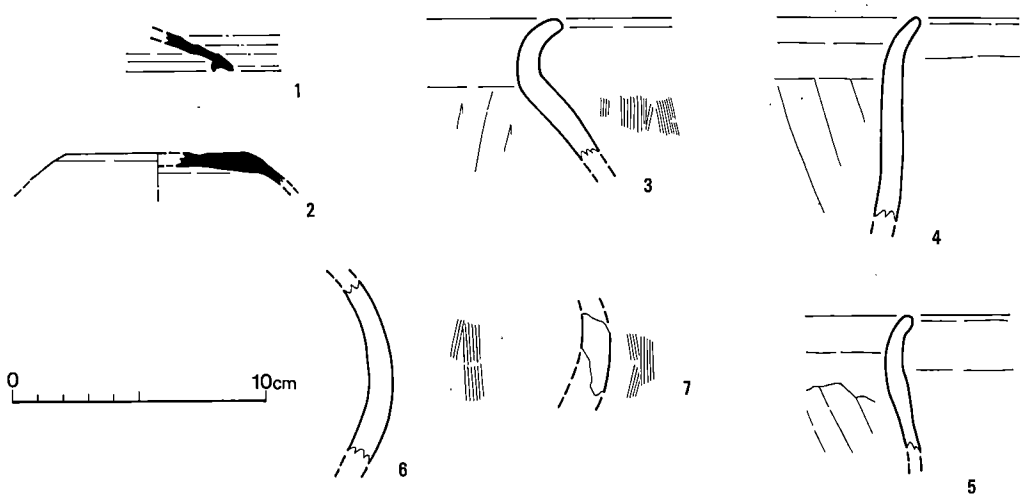


第 62 図　第24号住居跡カマド実測図（1/30）

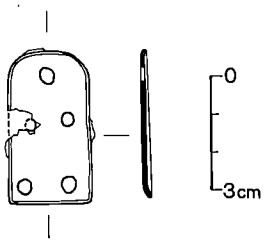
カマド（図版40，第62図）北西壁中央部に設置されたＢ形態のものである。右袖は既になく，左袖のみ存する。長さ28cm；最大幅30cmを残す。掘り形の長さ71cm・幅77cmで，燃焼部幅は38cmを測る。火床面はほぼ水平で，中央に浅いピットが検出された。ピットの周辺からは支脚に転用されたと思われる小型甕の破片が散在していた。

出土遺物（第63図）

須恵器（１・２）１は杯蓋の口縁部片で，床下出土である。小片のため口径の復原は不可能である。内面の返りは口縁より僅かに突出する。焼成良好で，色調暗灰色を呈する。２は蓋の天井部片で，床下出土である。破片のため明確ではないが，天井部外面は回転ヘラケズリの後ナデ仕上げを，内面はヨコナデの後ナデ仕上げを施している。天井部外面にヘラ記号が施されている。焼成良好で，色調は内面灰色，外面灰色～暗青灰色を呈する。



第 63 図　第24号住居跡出土土器実測図（1/3）



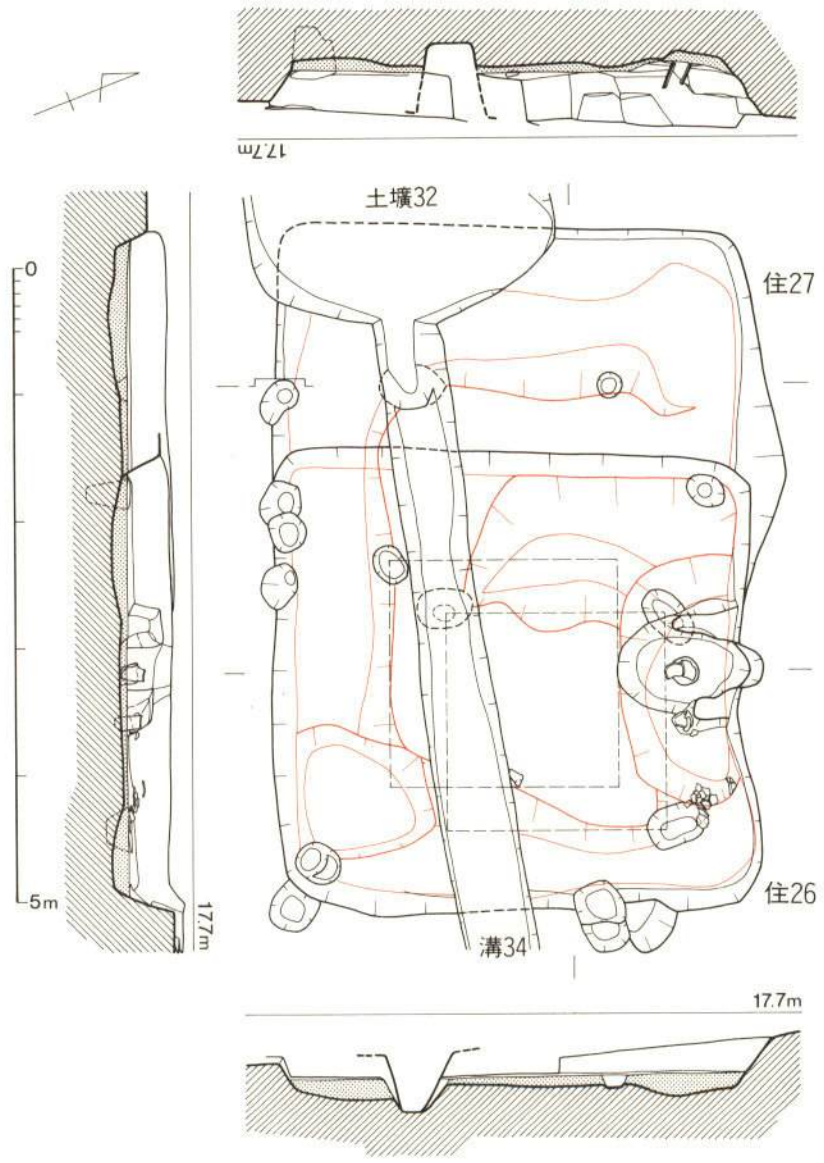
第 64 図　第24号住居跡出土鉄器実測図（1/2）

土師器（３～７）３は甕の口頸部片で，住居内埋土出土である。小片のため口径の復原は不可能である。やや肩の張る胴部からやや鈍い稜を有する。頸部はやや短く直立し上位で強く外湾しながら口縁部に続く形態を呈している。口頸部内外面はヨコナデ，胴部内面は縦方向のヘラケズリ，外面は縦方向のハケ目が施されている。焼成良好で，色調は橙褐色を呈する。

４～７はいずれもカマド内出土の小型甕の破片で，４・５は口縁部から胴部上位にかけての，また６・７は胴部下位から底部にかけての破片である。本来支脚として転用されていた同一個体と考えられるが，接合不可能で復原口径は不明である。４・５の胴部は全く張りが無く，頸部上位で弱く外反して口縁に続く形態を呈する。口径が胴部最大径を上回る。口頸部内外面はヨコナデ，胴部内面は縦方向のヘラケズリが施されているが，外面は磨滅しているため不明である。焼成良好で，色調は橙褐色を呈する。６・７はともに外面にハケ目が施されており，外面の色調も煤のため黒色化している。

鉄製品（第64図）片側の短辺が丸味を帯びた長方形の留金具である。長さ４cm，幅2.1cm，厚さ0.1～0.15cmを測る。５つの孔が穿たれており，両短辺はやや内側に曲がっている。

以上の出土遺物のうち，１は７世紀中頃に近い時期に比定できるが床下出土であり，重複関係にある第25号住居跡のものとも考えられる。カマド内出土の小型甕は７世紀後葉に比定され

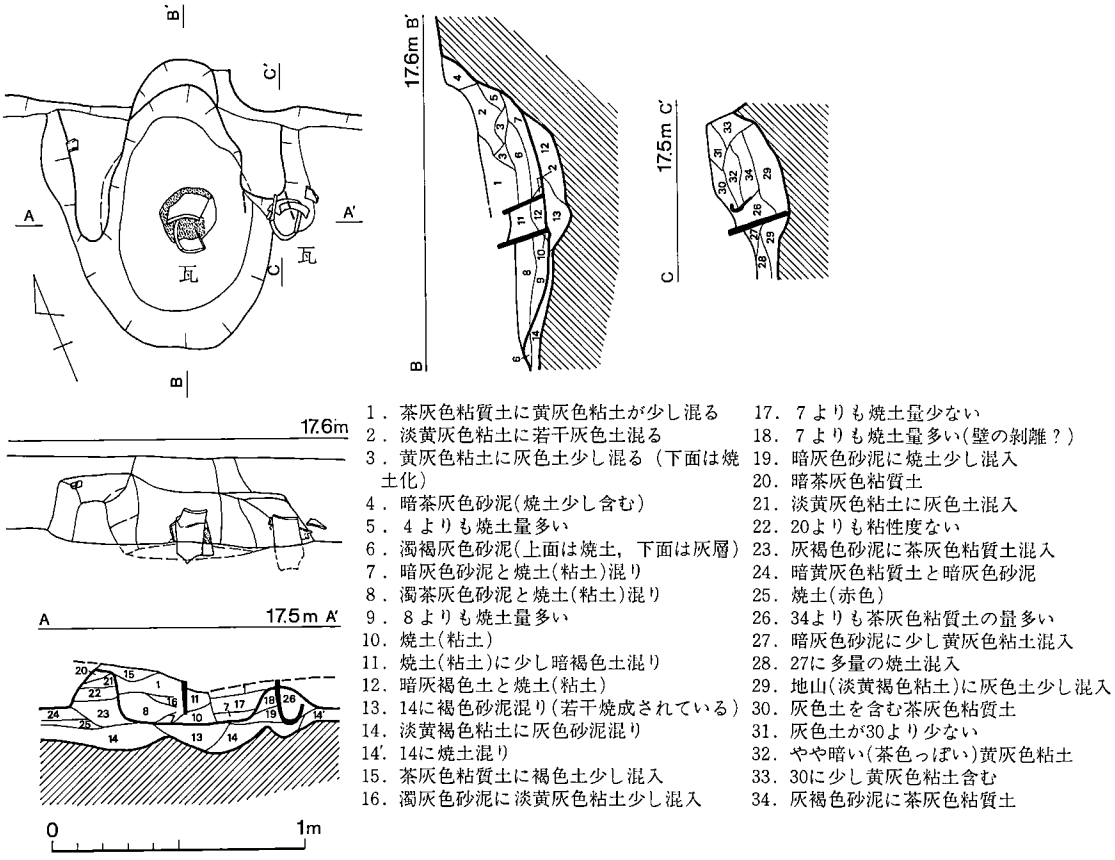


第 65 図　第26・27号住居跡実測図（1/60）

るものであり，本住居跡の時期も７世紀後葉と考えたい。　（森山）

第25号住居跡（図版39，第61図）

C群にあり，北側隅を第26号土壙に，南側隅から東側隅にかけてを第24号住居跡に切られている。また西側隅も撹乱を受けており，全体に残り良くなく，浅い。平面形は縦長方形で，長軸推定4.4m，短軸3.85mで，推定面積16.94㎡を測る。主柱穴は４本である。主軸方向はN 53° Wに取る。



1．茶灰色粘質土に黄灰色粘土が少し混る
2．淡黄灰色粘土に若干灰色土混る
3．黄灰色粘土に灰色土少し混る（下面は焼土化）
4．暗茶灰色砂泥(焼土少し含む)
5．4よりも焼土量多い
6．濁褐灰色砂泥(上面は焼土，下面は灰層)
7．暗灰色砂泥と焼土(粘土)混り
8．濁茶灰色砂泥と焼土(粘土)混り
9．8よりも焼土量多い
10．焼土(粘土)
11．焼土(粘土)に少し暗褐色土混り
12．暗灰褐色土と焼土(粘土)
13．14に褐色砂泥混り(若干焼成されている)
14．淡黄褐色粘土に灰色砂泥混り
14'．14に焼土混り
15．茶灰色粘質土に褐色土少し混入
16．濁灰色砂泥に淡黄灰色粘土少し混入
17．7よりも焼土量少ない
18．7よりも焼土量多い(壁の剝離？)
19．暗灰色砂泥に焼土少し混入
20．暗茶灰色粘質土
21．淡黄灰色粘土に灰色土混入
22．20よりも粘性度ない
23．灰褐色砂泥に茶灰色粘質土混入
24．暗黄灰色粘質土と暗灰色砂泥
25．焼土(赤色)
26．34よりも茶灰色粘質土の量多い
27．暗灰色砂泥に少し黄灰色粘土混入
28．27に多量の焼土混入
29．地山(淡黄褐色粘土)に灰色土少し混入
30．灰色土を含む茶灰色粘質土
31．灰色土が30より少ない
32．やや暗い(茶色っぽい)黄灰色粘土
33．30に少し黄灰色粘土含む
34．灰褐色砂泥に茶灰色粘質土

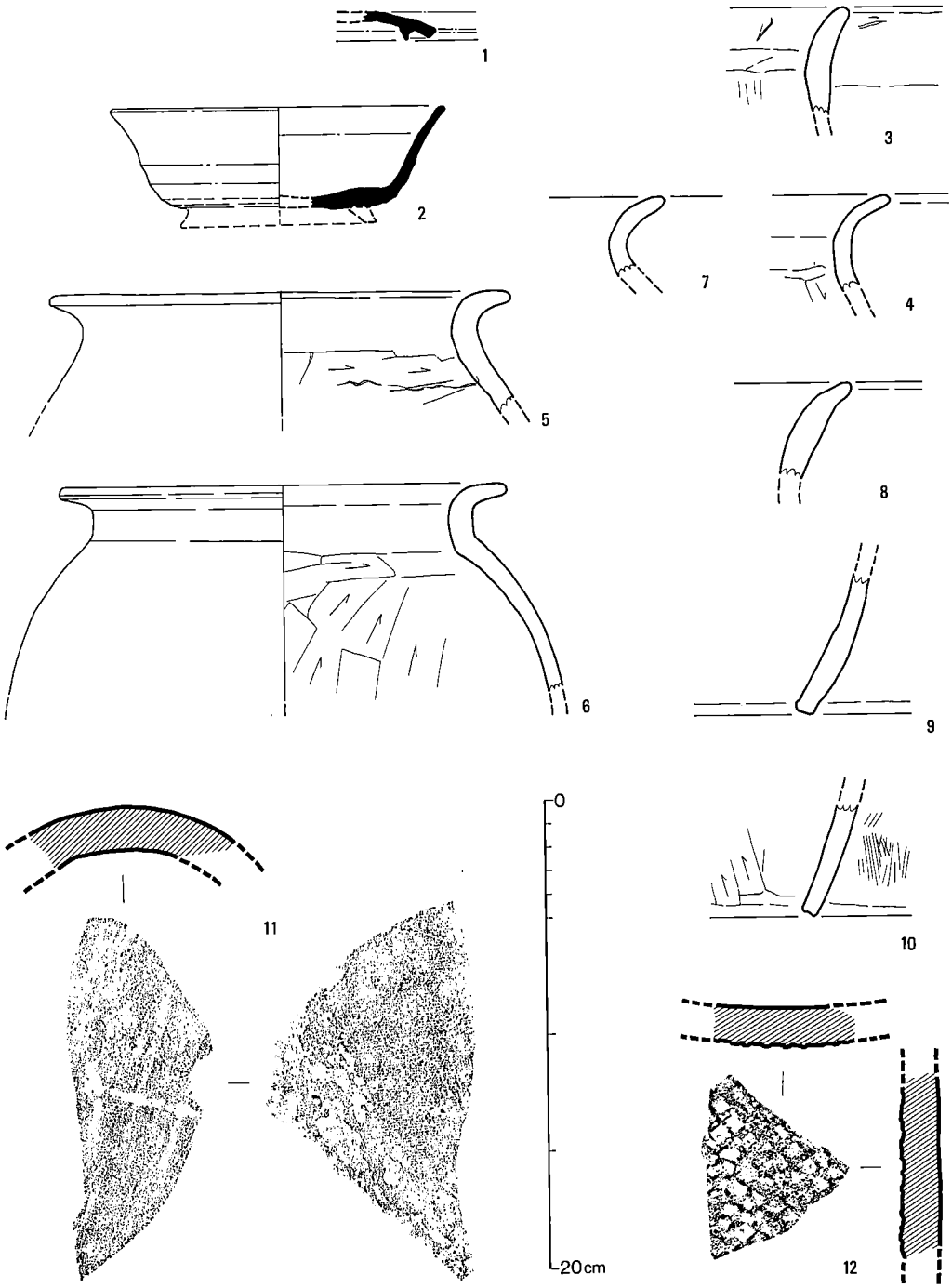
第 66 図　第26号住居跡カマド実測図（1/30）

カマド（図版39，第61図）北西壁中央部に設置されたA形態と思われるものである。残り悪く，掘り形しか検出できなかった。長さ100㎝，最大幅95cmの五角形を呈し，奥壁に行くに従いその幅を減じている。右側奥壁寄りに2個のピットを検出したが，本カマドに伴うものか明確にし得なかった。

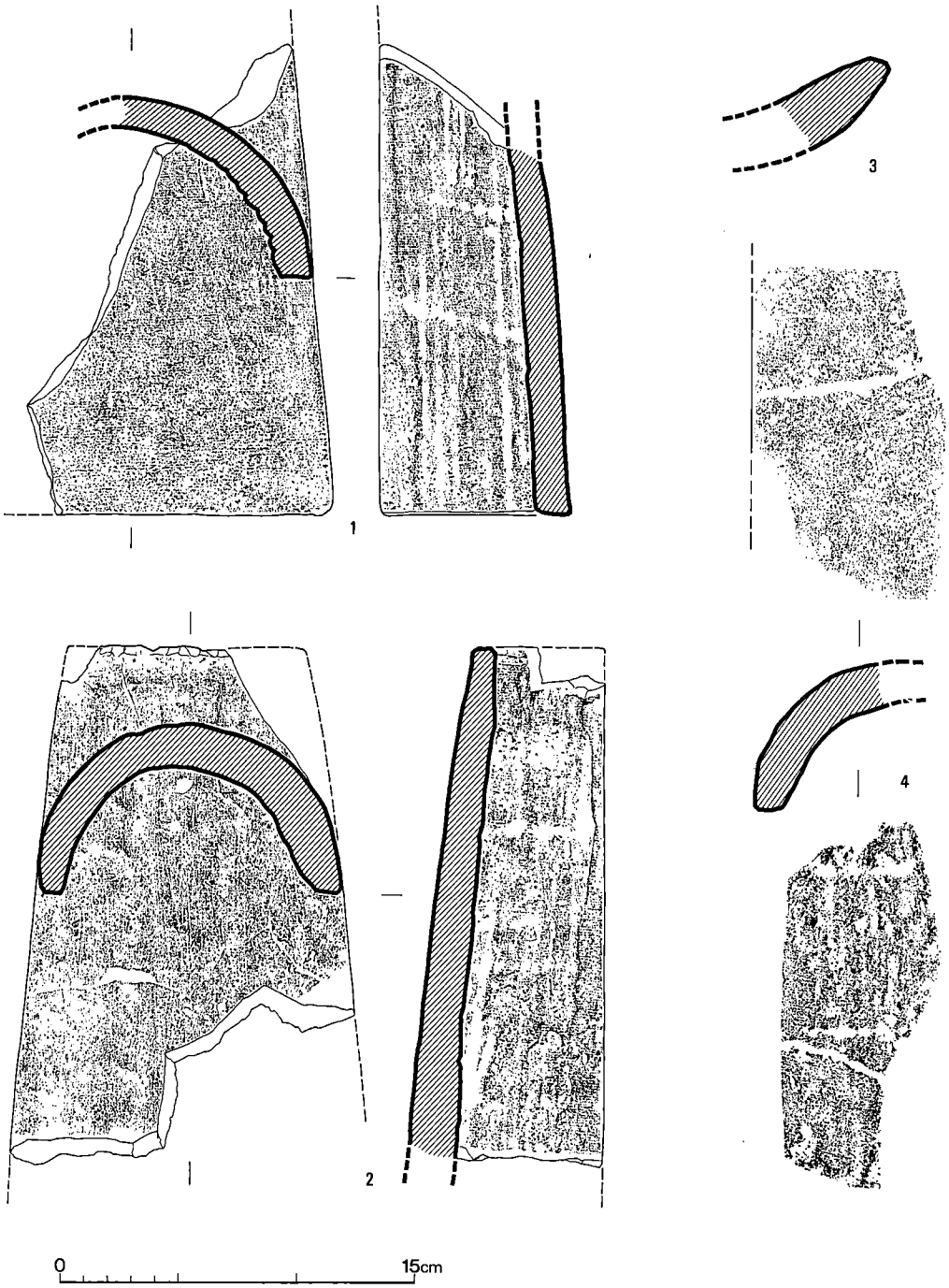
時期を推定し得る遺物の出土はなかったが，前述の第24号住居跡床下出土の須恵器杯蓋（第63図1・2）を本住居跡の遺物とした場合，本住居跡の時期を7世紀中頃前後と考えることができる。（森山）

第26号住居跡（図版41・42，第65図）

C群にあり，第27号住居跡を切り，第34号溝に切られている。平面形は隅円の縦長方形で，長軸3.75m，短軸3.6mで，面積13.5㎡を測る。主柱穴は4本と考えられるが，明確にし得な



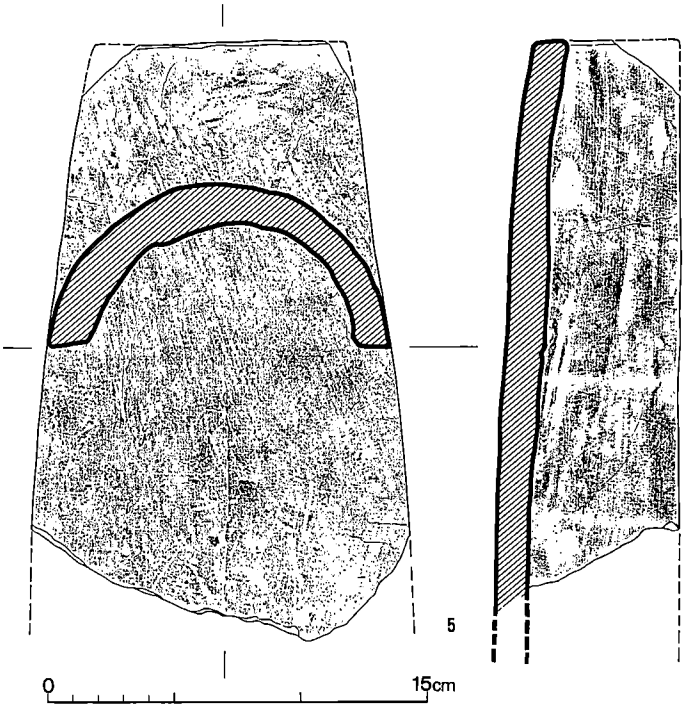
第 67 図　第26号住居跡出土土器・瓦実測図 (1/3)



第 68 図　第26号住居跡出土カマド転用瓦実測図（その１）(1/3)

かった。主軸方向はN22°Eに取る。カマドの右側，東側隅寄りの床面に，甕が潰れた状態で出土した。

カマド（図版42，第66図）北東壁中央部に設置されたA形態のものである。両袖は良く残っており，幅20cm，長さ50cmを測る。掘り形は楕円形を呈し，長さ115cm，最大幅100cmを測る。奥壁では中位で段を成す部分があり，奥壁から煙道に通じる煙道口かと考えられる。火床面中央には基部を粘土によって固定された丸瓦2枚が支脚として据えられており，粘土は熱を受けて焼土化していた。また，右袖には甕口縁から胴部にかけての破片と丸瓦1枚が補強材として置かれていた。



第 69 図　第26号住居跡出土カマド転用瓦実測図（その2）(1/3)

出土遺物（第67～69図）

須恵器（第67図1・2）1は杯蓋の口縁部片で，床下出土である。内面の返りは口縁部よりほんの僅か突出する形態を呈している。小片のため口径の復原は不可能である。焼成良好で，色調は灰色を呈する。

2は高台付の杯身であり，住居内埋土出土である。口径14.2cm，残存高4.3cmを測る。2条の沈線によって窺える高台の位置は張る腰部よりやや内側にあり，胴部は中位から外反気味に開いて口縁部に続く。口縁部から胴部は内外面ともヨコナデ，底部内面はナデ仕上げ，外面は回転ヘラケズリの後ナデ仕上げが施されている。焼成良好で，色調は内面灰色，外面には自然釉が付着して暗褐色～黒色を呈する。

土師器甕（4～7）4は住居内出土の小片であり，口径の復原は不可能である。5はカマドの右側東隅寄りの床面で出土したもので，復原口径19.5cmを測る。6はカマド右袖の補強材として転用されていたものであり，口径19.0cmを測る。7はカマド内出土の小片で，口径の復原は不可能である。

以上の4点はいずれも口頸部が強く外湾し，胴部が張る形態である。調整は口頸部をヨコナデし，胴部内面を縦方向のヘラケズリ，頸部近くの内面を横方向にヘラケズリしている。外面は磨滅して不明瞭だが，6からして縦方向のハケ目調整であろう。

土師器甑（3・8～10）　3・8は小片のため確証はないが，甑の口頸部破片と考える。3は住居内出土，8はカマド内出土で，いずれも磨滅して調整不明である。9・10は下端部片で，いずれも住居内出土である。調整も内面を縦方向のヘラケズリ，外面は縦方向のハケ目が施されている。

平瓦（第68図12）床下出土の破片である。小片で明確でないが，凸面に正格子タタキ目を斜めに施した平瓦であろう。凹面は磨滅して調整不明瞭だが，縦方向のナデと思われる。厚み1.7cmを測る。焼成不良で生焼けの状態であり，色調は黄褐色～淡茶褐色を呈している。

丸瓦（第68図11，第69図）11は床面出土の破片である。残存長16.0cm，厚さ1.9cmを測る。凸面はナデによって無文である。凹面には枠板および枠板の連綴紐と思われる圧痕が残っている。焼成良好で，色調は灰色を呈する。

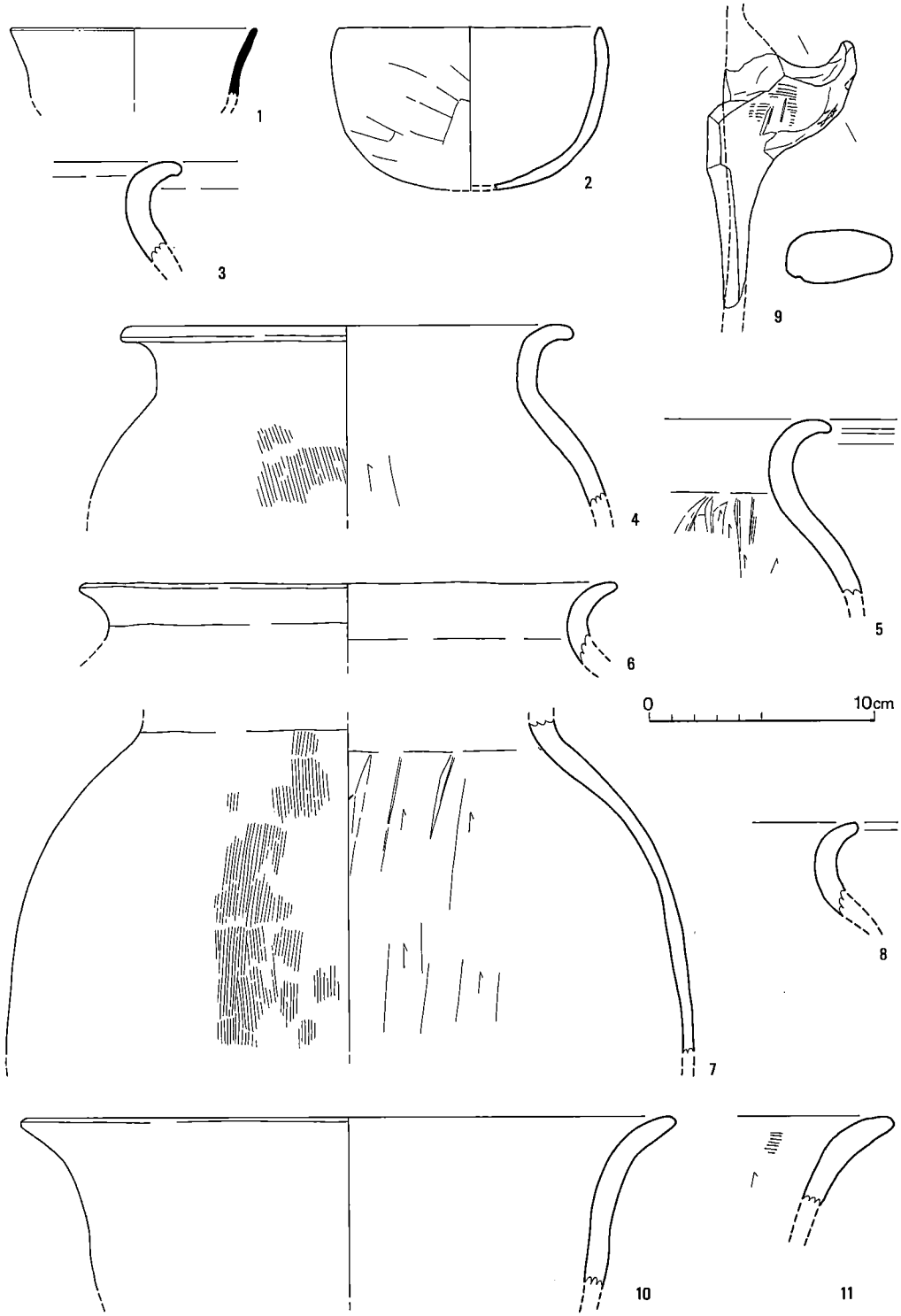
1はカマドの支脚に転用されていたものであり，広端面および片側面の破片である。残存長19.8cm，最大幅12.7cm，厚さ1.5cmを測る。凸面は丁寧なナデによって無文である。凹面には枠材と思われる竹状圧痕およびその連綴紐と思われる圧痕が残っている。側端面および内側縁部は縦方向のヘラケズリで面取りを行っている。焼成良好で，色調は暗灰色を呈する。

2もカマドの支脚に転用されていたものであり，狭端部および両側端部が残っており，行基瓦である。残存長22.1cm，最大幅14.0cm，厚さ1.5～2.1cmを測る。凸面はヘラ状工具による横方向のナデが施されて無文である。凹面には枠材と思われる竹状圧痕および，凹面の狭端部寄りには枠材の連綴紐と思われる圧痕が残っている。両側面および両内側縁部は縦方向のヘラケズリで面取りを行っている。狭端面は打ち欠かれて凹凸著しい。焼成良好で，色調は暗灰色を呈する。

3はカマド内出土で，片側端部の破片である。残存長14.0cm，最大厚さ2.5cmを測る。凸面はナデによって無文である。側端面および内外側端部は縦方向のヘラケズリで面取りを行っている。焼成良好で，色調は暗灰色を呈する。

4もカマド内出土で片側端部の破片である。残存長16.0cm，厚さ2.0cmを測る。凸面は磨滅して不明瞭だが恐らくナデによる無文と思われる。側端面および内側端部はヘラケズリによって面取りされている。凹面の上下2ケ所に枠材の連綴紐と思われる圧痕が残っている。焼成良好で，色調は内面黄灰色，外面黄橙色を呈する。

5はカマド右袖に補強材として転用されていたもので，広端部を欠く行基瓦である。残存長23.6cm，最大幅14.9cm，狭端部推定幅10.0cm，厚さ1.3～1.9cmを測る。凸面は斜位に走る縄目タタキの後ナデを施しているが，完全に消えずにタタキが残っている。また，凹面には枠材と



第 70 図　第27号住居跡出土土器実測図（1/3）

思われる竹状圧痕および枠材の連綴紐と思われる圧痕が残っている。両側端面および両内側端部は縦方向のヘラケズリによって面取りが行われている。焼成良好で，色調は淡黄橙色を呈する。

以上の出土遺物のうち，須恵器の杯蓋・高台付杯（第67図１・２）は７世紀後半に比定でき，本住居跡の時期も７世紀後半代と考えられる。（森山）

第27号住居跡（図版42，第65図）

C群にあり，第26号住居跡・第32号土壙・第34号溝に切られている。平面形は方形と思われるが明確でない。長軸3.75m を測る。主柱穴はわからない。主軸方向はN22°Wに取る。

カマド（図版42，第65図）確実なものではないが，北東壁中央部と思われる箇所の上端がやや外へ出ており，A形態のカマドの痕跡かと考えた。掘り形も残っておらず確証はない。

出土遺物（第70図）

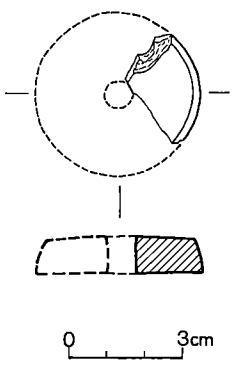
須恵器

杯身（１）口辺部の破片である。体部中位からさらに外反して口縁部に続く形態を呈する。復原口径11.0cmを測るが，あるいはもう少し大きいかもしれない。焼成良好で，色調は内面淡灰色，外面は灰をかぶり暗灰色を呈する。

土師器（２～11）

椀（２）深めの椀で，丸底の底部から胴部はほぼ直に上に延びて，尖り気味の口縁部へ続く形態を呈する。推定口径11.8cm，器高 7.3 cmを測る。胴部外面は斜め方向のヘラケズリが施されている。焼成良好で，色調は橙色を呈する。

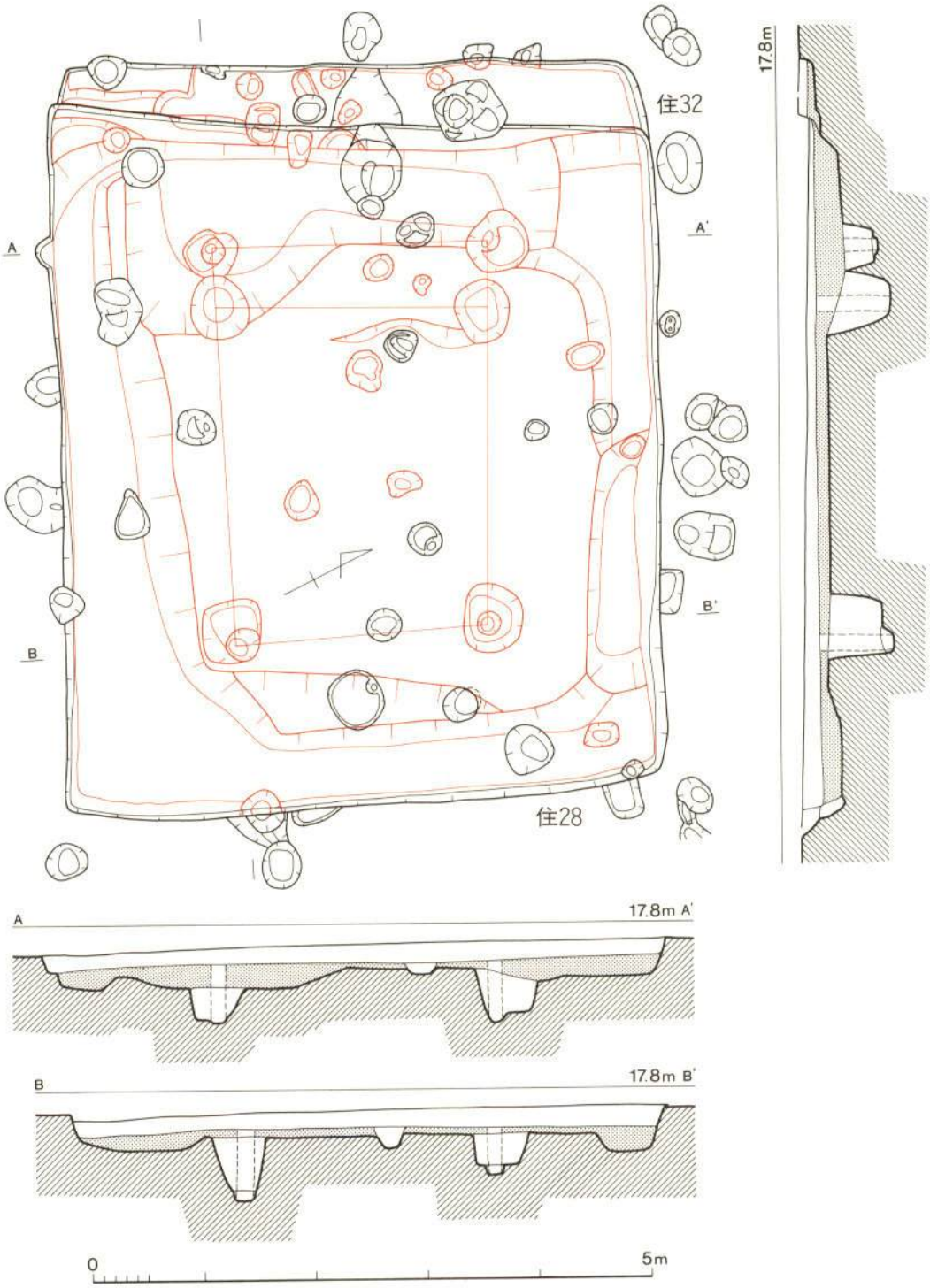
甕（３～８）６は胴部上位から頸部にかけて，それ以外はすべて口頸部片である。口頸部はすべて強く外湾するものであるが，４だけは頸部がいったん直立して外湾するものである。７は肩がやや張るが胴部最大径は下位に求められる。調整は口頸部内外面をヨコナデ，胴部内面を縦方向のヘラケズリ，外面は縦方向のハケ目調整している。



第71図　第27号住居跡出土紡錘車実測図(1/2)

甑（10・11）口頸部のみの破片で明確でないが，甑と考える。開き気味の胴部は頸部で更に大きく外反して口縁部へ続く形態のものである。口頸部内外面はヨコナデ，胴部内面は縦方向のヘラケズリが施されている。10の推定口径は29.2cmを測る。

把手（9）甕か甑の把手である。横断面は楕円形を呈している。外面は胴部調整時のハケ目が少し残っているが，ヘラ状工具によるナデ仕上げが施されている。胴部内面はヘラケズリが施されている。突出部には工具による窪みが付いている。



第 72 図　第28・32号住居跡実測図（1/60）

石製品（第71図）

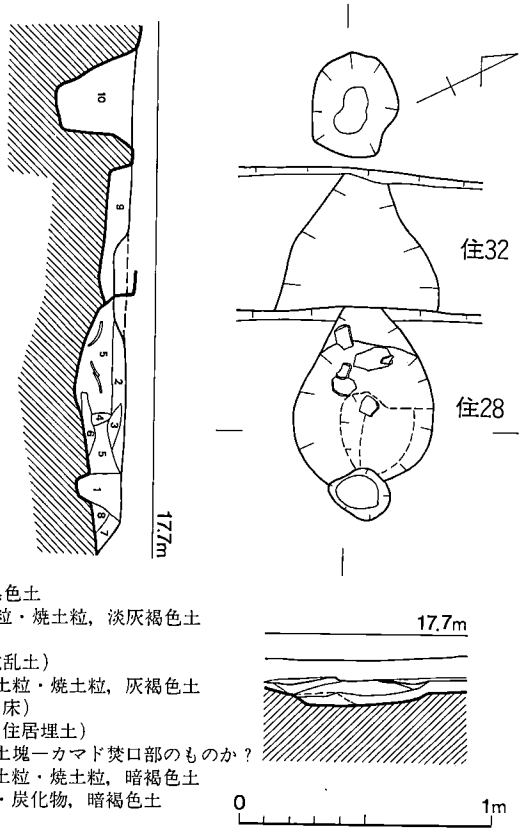
滑石製の紡錘車片である。断面台形を呈し，中央に円形の孔が穿たれている。円孔から上面端までの径は1.6cm，下面端までの径は1.8cmを測る。厚さは１cmである。

以上の出土遺物のうち，須恵器杯身(１)は，口径こそ異なるが，第26号住居跡出土の高台付杯身(第67図２)に胴部から口径にかけての形態がよく似ており，土師器の甕・甑なども同一形態をしており，大差ないと考える。しかし，土師器の椀(２)は古い様相を呈していることから；本住居跡の時期は第26号住居跡より僅かに遡り７世紀中頃に近い後半代と考えたい。（森山）

第28号住居跡（図版43，第72図）

A群にあり，第32号住居跡を切って重複している。平面形は縦長方形で，長軸6.1ｍ，短軸5.38mで，面積32,818㎡を測る。主柱穴は４本と思われる。主軸方向はN63°Wに取る。

カマド（図版43，第73図）北西壁中央部に設置されたA形態のものである。袖部は残っておらず，掘り方は長軸70cm，最大幅55cmを測る楕円形を呈している。ほぼ中央に火床面と思われる焼土層が検出できた。火床から奥壁にかけて土器片が少量出土した。



1．新Pit，黒色土
2．混黄色土粒・焼土粒，淡灰褐色土
3．黄色土
4．褐色土(撹乱土)
5．多混黄色土粒・焼土粒，灰褐色土
6．焼土層(火床)
7．暗褐色土(住居埋土)
8．暗灰褐色土塊―カマド焚口部のものか？
9．少混黄色土粒・焼土粒，暗褐色土
10．混焼土粒・炭化物，暗褐色土

第73図　第28・32号住居跡カマド実測図（1/30）

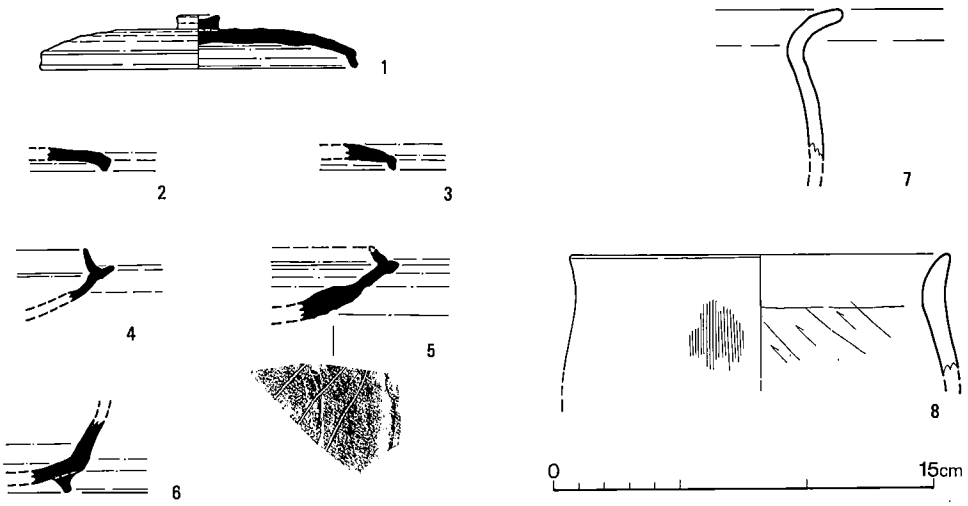
出土遺物（第74・75図）

須恵器

杯蓋（１～３）いずれも低い天井から下方に屈曲して鳥嘴状の口縁をなすものである。２は１・３に比して口縁部の屈曲弱く短い。１は天井部中央に中窪みの撮が付き，口縁部の屈曲は強く長い。１の推定口径12.6cmを測る。いずれも焼成良好で，色調は灰色を呈する。３は床下出土である。

杯身（４・５）４・５は蓋受部を有し，体部からいったん内に屈折し上方に反って立ち上がる口縁を成すものである。いずれも焼成良好で，色調は灰色～暗灰色を呈する。５の底部外面には「川」のヘラ記号が施されている。

高台付杯（６）底部から体部へ屈曲する部分よりやや内に高台が付く形態のものであり，高台はやや外に踏ん張



第 74 図　第28号住居跡出土土器実測図（1/3）

っている。焼成良好で，色調は黄灰色を呈している。

土師器

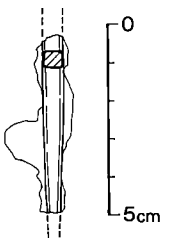
甕（７・８）７は張りの弱い胴部から頸部で強く外反する口縁をなすものである。調整は口頸部内外面をヨコナデ，胴部内面をヘラケズリしている。焼成良好で，色調は橙褐色を呈する。外面に煤付着している。８は張りのない胴部からそのまま僅かに外反する口縁をなす小型の甕である。推定口径15cmを測る。調整は口頸部内外面をヨコナデ，胴部内面を斜め方向のヘラケズリ，外面は縦方向のハケ目が施されている。

鉄製品（第75図）

長茎式鉄鏃の茎破片と考えられるが明確でない。残存長4.6cm，最大幅0.55cmを測る。床下出土である。

以上の出土遺物のうち，須恵器の１～３の蓋および６の高台付杯はほぼ８世紀中頃から後半に比定できるが，４・５の杯身は６世紀末から７世紀初頭頃に比定でき，両者に大きな時期差がある。土師器７・８は後者に近い時期のものである。更に，本住居跡の平面形が大型の縦長方形であり，カマドがA型態を呈する点などを考え合わせるならば，本住居跡の時期は６世紀末から７世紀初頭に置きたい。

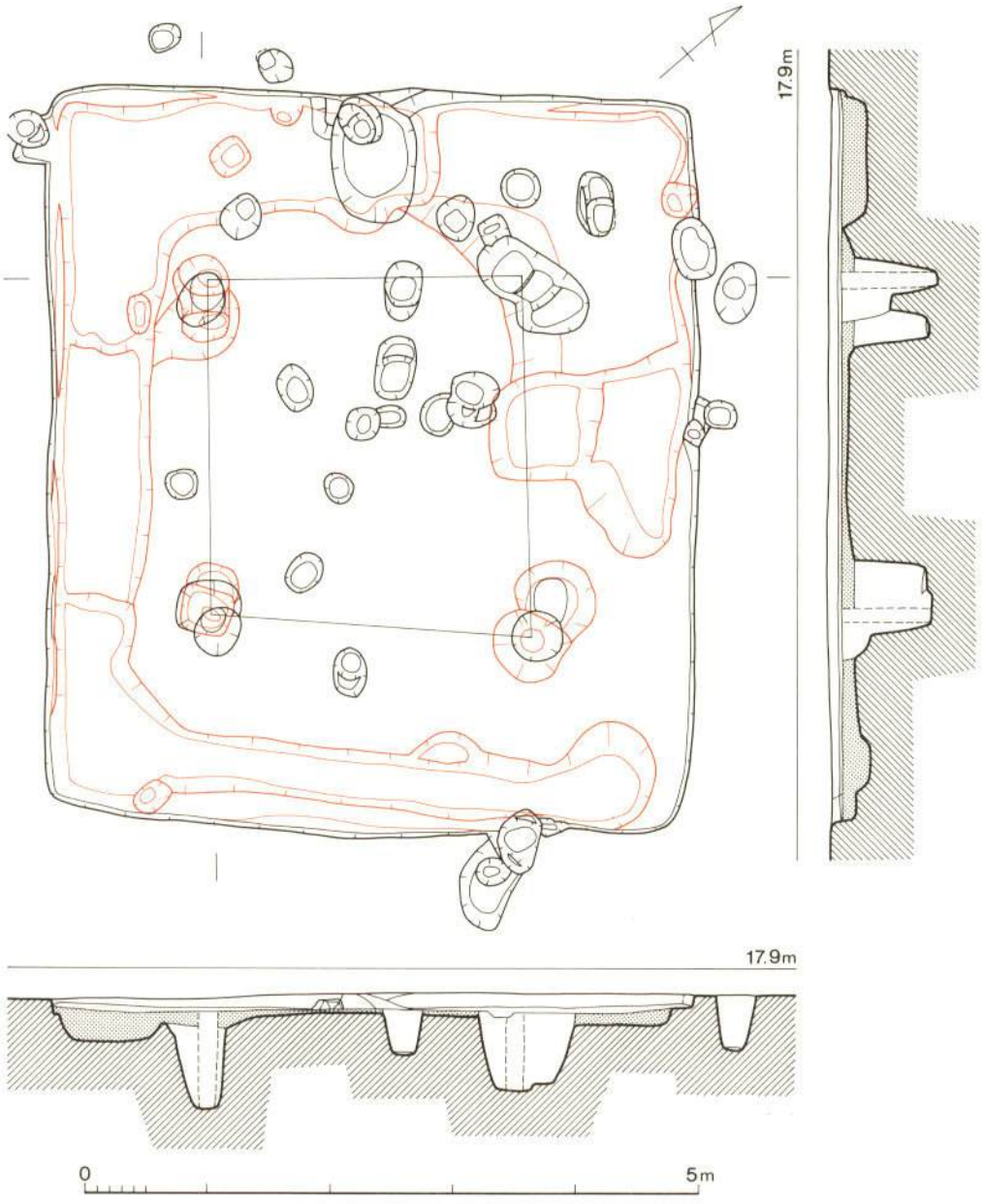
（森山）



第75図　第28号住居跡出土鉄器実測図（1/2）

第29号住居跡（図版44，第76図）

A群にあり，第28号住居跡の北東側に位置する。平面形は縦長方形で，長軸6.06m，短軸5.3mで，面積32.1㎡を測る。主柱穴は４本であるが，



第 76 図　第29号住居跡実測図（1/60）

最低１回以上の建替えがされたものと思われる。主軸方向はN49°Wに取る。

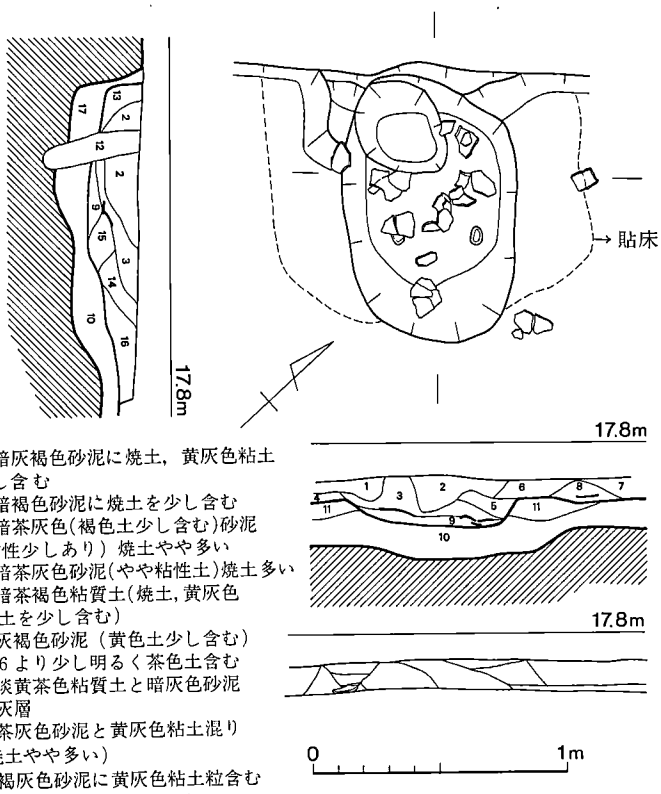
カマド（図版44，第77図）北西壁中央部に設置されたA形態のものである。両袖部は既に無く，基底部分の11層（黄灰色粘土粒を含む褐灰色砂泥）で，幅25～30cm・長さ80～95cmを測る。

掘り形は長さ110cm・幅70cmの楕円形を呈する。火床面は水平を成し，多くの土器片が散在していた。

出土遺物（第78図）

須恵器

杯身・蓋（1～3）1・2は杯の蓋・身いずれかにするか迷うが，あるいは3同様杯身にしても良いと思われる。1は天井から返り（立ち上がり）への屈曲が強い。推定口径9.4cm・器高2.7cmを測る。天井部外面に「メ」のヘラ記号を施している。2は天井から返り部にかけての体部がやや張りを持っており，1に比して深い。口径9.7cm・器高2.75cmを測る。天井部外面に3本線のヘラ記号を施している。3は床下出土の小片である。受け部に1条の沈線が巡っている。推定口径12.6cmを測り，1・2に比して大きい。



1．暗灰褐色砂泥に焼土，黄灰色粘土少し含む
2．暗褐色砂泥に焼土を少し含む
3．暗茶灰色(褐色土少し含む)砂泥（粘性少しあり）焼土やや多い
4．暗茶灰色砂泥(やや粘性土)焼土多い
5．暗茶褐色粘質土(焼土，黄灰色粘土を少し含む)
6．灰褐色砂泥（黄色土少し含む）
7．6より少し明るく茶色土含む
8．淡黄茶色粘質土と暗灰色砂泥
9．灰層
10．茶灰色砂泥と黄灰色粘土混り（焼土やや多い）
11．褐灰色砂泥に黄灰色粘土粒含む
12．新Pit，暗褐灰色(やや)粘質土（焼土少し含む）
13．暗茶灰色粘質土(焼土，黄灰色粘土含む)
14．13よりも焼土の量が少ない
15．焼土
16．黄灰色粘土(褐灰色砂泥少し混る)
17．淡茶灰色粘質土，暗灰色砂泥混り

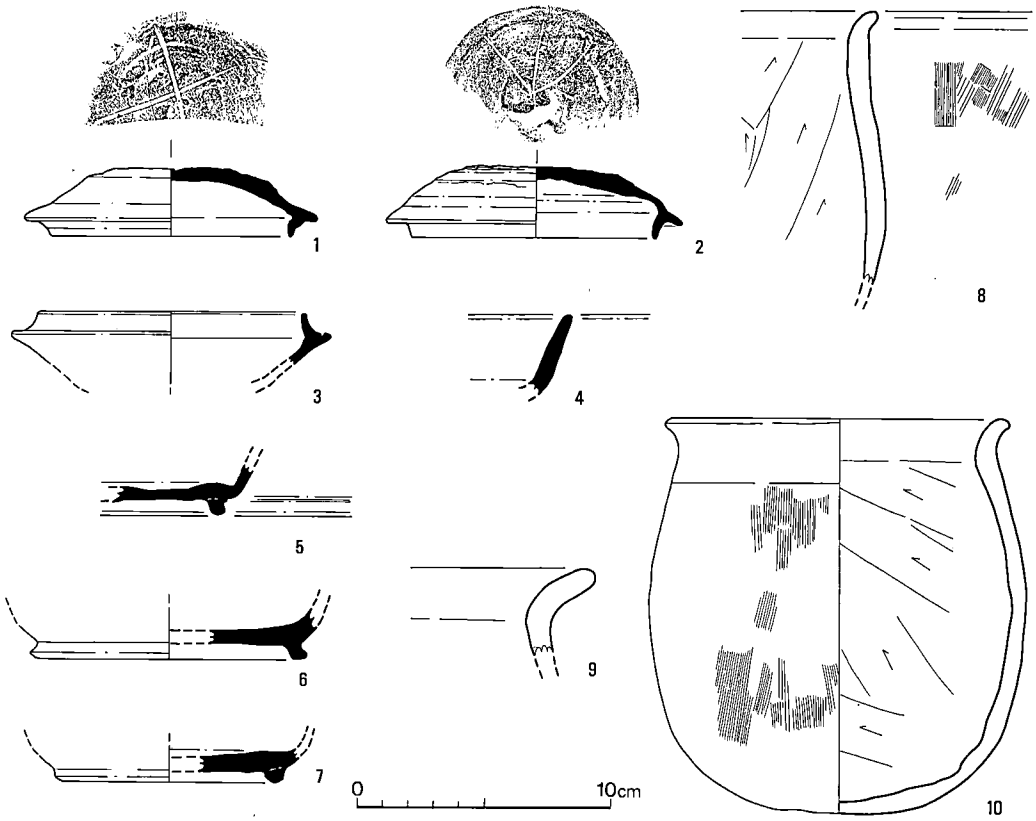
第77図
第29号住居跡カマド実測図
(1/30)

高台付杯（4～7）4は口辺部片だけであるが恐らく高台付杯と思われる。5の高台は体部の屈曲部からやや内側にある。6の高台は体部屈曲部分に位置し，外に踏ん張る形態を呈している。推定高台径11.0cmを測る。7の高台も体部屈曲部分に位置するが，短かい。推定高台径9.0cmを測る。

土師器

甕（8～10）10は小型の甕であるが，8・9は小片のため不明である。8・10の口頸部の屈曲は弱く，胴部の張りも弱い。9は頸部で強く屈曲して外反する形態を呈している。いずれの調整も，口頸部内外をヨコナデ，胴部内面を斜め方向のヘラケズリ，外面は縦方向のハケ目が施されている。10の底部外面はナデが施されている。10の推定口径13.6cm，器高16.3cm，胴部最大径14.9cmを測る。10の底部外面に黒斑，口縁部外面に煤の付着が認められる。

以上の出土遺物のうち，須恵器1～3の杯蓋身は6世紀末～7世紀初頭頃に比定できるが，



第 78 図　第29号住居跡出土土器実測図（1/3）

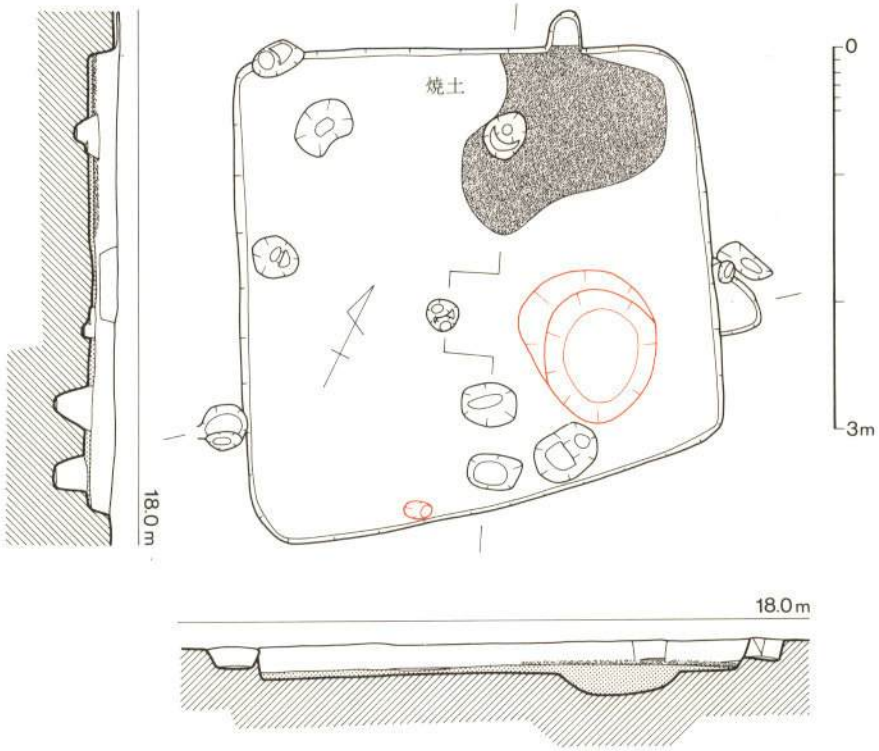
4 ～ 7 の高台付杯は 8 世紀後半に比定でき，第28号住居同様，出土遺物に大きく 2 つの時期が認められる。しかし，出土した土師器，住居跡の平面形およびカマドの形態など総合して考えると，本住居跡の時期も 6 世紀末から 7 世紀初頭頃に置いてよいものと考える。　（森山）

第30号住居跡（図版45，第79図）

B群の西北端に位置し，台形状プランに近い，いくらか小ぶりの不整方形住居となる。床面にはいくらか小ピットが散在するが，通有の 4 主柱穴配置は認められない。床面は，全体に貼床が施されるが，その下層の掘り込みは東隅一部にみられるだけである。

カマド（第79図）北西壁の北側へずっと片寄った位置に構築されたと考えられる。この北隅近くの床面に焼土が広く残存していた。カマドの本体及び袖等も全く残らない。

本住居跡は，やや小ぶりでもあり，床面主柱穴も明確でなく，カマドの位置も著しく片寄るなど，本遺跡中の規模の小さい住居の諸特徴を備えており，面積はともかくとして，本来的に



第 79 図　第30号住居跡実測図（1/60）

特殊目的の小型住居の類に包括されるべき遺構と考えられる。

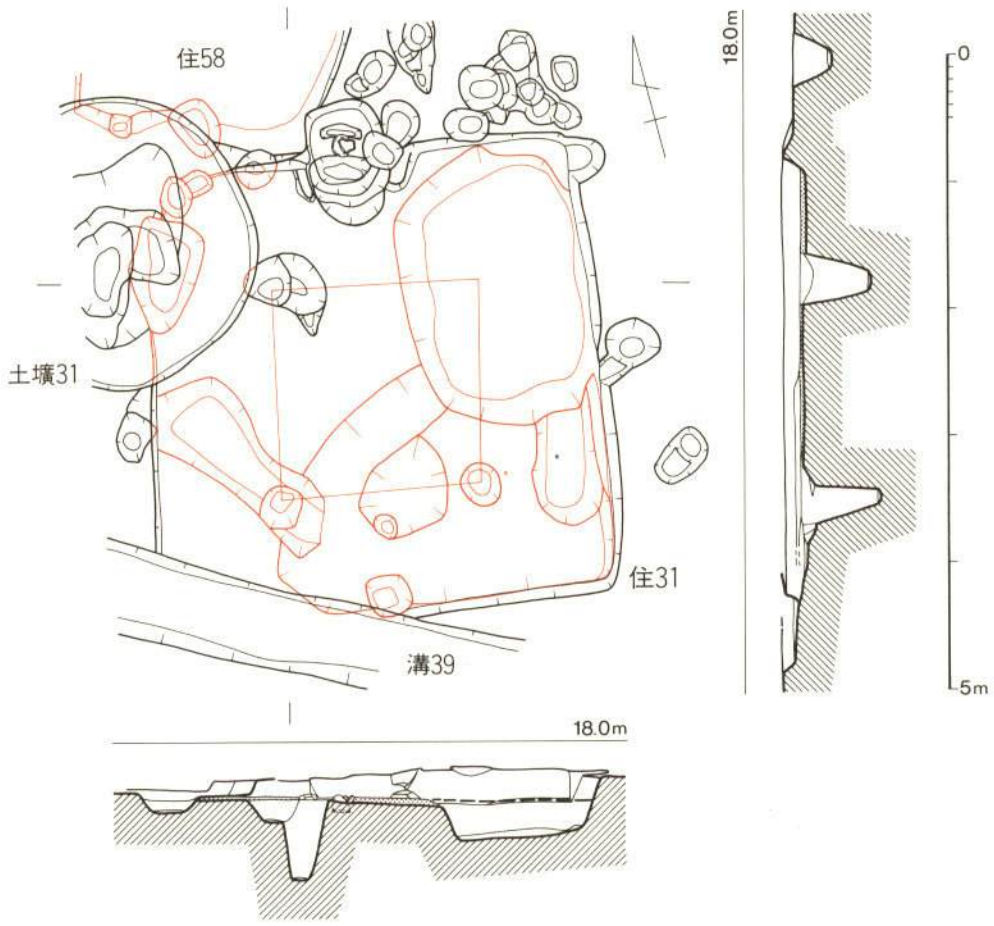
出土遺物は皆無で時期は決定できない。　（中間）

第31号住居跡（図版46，第80図）

B群とC群の中間に位置する住57・58・31と土壙30・31・56・57と第５号掘立柱建物の一群が，小支群を形成する。この支群は直線距離からするとB群により近いが，C・A群の如くその西に伸びる谷（薬師堂谷遺跡）に面して配置される点を考慮すると，この小支群はC群と関連するものかと推定される。よってここでは一応C′群として，以下述べる第31号住居跡もこの小支群として把えておく。

本住居跡は，第58号住居を切り，第31号土壙に北西隅を切られ，更に第39号溝に南西端を切られる。第39号溝は中世溝であり，第31号土壙は更に第58号土壙を切っている。以上を含めた付近の各遺構との切り合い関係は以下の通りである。（古→新）

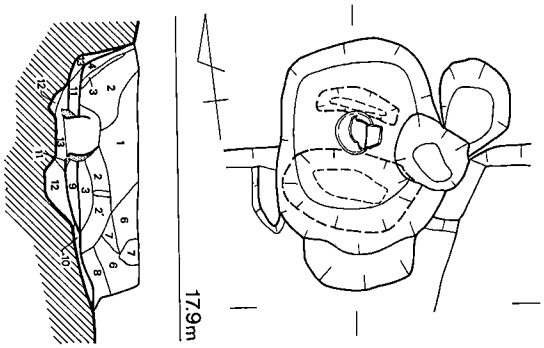
土壙57 → 住58 → 住31 → 土壙31 → 溝39
土壙57 → 土壙30 → 建物５ → 溝39



第 80 図　第31号住居跡実測図（1/60）

本第31号住居跡は 4 主柱穴を有し（北東の柱穴は未確認），北壁にカマドを付けるいくらか規模の小さい方形住居跡である。床面下層は，東壁沿いに大きな土壙状の掘り込み，東南側でも大きく浅い掘り込みが見られ，床面には貼床が施されている。

カマド（図版47，第81図）北壁のほぼ中央に設置されている。袖の残りは良くない。焚き口付近から燃焼部にかけて深さ20cmほど掘り込んで，その中に暗灰褐色粘質土を埋め込み，その上に土師器小甕を倒立させて支脚とする。支脚下半外面には黄色粘土を巻き，固定，強化している。土層断面から，天井部崩落土（黄色粘質土）が全体に観察でき，その内面は赤色に焼けている。最終使用火床自体も全体に浅く窪んでいる。支脚の位置が住居跡壁ラインより外側となり，カマド全体を壁外方へ大きく掘り込んだB類となる。

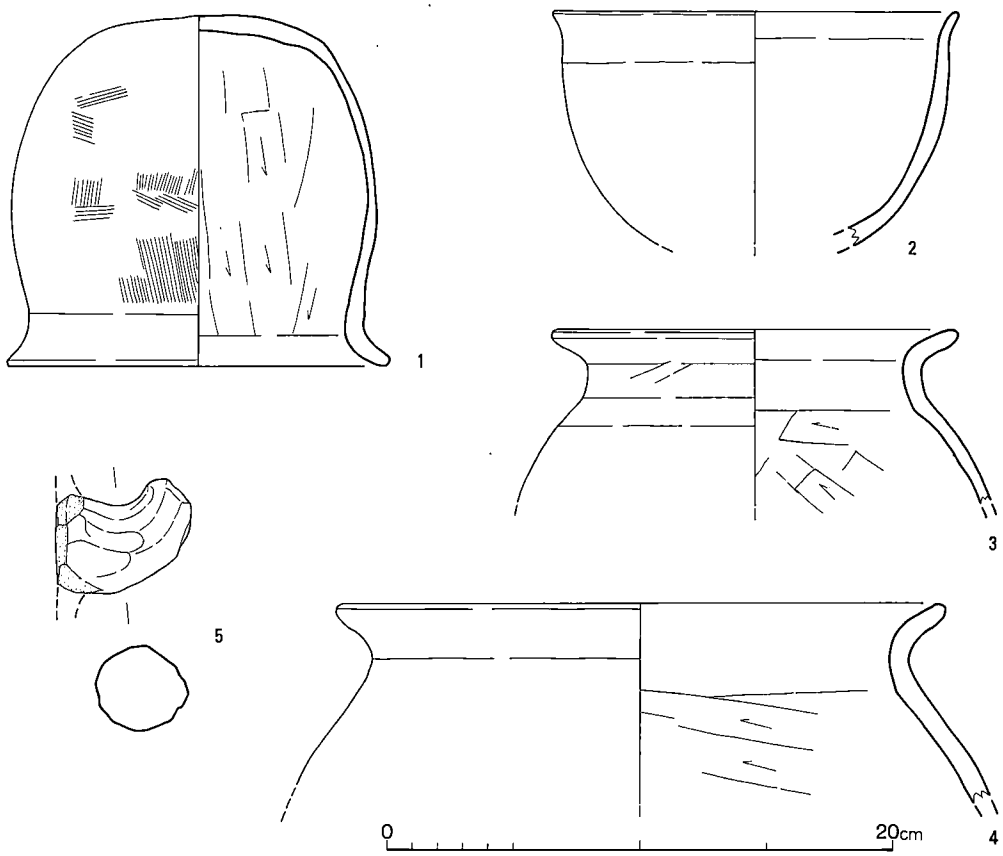


第 81 図
第31号住居跡
カマド実測図
(1/30)

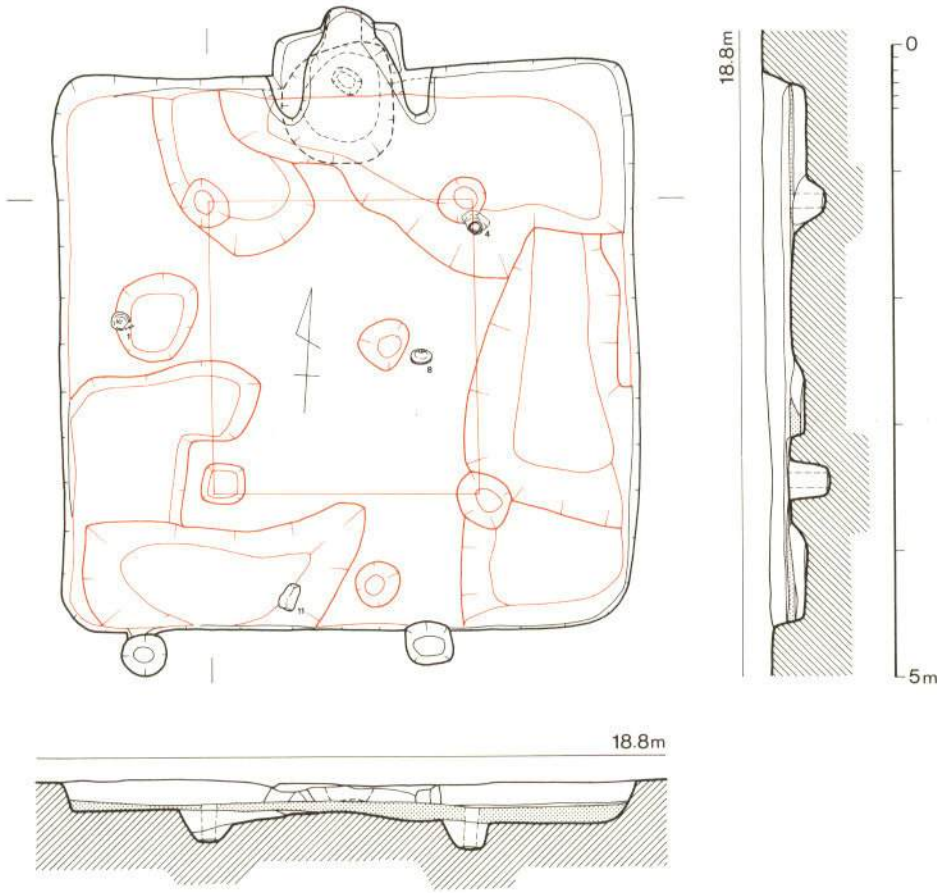
1．混黄色土粒・焼土粒・淡灰褐色土
2．黄色粘質土(天井崩壊部分)
2′．2の乱れたもの
3．2が熱で赤色に変化したもので天井内面
4．多混赤色(焼土塊)土塊黒色土，天井崩壊で生じた奥壁と天井のすきま
5．混焼土粒黄色粘土
6．少混黄色土粒黒色土
7．多混黄色土粒・焼土粒・淡灰褐色土，1に似るが6の一部
8．淡灰黄褐色土
9．赤色焼土(火床)
10．混焼土粒・炭化粒黄褐色粘質土（旧地山か灰かき出しの跡)
11．混焼土粒・黒色土（明確な火床としての焼土層ではないが，この面が底面と考えられる)
12．混焼土粒・黄色粘質土・暗灰褐色土
13．暗灰褐色粘質土(支脚の基礎部分)

出土遺物（第82図）

1は土師器小甕で，カマド内支脚として使用されたものである。口径15.2cm，器高13.8cmを測る。底部は内外面ともにナデている。2は，口径16cmの土師器鉢で，薄手の口縁は内外面横ナデ，胴部内外面は丁寧にナデている。胎土



第 82 図　第31号住居跡出土土器実測図（1/3)



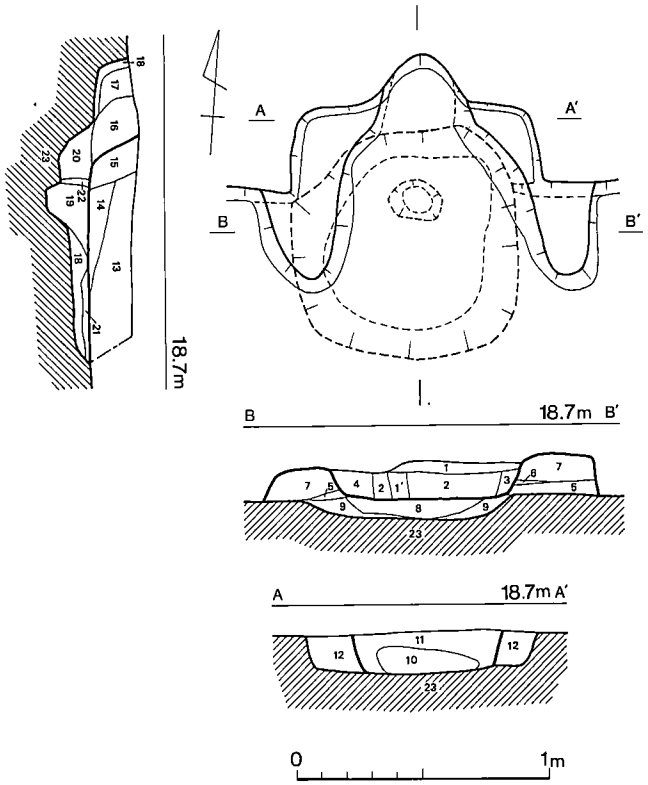
第 83 図　第33号住居跡実測図（1/60）

はわりと精良で，外面には黒斑部がみられる。３は頸部から２段に屈折して開く口縁となる。口径16cmの土師器甕で，全体に薄手である。４は，口径24cmの胴が強く張る甕で，外面は磨滅しており，調整不明である。５は土師器甕の把手で，短かい小型類である。

以上の土器のうち，１はカマド支脚として利用され，３・４は床面４主柱穴のうちのP.１内から出土したものである。３・４は６世紀後半～７世紀初頭代のもので，当住居の上限を示すものと考えられる。１もそう新しいものではなく，少なくとも７世紀中頃以前と考えられることから，この第31号住居跡は７世紀前葉を前後する時期に営まれたものと判断できよう。(中間)

第32号住居跡（図版43，第72図）

A群にあり，第28号住居跡にその大部分を切られており，あたかも第28号住居跡がそのまま



1．黒色土(若干黒褐色粘質土混る)
1'．淡黒茶色土(撹乱土)
2．赤褐色土(焼土塊多量)天井部の壁面が落下したもの
3．黒茶色に少し淡黒褐色土を含む（焼土含む)
4．1に同じ
5．黄灰色粘土
6．黒色土(真黒)
7．黒褐色粘質土
8．5＋黒灰色土(焼土・炭混入)
9．黄灰色粘土に若干炭化物焼土混入
10．黒灰茶色粘質土(焼土・炭を少量含む)
11．黒茶色粘質土(焼土含む)
12．黒褐灰色粘質土
13．黒色粘質土(焼土を含む)
14．赤褐色粘質土(焼土塊を含む)
15．2に同じであるが黒茶色粘質土を含む（焼土含む)
16．茶灰色粘土
17．黒褐色粘土(焼土含む)
18．黄灰色粘土
19．暗黒褐灰色粘質土(支脚の掘り込み)
20．黒色土に黒褐色粘質土が混る
21．黒灰色土(若干焼土・炭を混入)
22．黄灰色粘質土(支脚の裏込め)
23．地山(黄色粘質土)

第 84 図　第33号住居跡カマド実測図（1/30)

南東側にスライドして建替えられた感を受ける。平面形は縦長方形かと思うが不明であり，短軸5.2ｍを測る。主柱穴は4本かと考えるが，東・南側の2本は検出できなかった。主軸方向はN63°Wに取る。

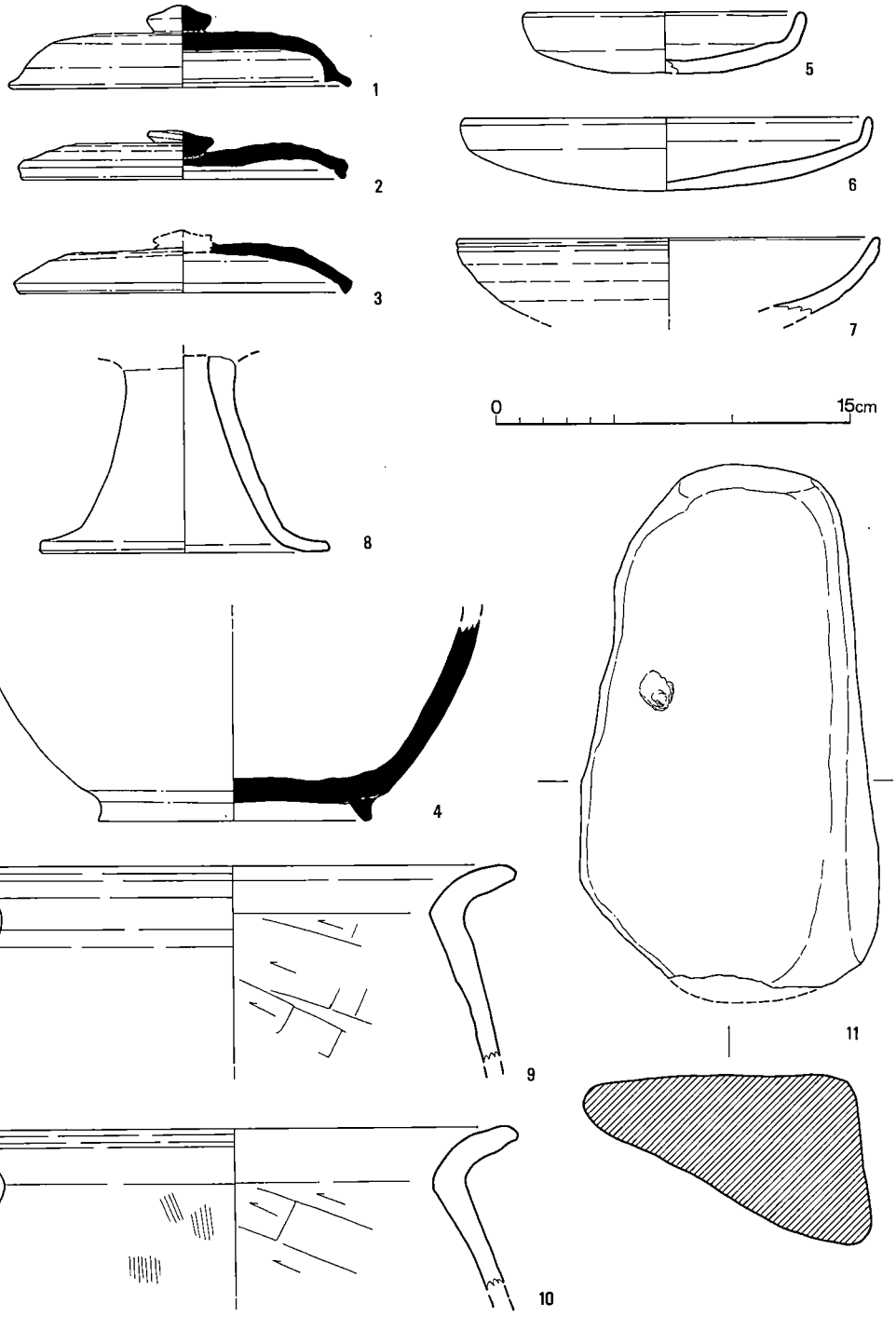
カマド（図版43，第72図）北西壁中央部に設置されたA形態のものと考えられる。掘り形しか残っておらず，南東側も第28号住居跡に切られており，その全容は不明である。

出土遺物無く，本住居跡の時期を明確にし得ないが，第28号住居跡との重複状況を考えた場合，本住居跡も第28号住居跡と大差無い時期と考えたい。（森山）

第33号住居跡（図版47，第83図）

G群の東寄りに位置し，本遺跡竪穴住居跡のうちで最東端のものとなる。これより東側は当時の生活面が緩やかに下がり，浅く幅広い谷状を呈し，集落遺構は存在しない。

床面に4主柱穴を有する，やや大きめの方形住居跡である。床面下の掘り込みは，北壁～東壁沿いと南西隅付近に大きく検出されたが，中央部には認められない。



第 85 図　第33号住居跡出土土器・石器実測図 (1/3)

床面直上からは須恵器杯，蓋類が出土しており，床直出土の遺物が少ない当遺跡の住居跡の状況からして，住居跡の時期を知り得る稀少な例となる。

カマド（図版48，第84図）北壁の中央に，壁を外方に掘り込んで設置され，煙道部へと続く小さな凹部が残存することから，C類となろう。壁の掘り込み幅1m近くもある大型のカマドで，燃焼部全体に10cmほど掘り込んでおり，その中央に支脚を設置したと思われる掘り込みを有する。支脚はその形跡から，土師器小甕を倒立させて転用したものではなく，柱状の石材を立てていたものかと思われる。これは，支脚の支持土（支脚を巻いていた土）と思われる土層No.22(黄灰色粘質土層）の存在からも積極的に支持し得るところである。カマド袖は，黒褐色粘質土を主に用いて構築している。

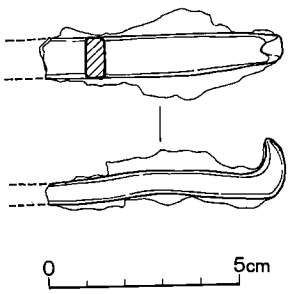
出土遺物（第85図）

1は須恵器杯蓋で，床面直上出土品である。短かいかえりを付け，高い擬宝珠つまみを有する。かえり端部径12.2cm，器高3.5cmを測り，天井外面には回転ヘラ削りを施す。2は，口径13.7cm，器高2cmを測る須恵器杯蓋である。全体に焼き歪みが著しく，天井が低くなっている。天井外面は回転ヘラ削りを施している。3は，口径14.1cmを測り，端部は短かいがシャープであり，上面はナデており，その周縁に僅かに回転ヘラ削り痕が残る。4は須恵器壺底部であるが，明橙色をなす生焼け品で，著しく磨滅している。内面は横ナデと思われる。床面直上出土品である。5は，口径11.6cmの土師器杯の小型品で，底外面は手持ちのヘラ削りと思われる。6は床面下出土品で，口径17.4cm，器高3.1cmを測る。内外面ともに磨滅している。7は，口径18cmを測る土師質焼成杯で，口縁付近には黒斑もみられる。しかし体部外面中途は回転ヘラ削りが施され，端部外面には浅い沈線もあり，蓋の可能性もある。8は土師器高杯で，脚端径12.3cmを測る。床面直上出土品である。9・10は土師器甕で，内面にシャープな稜をつくり，強く折れて開く口縁となる。孰れも口径24cmを測る。

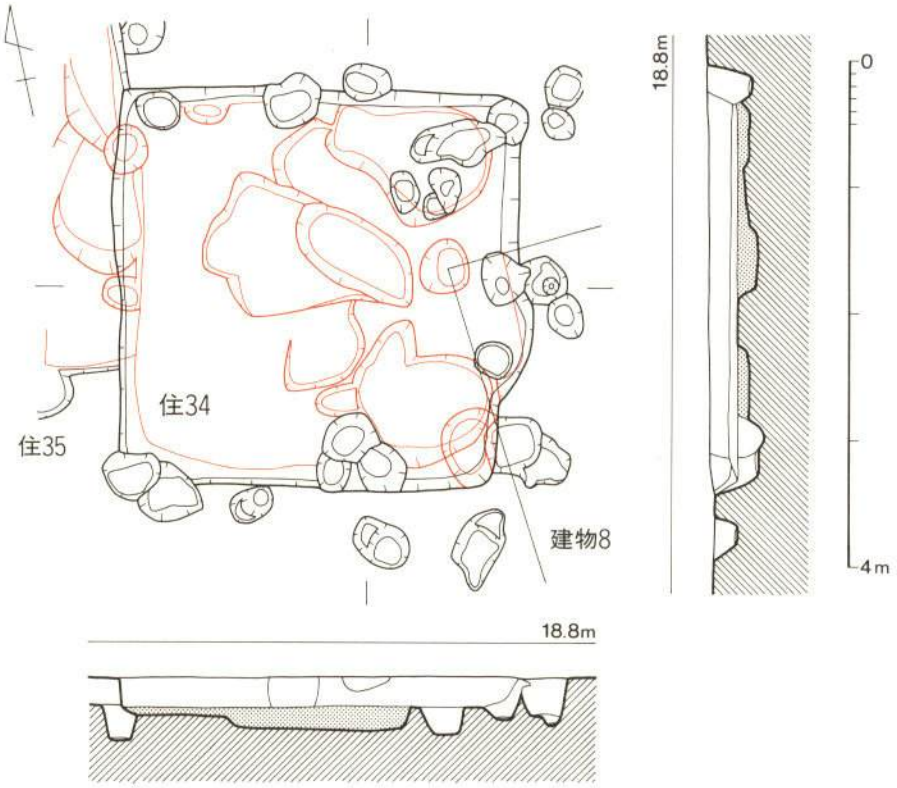
11は，床面直上に置かれていた台石状の河原石である。灰白色に表面が風化しており，玄武岩のようである。上面が一応平らな磨面となっており，作業台として使用されたものと考えられる。砥石ではない。

第86図は鉄製品で，幅1.1cm，厚さ0.5cmの鉄棒の先端を細く尖らせて，直角に曲げたものである。かすがいのような形状であるが，用途は定かではない。

以上の出土遺物のうち，1・4・8・11が床面直上出土品であり，それらは7世紀後葉代の所産である。また，床面下層出土の6もその時期を示している。次に2・3や9・10などは，8世紀前葉段階まで下がる時期のもので，この住居出土遺物は2時期に大きく分かれている。ここでは，



第86図　第33号住居跡出土鉄器実測図　(1/2)



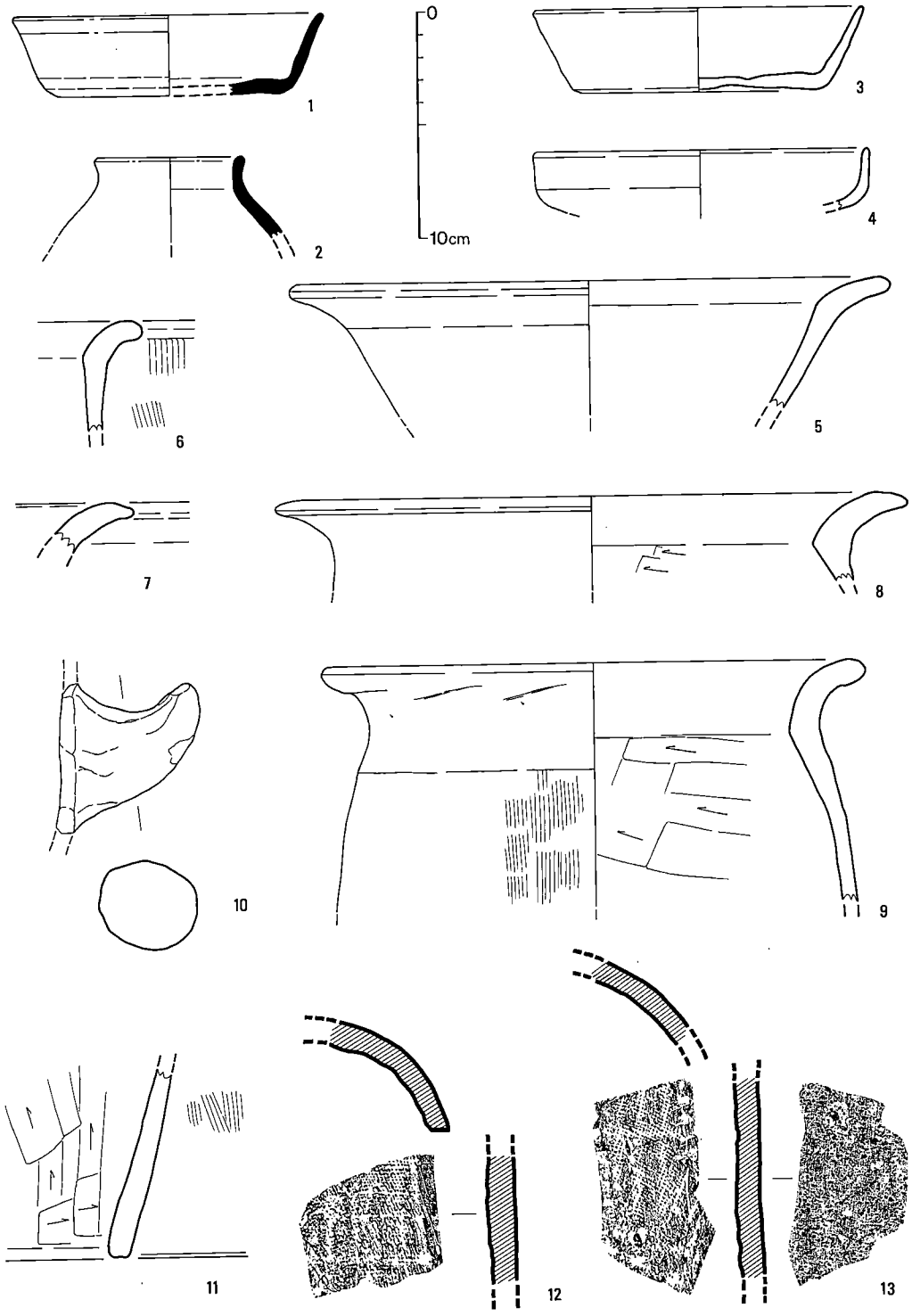
第 87 図　第34号住居跡実測図（1/60）

床面出土のものを尊重して，この第33号住居跡は７世紀後葉に営まれたものであり，廃棄・埋没段階で８世紀前葉の土器が投棄せられたものと解釈しておきたい。　（中間）

第34号住居跡（図版49，第87図）

G群の南寄り中央に位置し，第34号住居跡と第８号掘立柱建物を切る。 9.6㎡しかない小型方形住居跡である。床面上の通有の４主柱穴は認められず，或いは４隅の４柱穴，又は各壁ラインの中央部で各々重複する柱穴を加えた８柱穴がこの住居跡の上屋構造を支える柱穴配置となるかとも考えられる。それらの各々の柱間距離は1.2乃至1.75mとなろう。床面下層は中央部と北東寄り，南東寄りとが掘り込まれている。カマドはいずれの壁際にも認められず，床面における焼土分布もみられないことから，その設置はおそらく当初から計画されなかったものと考えられる。

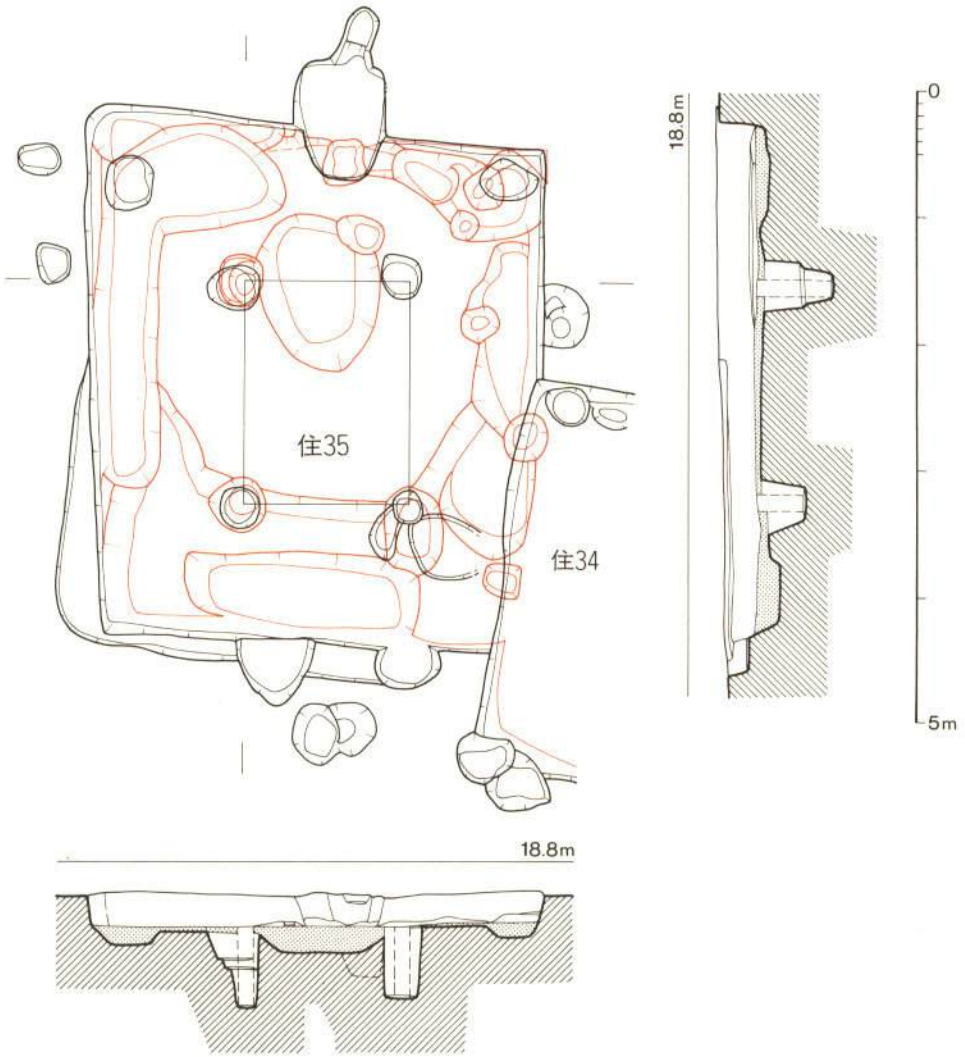
以上のことから，小型で，主柱穴も通有の４主柱穴を有せず，カマドも設置されなかったという，特殊な性格の『方形竪穴住居跡状遺構』であると判断される類である。



第 88 図　第34号住居跡出土土器・瓦実測図 (1/3)

出土遺物（第88図）

1は，須恵器杯で口径13.7cm，器高3.5cmを測る。体部外面下端から底外面にかけては回転ヘラ削りを施す。2は須恵器短頸壺で，外面は灰かぶりしている。口径6.6cmの小型品で，胎土精良である。3は土師器杯で，口径14.6cm，器高3.6cmを測る。体部は内外面横ナデで，やや外傾する。4は口径14.9cmの土師器杯で，体部下半は手持ちヘラ削りと思われる。5は土師器鉢で，口径26.6cmを測り，外面には煤が付着する。胴部外面にはハケ目調整を施している。6は胴の張らない土師器甕片で内面には煤が付着している。7は土師器甕或いは鉢の口縁で，



第 89 図　第35号住居跡実測図（1/60）

床面下出土品である。8は頸内面でシャープな稜をつくり，強く外反して開く口縁となる。口径28cmの土師器甕である。外面には煤が付着している。9は，口径24cmを測り，頸部内面に稜をつくり，長く外反して開く類である。10は土師器甕の把手部分で，断面は丸くなる。11は土師器甑の底部片で，下端周縁は横ナデ調整を行い，黒色変している。

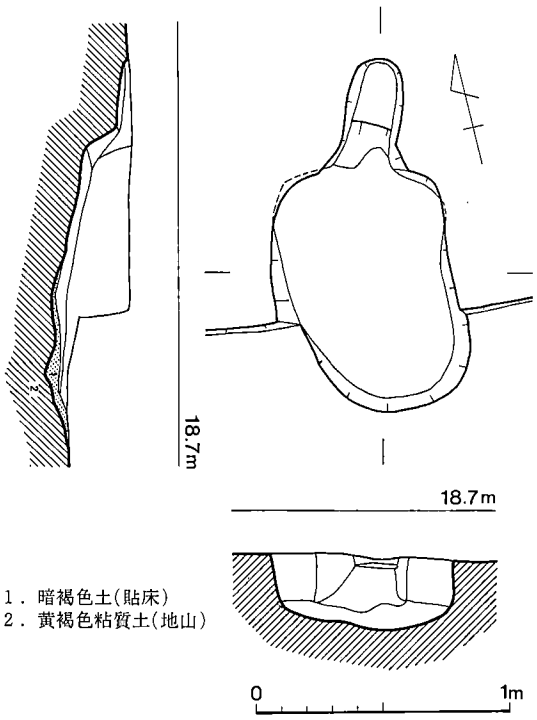
12・13は丸瓦片である。12の凸面は縦方向にナデており，凹面には横方向のタガ或いはスノコ状模骨を縛った紐圧痕がみられる。13は床面下出土品で，12と同一個体と思われる。

以上の出土遺物は，8世紀後葉の所産で，それも中頃に近い時期のものと考えられる。それは，当住居跡に切られる第8号掘立柱建物が8世紀中頃に比定されていることとも矛盾していない。（中間）

第35号住居跡（図版49，第89図）

G群の中央に位置し，第34号住居に切られる。床面に4主柱穴を有する縦長となる方形住居跡である。4主柱穴の配置も一尺分ほど縦長となるタイプである。南西隅付近に本住居掘り方より一段高い掘り込みが認められるが，主柱穴自体は動いていないことから，拡張的な事業が行なわれたとは考え難く，当初からの壁外方使用スペースを有したものと判断したい。床面は全体に貼床が認められ，壁沿いの四周に床面下層の掘り込みが行なわれている。中央部のカマド寄りの部分にも掘り込みがみられる。

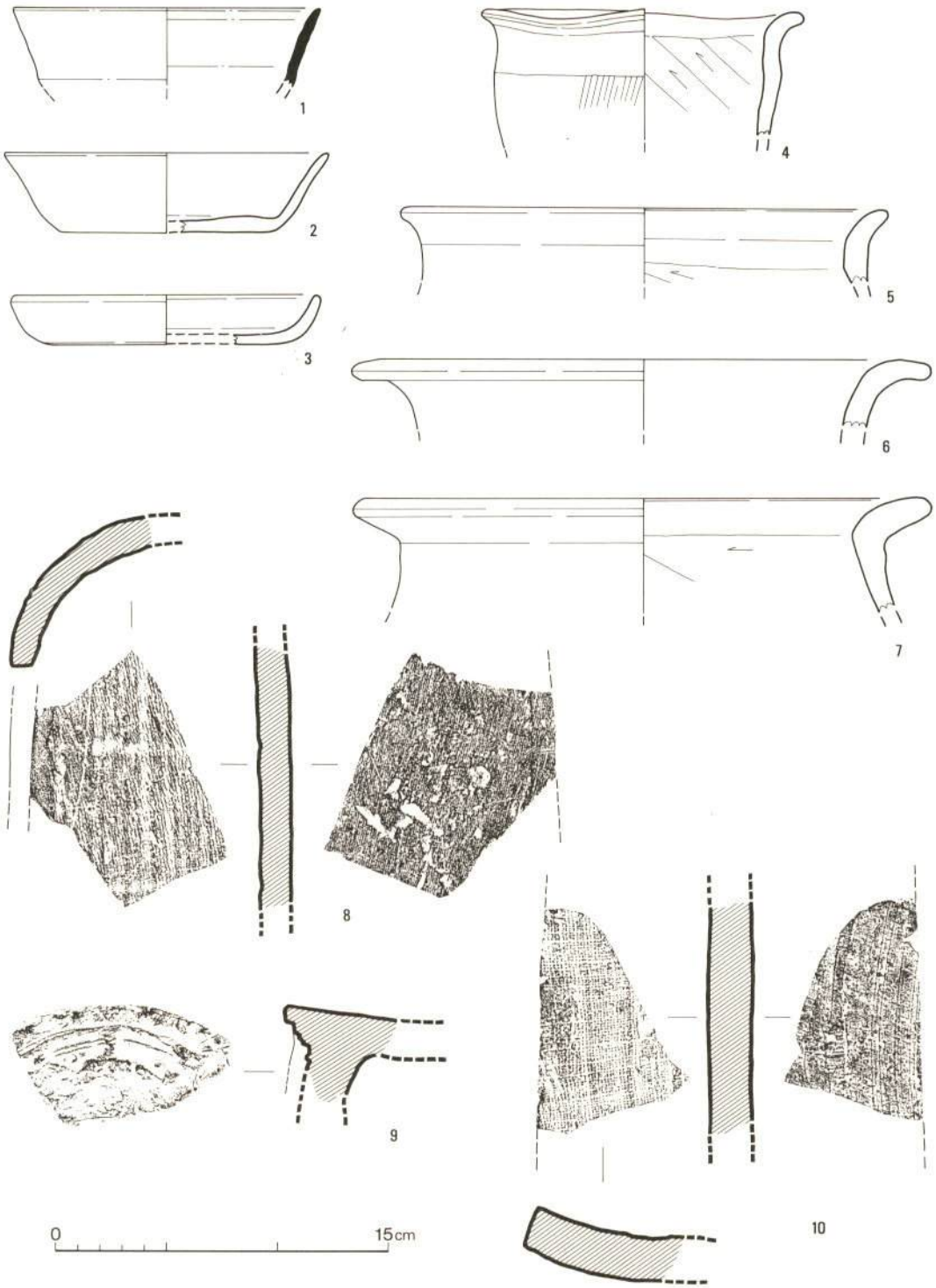
カマド（図版50，第90図）北壁のほぼ中央部に設置されたと考えられるが，袖部等の本体は殆んど残らない。焚口部から燃焼部にかけて地山の掘り込みがみられ，その上に貼り床が施され，最終火床面も全体に浅く窪んでいる。住居跡壁ラインより外方へ60cmほど大きく掘り込まれており，その更に外側へ煙道部がいくらか残存している。



第90図　第35号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（第91図）

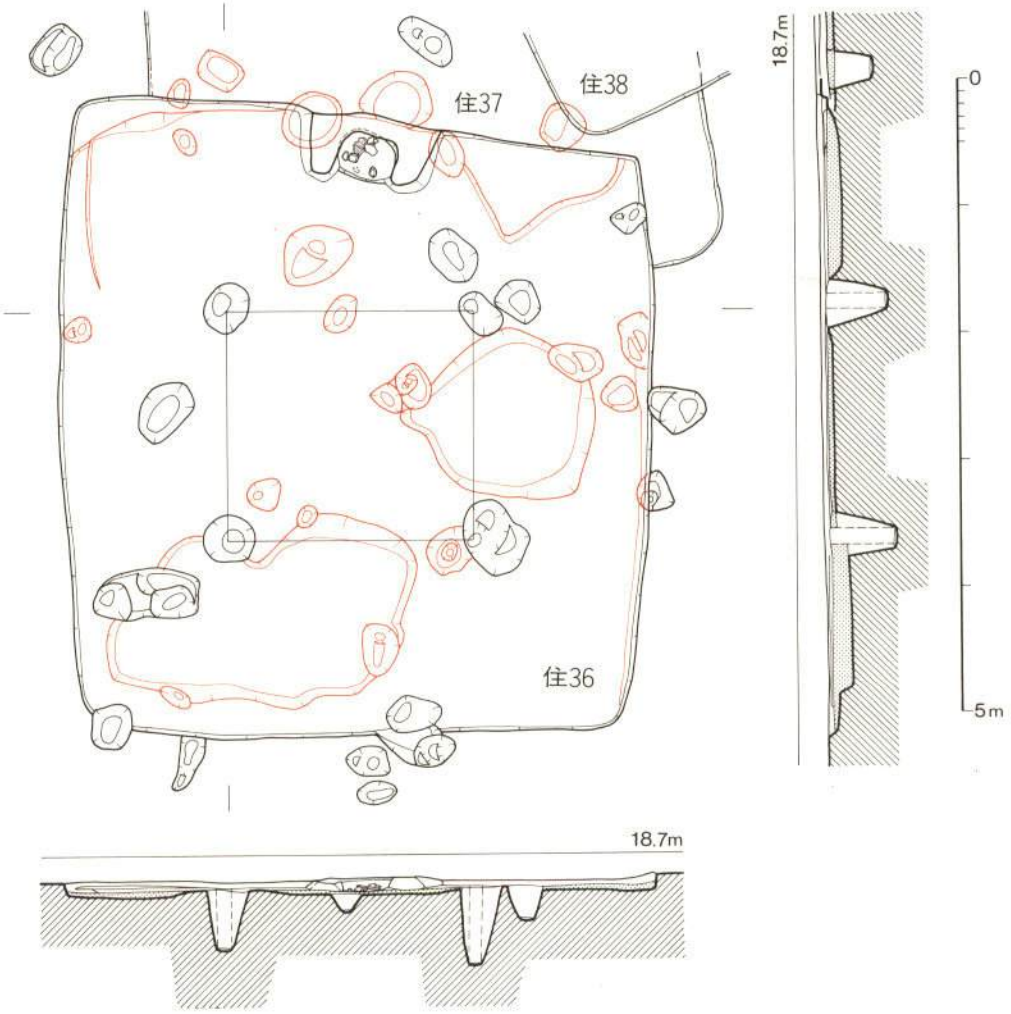
1は，須恵器杯身で，復原口径13



第 91 図　第35号住居跡出土土器・瓦実測図（1/3）

.8cmを測り，内外面ともに横ナデを施す。７世紀後葉でも中頃に近いタイプである。２は土師器杯で，口径14.6cm，器高3.6㎝を測る。床面下出土品で，体部が大きく開き，底外面は回転方向のヘラ削りと思われる。８世紀後葉の所産である。３は口径14cm，器高2.2㎝の浅い皿状の形態となる。底外面はヘラ削りしている。４はカマド内出土の土師器小甕で，口径14.5cmを測る。外面には黒斑が付く。５は口径21.8cmの土師器甕で，カマド内出土品である。６は頸部で肥厚せず大きく屈曲して開く類となる。口径26cmで，口縁内外面には煤が付着する。７は頸内側で稜をなし，強く折れて開く口縁となる。口径26cmを測り，胴外面はナデている。

８は丸瓦片で，凸面は丁寧な縦方向のナデ，凹面は縦位のスノコ状模骨とそれを横方向に縛



第 92 図　第36号住居跡実測図（1/60）

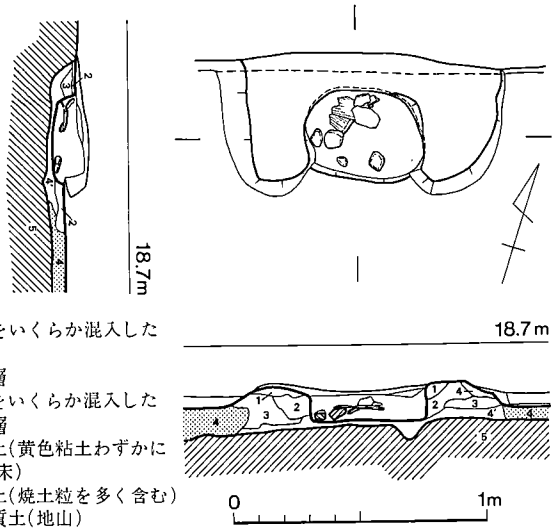
る紐の圧痕がみられる。側面際の両面縁ともにヘラ削りを施している。9は軒丸瓦で，小片であるため詳細はわからないが，単弁六葉の退化形式と思われる。弁の外側両方に小さな潰れかかったような珠文が配置されている。胎土に石英・長石粒を多く含み，焼成はやや軟質で淡灰色をなす。10はカマド内出土の平瓦片で，凸面は板状工具による縦ナデ風の擦過痕がみられ，凹面は布目が明瞭で一部に縦方向模骨圧痕がみられる。側面はヘラ切りが施されている。

以上の出土遺物は，7世紀後葉代から8世紀後葉代までのものを含んでいる。ただし，当住居跡は8世紀の中頃に近い後葉代とした第34号住居跡に明らかに切られているのであり，より古くなければならない。よってこの第35号住居跡の営まれた年代は，カマド出土の4・5・10から見る限り，7世紀後葉段階とされよう。ただし，2は床面下出土品として取り上げており，3とともに，8世紀後葉の所産であり，大きな矛盾を感じる。（中間）

第36号住居跡（図版50，第92図）

G群の北西部寄りに位置し，第37号住居跡を切る。第38号住居跡とは北側で隣接するが両者は上屋構造を考慮する時，同時併存は考え難い。わずかに横長の4主柱穴配置となり，どちらかというと大型の規模に属する方形住居である。床面下は西南隅寄りと，東壁寄りに部分的に掘り込みが認められ，全体に貼り床を施している。

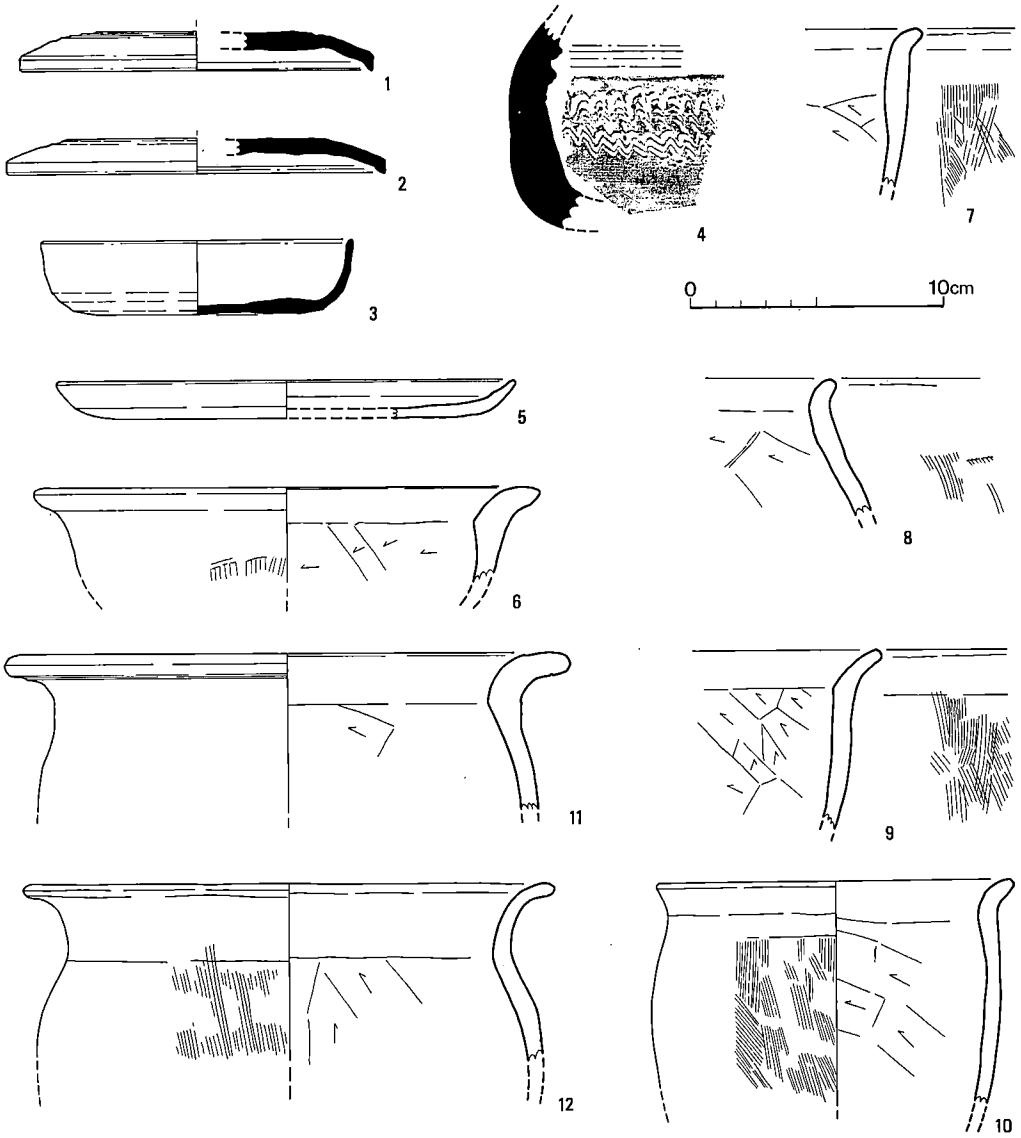
カマド（図版51，第93図）北西壁の中央に設置され，壁ラインより極く僅かに外方に掘り込むが，大勢としては住居壁内側で設置されるA類のカマドとなる。両袖の残りは良好で，黄色粘土を基本とした構築である。燃焼部は地山を掘り窪めており，最終火床面も全体に浅く窪んでいる。燃焼部内部には，拳大の礫3点が置かれ，支脚として使用されたと推定される土師器甕の破片が散在する。燃焼部外壁側上面は赤色に焼けており，本来煙道へと続く構造であったことが想定される。



第93図　第36号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（第94図）

1は須恵器杯蓋で，口径14cmを測る。天井外面は回転ヘラ削りの上を部分的に横ナデしている。2も口径15cmの須恵器杯蓋で1と同工である。3は全体に薄手の須恵器杯で，口径12.3cm，



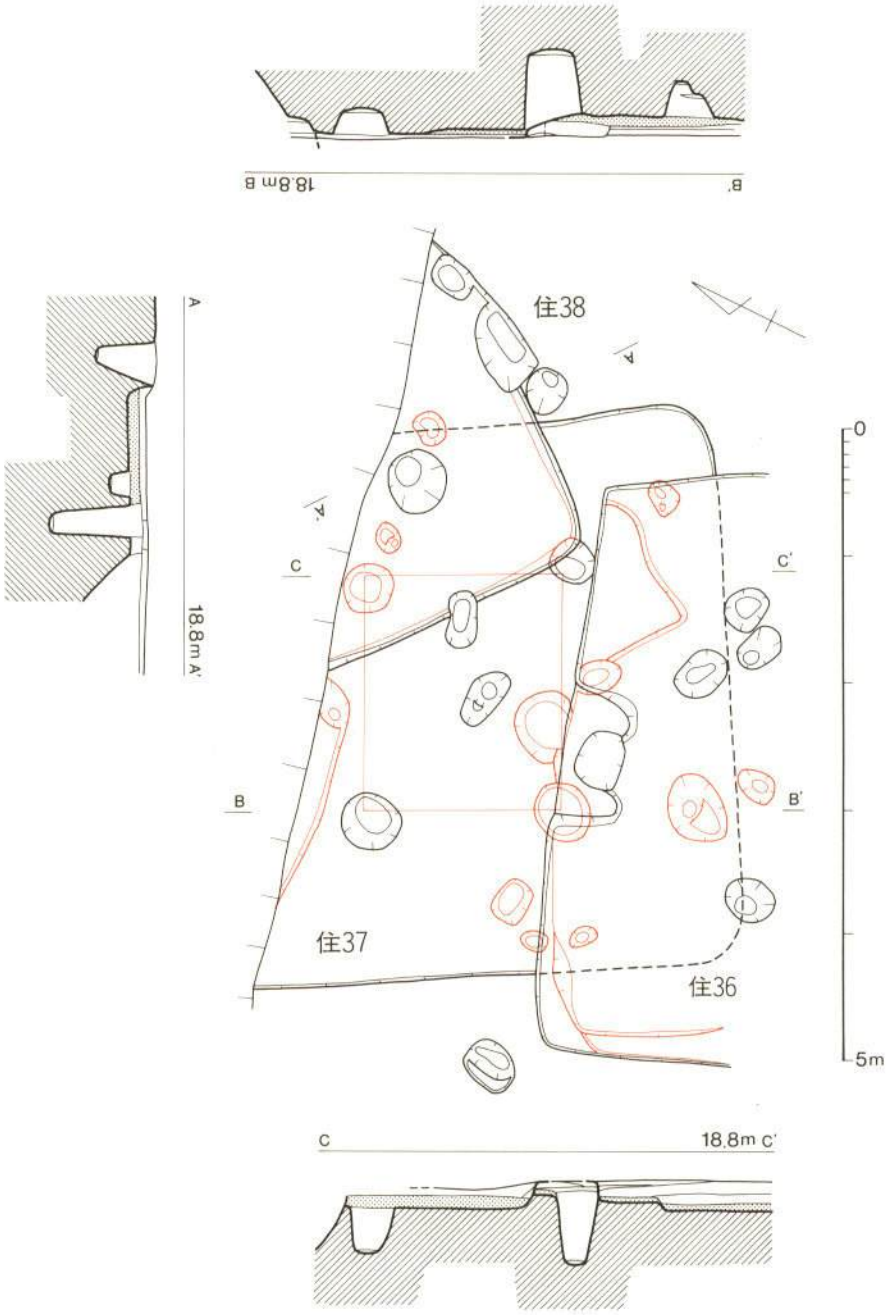
第 94 図　第36号住居跡出土土器実測図（1/3）

器高 2.9 cmを測る。体部外面下端は回転ヘラ削りで，底外面はその上をナデている。４は，須恵器甕頸部片で，２条の三角凸帯の下に稚拙な櫛描波状文を施している。５は口径18.1cmの土師器皿で，全体に磨滅している。６は土師器鉢で口径20cmの小型品である。７は短かく折れる小さな口縁となる土師器小甕である。８はやや胴が張るタイプとなる。９はカマド内出土の小甕片で，胴は張らず，内外面ともに煤が付着している。10はカマド支脚に使用された小甕で，口径14.1cmを測る。11は口径22.4cmの土師器甕で，内外面に煤が付着している。12は口頸部で

肥厚せず，長く延びて開く口縁となる。口径21cmを測る。

以上の出土土器から，この第36号住居跡の営まれた年代は，８世紀前葉期と考えられる。

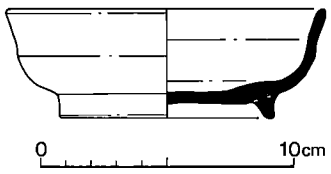
（中間）



第 95 図　第37・38号住居跡実測図（1/60）

第37号住居跡（図版50，第95図）

G群の本来北側へ延びると推定される集落群の西南寄りの部分に位置する。第36号住居跡に南端を切られ，第38号住居跡に東側を切られる。北半は路線外となり，その全容は明らかではない。床面に通有の4主柱穴を有すると思われる中規模の方形住居跡と考えられる。



第96図　第37号住居跡出土土器実測図　(1/3)

カマドは北東，南東，南西いずれの壁際にもみられず，おそらく路線外となる北西壁中央に設置されたものと考えられる。床面の貼床は薄く，床面下層の掘り込みは北西壁沿いに僅かにみられる程度である。

出土遺物（第96図）

須恵器杯身1点のみである。口径12.7cm，器高4.3cm，高台径8.5cmを測る。体部は内外面ともに横ナデ調整を施し，底外面は灰かぶりしている。

この土器はその器形の特徴から，7世紀の中頃に近い後葉期の所産と考えられ，この第37号住居跡の営まれた時期を示すものであろう。　（中間）

第38号住居跡（図版50，第95図）

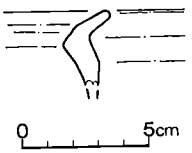
G群の今回調査分の北端にて検出され，その北側の大部分は側溝工事にて既に破壊され，更に路線外となる。4主柱穴の1つになると思われる南隅の1柱穴が認められており，それから想像するに，床面積18㎡前後と考えられる中規模の方形住居跡が考えられる。カマドの位置も周辺の状況から，恐らく北西壁中央部となろう。

床面は全体に8cm前後のやや厚い貼床が施されている。

出土遺物（第97図）

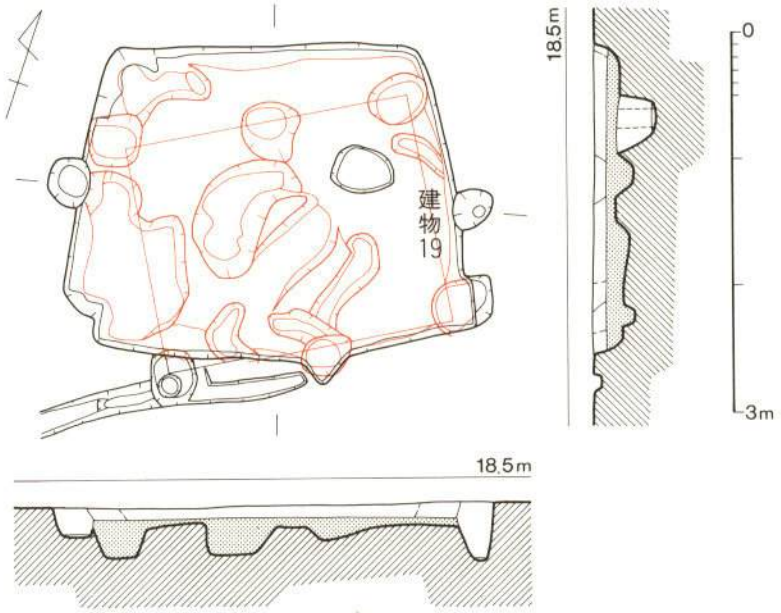
土師器小甕小片である。内外面ともに磨滅しており，調整は不明である。頸部内面で稜をつくり，短かく外反する口縁となる。

この小片のみからの時期決定は困難であるが，7世紀後葉の第37号住居跡を切っていることから，それを上限と考えることができる。更に，第36号住居跡と接しており両者併存は考え難いことから，8世紀前葉代では無いと思われる。上記小甕片は少くとも8世紀中頃以降の所産とは考えられない。そうすると7世紀末～8世紀初頭前後の年代しか考えられず，これが第38号住居跡の営まれた時期と思われる。



第97図　第38号住居跡出土土器実測図　(1/3)

（中間）

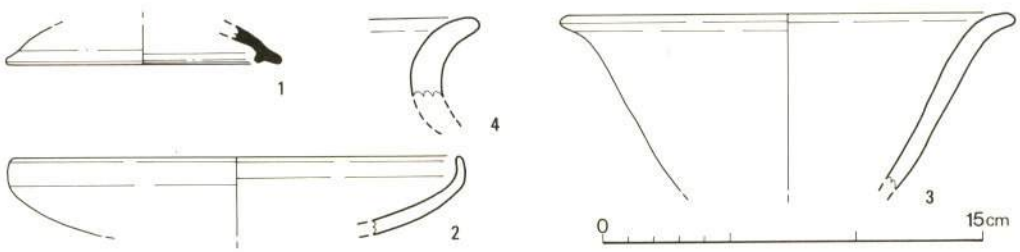


第 98 図　第39号住居跡実測図（1/60）

第39号住居跡（図版51，第98図）

E群の北端に位置し，この群本来の中心部よりややかけ離れて営まれる。床面積が6.6㎡しかなく，第３号住居跡と並ぶ特小型の横長台形プランを呈する特殊遺構である。床面下は全体にかなり凹凸著しい掘り込みを行なっており，その貼り床下から１×２間の第19号掘立柱建物を検出した。当初この住居跡自体の主柱穴が明確でなかったため，第19号掘立柱建物とした柱穴配置が本住居に伴う柱穴となるかとも考えたが，この遺構の西側に同規模・同構造の第10号掘立柱建物が検出されて，両者が対となることが判明したため，本住居跡と第19号掘立柱建物とは別物であると判断し得た次第である。

本住居跡にはカマドは設置されていない。このような特小型住居跡（状遺構）に共通する，



第 99 図　第39号住居跡出土土器実測図（1/3）

主柱穴不明，カマドなしの状況は，本遺跡において特殊な用途を考える小遺構として位置付けられる。

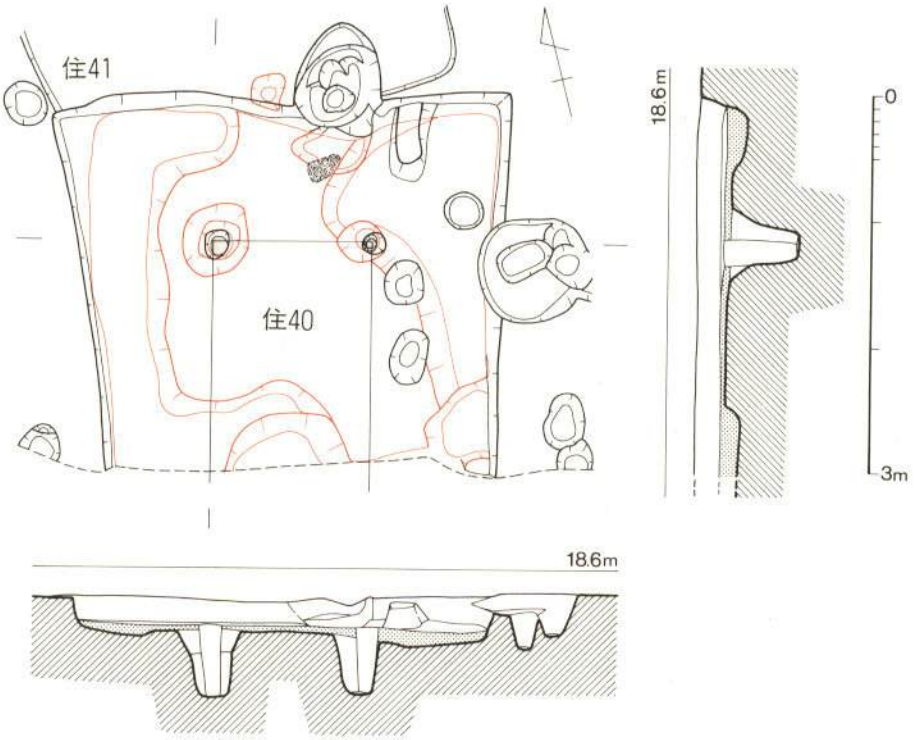
出土遺物（第99図）

1は須恵器杯蓋で，口径11cmを測る。焼成軟質で灰色を呈する。2は土師器杯で，口径17.7cmを測り，内外面ともに磨滅している。3は，口径18cmの土師器杯で，外面は赤変している。全体に磨滅著しく調整は不明である。4は土師器甕口縁片で，丸く屈曲して開く類となる。

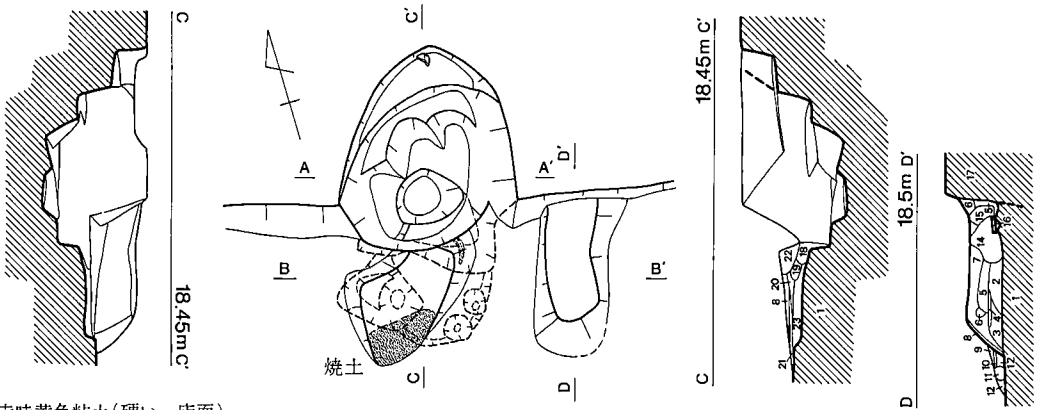
以上の出土土器は，1が7世紀中葉の所産であるが，2・4は7世紀後葉代と考えられる。よってこの第39号住居跡は，7世紀後葉代に営まれたものと考えられる。（中間）

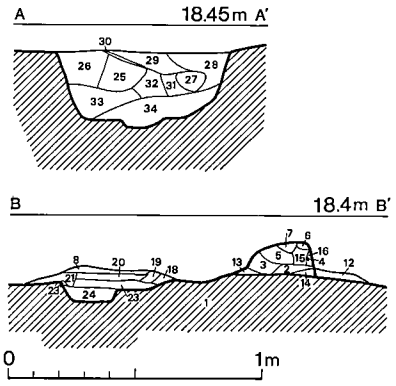
第40号住居跡（図版53，第100図）

D群の中央部に位置し，第41号住居跡を切っている。南端はビニールハウス撤去に伴うコンクリート基礎部分破壊による攪乱のために，住居跡南壁辺が確認できなかった。ただ東西幅や，2本残る床面の主柱穴の位置からすると，9.6㎡前後の小型方形住居となろう。カマド寄りの2主柱穴はその柱痕が明らかであり，柱間心々距離は1.2mを測る。南壁寄りの2主柱穴



第100図　第40号住居跡実測図（1/60）





1．赤味黄色粘土(硬い・床面)
2．黄味白灰色土
3．白灰色土やや暗い，焼土・炭混入
4．泥炭土
5．黄灰色土・砂多少混入
6．黄色粘土ブロック
7．灰味黄色土砂多量混入，炭少混入
8．黄色土
9．白灰色土，砂多量混入
10．赤味黄色土
11．泥炭土
12．暗灰色土
13．黄色に濁った白灰色土
14．暗白灰色土
15．黄味灰色土，砂少量混入
16．黒灰色土
17．黄褐色土(地山)
18．暗灰色土，炭混入
19．斑文状黄色粘土黒色土
20．黄味暗灰色土，焼土・炭混入
21．灰味褐色土，焼土・炭混入
22．緑味暗灰色土
23．斑状黄褐色土，暗灰色土(焼土・炭混入)
24．暗白灰色土，焼土・炭混入
25．黄色粘質土
26．ブロック状，黄色粘質土，暗灰色土，焼土粒混入
27．ブロック状，黄色粘質土，暗灰色土，黒炭混入
28．ブロック状，暗灰色土，黄色粘質土，焼土粒，炭混入
29．黄味暗灰色土，ブロック状黄色粘質土混入
30．赤褐色土(赤色に焼けている)
31．暗灰色土，焼土，炭少量混入，白色砂粒多混入
32．暗灰色土，焼土炭多量混入
33．暗灰色土，白色砂粒多量混入
34．黒色土，焼土・黄色粘質土ブロック多量混入

第101図　第40号住居跡カマド実測図 (1/30)

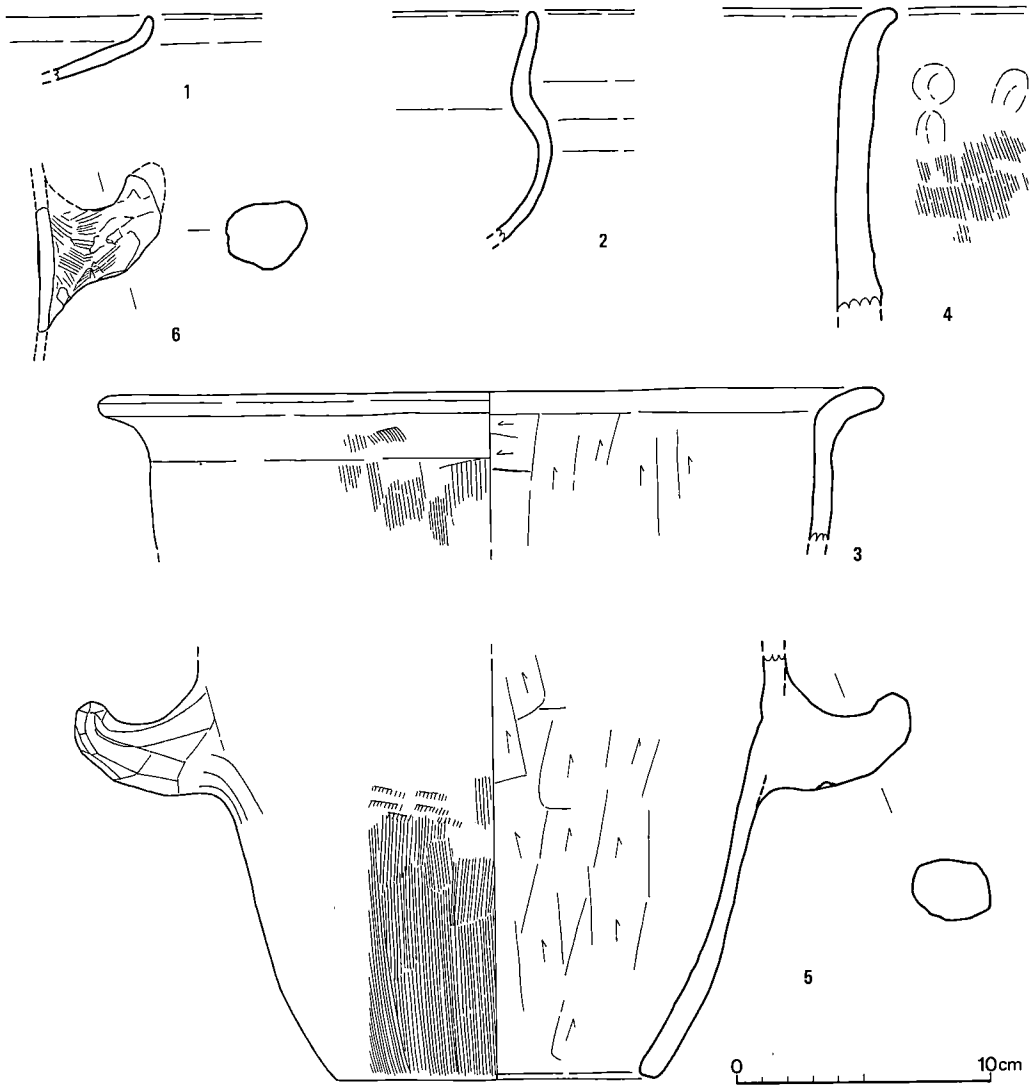
は恐らく存在しなかったものと推定され，かえって第12・22号住居跡と同様な，カマドと相対する壁際に2柱穴を有するタイプかと考えられる。

床面下は東，西壁両沿いに掘り込みがみられ，その上に貼り床が施されている。

カマド（図版53，第101図）　北壁の中央よりやや東へ片寄った位置に設置される。住居跡壁ラインより60cmほど外方へ掘り込んだB類であり，片袖部のみ残る。焚口部付近の床面は焼土が認められ，それから燃焼部にかけて浅く窪む。燃焼部中央に丸く掘り込みがみられ，支脚埋設の痕跡かとも想定されるが，定かではない。袖は主として地山土である黄色粘質土を用いて構築されている。

出土遺物（第102図）

1は，土師器杯で内外面とも磨滅している。2は，土師器鉢で，下半は胴が張り，頸が長めに立ち上がり，広口壺的形状をなす。3は口径31cmの土師器甕で，胴は全く張らない。4はカマドの東袖内出土品で，土師器甑口縁と考えられる。内面は磨滅している。外面には煤が付着



第102図　第40号住居跡出土土器実測図（1/3）

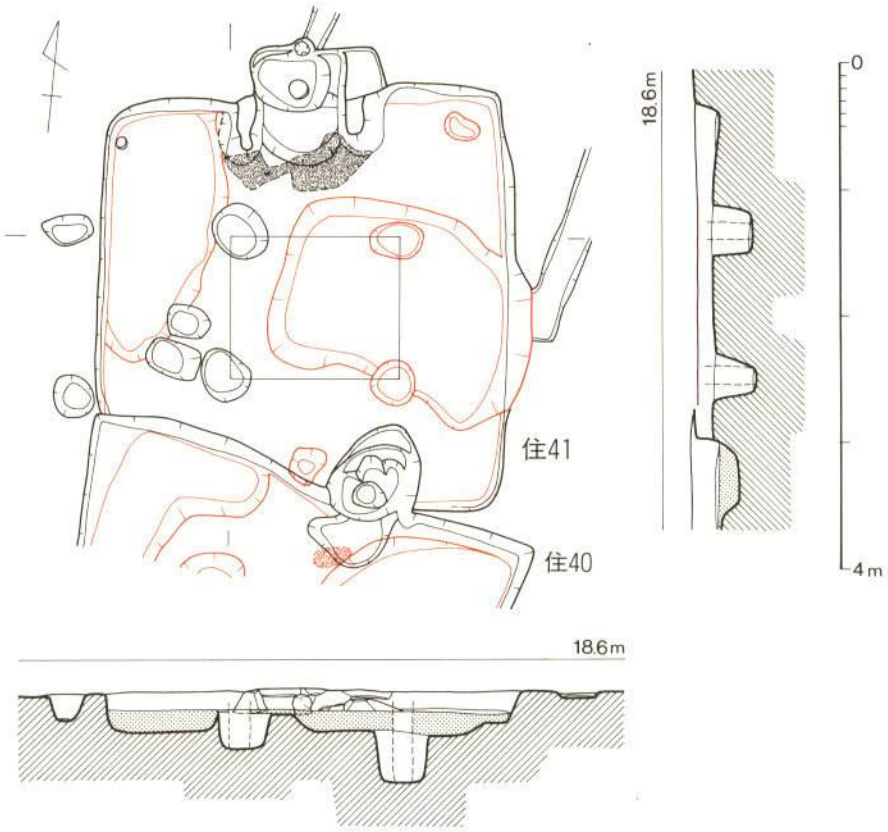
する。5は土師器甑下半部で，やや小さめだが長い把手を付けている。下端部周縁は横ナデを施し，胴外面には黒斑部がみられる。把手下面には刺突孔がみられる。

以上の出土遺物から，この第40号住居跡は7世紀後葉代に営まれたものと判断される

（中間）

第41号住居跡（図版54，第103図）

D群中央に位置し，第40号住居跡に切られるやや小規模の方形住居跡である。床面4主柱穴



第103図　第41号住居跡実測図（1/60）

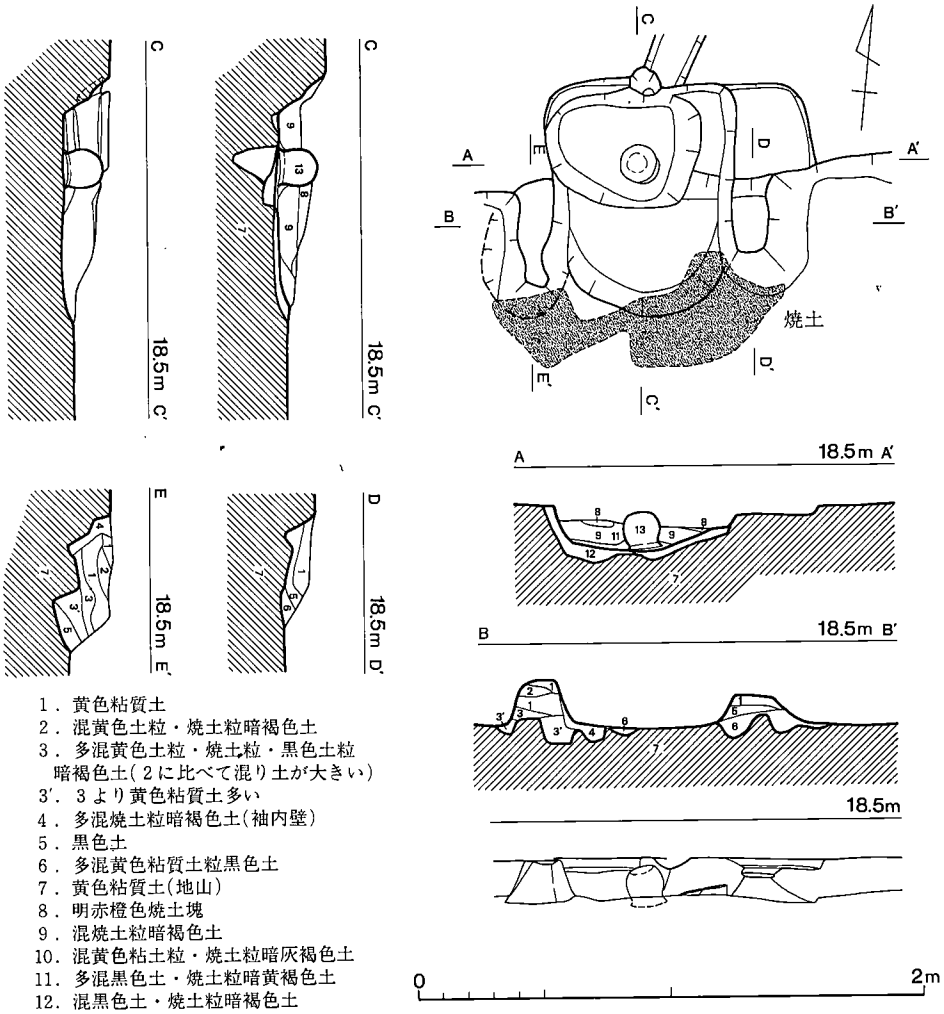
の配置はやや横長となる。床面下は北西隅付近と東壁寄り中央とが大きく掘り込まれる。

住居跡外のカマド外端部と東壁中央側に各々幅20～30cmの浅い溝がみられるが，これは実際は本住居跡より新しい遺構で，伴うものではない。

カマド（図版55，第104図）　北壁中央に設置されており，壁外方へと方形に大きく掘り込んで構築したB類となる。焚口部前面の住居跡床面には，炭・焼土の混ざった黄色粘土がひろがっている。燃焼部は全体に地山を浅く掘り窪ませ，その中央に土師器小甕をふせた支脚が据えられている。支脚下半外面には黄色粘土が巻かれ，固定が計られている。袖は壁外側への方形掘り込みより外側の壁からとり付けられており，黄色粘土を外面にかぶせている。燃焼部の最奥部分には更に小さな掘り込みがみられ，本来煙道が延びていたものかと思われる。

出土遺物（第105図）

1は須恵器杯身で，口径8.3cm，器高3.2cmを測る。体部外面に井桁状のヘラ記号が施されている。底外面は手持ちヘラ削りのようである。床面直上出土品である。2は薄手の土師器甕口

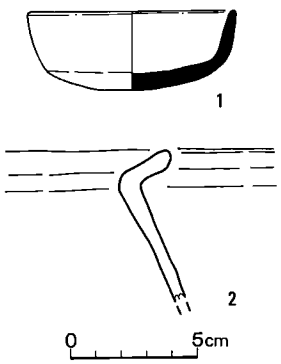


1．黄色粘質土
2．混黄色土粒・焼土粒暗褐色土
3．多混黄色土粒・焼土粒・黒色土粒
暗褐色土(2に比べて混り土が大きい)
3′．3より黄色粘質土多い
4．多混焼土粒暗褐色土(袖内壁)
5．黒色土
6．多混黄色粘質土粒黒色土
7．黄色粘質土(地山)
8．明赤橙色焼土塊
9．混焼土粒暗褐色土
10．混黄色粘土粒・焼土粒暗灰褐色土
11．多混黒色土・焼土粒暗黄褐色土
12．混黒色土・焼土粒暗褐色土
13．多混黒色土粒茶褐色土充満
14．黄色粘土

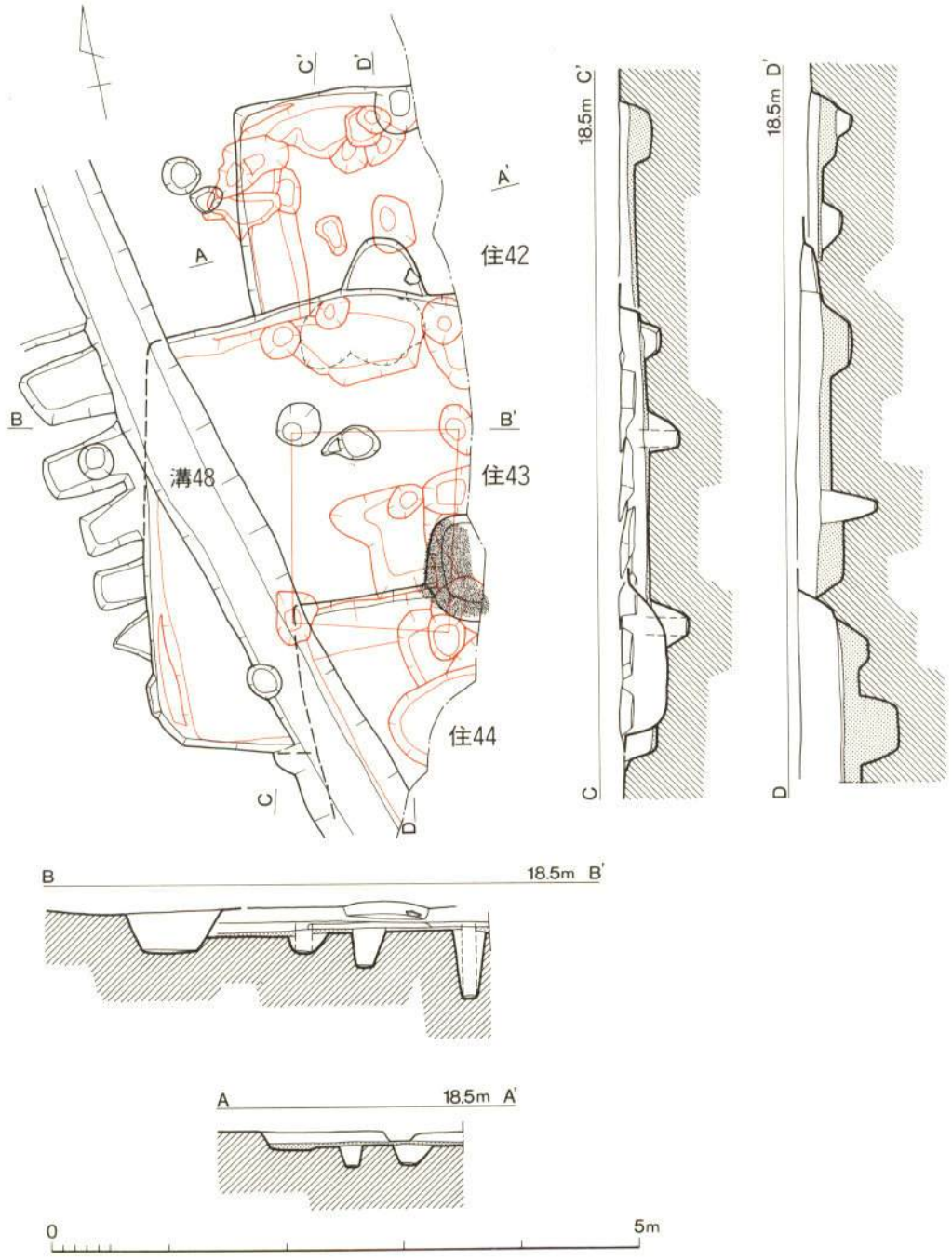
第104図　第41号住居跡カマド実測図（1/30）

縁部で，内外面ともに磨滅著しく調整不明である。なお，カマドの支脚として用いられた土師器小甕が見当らないが，どうもラベル紛失で包含層出土遺物の中に入れた第381図26が，可能性が強い。全体に薄手の精品である。

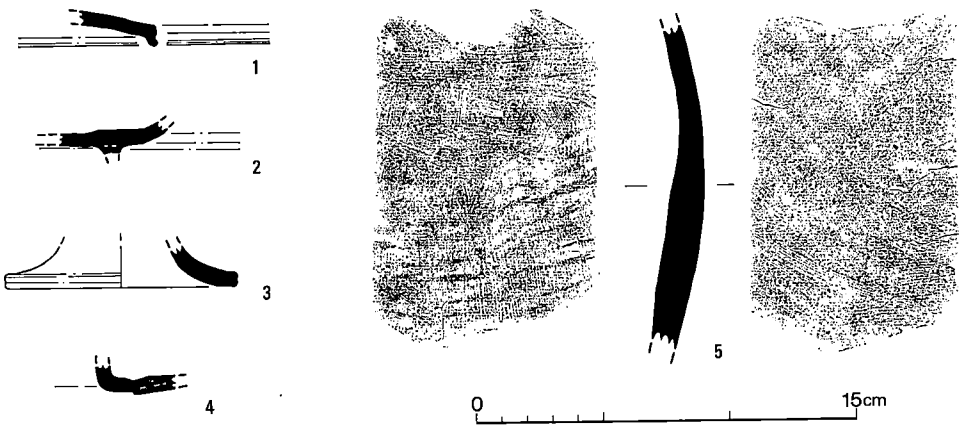
以上の出土遺物は7世紀中葉の所産で，この第41号住居跡が営まれた時期を示すものと考えられよう。　（中間）



第105図　第41号住居跡
出土土器実測図　(1/3)



第106図　第42～44号住居跡実測図（1/60）



第107図　第42号住居跡出土土器実測図（1/3）

第42号住居跡（図版56，第106図）

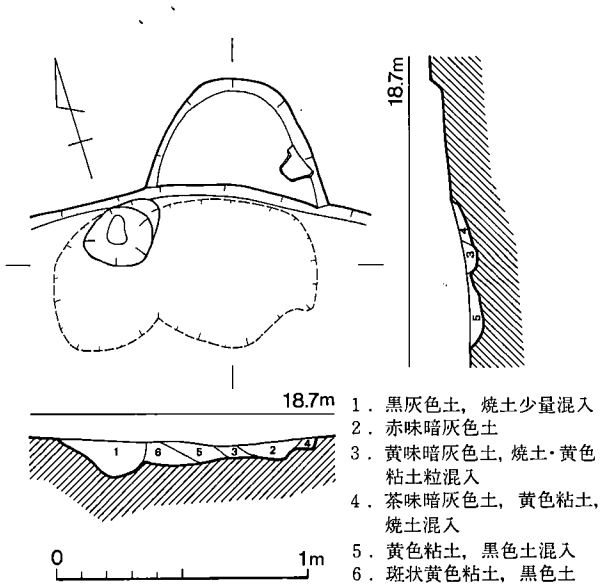
D群の中央西寄りに位置し，第43号住居跡に南半のほとんどを切られ，東側の大半はビニールハウスによる攪乱で破壊されている。つまり方形住居跡の北西コーナー付近しか残存していないということである。よって，その規模，柱穴の配置，カマド等全く不明である。

床面下は，壁に沿って掘り込みがみられ，その上全体に貼り床が施されている。

出土遺物（第107図）

1は須恵器杯蓋で，外面上端角はシャープである。2は高台付杯で，体部内外面は横ナデを施している。3は須恵器高杯脚端片で，小型の器種となろう。4は平瓶の頸部付け根付近小片で，外面は灰かぶりしている。薄手であり小型品となろう。5は幅の広い平行条線状叩きを施し，その上から縦横にナデて叩きを消している。

以上の須恵器は1が7世紀末前後のシャープさを残しており，それがこの第42号住居跡の営まれた年代を示すと考えられる。（中間）



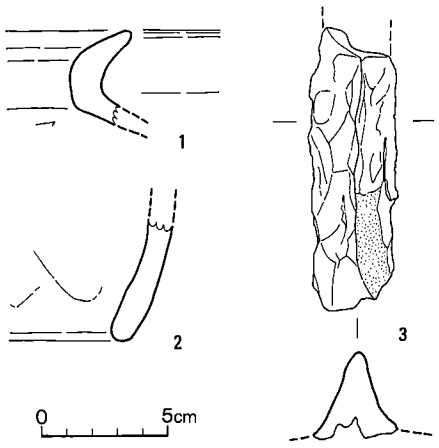
第108図　第43号住居跡カマド実測図（1/30）

第43号住居跡（図版56，第106図）

D群の中央西寄りに位置し，第42号住居跡を切り，第44号住居跡に南側を切られる。また，西寄りで南北に走る近代溝（第48号溝）に切られている。東壁側はビニールハウスによる攪乱部で破壊されている。

床面の4主柱は縦長に配置されており，床面下は東半で掘り込みがみられ，全体に貼り床が施されている。

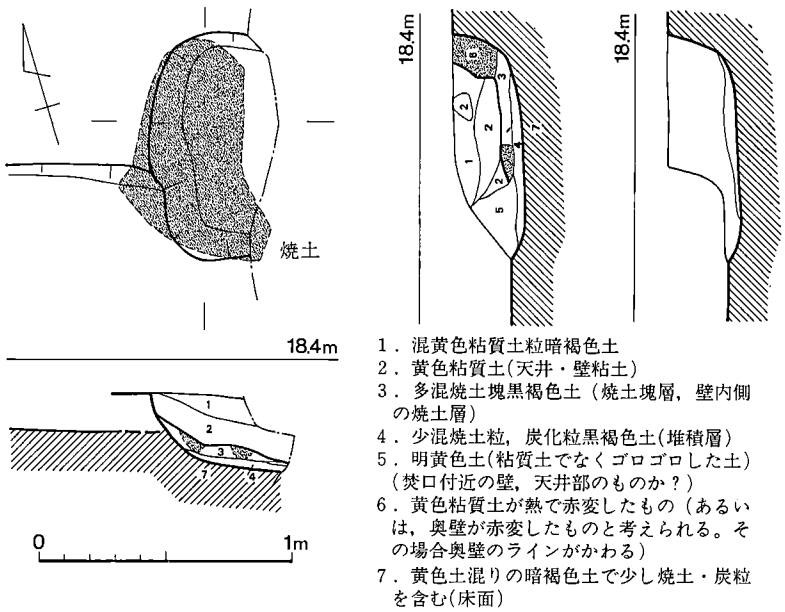
カマド（図版56，第108図） 北壁の中央に設置されるが，袖も全く残らない。燃焼部床面は地山に浅く掘り窪め，住居跡壁を外方に掘り込んで，B類の形態をとる。この掘り込み中から須恵器甕片が出土したが，カマド構築に付随するものか定かではない。



第109図 第43号住居跡出土土器実測図(1/3)

出土遺物（第109図）

1は土師器甕口縁片で，胴が張り，強く折れて開く類である。カマド内出土品である。2は土師器甑底部片で，内外面ともに磨滅著しい。3は土製カマドの貼り付け廂部分で，指頭圧痕が著しく残る。



1．混黄色粘質土粒暗褐色土
2．黄色粘質土(天井・壁粘土)
3．多混焼土塊黒褐色土（焼土塊層，壁内側の焼土層）
4．少混焼土粒，炭化粒黒褐色土(堆積層)
5．明黄色土(粘質土でなくゴロゴロした土)（焚口付近の壁，天井部のものか？）
6．黄色粘質土が熱で赤変したもの（あるいは，奥壁が赤変したものと考えられる。その場合奥壁のラインがかわる）
7．黄色土混りの暗褐色土で少し焼土・炭粒を含む(床面)

第110図 第44号住居跡カマド実測図（1/30）

以上の土器から年代を決定するのは難しいが，1の甕の特徴は7世紀後半～8世紀前半代のものである。ここでは切り合い関係をも併考して，この第43号住居跡の年代は8世紀初頭を前後する頃と考えておきたい。

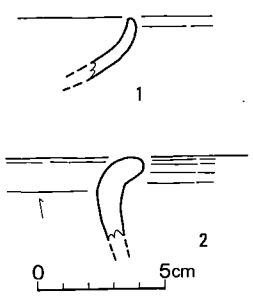
（中間）

第44号住居跡（図版56，第106図）

D群の中央西寄りに位置する。北側で第43号住居跡を切る。東～南側の大半はビニールハウスにより攪乱で破壊されており，結局，北西コーナー付近しか残存していない。

床面下は大きく掘り込まれており，その上は貼り床が施されている。そのレベルは北側の第43号住居床面より20cmほど低い。柱穴配置及び規模・プラン等は全くわからない。しかし，北壁に設置されているカマドと住居跡北西コーナーとの距離が短かいことから，小規模タイプの方形住居となると推定できる。

カマド（図版56，第110図） 北壁の中央付近に設置されるが，東半部は攪乱を受けて残らない。袖部その他も残らず，壁外方に掘り込まれた部分と燃焼部の浅い掘り込み部分が残るのみである。最終火床面は赤変しており，その上に黄色粘質土から成るカマド天井部の崩落土が堆積している。形態からB類とされる。



第111図 第44号住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土遺物（第111図）

1は土師器杯で，内外面ともに磨滅しており調整不明である。2はカマド内出土品で，短かく寸詰まり気味に開く口縁となる。

これらの出土遺物は少くとも8世紀中頃を下ることは無く，第43号住居を切ることをも考えると，この第44号住居跡は8世紀前葉代に営まれたものと思われる。（中間）

第45号住居跡（図版57，第112図）

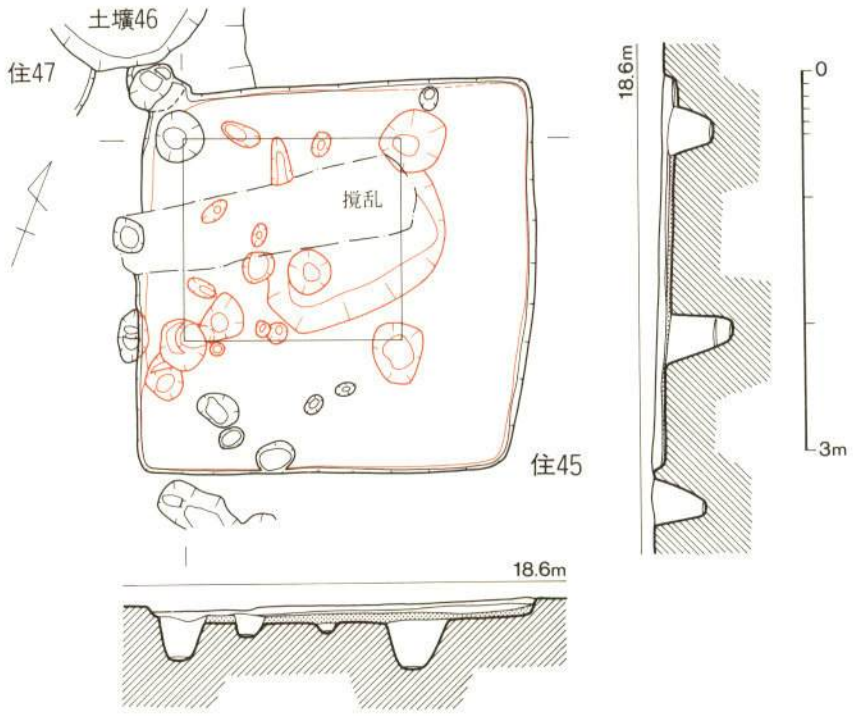
D群の南端に位置する平行四辺形気味の，床面積9.0㎡ほどの方形住居である。第47号住居跡と西側で隣接するが，両者の主軸方向も異なり，上屋構造を考慮すると，両者の同時併存は考え難い。中央北寄りには，試掘の際の重機による掘削痕が残る。

床面には4主柱穴かと思われる4柱穴を結び得るが，西北隅寄りに極めて片寄っており，本住居跡の主柱穴とは素直には認め難い。本来，通有の4主柱穴は設けられなかったものと考えたい。床面は薄く貼床を施しているものの，床面下の掘込みは，中央部を除いて見られない。本住居跡は，カマドも無く，4主柱穴も明確でなく，小型住居跡に共通する諸特徴を示す類と判断される。

出土遺物（第113図）

1は須恵器甕胴部片で，内面には平行条線状叩きを施し，外面は同様の叩きの上を横位のカキ目で消している。2は土師器甕口縁片で，内面はヘラ削りかと思われる。胴が殆んど張らず，口頸部も肥厚せずにゆるやかに開いている。

以上の出土遺物から年代を決定するのは困難である。1は第42号住居跡出土の甕片と技法が



第112図　第45号住居跡実測図（1/60）

似てはいるが同一個体ではない。2も8世紀前葉以降のものではなく，より古相を示す。よって，7世紀末を中心とする時期をこの第45号住居跡に与えてもいいのではないかと考える。

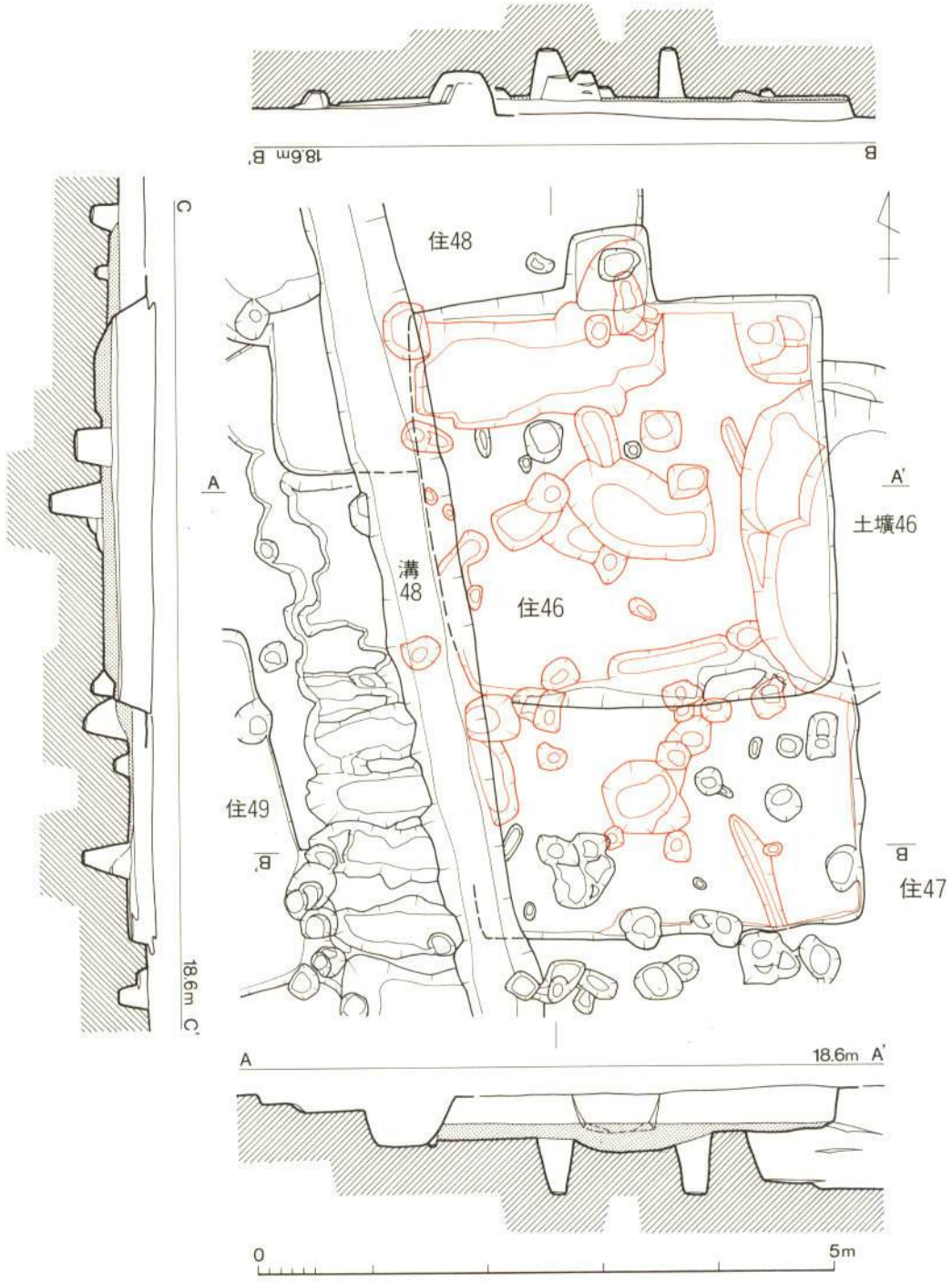
（中間）

第113図　第45号住居跡出土土器実測図（1/3）

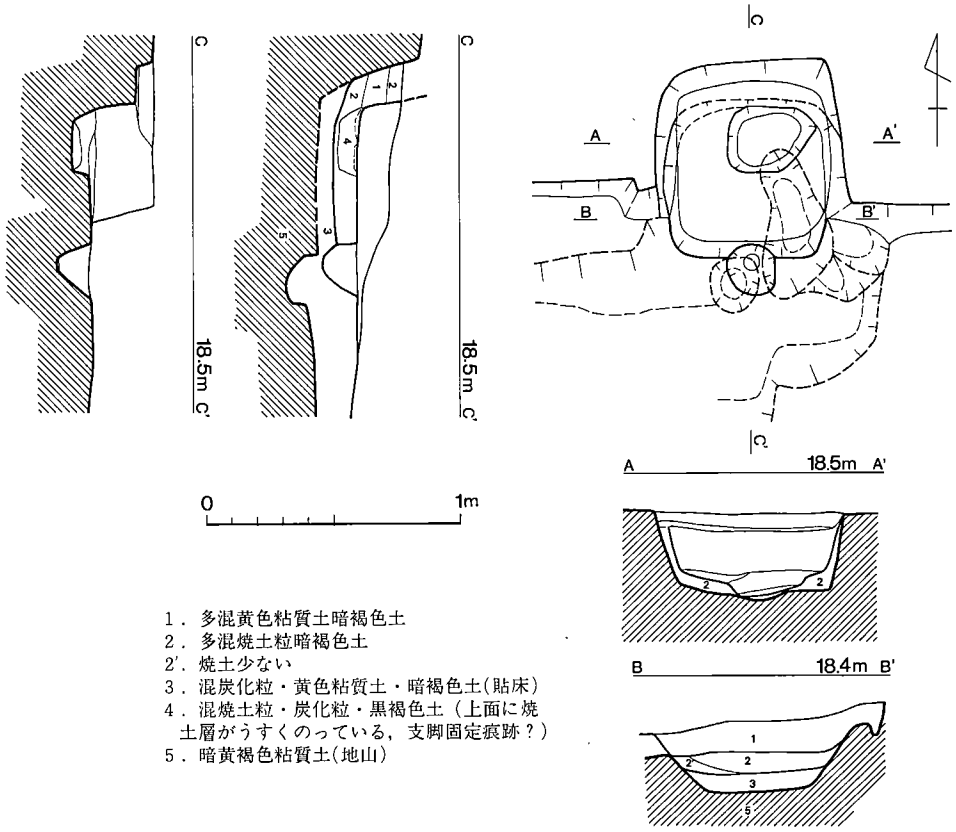
第46号住居跡（図版58，第114図）

D群の南端近くの中央に位置し，北側で第48号住居跡を切り，東側で第46号土壙を切り，南側で第47号住居跡を切る。西辺は近代溝（第48号溝）に切られる。

床面上に通有みられる4主柱穴は検出されなかった。ただ，カマド寄りの2柱穴と，南壁際の2小柱穴とが組み合って，第12・22号住居跡例の如くなる可能性も考え得る。



第114図　第46・47号住居跡実測図（1/60）



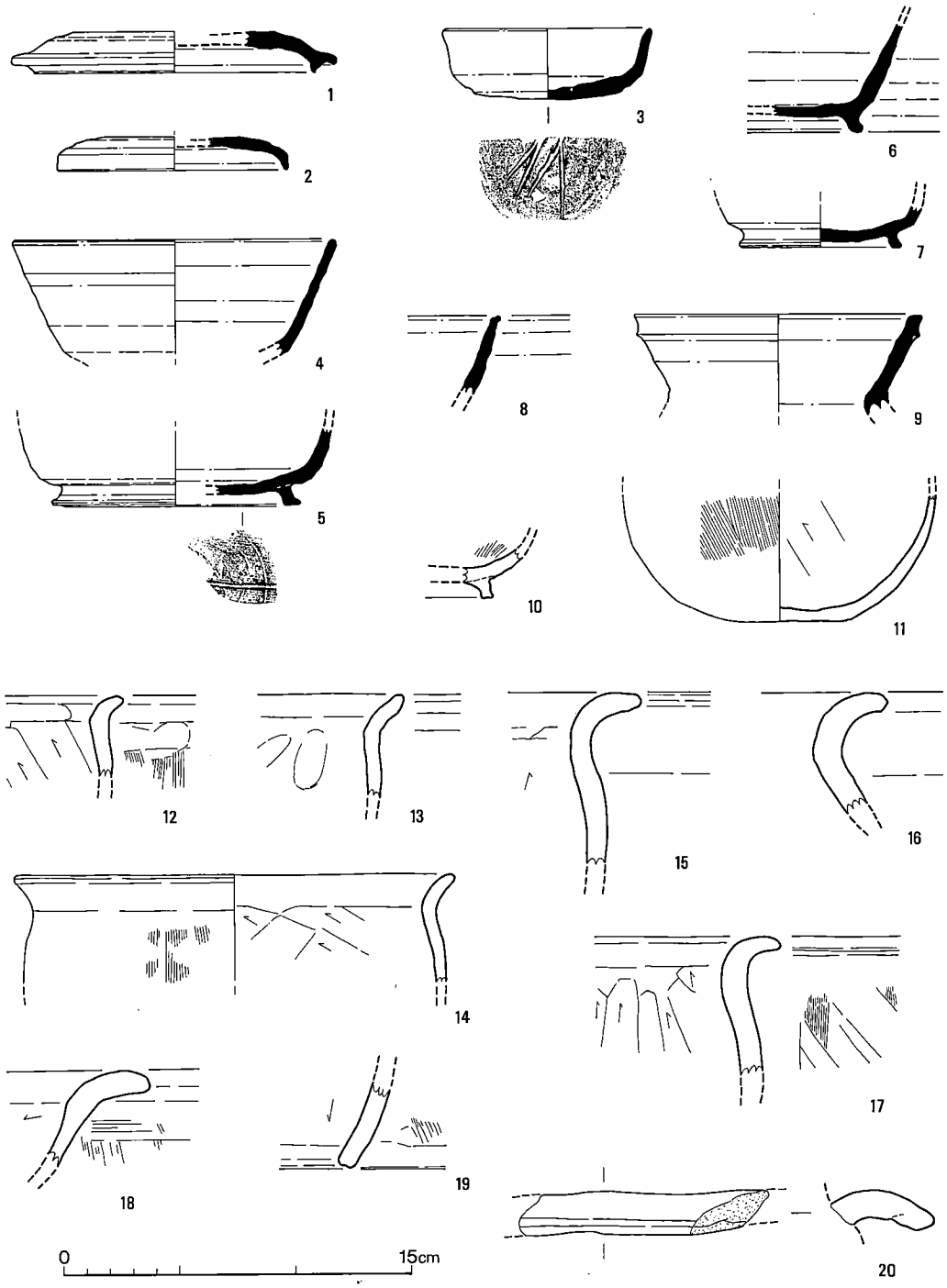
第115図　第46号住居跡カマド実測図（1/30）

床面下は北壁沿いの西寄りと，中央部とが掘り込まれており，その上に約10cmと厚く貼り床が施されている。

カマド（図版59，第115図）　北壁の中央に設置されるが，残りは極めて悪い。壁の外方に60cmほど方形に掘り込み，燃焼部をつくる。前面の焚口部側中央に小ピットが掘り込まれており，支脚の固定痕跡かとも考えられるが，位置が手前過ぎるようでもあり，定かでない。最終火床面は焼けて赤変した部分がみられる。

出土遺物（第116図）

須恵器（１～９）１は短かい返りが付く杯蓋で，返り端部径12.1cmを測る。天井外面は回転ヘラ削りを施す。２は口径10cmの小さい蓋で，天井外面は回転ヘラ削りを施す。３は，杯身で口径９cm，器高３cmを測る。底外面はナデており，４本直線を組み合わせたヘラ記号が施されている。４は口径14cmの杯身で，口縁直下の外面と体部下端外面とに回転ヘラ削りが施されている。５は長く外方へ踏ん張る高台を付け，体部外面下端には回転ヘラ削り痕を残す。底外面にヘラ記号が施される。６も高台付杯で，体部外面下端には回転ヘラ削りを残している。７は高



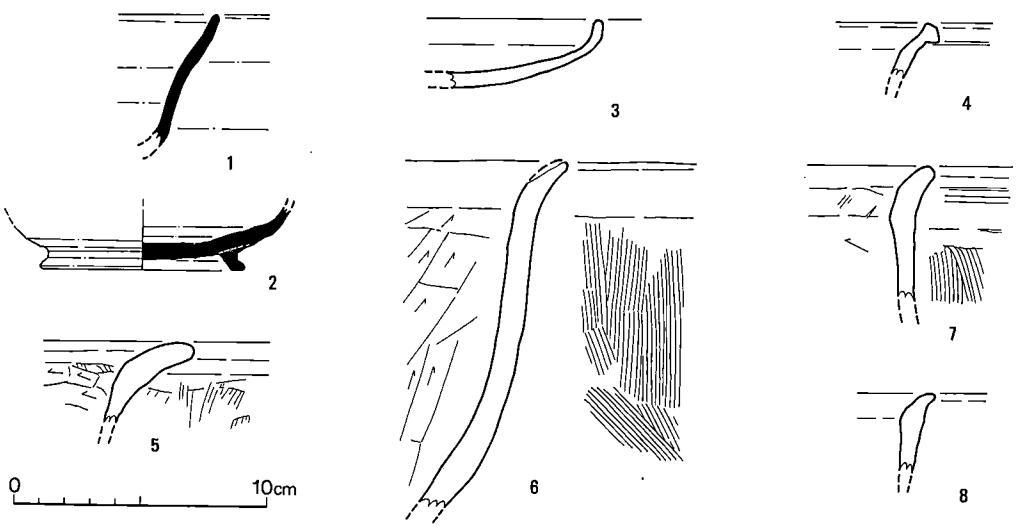
第116図　第46号住号跡出土土器実測図（1/3）

台径７cmの小型品で，全体に薄手である。８は，内外面ともに強い横ナデで，口唇外端が突出する特徴をなす。杯身ではなく小型壺類等他器種となるかもしれない。９は，口径12.3cmを測り，口縁下に三角凸帯をめぐらす。一見５世紀初頭前後の陶質土器に似るが，定かではない。内外面とも灰かぶりしている。

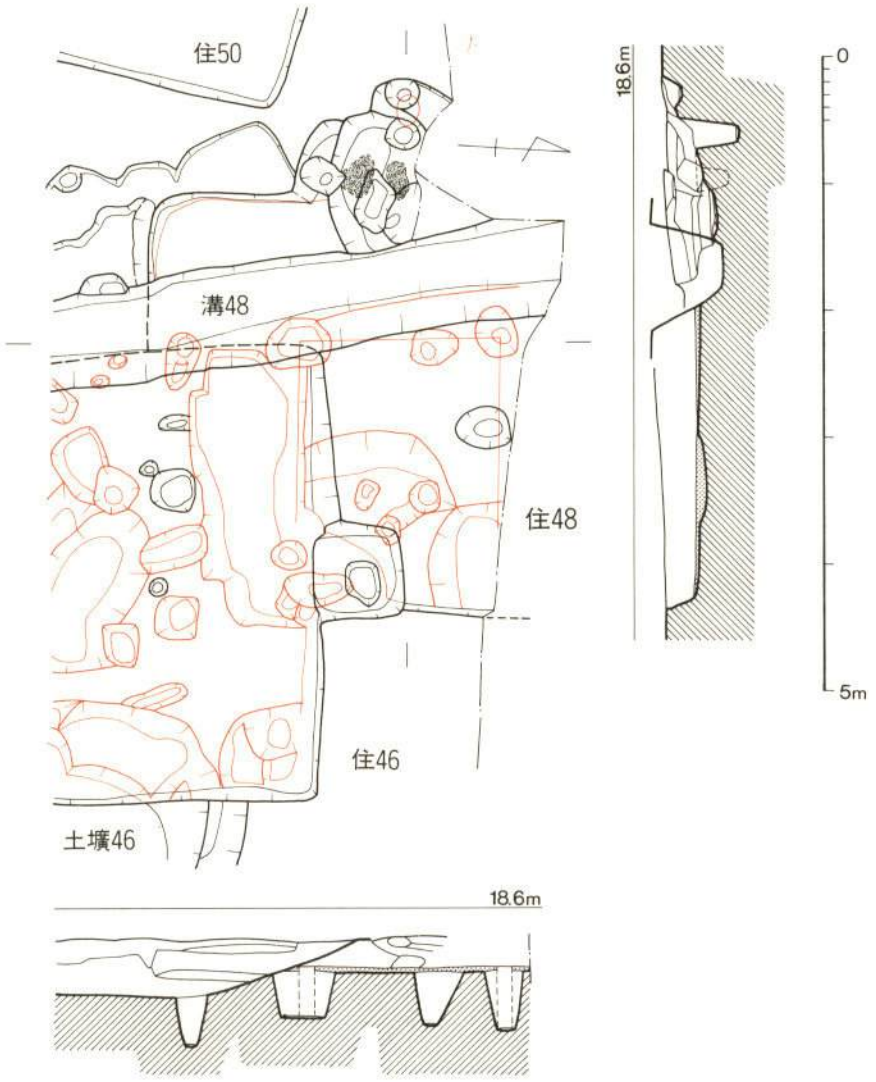
土師器（10～20）10は須恵器模倣の土師器杯で，内面にはハケ目が施されている。体部外面は磨きかと思われる。11は，内面を削っており，短頸の壺状となるかと思われる。薄手で底外面にもハケ調整が施されている。12は床面下出土品で，短かく開く口縁となる小甕である。外面には煤が付着する。13は口頸部で肥厚せず，ゆるやかに外傾する口縁をなす小甕である。14は，口径19cmの薄手の小甕で，胴は強く張らず，口縁もゆるく外傾する程度となる。15は強く屈曲して外方へ開く甕となる。胴外面はナデている。床面下出土品である。16は胴が張り丸く反転して開く口縁となる。内外面ともに磨滅している。17は，他の甕と同様に，内面に鋭い稜をつくることなく，胴はゆるやかに張る程度である。18は，鉢口縁である。19は甑底部片で，下端の内外面まで横ナデを施す。20は土製カマドの廂部分で，曲げ廂のタイプとなる可能性もある。

以上の出土遺物は，３が７世紀中葉，１・５～７等が７世紀後葉～末，２が８世紀代のものと，各時期に分かれる。当住居は第47・48号の２軒の住居及び第46号土壙をも切っており，古い時期の遺物が混入していることが考えられる。よって，この第46号住居跡は８世紀前葉前後に営まれたものと考えたい。（中間）

第47号住居跡（図版58，第114図）



第117図　第47号住居跡出土土器実測図（1/3）



第118図　第48号住居跡実測図（1/60）

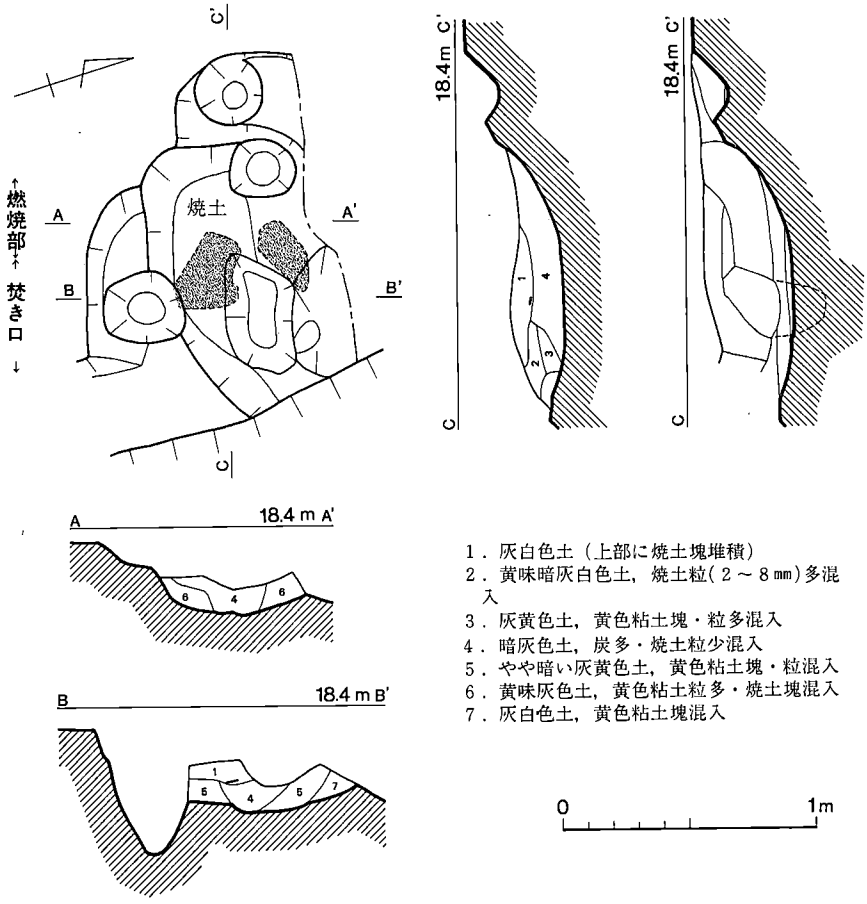
D群の南端に位置し，第46号住居跡に北半を切られ，西壁側を近代溝（第48号溝）に切られる。また，北東側で第46号土壙を切る。

床面での4主柱穴配置は認められない。床面下の掘り込みは，大きなものはみられず，小さな凹凸が多い。貼り床も薄い。北隣の第46号住居の床面より15cmほど高い。

カマドは残存しないが，かつて設置されたとすると，北或いは西の位置と考えられる。

出土遺物（第117図）

1は，須恵器鉢で，薄手で体部中途で屈折する形態で，7世紀後葉前後に時々みられる類で



カマド内杭痕跡平面図

カマド内杭痕跡一覧

No.	直径cm	深さcm	傾斜角	打込方向	土色
1	2.0	6.0	45°	W→E	赤味暗灰色土，焼土混入
2	3.0	2.0	ほぼ直，北に傾く		
3	3.5	6.0	ほぼ直		
4	2.0	10.0	直		黒色土
5	2.0	9.0	20°	E→W	赤味暗灰色土，焼土混入
6	2.0	3.0	45°	SW→NE	

第119図　第48号住居跡カマド実測図（1/30）

ある。内外面横ナデ調整で，外面には灰かぶりがみられる。2は須恵器高台付杯で，体部外面下端まで横ナデ調整，底外面には回転ヘラ削り痕を残す。底部全体に丸く，外方へ踏ん張る高台を付ける。3は，土師器杯で底外面は磨滅している。4は須恵器模倣の所謂赤焼きの土師質焼成甕口縁である。内外面黄褐色を呈する。5は，土師器鉢口縁である。6はカマド内出土土師器鉢で，口縁は短かめである。外面には煤が付着している。7は土師器小甕片で，胴が張らず，僅かに外傾気味に開く口縁となる。8は短かい口縁につくる小甕片で，全体に磨滅している。

以上の出土土器は，7世紀後葉代の特徴を良く示しており，それも，より中頃に近い時期と考えられる。（中間）

第48号住居跡（図版58，第118図）

D群のほぼ中央に位置し，住居北側のほぼ半分は撹乱を受け，カマド前面で南北に第48号溝に切られ，南東隅を第46号住居跡に切られるという惨憺たるものである。現況から推察して平面形態は小型の横長となるもので，主柱穴配置は東壁寄りに方形に配される。

カマド（図版58，第119図） 西壁中央部に設置されたものであろう。形態はB類である。掘り方は現状で長さ150cm，幅105cmを測る。住居跡の規模の割には大型のカマドである。袖はなかった。しかし燃焼部では壁体の燃焼の痕跡や残灰の堆積状況を確認した。さらに壁体を精査したところ径3.5～2cmの6個の小穴を検出した。これらは極めて小型のものであり，穿つことは不可能に近いであろう。この様な点から木もしくは竹の杭と推する。2～4，6の杭は燃焼部を取り囲む様に存し，1は焚口に向って傾き，5は煙出し部へ傾いている。このような状況からそれらがカマドとまったく無関係に配置されたものではないことが察せられる。またカマド最深部の小穴であるが，煙出しの施設と考えるのが妥当であろう。

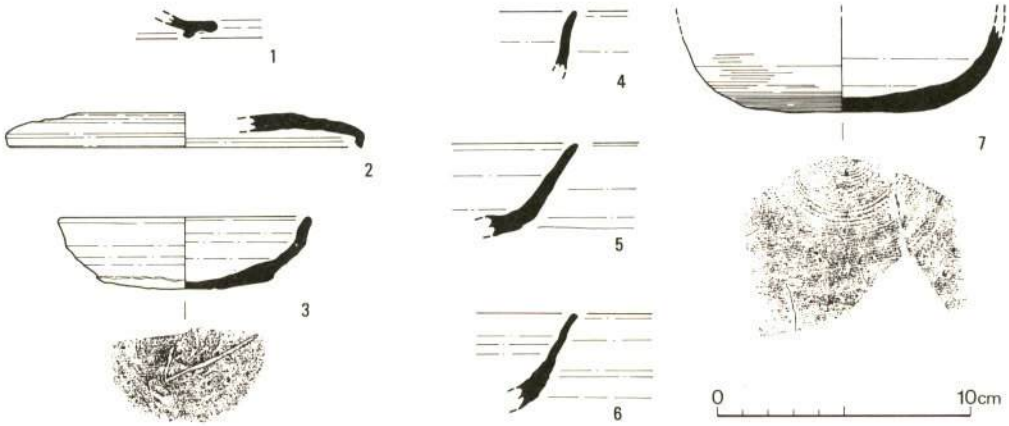
カマド内の小杭の痕跡は，第49・50号住居跡でも検出しており，後において詳述したい。

（平嶋）

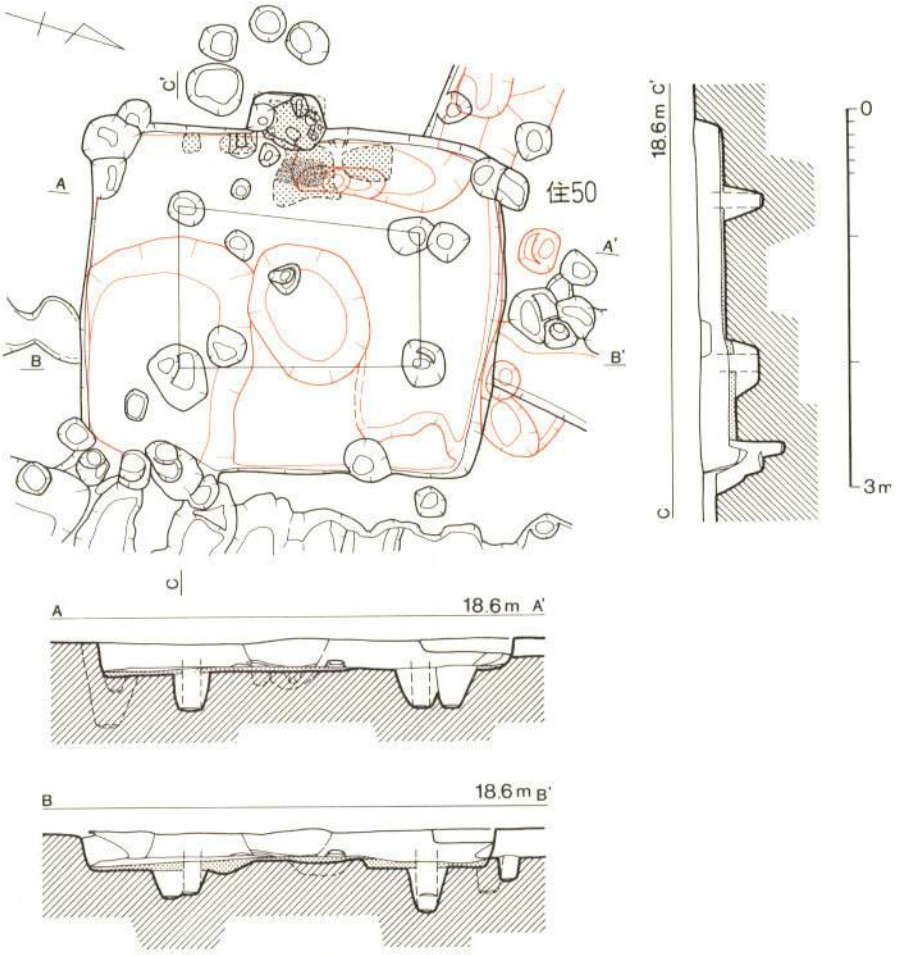
出土遺物（第120図）

1は須恵器杯蓋で，短かい返りを付ける。2は，口径13.8cmの須恵器杯蓋で，口縁部が所謂鳥嘴状口縁とは異なり，下端面を斜めに削ぎ落したような形状をなす。天井部外面には回転ヘラ削りが施されている。7世紀末の所産であろう。3は口径10cm，器高2.9cmの須恵器杯身で，底外面はナデており，V字状のヘラ記号が施されている。4～6は須恵器杯身で，高台の付くものとなろう。いずれも胎土精良で，内外面横ナデを施している。7は，須恵器壺類の底部か，瓶類の側面とも考えられる。外面には同心円状のカキ目が施される。

以上の出土土器は，3が古すぎるが，2や4～6などの特徴からみて，この第48号住居跡は7世紀末ごろに営まれたものと考えられる。（中間）



第 120 図　第48号住居跡出土土器実測図（1/3）



第 121 図　第49号住居跡実測図（1/60）

第49号住居跡（図版60，第121図）

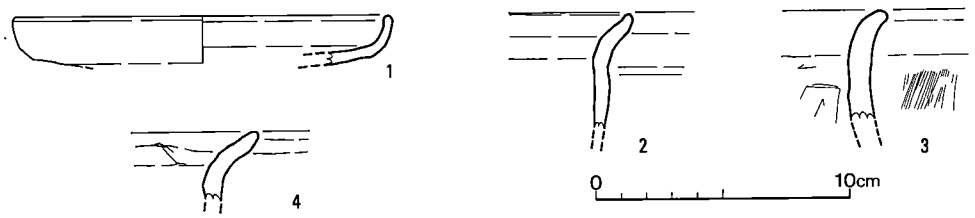
D群の南に位置し，第50号住居跡を切っている。平面形態は小型の横長を呈し，主柱穴配置も同様である。

カマド（図版60，第123図） 南西壁中央に設置されたB類のものである。掘り方は長さ46cm，幅64cmを測る。袖は両袖共に検出し，右袖は壊されたものか，先端部での残存状況が悪い。また，燃焼部やカマド前面，左右袖の脇に黄色粘土が散乱しており，カマド前面のものの下層からは焼土塊が検出された。これも第49号住居跡のカマドが破壊されたことを物語るものであろう。このカマドも壁体精査の結果13個の径３～1.5 cmの小穴を検出した。１・２・４は燃焼部中央に向けて傾き，３・７は煙出し部に配され，６・８も煙出し部にあたるものと思われる。11・13も燃焼部に付随するものが，燃焼部中央に向けて傾く。しかし，12はそれらと異なり，焚口方向へ傾く。５・９・10は燃焼部の左脇の小穴中央に向って傾く。また，図示してはいないが８の周囲に径１～0.5 cmの不明瞭な杭跡が３～４個あったことを付記しておく。（平嶋）

出土遺物（第122図）

１はカマド内出土品で，復原口径15cmを測る土師器皿である。体部がやや内湾気味に立ち上がり，端部は丸くおさめる。底外面は磨滅しているが手持ちヘラ削りかと思われる。２・４は土師器鉢で，胴部内外面ともにヘラ削りを施している。２はカマド内出土品である。３は，土師器小甕片或いは甑の口縁とも考えられる。頸部で全く肥厚せず，僅かに外傾するだけの口縁となる。

以上の出土遺物は，１が７世紀後葉期の特徴を残しており，この第49号住居跡はその頃の所産かと考えられるが，明確ではない。（中間）

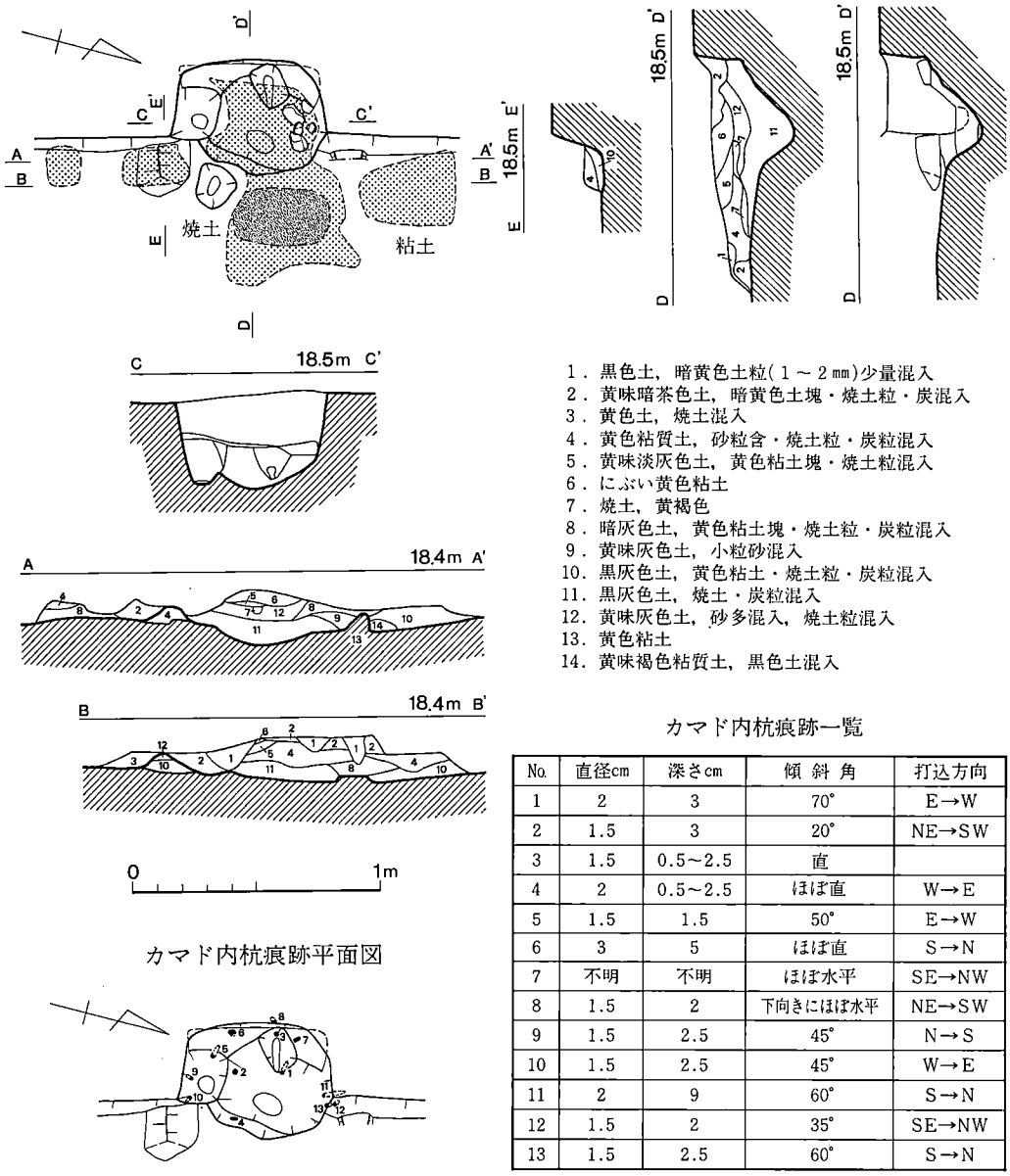


第122図 第49号住居跡出土土器実測図（1/3）

第50号住居跡（図版60，第124図）

D群の南に位置し，第48号溝の西側で第49号住居跡に切られる。平面形態は方形のもので，主柱穴配置も同じである。

カマド（図版61，第125図） 西壁中央部に設置されたB類のものである。掘り方は長さ105 cm，幅73cmを測る。袖は検出できない。焚口部で粘土塊が検出されている。これもこのカマド



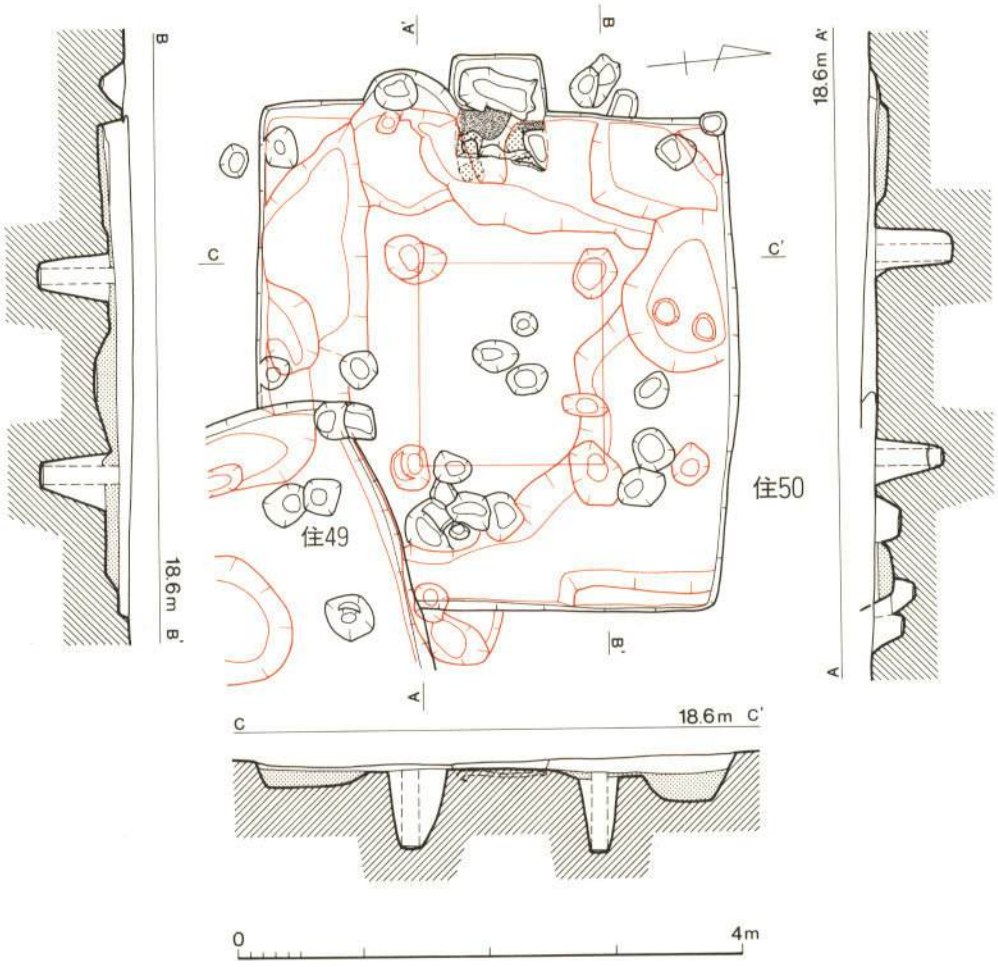
カマド内杭痕跡平面図

1．黒色土，暗黄色土粒(１～２㎜)少量混入
2．黄味暗茶色土，暗黄色土塊・焼土粒・炭混入
3．黄色土，焼土混入
4．黄色粘質土，砂粒含・焼土粒・炭粒混入
5．黄味淡灰色土，黄色粘土塊・焼土粒混入
6．にぶい黄色粘土
7．焼土，黄褐色
8．暗灰色土，黄色粘土塊・焼土粒・炭粒混入
9．黄味灰色土，小粒砂混入
10．黒灰色土，黄色粘土・焼土粒・炭粒混入
11．黒灰色土，焼土・炭粒混入
12．黄味灰色土，砂多混入，焼土粒混入
13．黄色粘土
14．黄味褐色粘質土，黒色土混入

カマド内杭痕跡一覧

No.	直径cm	深さcm	傾 斜 角	打込方向
1	2	3	70°	E→W
2	1.5	3	20°	NE→SW
3	1.5	0.5～2.5	直	
4	2	0.5～2.5	ほぼ直	W→E
5	1.5	1.5	50°	E→W
6	3	5	ほぼ直	S→N
7	不明	不明	ほぼ水平	SE→NW
8	1.5	2	下向きにほぼ水平	NE→SW
9	1.5	2.5	45°	N→S
10	1.5	2.5	45°	W→E
11	2	9	60°	S→N
12	1.5	2	35°	SE→NW
13	1.5	2.5	60°	S→N

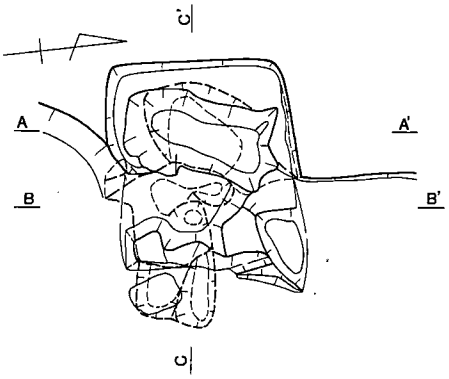
第123図　第49号住居跡カマド実測図（1/30）

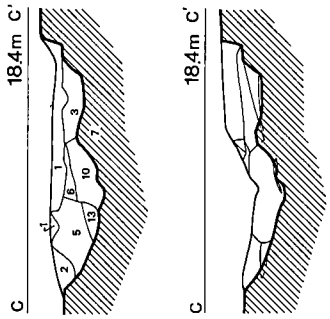


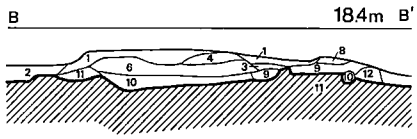
第124図　第50号住居跡実測図（1/60）

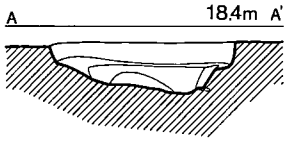
が壊された痕跡であろう。第50号住居跡カマドでも，カマド内外に小杭の跡を検出した。4～8は燃焼部火床に弧を描くように配置されているが，しかし，傾斜方向から直接燃焼部に伴うものは4～6のもので7・8は外に傾いている。また，他に燃焼部に関わるものとして9・12・14が考えられる。11・16は煙出しに関わるものであろう。1・2は焚口に付されている。15は袖が存した部分に付されている。9・10については，他と若干異なり，大形で杭痕跡が反り気味であり，埋土が暗茶灰色土で焼土粒を多量に含んでいた。焼土粒の存在からカマドとまったく無関係とも考え難く，カマドの大黒柱的存在なのかもしれない。一方このカマドは焚口部と燃焼部とに段を有し，燃焼部が一段高くなっている。（平嶋）

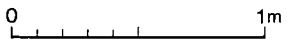
出土遺物は全くみられず，時期決定は難しい。ただ，当住居を切る第49号住居が，7世紀後



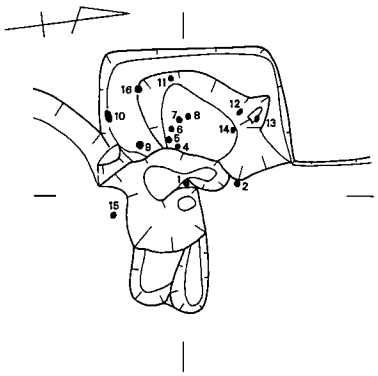








カマド内杭痕跡平面図



1．黒灰色土中に斑文状黄味茶色粘土・焼土・炭混入
2．にごった茶色，ゴマ状暗黄色粘質土（1～2㎜）
3．暗灰色土，焼土粒・炭少量混入
4．灰味黄色土，砂粒多混入
5．黄味黒灰色土，ゴマ状暗黄色粘質土・焼土・炭混入（1～4㎜）
6．斑文状黒灰色土・焼土（上層部に焼土堆積）
7．茶褐色土
8．赤味黄色粘土
9．黄味暗茶色土
10．暗灰色土
11．暗黄色粘質土（地山）
12．赤味暗黄色土，斑状黒色土
13．黒色土，斑状黄色粘質土混入

カマド内杭痕跡一覧

No.	直径cm	深さcm	傾斜角	打込方向	土色
1	2.0	1.0	40°	E→W	灰褐色
2	2.0	3.0	ほぼ直		
3					
4	1.5	1.5	20°	W→E	
5	1.5	1.0	20°	WSW→ENE	
6	1.5	1.0	20°	WNW→ESE	
7	1.5	2.0	30°	W→E	
8	1.5	1.0	30°	E→W	
9	2.5	7.5	20°	N→S	灰暗色茶
10	2.5	9.5	30°	W→E	
11	1.5	0.5	下向きほぼ水平	W→E	黒灰色
12	1.5	1.0	ほぼ直		
13	不明	2.0	20°	SW→NE	
14	1.0	1.0	20°	S→N	
15	2.0	4.0	ほぼ直		
16	2.0	3.0	30°	SE→NW	

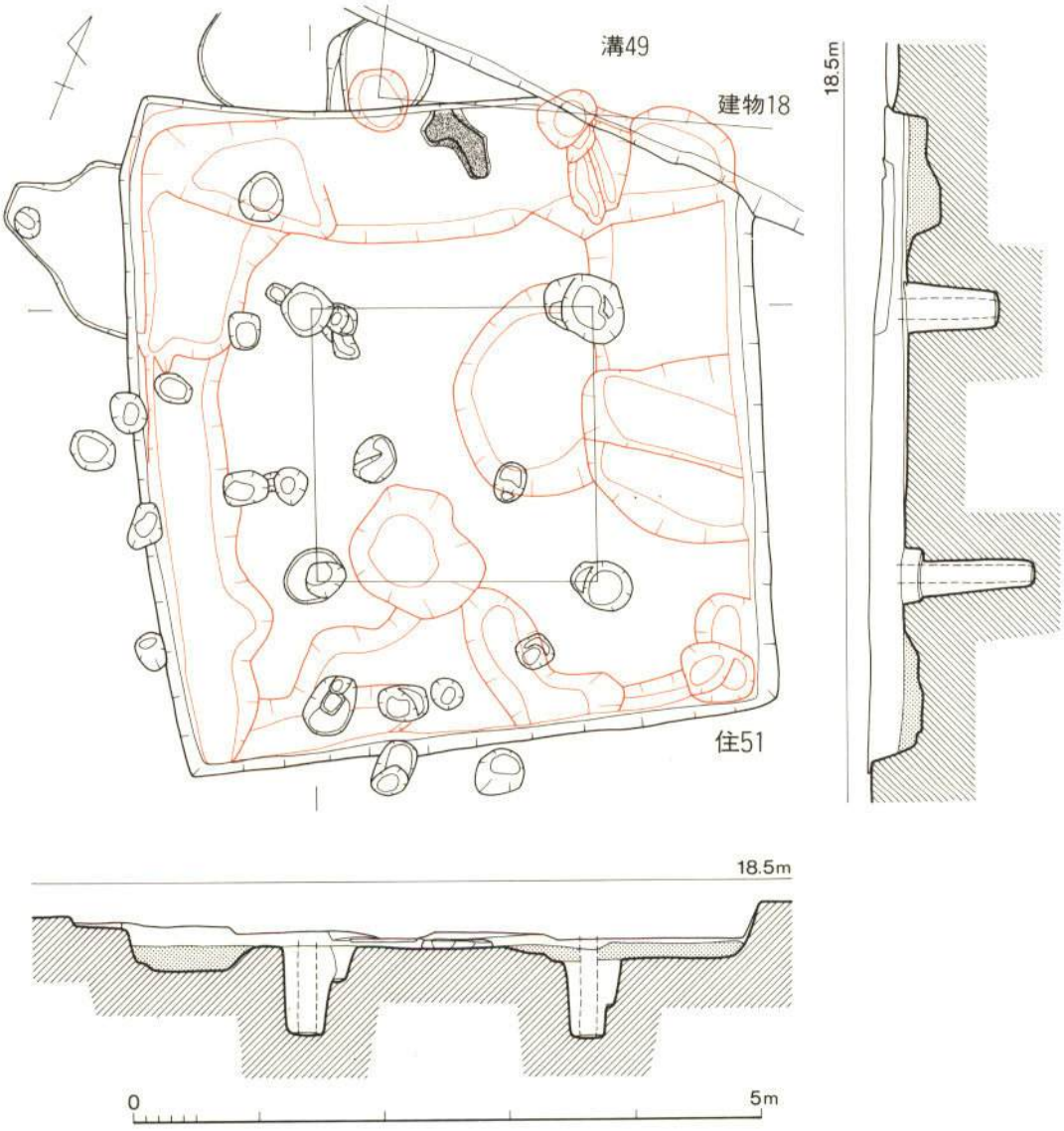
第125図　第50号住居跡カマド実測図（1/30）

葉期の可能性が考えられており，それを下限とすることもできる。当住居跡は第49号住居とともに，D住居群の中では異例の西向きカマドをなしている。西向きカマドはC住居群に多く，

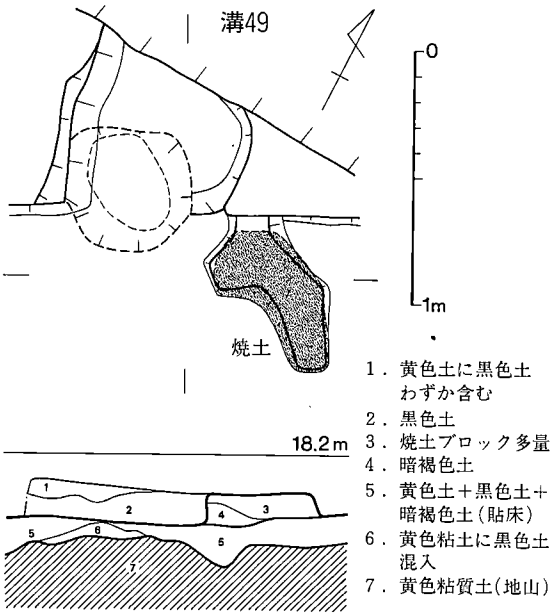
それらは7世紀初頭を前後する古い時期のものがかなりある。このようなことを考えると，第49・50号住居跡も，以外と古く，D群中の最古段階のものとなるかもしれない。ただ，確実な証拠は無い。　（中間）

第51号住居跡（図版61，第126図）

大きな住居群であるD群とE群の西側中央に，第51～53号住居跡，第17・18号掘立柱建物跡，



第126図　第51号住居跡実測図（1/60）



第127図　第51号住居跡カマド実測図（1/30）

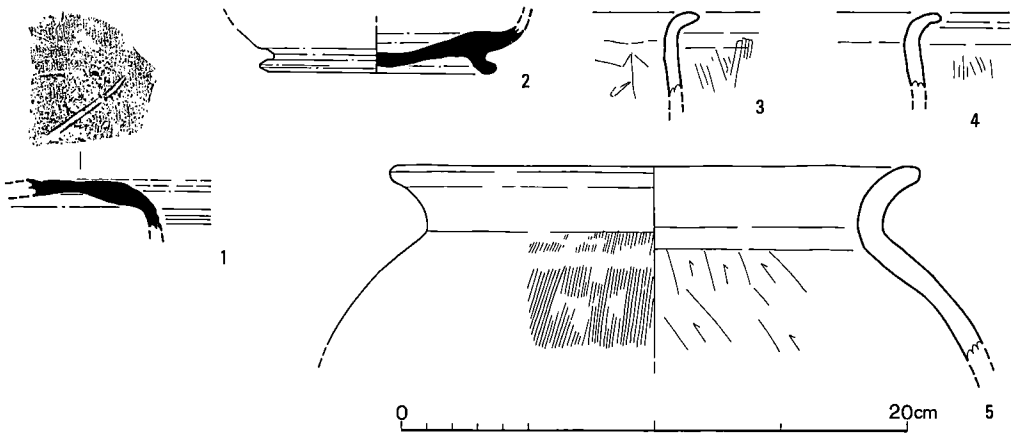
巨大な第47号土壙，第2号井戸などの一群がみられ，F群と呼称したい。このF群は遺構の数を他と比べると著しく少ないが，いずれも大型住居で，土壙も巨大であり，他の住居群と性格が全く異なると考えたい。本遺跡全体としても中央部を占めており，かなり重要な一群と思われる。

第51号住居跡はこのF群中央に位置し，第18号掘立柱建物を切り，近代溝（第49号溝）に北端を切られる。1辺5.0mの大型方形住居跡で，4主柱穴を配置しており，その掘方の深さは1m近くもあり，しっかりと埋め込んでいる。床面下は四周で大きく掘り込んでいるが，中央付近では貼り床は殆んどみられない。

カマド（図版62，第127図）　北西壁の中央に設置されているが，残りは極めて悪い。壁外方へ大きく掘り込むB類になり，袖部は貼り床の上に構築している。このカマドの燃焼部直下に第18号掘立柱建物の西南隅の柱穴が検出されており，両者の前後関係が確認された。

出土遺物（第128図）

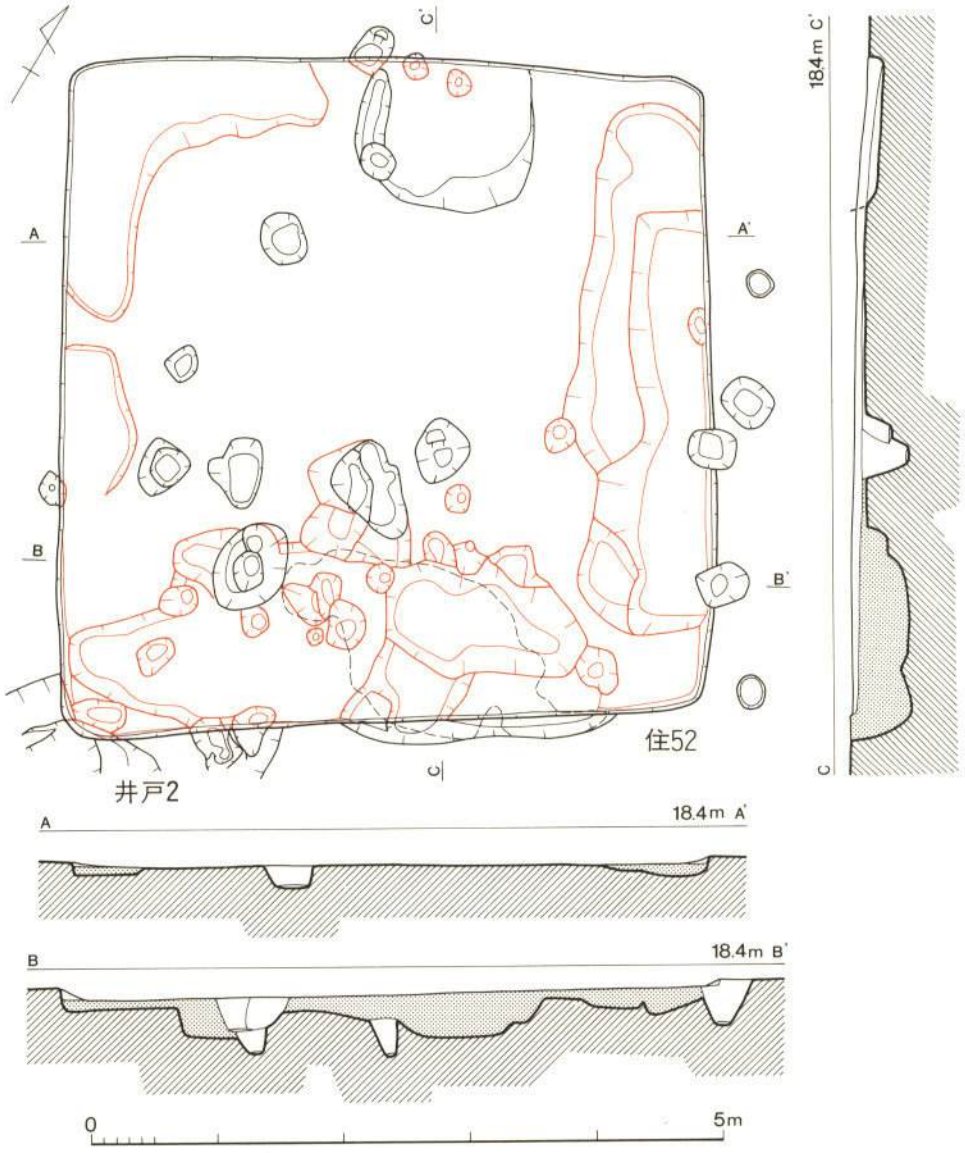
1は須恵器蓋で，短頸壺等にかぶさるものか，或いは身となる可能性も考えられる。体部外



第128図　第51号住居跡出土土器実測図（1/3）

面に２条の沈線をめぐらせ，天井外面はナデており，その上にヘラ記号が施される。２は須恵器杯身で，外方へ強く踏ん張る高台を付ける。体部外面下端までは横ナデ，底外面は回転ヘラ削り痕が残る。内面は灰かぶりしている。３は薄手の土師器小甕で，４も同類である。５は，口径21cmを測り，胴が強く張り，頸部で肥厚せず，丸く反転して開く口縁となる。

以上の出土土器は，１が７世紀中頃で古く，２が７世紀中頃に近い後葉代となり，５も後者に近い形態をなす。１を混入品と考え，ここでは第51号住居跡の営まれた年代は，７世紀の中頃に近い後葉代と考えておく。（中間）

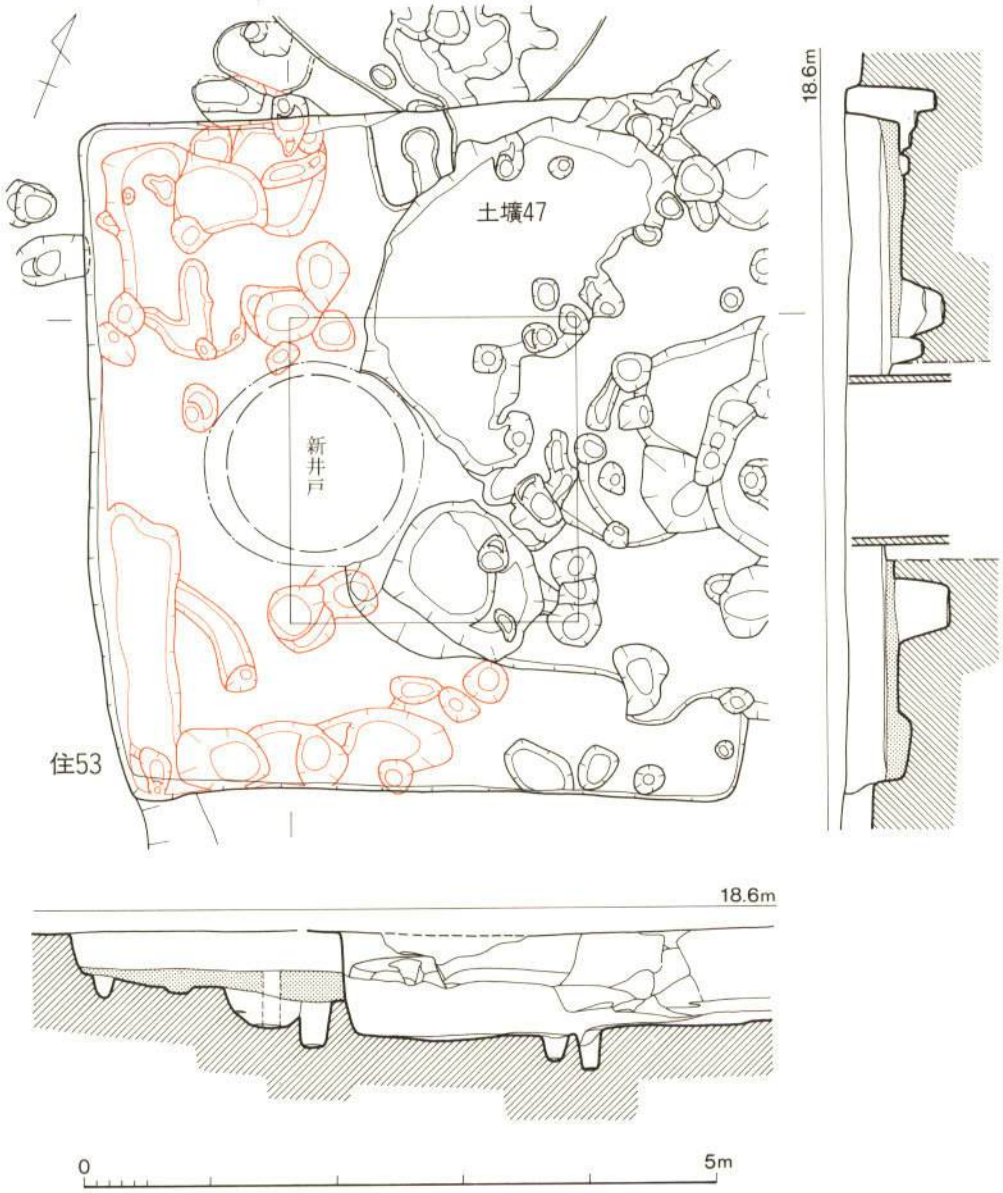


第129図　第52号住居跡実測図（1/60）

第52号住居跡（図版63，第129図）

F群西端の第51号住居跡の西隣に位置する。南端で第２号井戸を切る。床面積26.5㎡にもなる大型方形住居となる。

床面における４主柱穴配置はみられず，小型住居では珍しくないこの特徴が大型住居に示されていることは重要である。床面下は南壁沿いに大きく掘り込まれている。中央部では貼床は



第130図　第53号住居跡実測図（1/60）

殆んど施されていない。

カマドは残存していない。ただ，北壁中央が新しい攪乱により掘られており，カマドがもし在ったとすれば，この位置であったと考えられる。しかし，壁外方へ掘り込むB類ではなかった事は確実で，A類であったとしても，周辺に焼土等のカマド存在を積極的に支持する証拠は無い。存在しなかった可能性も強い。

以上のように，大型住居であるにも関らず，通有の床面4主柱穴を持たず，カマドの存在すら疑問とされる，このような特殊な様相は何を物語るのであろうか。本遺跡全体の中央に位置することからも，この集落の共同使用に供されるというような，集会場的な性格を考えていいかもしれない。

残念ながら出土遺物のうち図示に耐え得るものは皆無であった。このような大型住居にしては如何にも珍しく，上述したような特殊用途の性格を示すものかもしれない。或いは廃棄後に，意識してごみ捨場とすることを忌避したことも想像される。

ただ，南端で第2号井戸を切っていることから，この第52号住居跡は7世紀後半～末を上限とする時期と考えられる。（中間）

第53号住居跡（図版64，第130図）

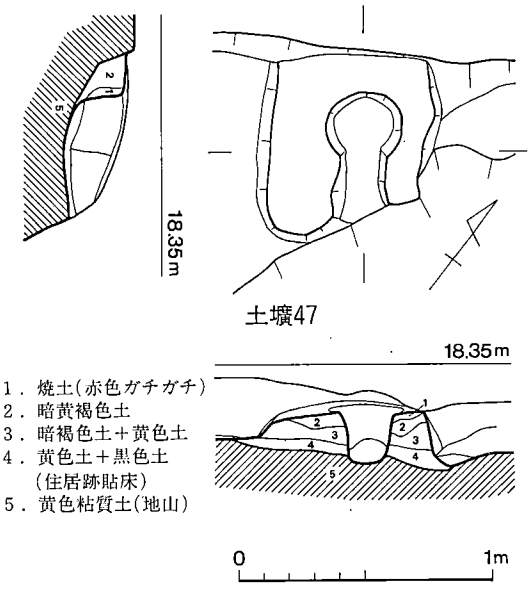
F群の東南側に位置し，床面積28.6㎡を有する大型方形住居である。中央部に畑灌のコンクリート製枠を持った井戸があり，東側は大きく第47号土壙に切られている。

床面下は各壁沿いを中心に掘り込まれ，全体に厚く貼り床が施されている。東側の2柱分は第47号土壙に切られて明確ではないが，床面に4主柱を配するものと考えられる。

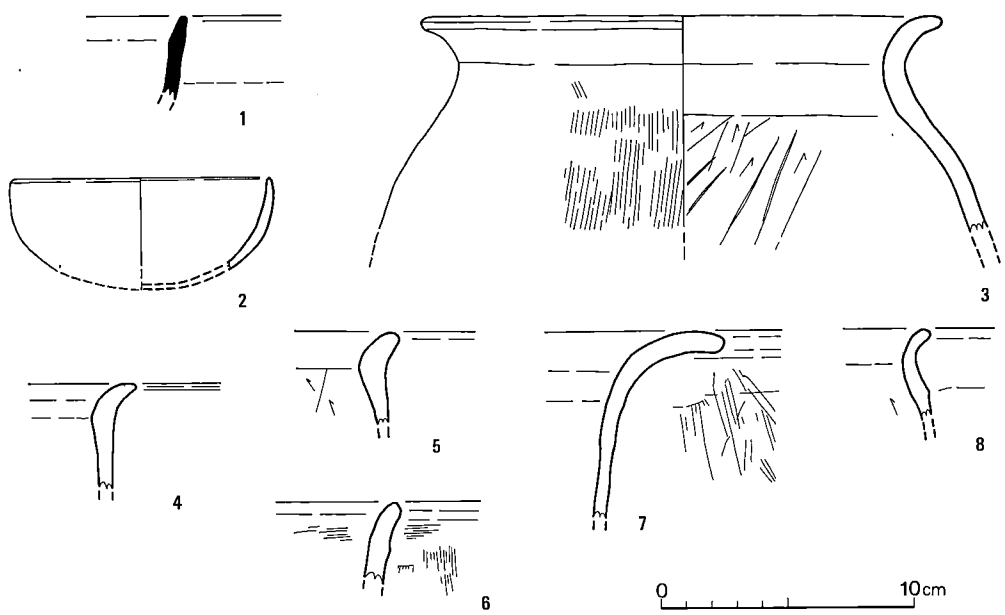
カマド（図版64，第131図）北壁の中央に設置されている。壁外への掘り込みを行わないA類である。暗黄褐色土を袖に使用し，燃焼部奥壁と袖上面は焼けて固く赤変している。

出土遺物（第132図）

1は，須恵器杯身で，体部外面下端は回転ヘラ削りが施される。2は全体に内湾気味に立ち上がる土師器椀で，復原口径10.4cmを測る。内外面ともに



第131図　第53号住居跡カマド実測図（1/30）



第132図　第53号住居跡出土土器実測図（1/3）

磨滅して調整はわからない。3は，口径20.6cmを測る土師器甕で，胴中位で張り，頸部はそれほど肥厚せずに丸く反転して開く口縁となる。4は，胴の張らない土師器小甕で，全面磨滅しているが，内面はヘラ削りかと思われる。5は寸詰まり気味となる土師器小甕片で，外面は磨滅している。6は甑の口縁となると思われ，極く僅かに外傾するだけの形状をなす。7は，器壁の薄い胴部から大きく長く反転して開く器形となる。胴部内面はヘラ削りが施され，煤が付着している。8は薄手の土師器小甕で，二次火熱を受けて赤変し，煤も付着している。

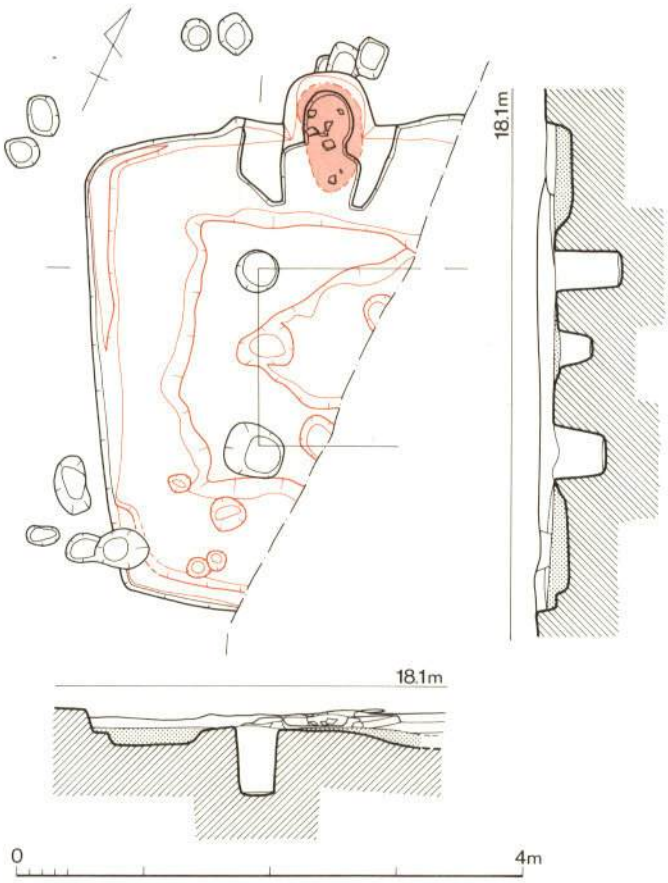
以上の出土遺物は2・3などが古い様相を示しており，この住居を切る第47号土壙西半部が7世紀後葉頃に掘削されたことを考えると，この第53号住居跡は，7世紀前葉～中頃の時期に営まれたものと考えられる。（中間）

第54号住居跡（図版65，第133図）

本遺跡の最西北端の住居群C群の東側に，やや離れて第54～56号住居跡が占地している。ここでは一応C″群と呼称しておく。この3軒のうち東端に本住居は位置している。これから東側のD群までの間約50mは僅かに微低地状を呈しており，小ピットも少なく，この集落全体からみて中央部の広場状空閑地を呈している。

本住居跡の東半側は上面を削平されており，残存していない。2柱分は削平されて残らないが，床面に4主柱穴を配するものと思われる。床面下は各壁沿いと中央部で掘り込まれている。

カマド（図版66，第134図）北西壁中央に設置されている。壁外方へ掘り込んで，更に煙道が延びていたと推定される窪みも検出され，C類に含まれる。燃焼部床面から壁内面にかけては，全体に厚く焼けて黄赤色に変色している。燃焼部中央には，土師器小甕片が散乱しており，支脚に転用されたものかと考えられる。



第133図　第54号住居跡実測図（1/60）

出土遺物（第135図）

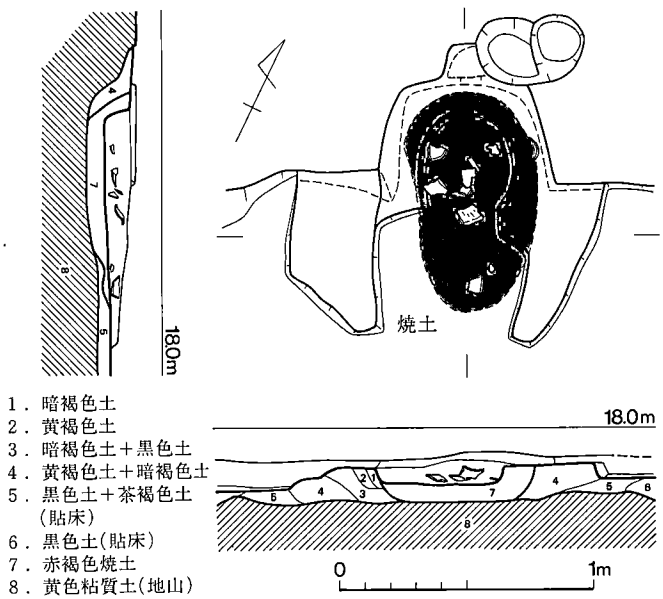
1は，須恵器甕の口縁片で，内外面ともに横ナデ調整を施す。口唇上端が突出する特徴を有する。2は，カマド内出土の土師器小甕で，口縁がゆるやかに反転して開く類となる。胴部内面はヘラ削りが施され，口径17.5cmを測る。3は，カマド内出土の小甕で，支脚に使用されたものであろう。口径11.9cmを測り，口縁はゆるやかに外傾する程度である。4もカマド内出土の小甕で，胴がややふくらみ，頸部内面に稜をつくり，短かく折れて開く口縁となる。口径15cmを測る。

以上の出土遺物は，全体に古い様相を示すものばかりではあるが，決め手に欠ける。大旨7世紀初～前半代と考えてよさそうである。（中間）

第55号住居跡（図版66，第136図）

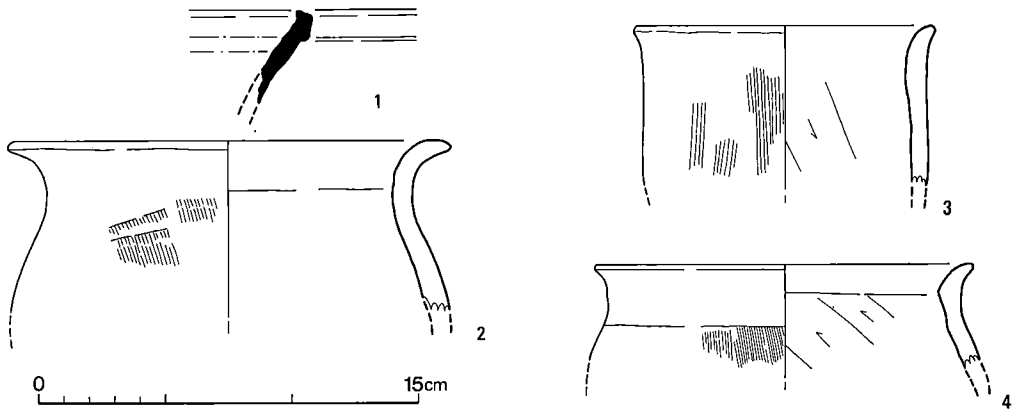
C″群の西北端に位置する。東隅のみが尖り気味に鋭角になり，北隅が隅丸形となるやや歪つなプランを呈する。

床面に4主柱穴を配置する。床面下は東隅寄りで大きく掘り込まれており，他はそれ程でもない。全体に5cm弱厚さの貼り床を施している。



第134図　第54号住居跡カマド実測図（1/30）

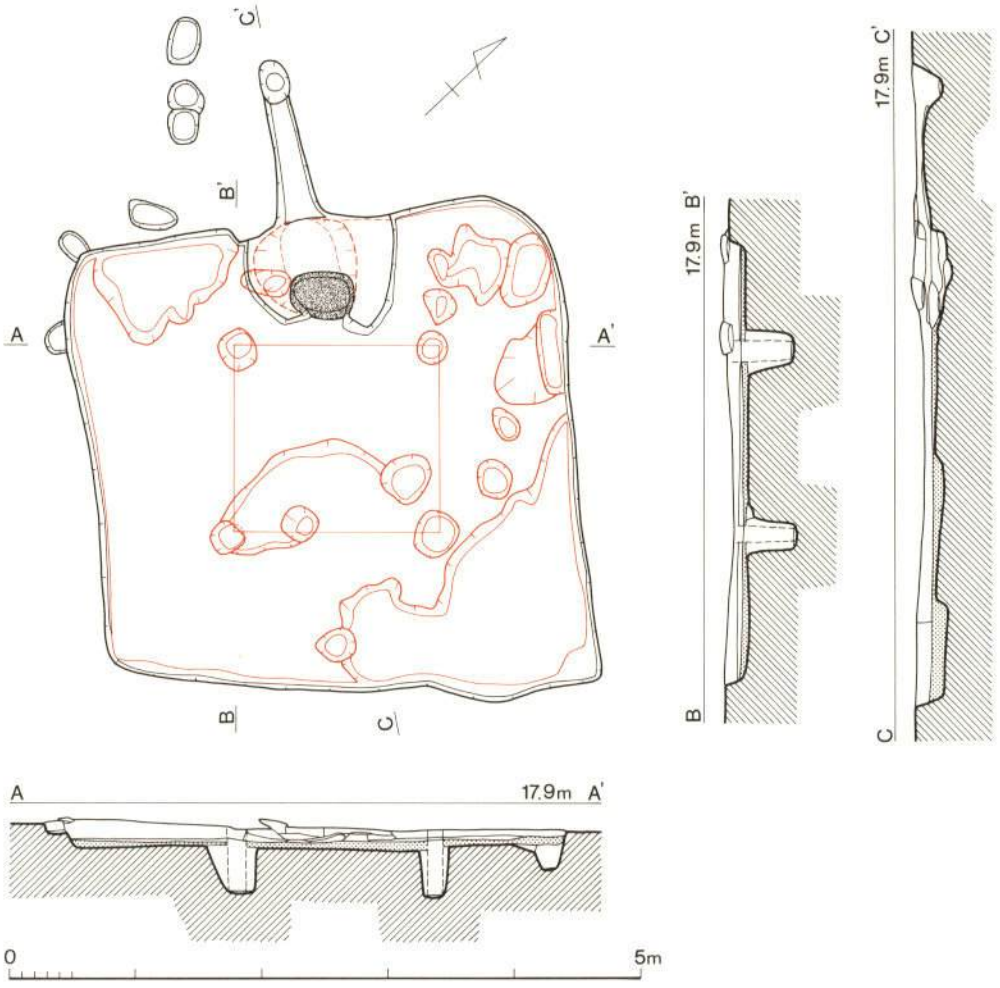
カマド（図版67，第137図）北西壁の中央に設置されている。煙道が外方へ1.3ｍも細長く延びる類であるが，燃焼部を壁外方へ掘り込んで作るタイプではなく，A類に属する。カマド分類の項（本書15頁）で，単に「煙道が長いタイプ」としてC類を設定したが，これは同頁の模式図に見る如く，B類のうちで煙道の長いものをC類としたもので，A類の煙道の長いものは敢えて分類しなかった。これは，本住居例の如きA類に煙道が



第135図　第54号住居跡出土土器実測図（1/3）

長く付くものが本例のみであったからで，他の殆んどはB類に煙道が付くものであったという理由による。本住居例によって，A類にも長く煙道を付けるものがあることが判かった。

また，この煙道部先端は小さなピット状をなしており，これから上方へと煙突状の構造物が立てられたものと思われる。燃焼部は当初，地山を大きく掘り窪めており，最終火床面は赤く焼けており，焚口部寄りで丸く浅い窪みがみられる。

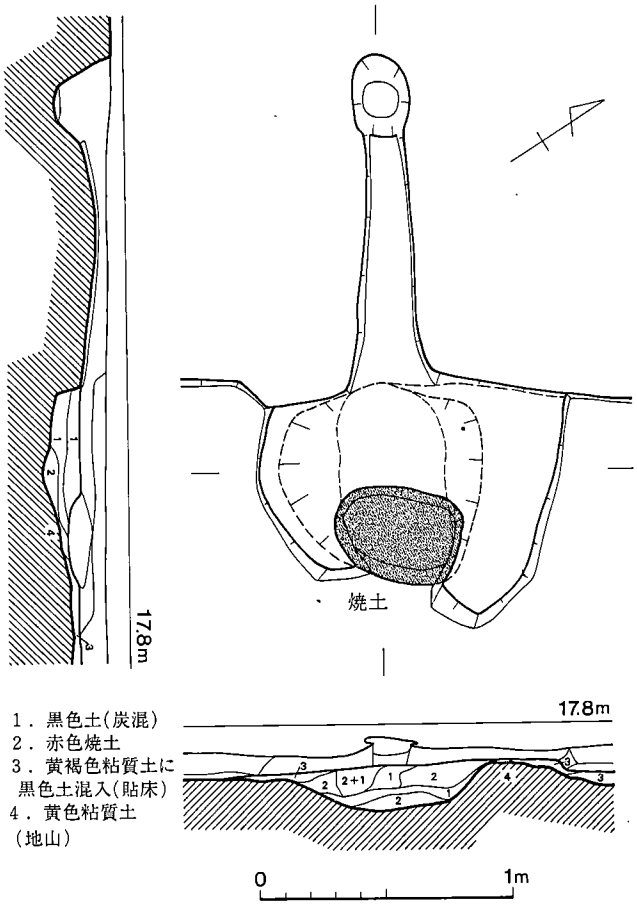


第136図　第55号住居跡実測図（1/60）

出土遺物（第138図）

1は須恵器甕胴部片で，外面は小さな格子目叩きの上をカキ目，内面は青海波が施されている。内外面に焼きぶくれがみられる。2はカマド内出土品で，須恵器杯蓋と考えられる。天井部外面には回転ヘラ削りが施されている。3は体部中央に沈線をめぐらす須恵器高杯で，小型の類となろう。体部下半外面は回転ヘラ削りを施している。4はカマド内出土土師器甕で，口径19.8cmを測る。胴はあまり張らず，頸部で肥厚せずに，ゆるやかに外傾気味に開く口縁となる。5もカマド内出土品で，胴が強く張り，丸く外反して開く口縁となる。

以上の出土遺物は，1に格子目叩きという新しい様相をみるが，ここでは，2・4のカマド



第137図　第55号住居跡カマド実測図（1/30）

内出土という点を尊重して，この第55号住居跡は7世紀初頭前後に営まれたものと考えたい。　（中間）

第56号住居跡

（図版68，第139図）

C″群の南端に位置し，北西隅が大きく突出する，歪つなプランを呈する。北西隅は新しい攪乱により切られる。

4主柱穴が検出されたが，その配置は正方形をなさず，北西の1柱穴のみが北へ片寄っている。これは，本住居跡の竪穴プランと呼応して北西側のみの柱穴をずらしたもので，当初からの設計にかなったものであったと考えられる。

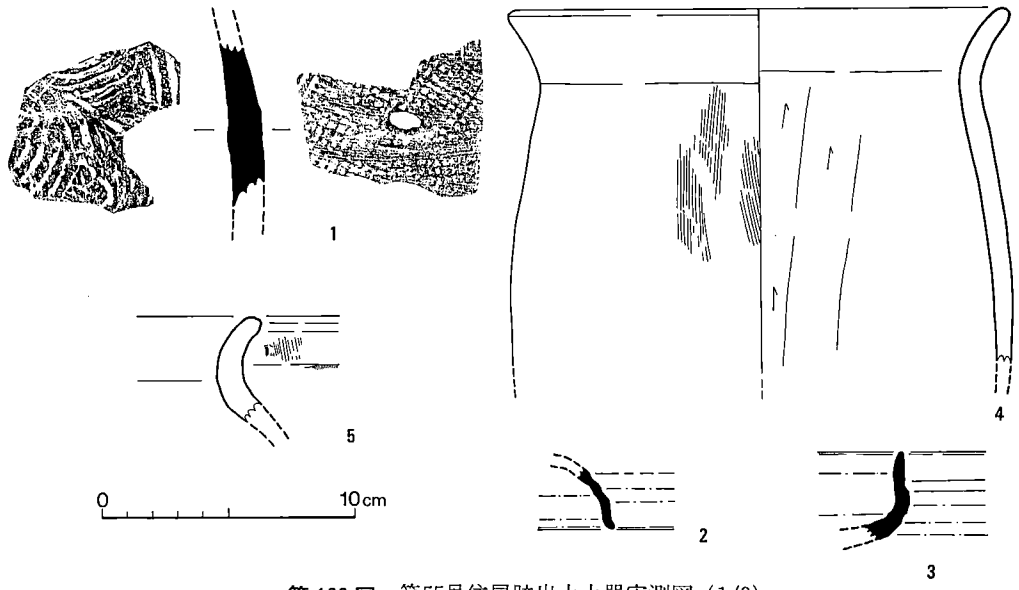
床面下は，部分的には掘り込みがいくらかみられるが，全体としては顕著ではない。ただ，最終床面は地山面から17cm強，厚く貼り床が施されている。

カマド（第139図）北壁の中央に設置されたらしく，焼土が拡がっている。袖やその他の構造物は全く残存しない。壁外方に掘り込んでいないので，A類だったと考えられる。

出土遺物のうち，図示できるものは皆無である。遺構の残存状況自体が極めて浅く，良くなかったためかもしれない。年代は不明である。　（中間）

第57号住居跡（図版69，第140図）

C群の南側の小支群C′群の東端に位置する。この住居跡の南側の大半が深く掘り込まれており，床面や貼床層，柱穴等が全く検出されなかった。また，この南半部は黒色土が充填しており，南隅においては壁下半をオーバーハングして掘り込んでおり，別の遺構と判断して第52号



第138図　第55号住居跡出土土器実測図（1/3）

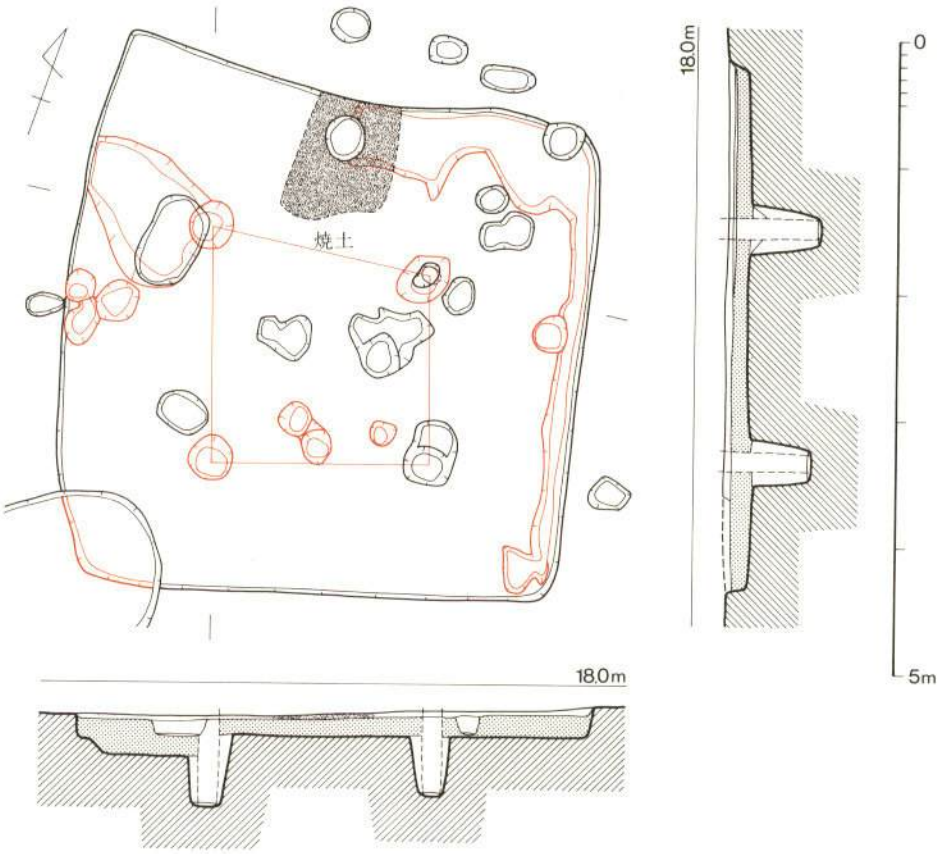
土壙とした。これは，第57号住居跡が放棄され，埋没段階でごみ捨場とされ，それが更に埋まっていたので，改めて大きくより深く掘り直された結果と考えられる。

本住居は大型住居に近い面積を有し，いくらか横長方形のプランを呈する。床面配置の4主柱は南側の第52号土壙掘削により残存しない。床面は北西壁寄りに僅かに残るのみであり，床面下層の状況も明確でない。

カマド（図版69，第141図）北西壁の中央に設置されている。壁外方には掘り込まないA類である。床面貼床層を切り込んで，燃焼部が浅く掘り窪められている。袖は貼床の上に暗黄褐色土を盛って築かれる。燃焼室中央には，土師器小甕が倒立して据えられており，支脚に転用されている。

出土遺物（第142図）

1は須恵器甕口縁で，復原口径24cmを測る。第54号住居出土のものと細部の形状がよく似ている。床面下からの出土品である。2は，須恵器甕胴部片で，外面は殆んど格子目といってよい程の叩きを施し，内面にはやや細身の青海波がみられる。3は，外面に格子目にやや近い条蓆状叩きを施し，内面には太い青海波がみられる。4は，カマドの支脚に使用された土師器小甕である。口径14cm，器高13.3cmを測り，胴は殆んど張らず，極めて短かく折れる口縁となる。胴部外面には黒斑部がみられる。細砂粒を多く含む。5もカマド内出土土師器小甕で，口径15cmとなる。頸内面に稜をつくるが，他は4とほぼ同工である。6は土師器甕片で，床面下出土品である。胴内面はヘラ削りと思われる。7は短かく折れる口縁となる土師器小甕片で，胴は



第139図　第56号住居跡実測図（1/60）

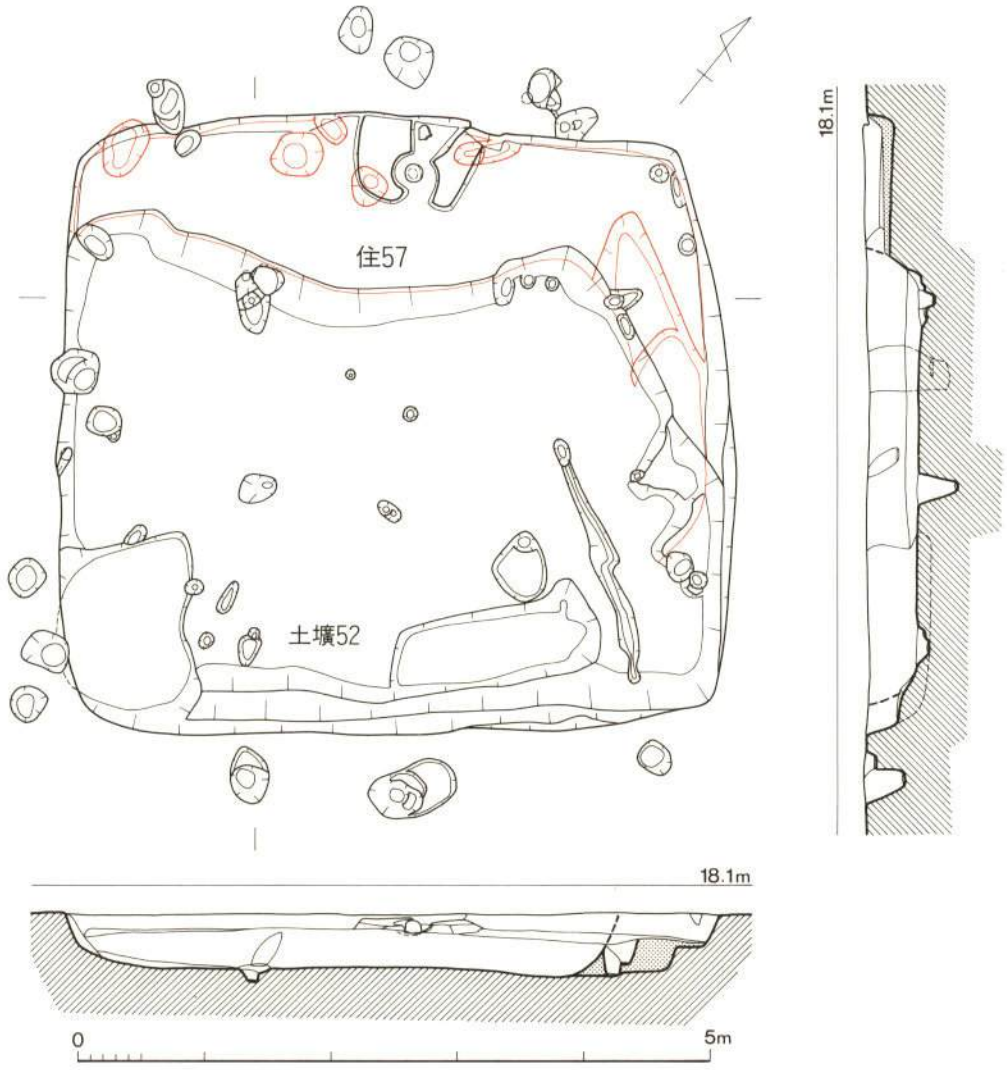
ほとんど張らない。8はわずかに外傾する程度の口縁となる土師器鉢である。胴部は内外面ともにヘラ削りを施している。9は床面下出土品で，外面は磨滅している。

以上の出土土器の中で，2・3・7・8などは第52号土壙のものである可能性が強い。新しい様相を持つからである。また，床面下出土の1・6・9はさすがに古いが，6世紀代にはっきりと上るものではなく，カマドの小甕などからみて，この第57号住居跡は7世紀初～前葉の時期に営まれたものと考えたい。（中間）

第58号住居跡（図版70，第143図）

C′群の北端に位置し，中規模程度の床面積を持つ方形住居である。下記の如き切り合い関係をなす。（古→新）

土壙57 → 住58 → 住31 → 土壙31 → 溝39
土壙57 → 土壙30 → 建物5 → 溝39

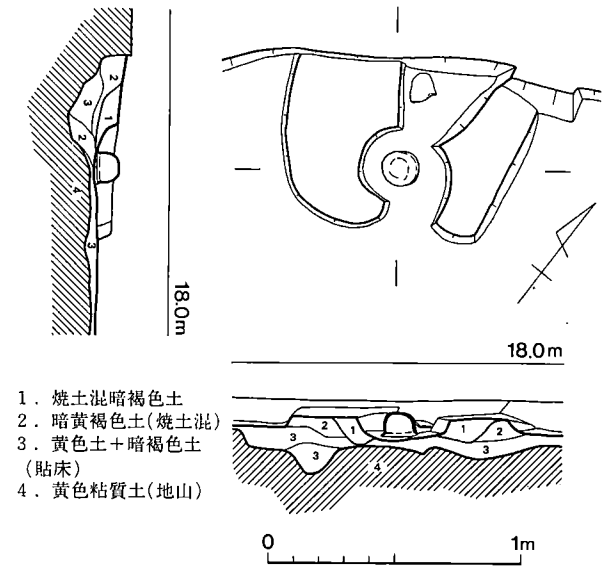


第 140 図　第57号住居跡実測図（1/60）

床面に 4 主柱穴を配するが，北側の 1 柱がより北側へ片寄っている。これは住居の竪穴自体のプランが，北隅と南隅がやや鋭角となる平行四辺形気味の形状を呈するために，それに対応させて配置されたものと考えられる。

床面下は全体に多くの凹凸が著しくみられるが，大きな掘り込みは認められない。

カマド（図版70，第 144 図）北西壁の中央に設置され，壁外方へ掘り込むB類となる。袖など全く残らないが，前面に焼土が拡がっている。燃焼部は貼り床層を切り込んで，浅い窪みをなしている。



第141図　第57号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（第145図）

1は須恵器杯身で，床面下出土品である。2も立ち上がりがまだ長めの杯身である。3は，土師器小甕口縁で，外面は磨滅している。4はカマド下層出土品で，ゆるやかに反転する口縁となる。5は床面下出土品で，土師器甑の口縁である。6は土師器甕の把手部分で，短かく，断面が丸いタイプである。

以上の出土遺物は床面下のものも含めてすべて古く，7世紀初頭～前葉の幅が考えられ，この第58号住居の営まれた時期とされよう。　　（中間）

第59号住居跡（図版72，第146図）

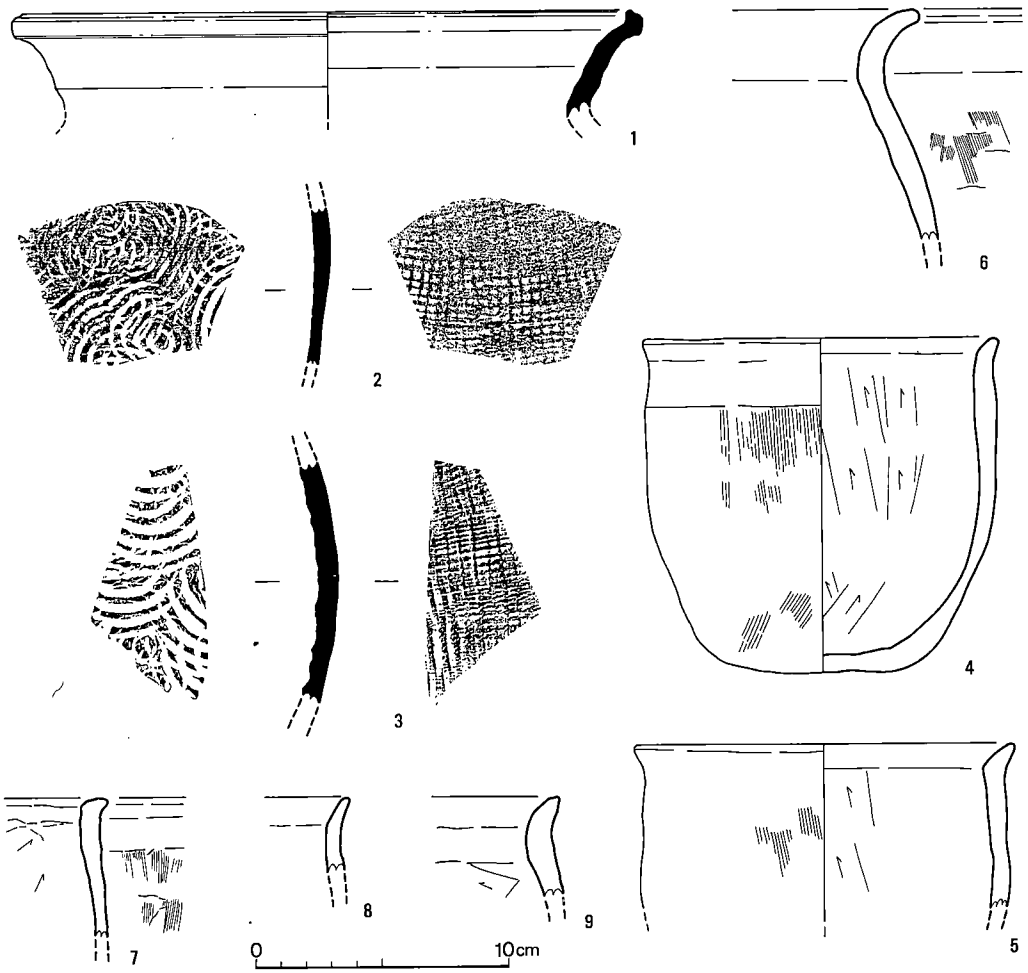
高松家墓地の調査終了後に検出した住居跡であり，高松家6号墓が北壁を切り，同2号墓が南壁を切っているため床面はH形に残る程度である。西壁の長さは3.75mを測り，コーナー部にピット等が存在するため正確な計測は不可能であるが，北壁長4.10m，東壁長4.25m，南壁長4.70m前後を測る不整方形の平面を呈しよう。壁高は北西側コーナー部で22cmを測る。

主柱穴は「井」字形に4本配されると考えられるが，断面図に示したP1・2の深さは10cm程度で主柱穴の可能性は低く，主柱穴そのものは墓に切られて存在しないものと思われる。床面はH字形に残る程度であるが，残存部分は踏み締められて堅くなっていた。また，床面は茶褐色土で貼床しており，貼床を掘り下げたところピット・落込み等を検出した。

遺物は埋土中から土師器小片が出土した。また，高松家2・6号墓埋土中からは，当住居跡に伴うと考えられる須恵器杯身・杯蓋，土師器甕・甑等の破片が出土している。

カマド（図版73，第147図）袖部を住居壁に直接貼り付けるタイプのカマドで，西壁中央に付設している。天井部は崩落し，袖部のみ残る。右袖は長さ36cm，最大幅31cm，残高19cm，左袖は長さ73cm，最大幅32cm，残高25cmを測る。また，袖部は暗褐色土・暗黄褐色土を盛っており，4・5層には焼土粒が混じっていた。左袖内には甕の破片を入れて補強を図っている。

煙道は掘削を受けたものか残っておらず，奥壁にあるピットは当カマドとは無関係のもの。



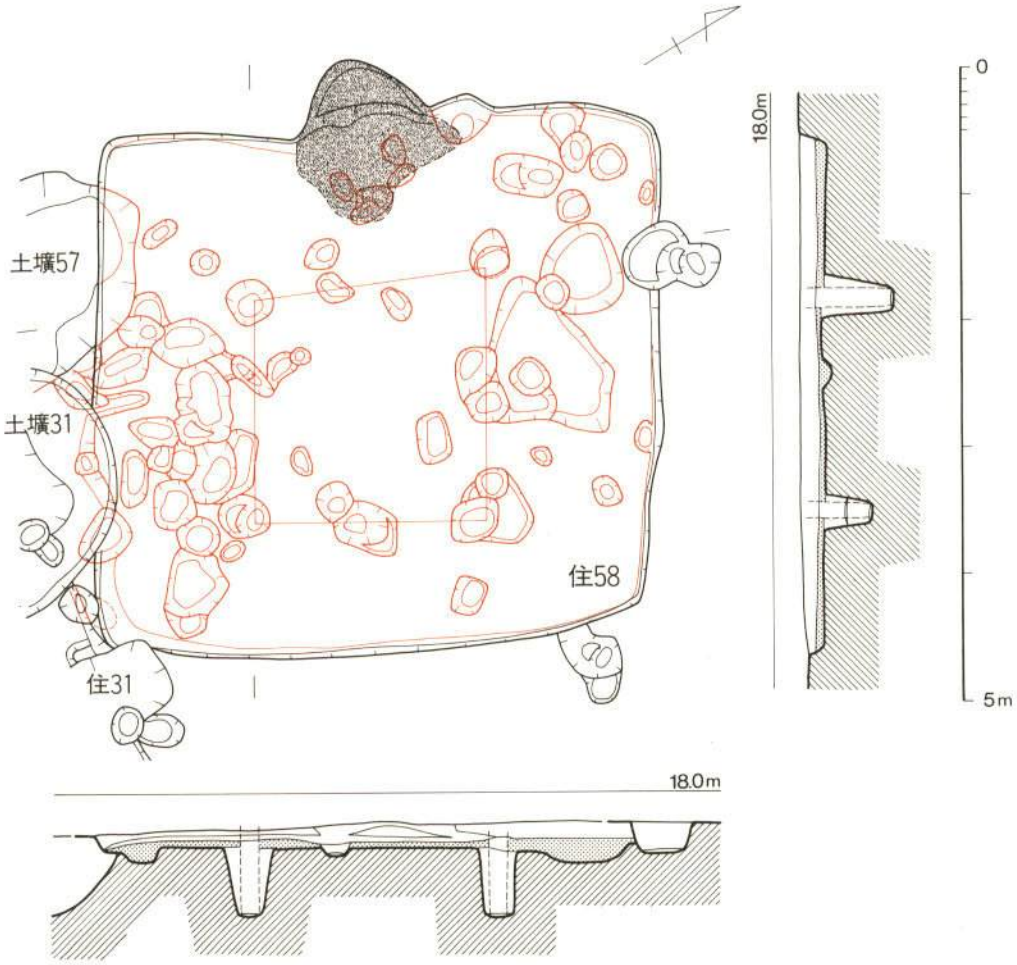
第142図　第57号住居跡出土土器実測図（1/3）

火床面・壁体はさほど焼けておらず，支脚は遺存しない。カマド内からは土師器甕・甑の小片が出土した。カマド主軸はN69°Wを示す。

出土遺物（第148図）

1は須恵器杯身である。受部付近の小破片であるが，受部径は11.2cmに復原できる。受部は回転ナデ，外底面は回転ヘラケズリによる。焼成は堅緻で，色調は灰青色を呈する。

2～5は土師器である。2は高杯で杯部と脚裾部を欠く。内外面はヘラケズリされる。胎土に石英・長石・雲母を含む。焼成は軟質で，黄褐色を呈する。3は小型甕の口縁～胴部にかけての破片である。口縁部は屈曲しているが，肉厚と言うほどではない。復原口径は13.0cmを



第143図　第58号住居跡実測図（1/60）

測る。内面は板ナデ，外面は器面剝離のため不明。胎土に長石・石英を多く含む。4は口縁部破片である。直線的であることから甑になろうが，もう少し傾くかも知れない。口縁端部は丸い。外面はハケ目調整による。3・4ともカマド内の出土である。5は甑の取っ手部破片である。内外面ともヘラケズリ調整による。

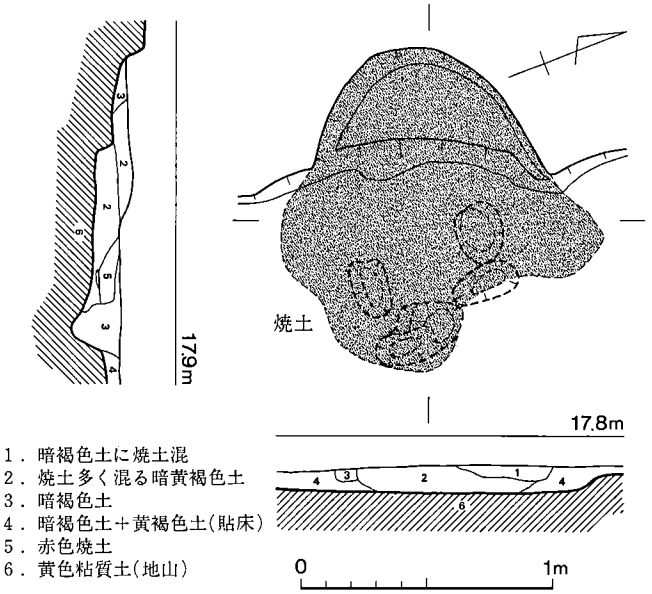
1・2は高松家2号墓埋土中の出土であるが，当住居跡に帰属していたと考えられ，当住居跡の時期は6世紀末であろう。（小田）

第60号住居跡（図版73，第149図）

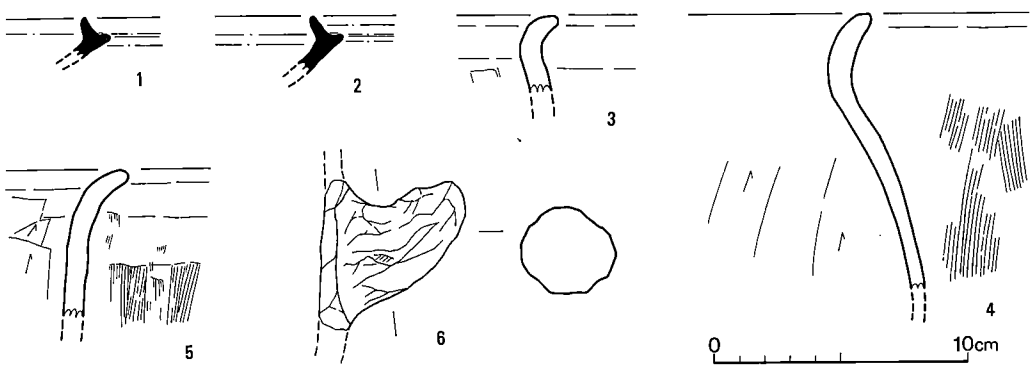
高松家墓地の調査終了後に検出した住居跡であり，59号住居跡に北接する。当住居跡は高松

家6・10～12号墓に切られており，辛うじて南東側コーナー部とカマド付近を残す程度であった。規模は，残存する壁面からみて東西長3.87m，南北長3.70m前後を測り，平面形は方形を呈しよう。主柱穴は墓に切られて存在しないが，「井」字形に4本配されていたものと考えられる。壁高はカマド側で22cmを測る。

遺物は埋土中から土師器甕の小片が出土した。また，高松家10・11号墓埋土中からは，当住居跡に伴うと考えられる須恵器



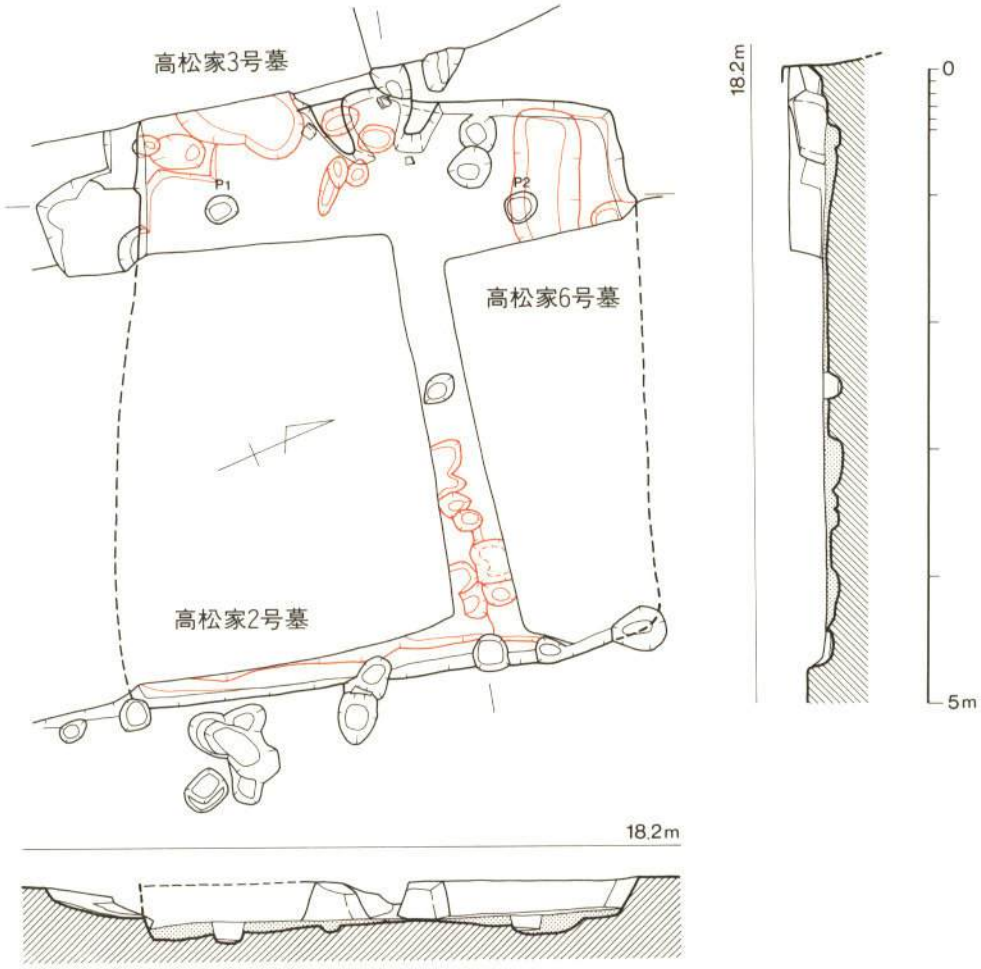
第144図　第58号住居跡カマド実測図（1/30）



第145図　第58号住居跡出土土器実測図（1/3）

杯・甕・横瓶，土師器甕等の破片が出土したが，図示できる遺物はない。

カマド（図版74，第149図）住居壁から方形に突出させた掘方を有するタイプのカマドで，西壁側に付設している。カマド壁体は幅90cm，奥行き55cmの方形に掘り込んでいるが，天井部は崩落し，袖部は11号墓に切られて遺存しない。壁面・火床面はよく焼けていた。また，支脚は遺存していなかった。カマド内からは土師器甕の破片が出土した。カマド主軸はN 78°Wを示す。



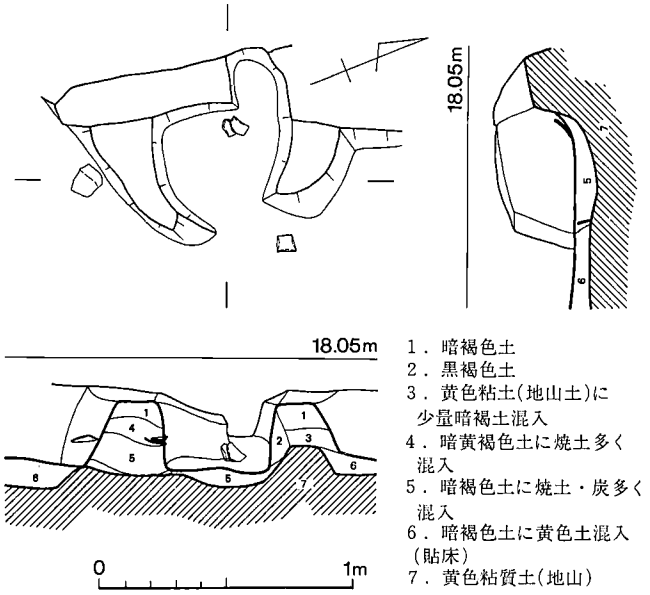
第146図　第59号住居跡実測図（1/60）

出土遺物（図版第150図）

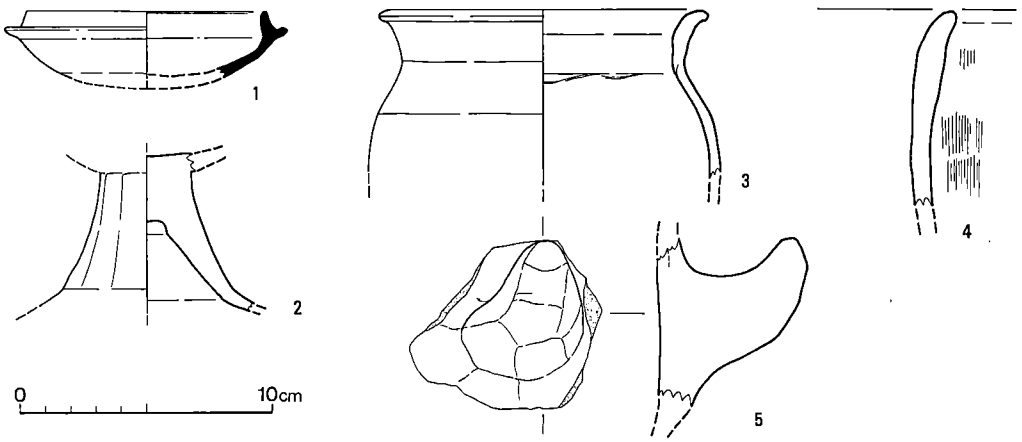
1は大型の土師器甕で，カマド内の出土である。口縁部は緩やかに外反し，口唇部は丸い。外面ハケ目，内面ヘラケズリ調整による。焼成は良好で，黄褐色を呈する。また，口縁部内面～胴部外面にかけて煤が遺存している。

2は丸瓦の破片である。土管状のものを2分割しており，分割部はヘラによって3面面取りされている。凸面は縦方向のナデで叩き痕を丁寧に消している。凹面みられる山形の凹凸は，竹を編んで作った簀子状の型の使用により生じたものと考えられる。また，矢印で示した部位は，紐の位置に当たり，その間隔は10cmである。胎土には砂粒を含むものの精良である。焼成は堅緻で，淡灰色を呈する。混入したものか。

当住居跡は，第59号住居跡（6世紀末）に隣接するが，その位置関係からみて併存していたとは考えられず，第59号住居跡より古いか，新しいかの何れかである。第59号住居跡のカマドは，袖部を住居壁に直接貼り付けるタイプであるが，当住居跡のカマドは，掘り方が突出するタイプであり，それよりは新しい様相を呈する。



第147図　第59号住居跡カマド実測図（1/30）

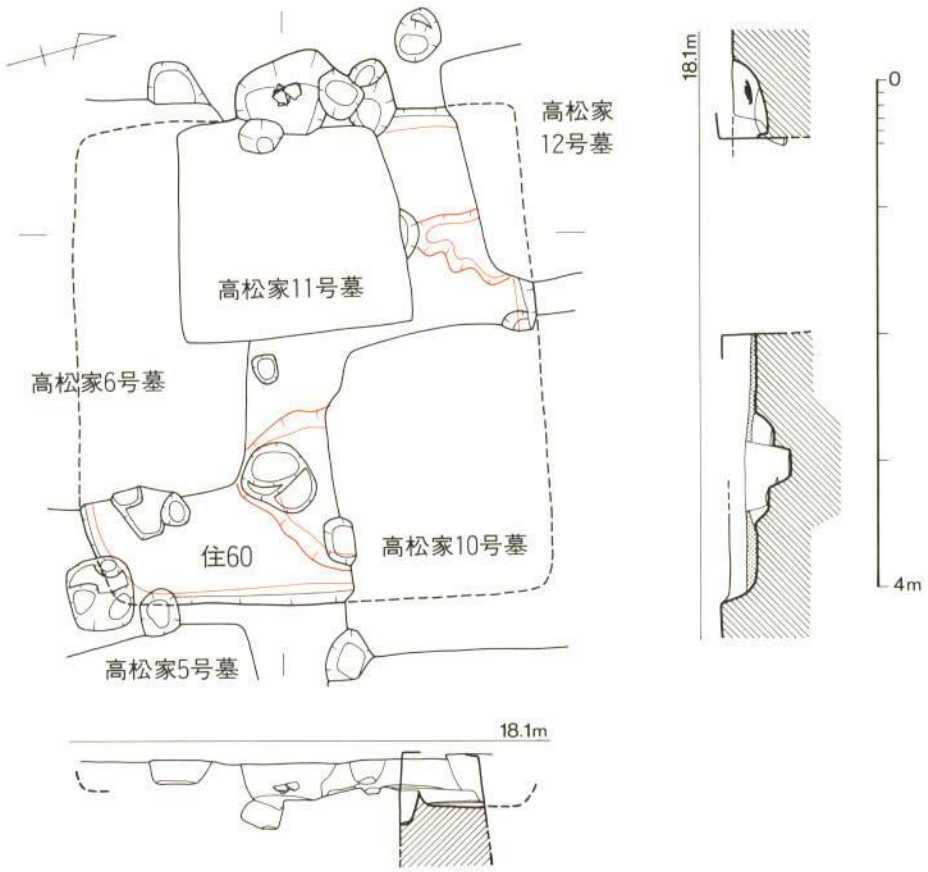


第148図　第59号住居跡出土土器実測図（1/3）

カマド内出土の甕は，口縁部が肥厚することなく外反し，また，口縁部内面のヘラケズリによる稜が不明瞭である。以上のことから，当住居跡の時期は7世紀前半頃であろう。（小田）

第61号住居跡（図版75，第151図）

高松家墓地の調査終了後に検出した住居跡であり，第24号住居跡の北西に位置する。当住居跡

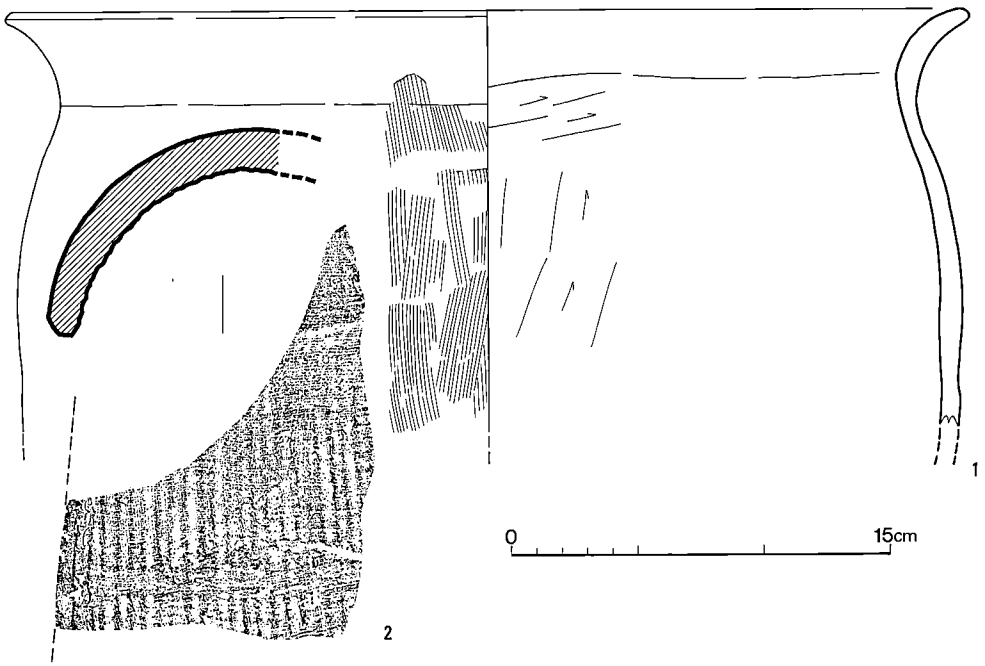


第149図　第60号住居跡実測図（1/60）

は高松家8・13・14・23号墓及び第35号溝に切られている。また，第62号住居跡と切り合い関係にあるが，当住居跡が切られているようであり，辛うじて南東側コーナー部とカマド付近を残す程度であった。規模は4.50m前後を測り，方形を呈しよう。壁高は南東側で13cmを測る，柱配置についてはよく判らなかった。また，床面は茶褐色土・黄褐色土で貼床しており，貼床を掘り下げたところピット・落込み等を検出した。

遺物は埋土中から須恵器杯蓋及び土師器甕の小片が出土した。また，高松家８・13・14・23号墓埋土中出土の須恵器杯・甕，土師器甕小片の一部には当住居跡に伴うものもあろう。

カマド（図版75，第151図）西壁側に付設しているが，第35号溝に切られているため遺存状態は悪く，左袖部が長さ42cm，幅30cm残る程度である。また，左袖の右側にある粘土塊は崩落した天井部の残骸であろう。カマド内からの遺物の出土はなかった。

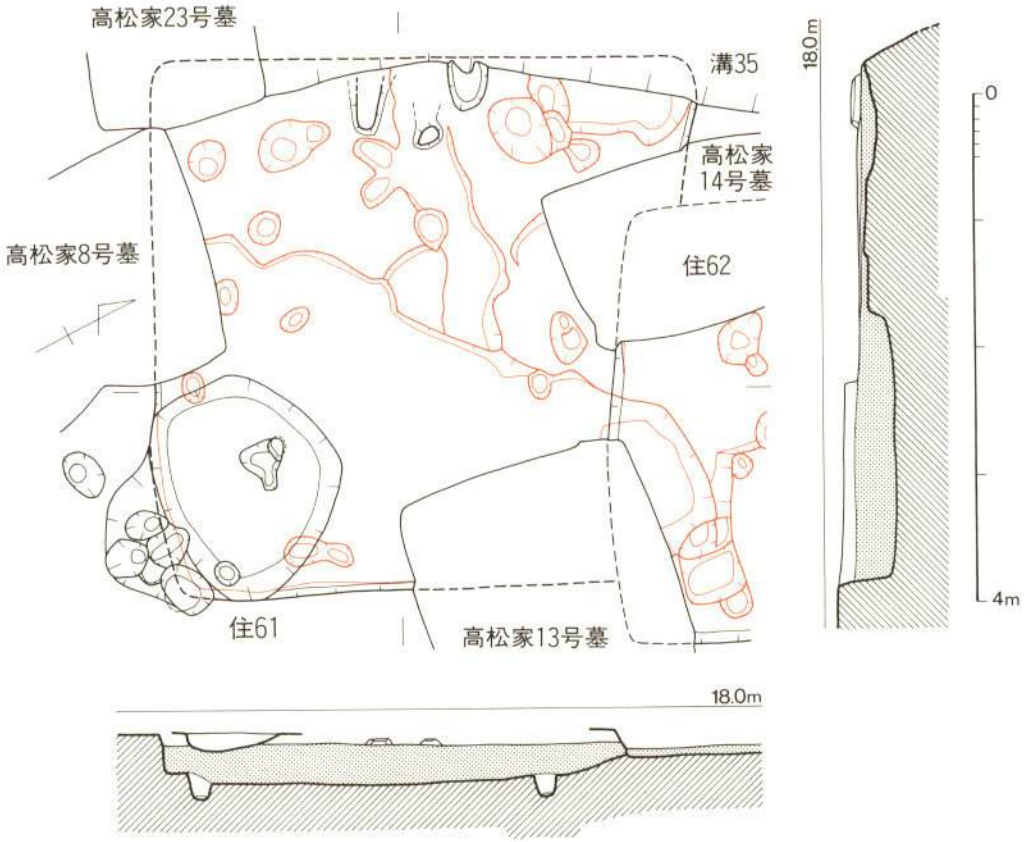


第150図　第60号住居跡出土土器実測図（1/3）

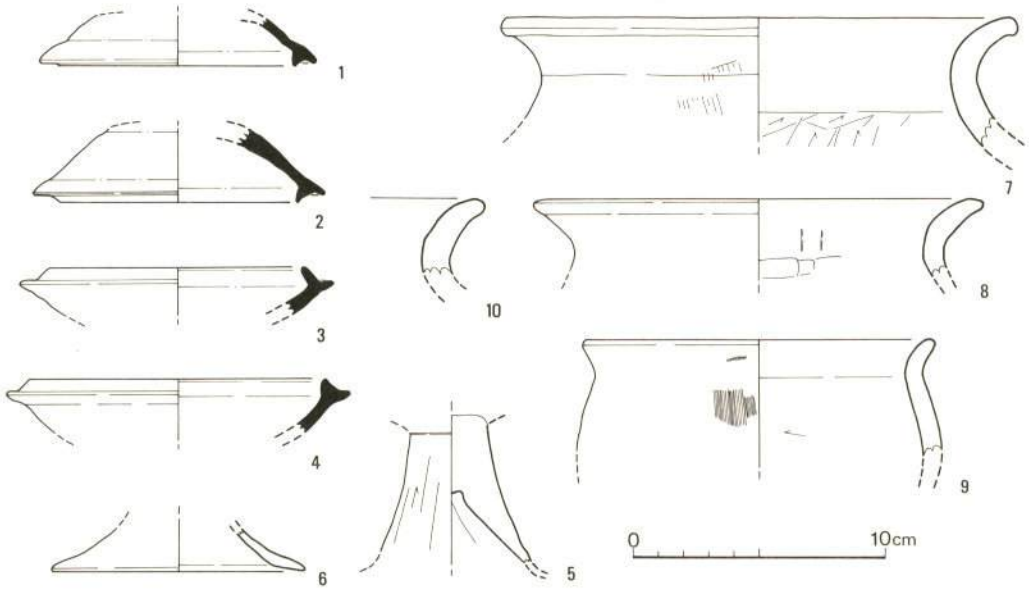
出土遺物（第152図）

1～4は須恵器，5～10は土師器である。1・2はかえりを有する杯蓋の口縁部破片であり，高松家8号墓埋土中の出土である。2のかえりはよく突出しているが，1のかえりはそれ程でもない。口径は1が11.0cm，2は11.6cmに復原できる。口縁部調整は1・2とも回転ナデで，外面は灰を被っている。両者とも焼成は堅緻で，色調は青灰色を呈する。3は杯身の受部破片である。4は受部の立ち上がりは弱いが，受部径は13.6cmと比較的大きいことから杯身とした。受部調整は3・4とも回転ナデによる。両者とも焼成は堅緻で，色調は3が青灰色，4は灰白色を呈する。3は高松家14号墓，4は同13号墓埋土中の出土である。

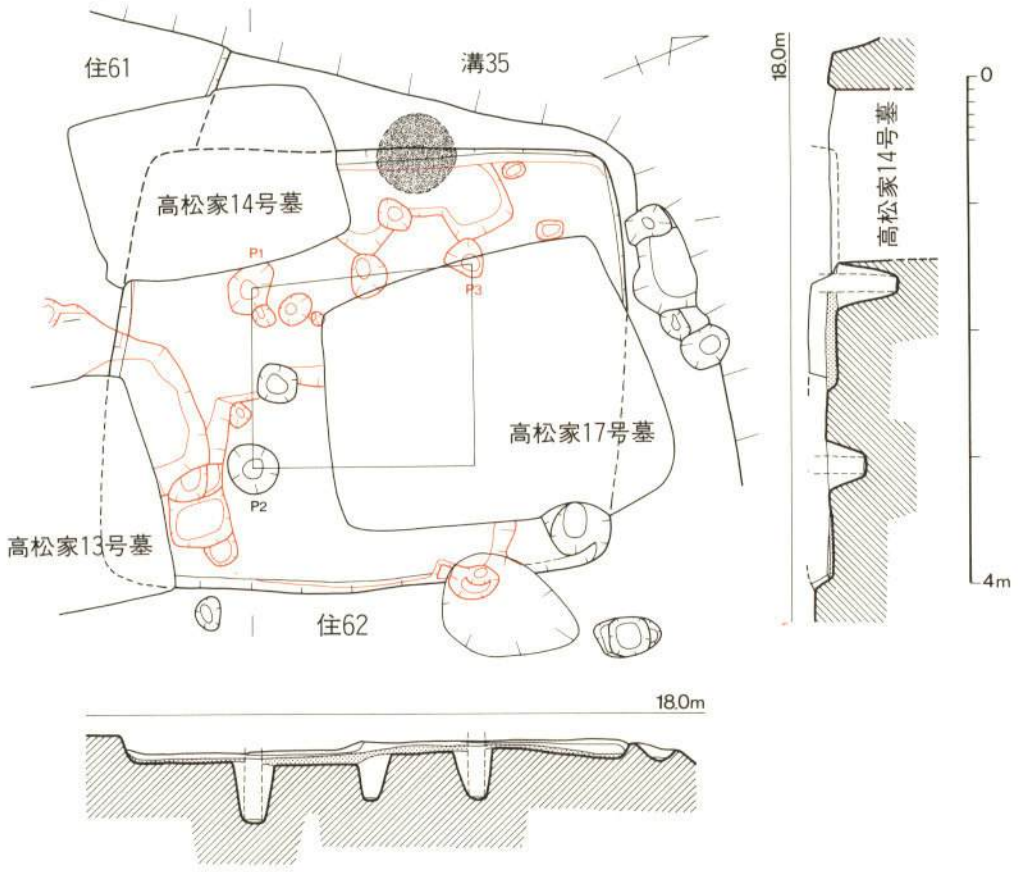
5・6は高杯で，5は脚柱部，6は脚裾部の破片で埋土中の出土である。5は内外面ともヘラケズリ調整による。6の器面調整は，磨滅により不明。両者とも胎土に石英を含み，焼成は良い。色調は5が黄灰色，6は黄褐色を呈する。7・8・10は中型甕の口縁部破片であり，7・10が埋土中，8は高松家8号墓の出土である。口径は7が20.4cm，8は17.8cmに復原できる。何れも口縁部は強く外反し，口唇部は丸く納める。調整は口縁部ヨコナデ，内面ヘラケズリ，外面ハケ目による。胎土に長石・石英を含み，7には赤褐色粒もみられる。色調は7が明橙色，8は暗黄褐色，10は黄褐色を呈する。9は小型甕の口縁～胴部にかけての破片であり，口縁部は如意形に屈曲する。復原口径は14.0cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ，内面ヘラケズリ，外



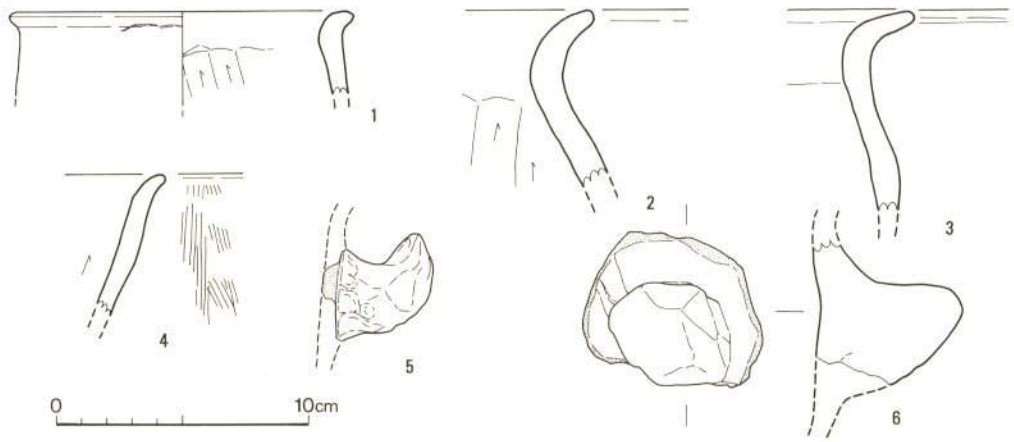
第151図　第61号住居跡実測図（1/60）



第152図　第61号住居跡出土土器実測図（1/3）



第153図　第62号住居跡実測図（1/60）



第154図　第62号住居跡出土土器実測図（1/3）

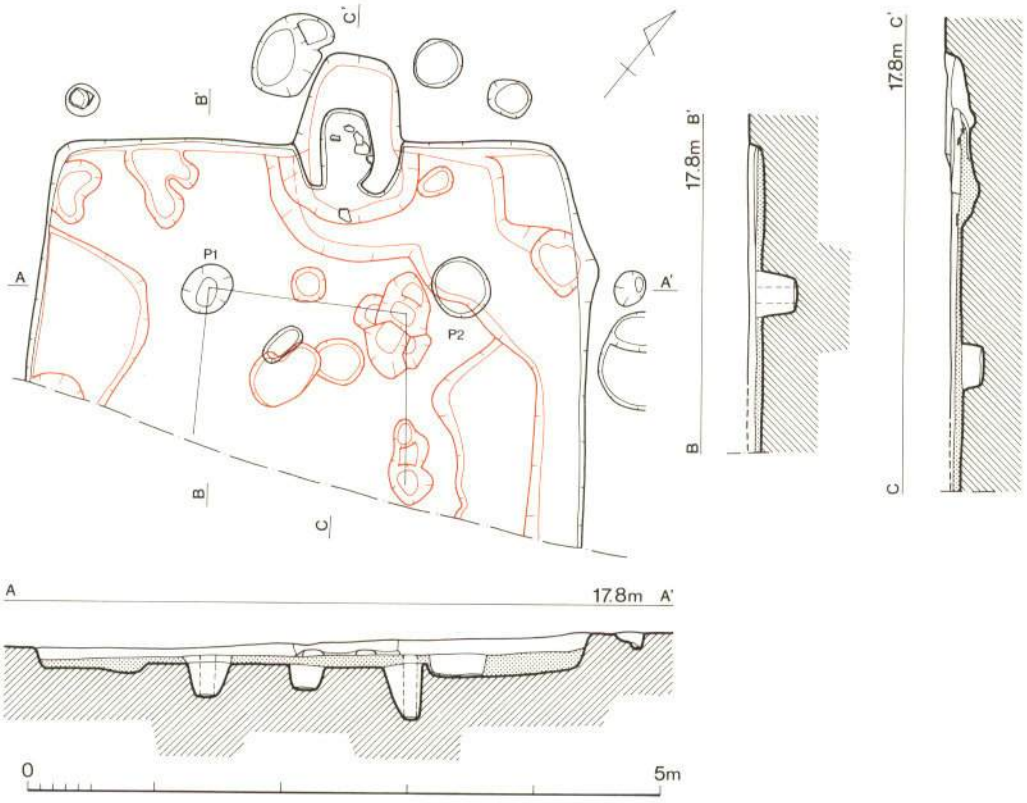
面ハケ目による。胎土に細砂を含む。焼成は良好で，褐色を呈する。また，器面は加熱により赤変している。

1・2の杯蓋は杯身が逆転した形態のものであること，また，7・8の甕は口縁部が強く締り，口縁部内面のヘラケズリによる稜が不明瞭であることから，当住居跡の時期は6世紀末～7世紀前半であろう。（小田）

第62号住居跡（図版75，第153図）

高松家墓地の調査終了後に検出した住居跡であり，第67号住居跡のすぐ南側に位置する。当住居跡は高松家13・14・17号墓に切られている。また，第61号住居跡と切り合い関係にあり，当住居跡がそれを切っているようである。

当住居跡も墓地に切られて残存状態はよくないが，規模の復原は可能である。北壁長3.18m，西壁長3.60m前後を測り，平面形は隅丸長方形を呈しよう。壁高は北西側コーナー部で11cmを測る。P1～3が主柱穴であるが，1本分は墓に切られて存在しない。深さはP1－53cm，P

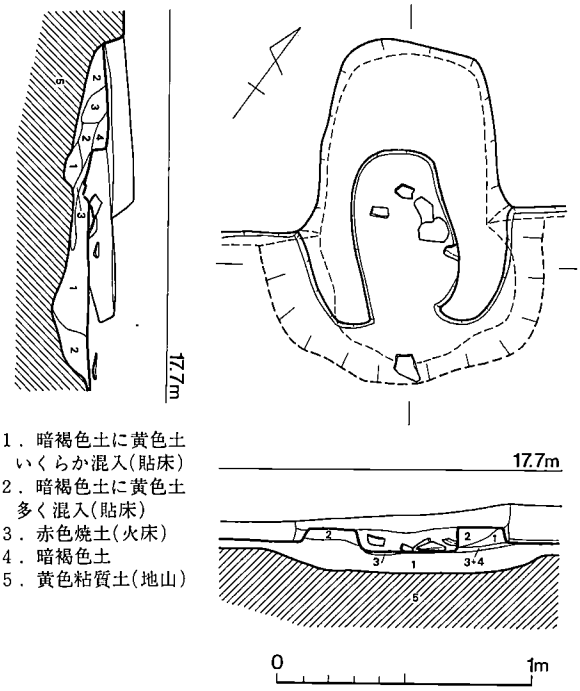


第155図　第63号住居跡実測図（1/60）

2－31cm，P 3－44cmを測る。柱間はP 1～3間1.76m，P1～2間1.44mを測る。

遺物は埋土中から土師器甕の小片が出土した。また，高松家13・14・17号墓埋土中からは須恵器杯・甕，土師器甕小片等が出土しており，当住居跡に伴うものもあろう。

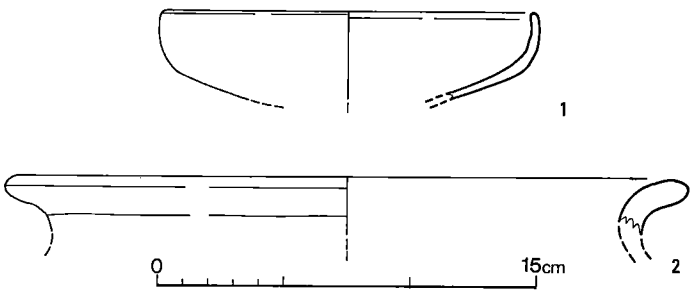
カマド（図版75，第153図）全く遺存しておらず，その形状・規模については知るすべもなく，ただ西壁中央にみられる焼土が当住居跡のカマドの残骸と考えられる。



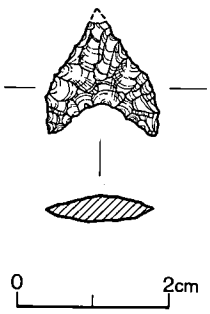
第156図　第63号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（第154図）

1～5は土師器である。1は小型甕の口縁破片である。口縁部は僅かに屈曲しており，やや肉厚である。復原口径は13.6cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ，内面ヘラケズリ，外面ナデによる。胎土に長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で，暗茶褐色を呈する。2・3は甕の口縁部小破片である。口縁部は大きく外反し，口唇部は丸く納める。2の内面はヘラケズリ調整による。3は磨滅が著しく調整は不明。4は僅かに屈曲する口縁部を有する土器で，傾きには自信がなく，或は小型甕になるか。5・6は甑の取っ手部破片である。胴部との接合は，ソケット式の挿入法による。1・6は高松家17号墓埋土中，2・4・5は貼床下部の出土である。



第157図　第63号住居跡出土土器実測図（1/3）



第158図
第63号住居跡出土石鏃実測図（実大）

当住居跡は，第61号住居跡を切っているものの，甕形土器においては，両者間に形態状の差異はみられないことから，時期は７世紀前半頃であろう。（小田）

第63号住居跡（図版76，第155図）

調査区の西端で検出した住居跡で，第28号住居跡の３ｍ南に位置する。住居の南1/3は側溝工事の際に破壊されて遺存しないものの，南側住居壁は調査区外に伸展しない（調査区南壁の土層で確認）ことから，４ｍ前後を測る方形ないしは長方形の平面形を呈しよう。北壁の長さは3.92ｍを測る。また，壁高は北東側コーナー部で12cmと浅く，かなりカットされている。

主柱穴は４本と考えられるが，南側２本は存在しない。深さはＰ１－32cm，Ｐ２－48cmを測り，柱間は1.62ｍを測る。床面は暗褐色土と黄褐色土で貼床しており，貼床を掘り下げたところピット・落込み等を検出した。遺物は埋土中から土師器甕・甑の小片が出土した。

カマド（図版77，第156図）住居壁から方形に突出させた掘方を有するタイプのカマドで，北壁のやや右寄りに付設している。カマドは，住居壁を幅65cm・奥行き70cmの長方形に掘り込み，黄色土混じりの暗褐色土を掘方に貼り付け壁体を形成し，更に前方に40cm突出させて袖部を盛っている。左右の袖の最大幅は22cmを測る。煙道は遺存しない。

支脚は遺存していなかったが，カマド縦断面図の中央の窪みが支脚の抜き跡とすれば，手前の土器のある部分が火床面に当り，奥側は天井部の崩落土ということになる。カマド内からは土師器甕・杯の破片が出土した。カマド主軸はＮ36°Ｗを示す。

出土遺物（第157図）

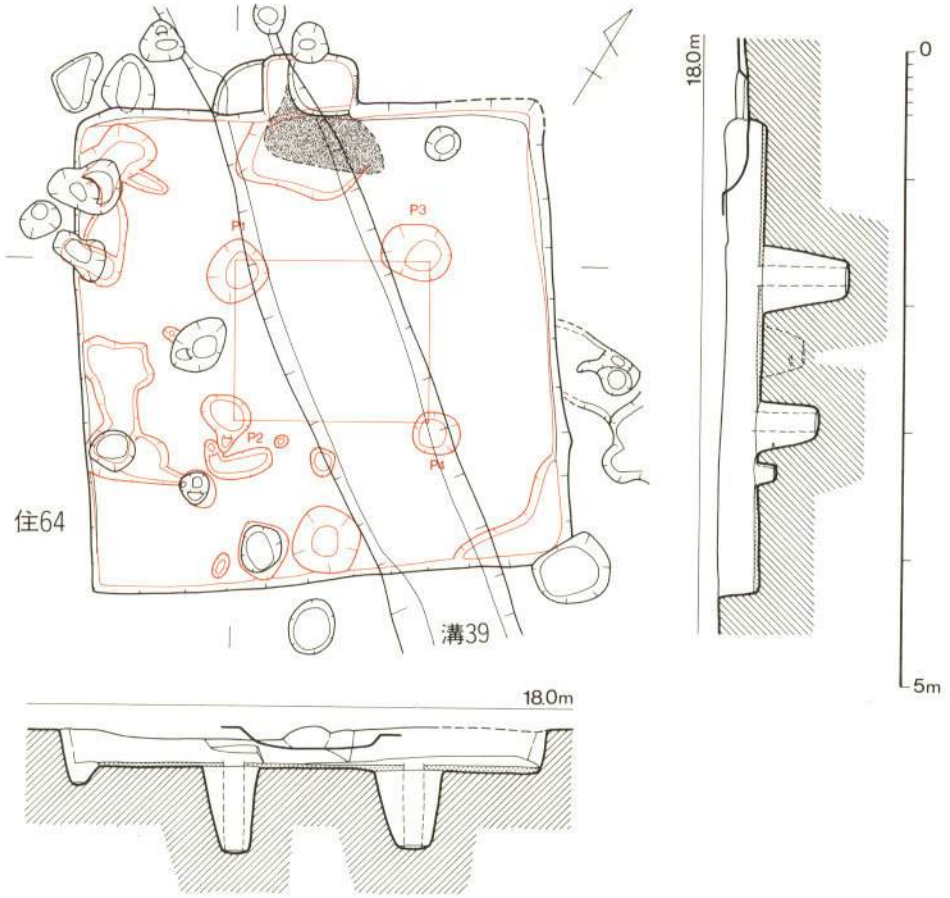
１は土師器杯であり，口径は15.0cmに復原できる。口縁部は内湾して立ち上がり，口唇部は丸い。磨滅により調整は不明。胎土は精良である。焼成は良く，黄褐色を呈する。２は土師器甕の口縁部破片であるが，小破片のため詳細は不明。１・２ともカマド内の出土である。

石器（第158図）黒曜石製の石鏃で，埋土中の出土である。先端を僅かに欠くが，現存長1.5cm，最大幅1.45cm，重量0.45ｇを測る。

当住居跡の時期は，出土土器に乏しく不明瞭ではあるが，１の丸みを帯びた口縁部を有する杯からして７世紀後半であろう。（小田）

第64号住居跡（図版78，第159図）

調査区の西側で検出した住居跡で，第30号住居跡の１ｍ西に位置する。また，第39号溝が当住居跡中央を横切る。規模は北西壁長3.72ｍ，南西壁長3.82ｍを測り，平面形は方形を呈する。壁高は南側コーナー部で27cmを測る。主柱穴はＰ１～４で，住居壁から1/3の箇所に配される。深さはＰ１－70cm，Ｐ２－48cm，Ｐ３－65cm，Ｐ４－43cmと全体的に深い。柱間はＰ１～２間1.20ｍ，Ｐ３～４間1.45ｍ，Ｐ１～３間1.55ｍ，Ｐ２～４間1.62ｍを測り，主柱穴間を結んだ

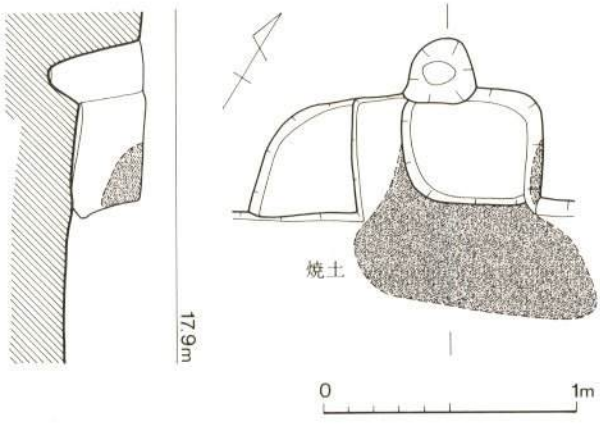


第159図　第64号住居跡実測図（1/60）

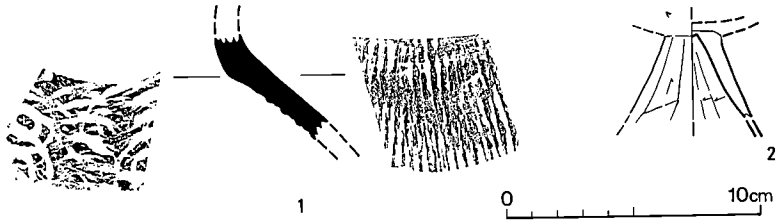
線は不整方形を呈する。

床面は暗褐色土と黄褐色土で貼床しており，主柱穴付近は踏み締められて堅くなっていた。また，貼床を掘り下げたところピット・落込み等を検出した。遺物は埋土中から須恵器杯，土師器甕・甑の小片が出土したが，図示できる土器は少ない。

カマド（図版79，第160図）　住居壁から方形に突出させた掘方を有するタイプのカマドで，北西壁



第160図　第64号住居跡カマド実測図（1/30）



第161図　第64号住居跡出土土器実測図（1/3）

の中央に付設している。カマド壁の左側には浅い段があり，奥壁にあるピットはカマドを壊していた。カマド壁体は幅66cm，奥行き49cmの方形に掘り込んでいる。天井部は崩落し，袖部・支脚も遺存していなかったが，壁面・火床面はよく焼けており，カマド前面に焼土が広がる。カマド内からは土師器甕の小片が出土した。カマド主軸はN31°Wを示す。

出土遺物（第161図）

1は須恵器で，甕の頸部破片であろう。内面には同心円，外面には平行タタキ目を残す。焼成は良好で，赤みがかった灰色を呈する。2は土師器高杯の脚柱部破片である。内外面ともヘラケズリ調整による。胎土は精良である。焼成は良く，黄白色を呈する。

当住居跡の時期は，出土土器に乏しく不明瞭ではあるが，第63号住居跡とカマド主軸を等しくすることなどから，それと近接する時期であろうが，遺物だけからみると7世紀中葉前後かと考えられる。（小田）

第65号住居跡（図版79，第162図）

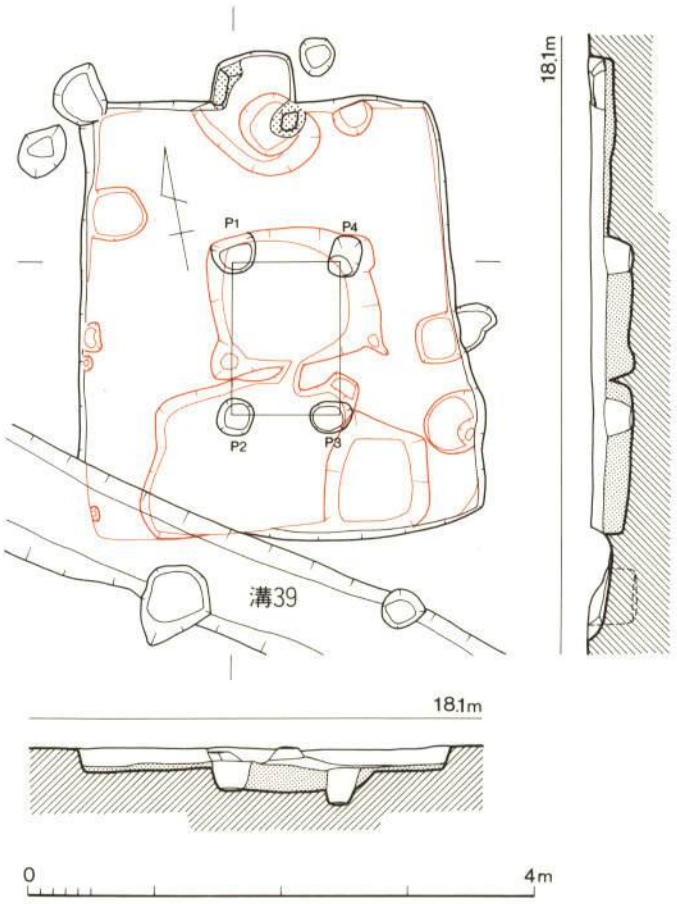
調査区の西側で検出した住居跡で，第64号住居跡の1m西に位置する。当住居跡も第39号溝に南西側コーナー部を切られる。壁高はカマド側で12cmと浅く，かなりカットされている。規模は北壁長2.64m，西壁長3.42mを測る。南壁は北壁より0.5m長く，3.14mを計測し，平面形は長方形を呈する。住居跡の中央寄りでP.1～4の主柱穴を検出したが，柱間はP.1～2間1.20m，P.3～4間1.20m，P.1～3間0.85m，P.2～4間0.80mを測り，P.1～3・2～4間が狭いため中央に寄りすぎている嫌いがある。深さはP.1—22cm，P.2—20cm，P.3—28cm，P.4—16cmを測る。また，主柱穴間を結んだ線は長方形を呈する。

床面は暗褐色土と黄褐色土で貼床しており，主柱穴付近は踏み締められて堅くなっていた。また，貼床を掘り下げたところピット・土壙・落込み等を検出した。貼床下部中央にある土壙は，小郡市前伏遺跡（註1），甘木市立野遺跡（註2）・同塔ノ上遺跡（註3），朝倉町長島遺跡（註4）等の住居跡で検出されており，湿気対策と推察されているが，その性格については判明していない。

住居跡出土の遺物は少なく，僅かに埋土中から須恵器甕，土師器杯・甕の小片が出土したに

過ぎない。

カマド（図版80，第163図） 住居壁から方形に突出させた掘方を有するタイプのカマドで，北壁のやや左寄りに付設していた。カマド壁体は幅63cm，奥行き44cmの方形に掘り込んでいる。天井部は崩落していたが，右袖の一部と左壁に貼り付けていた粘土が遺存していた。壁面・火床面は余り焼けていなかったが，埋土下位には焼土・炭をかなり多く含んでいた。カマド内からは土師器甕の小片が出土したのみである。カマド主軸はN8°Eを示す。

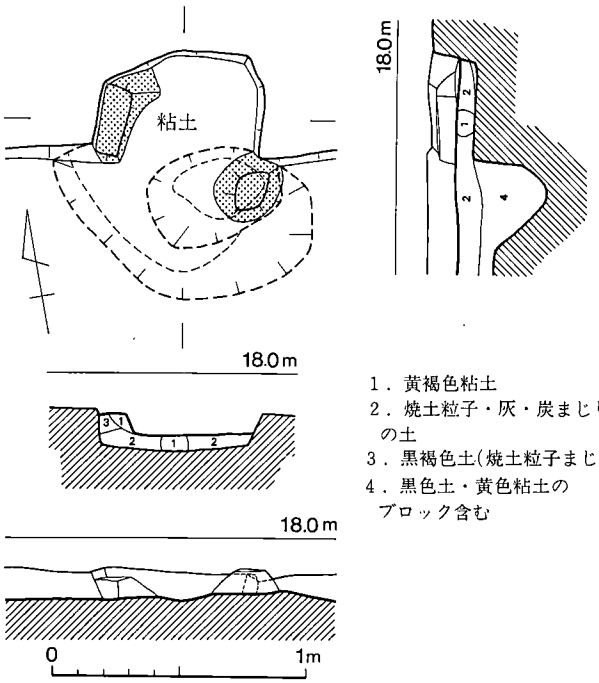


第162図 第65号住居跡実測図（1/60）

出土遺物（第164図）

1～7は須恵器，8～10は土師器である。1・2はかえりを有する杯蓋である。1は天井部に擬宝珠つまみを付しているが，2は付していない。また，1は口縁部とかえりを結んだ線は等しいが，2のかえりは口縁部より内側にくる。1は器高3.7cm，復原口径14.2cm，2は器高2.4cm，口径14.3cmを測る。調整は1・2とも口縁部ヨコナデ，内・外面ナデによる。色調は1が灰色，2は淡黄褐色を呈する。3・4は杯身の口縁部破片である。3は口唇部と口縁部内面に段を有する。口縁部調整は3・4ともヨコナデによる。両者とも焼成は堅緻で，色調は3が淡灰褐色，4は灰色を呈する。

5は口縁部破片であるが，端部が屈曲していることから椀形の器形になるか。6は口縁部が大きく外反し，口唇部が丸いことから横瓶になろう。8は甕もしくは横瓶の胴部破片であろう。外面は平行タタキ目→カキ目，内面は円弧タタキ目による。



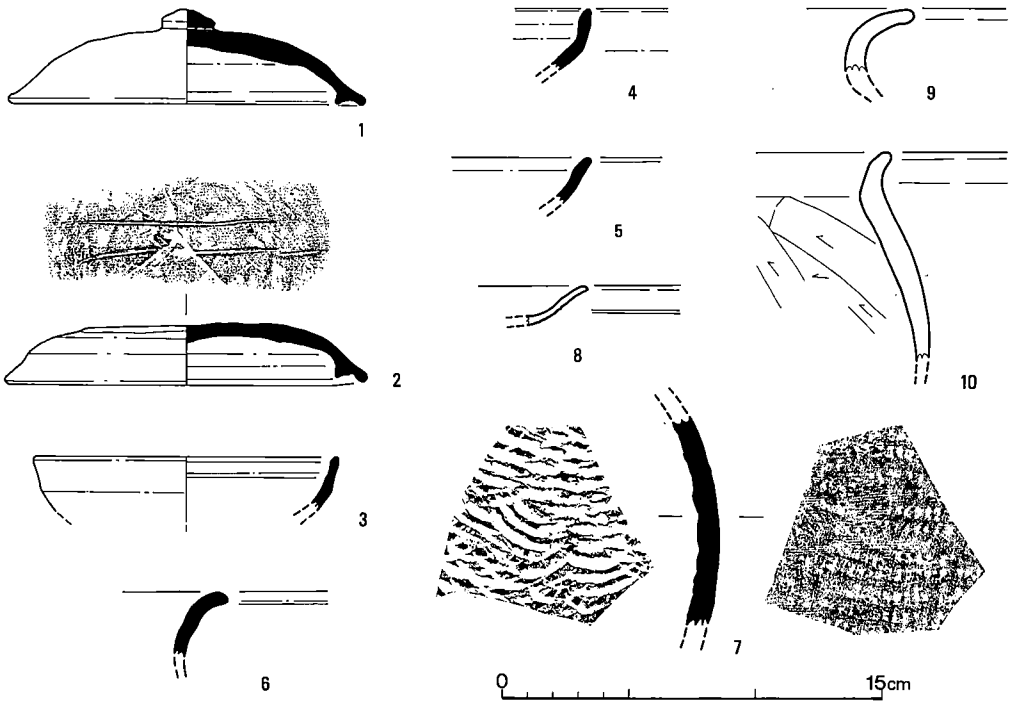
1．黄褐色粘土
2．焼土粒子・灰・炭まじりの土
3．黒褐色土(焼土粒子まじる)
4．黒色土・黄色粘土のブロック含む

第163図　第65号住居跡カマド実測図（1/30）

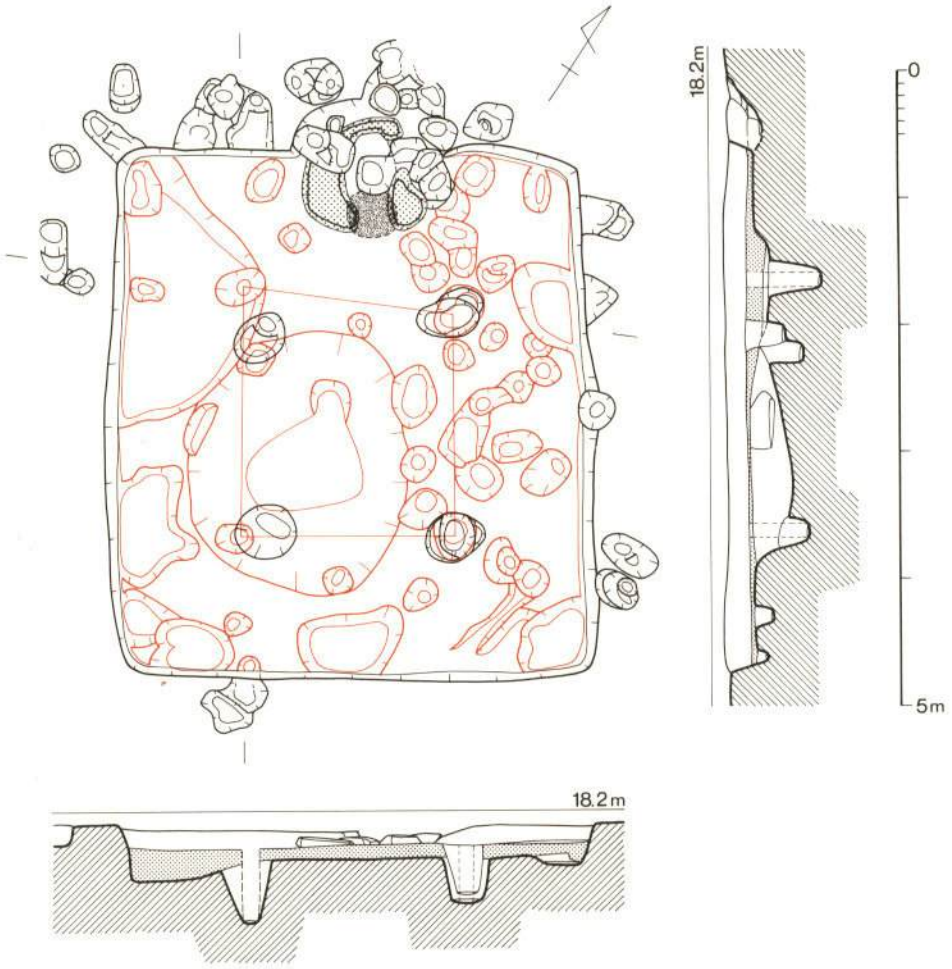
8は口縁部破片であるが，傾きからして皿になるか。9・10は甕の口縁部破片である。9の口縁部は大きく外反するが，10の口縁部は小さく屈曲する。

当住居跡の時期は，1・2のかえりを有する杯蓋から7世紀後半であろう。　（小田）

註1）「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」—11—福岡県教育委員会　1987
註2）「同上」—2—　1983
「同上」—8—　1986
註3）「同上」—9—　1987
註4）福岡県教育委員会が昭和62年度に調査を実施し，現在整理中である。



第164図　第65号住居跡出土土器実測図（1/3）

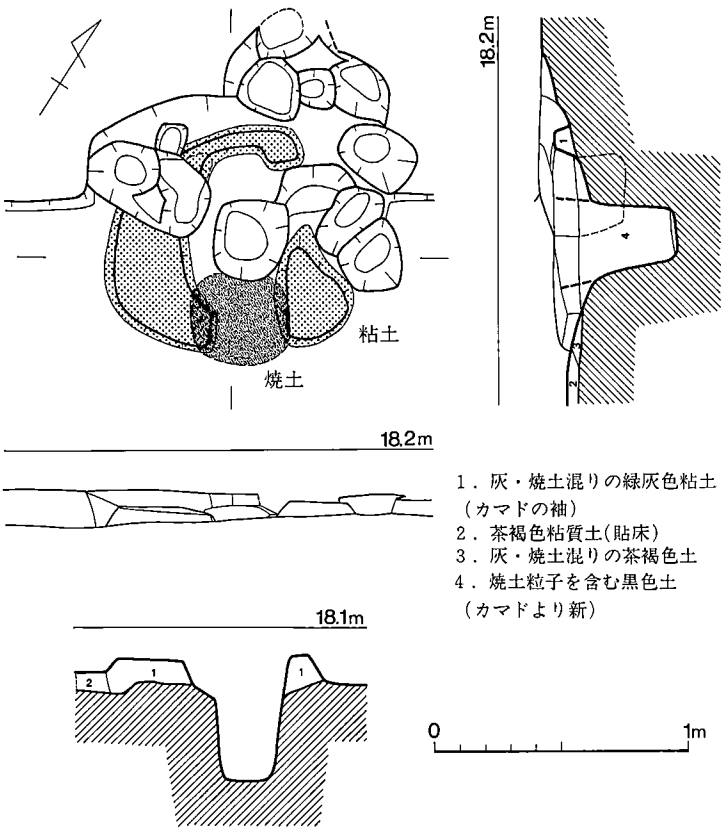


第165図　第66号住居跡実測図（1/60）

第66号住居跡（図版81，第165図）

B群の北東端に位置する。縦長の方形住居で，床面に4主柱穴を配置する。床面下は，西隅付近で大きく掘り込まれており，中央でも深く掘削されている。床面全体に厚く貼り床層が認められる。

カマド（図版82，第166図）　北西壁の中央に設置されている。壁外方に掘り込んで，煙道が延びると思われるC類となろう。燃焼部中央には新しい穴が在る。袖は灰・焼土混りの緑灰色粘土で築かれており，この粘土は燃焼部奥壁にまで巻かれている。また，この種の粘土は，本遺跡カマドで多く使用される黄色粘土（地山土）に比べて，極めて異例のものである。



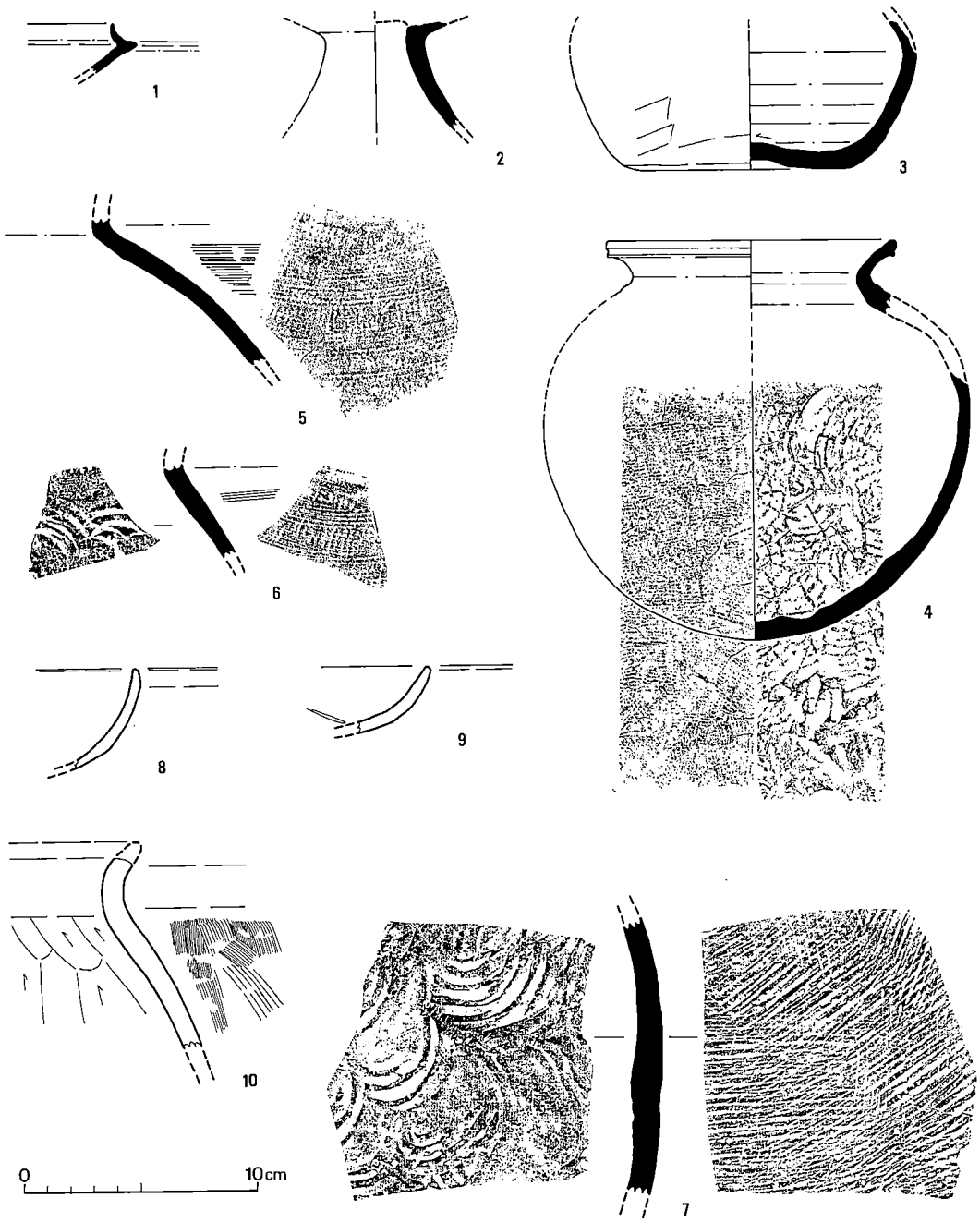
第166図　第66号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物

（第167・168図）

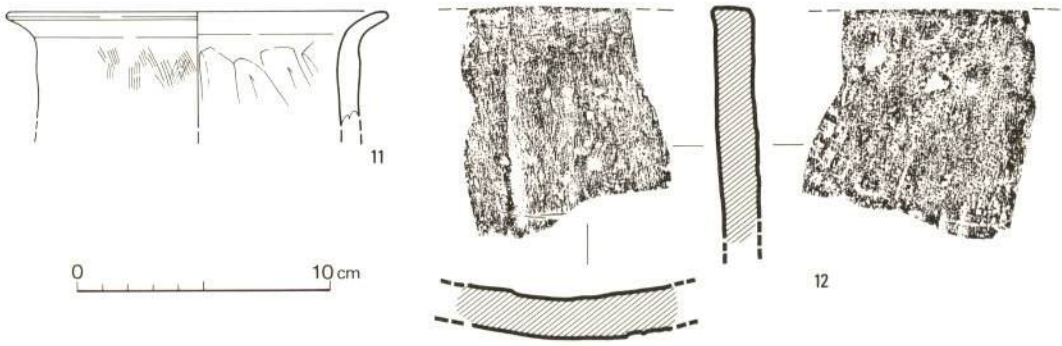
1は，須恵器杯身で全体に薄手である。2は，須恵器高杯で，内外面横ナデを施す。3は須恵器壺類の底部で，胴部下半は底部まで手持ちのヘラ削りを施し，それ以上は横ナデを施している。4は，球形胴に近い形状の須恵器壺で，口径12.4cm，器高17.1cm，胴部最大径18.2cmを測る。胴部上端より上の内外面は横ナデ，胴部外面は太い平行線に直角方向に細い平行線を密に入れた叩きを施し，内面には所謂「車輪文」を施している。胎土に細砂粒をやや多く含む。5は，須恵器壺の肩部片で，内面には青海波，外面には平行条線状叩きの上をカキ目調整している。カマド内出土品である。6も同一個体かと思われる。7は須恵器甕胴部片で，内面には太い青海波，外面には平行条線状叩きを雑に施している。8は土師器椀で，内面は磨いているようである。外面中途の屈折部以下は手持ちヘラ削りを施す。内面には化粧土が施されている。9は，床面下出土品で，土師器椀状をなす。10は土師器甕でゆるやかに反転する口頸部となる。11は土師器小甕で，口径15cmを測り，ゆるやかに外反する口縁となる。12は平瓦片で，凸面は正格子叩きの上をナデて，殆んど叩き目を消している。凹面は布目が明瞭で，白褐色を呈する生焼け品である。

以上の出土遺物のうち2・3・7・9・10は床面下の掘り込み中から出土したもので，当住居の上限を示すものである。うち2・7は少くとも7世紀前葉以前に溯るものではない。よって，1や8などは混入品と考えられる。以上の観点から当住居の営まれた年代を推定すると，



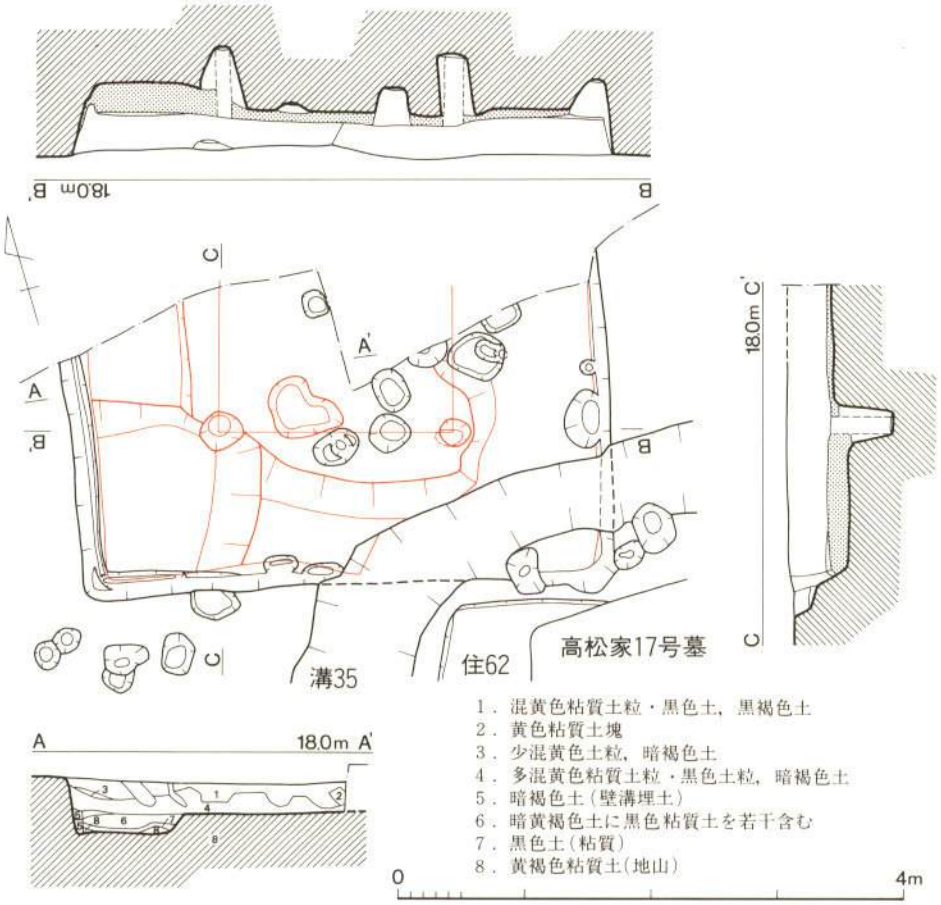
第167図　第66号住居跡出土土器実測図（その１）(1/3)

４のような内面にマスクメロン様の車輪文を施すものや，２・５などがその時期を示している



第168図　第66号住居跡出土土器・瓦実測図（その2）(1/3)

と思われ，7世紀後葉代を前後する頃と考えられる。　（中間）



第169図　第67号住居跡実測図（1/60）

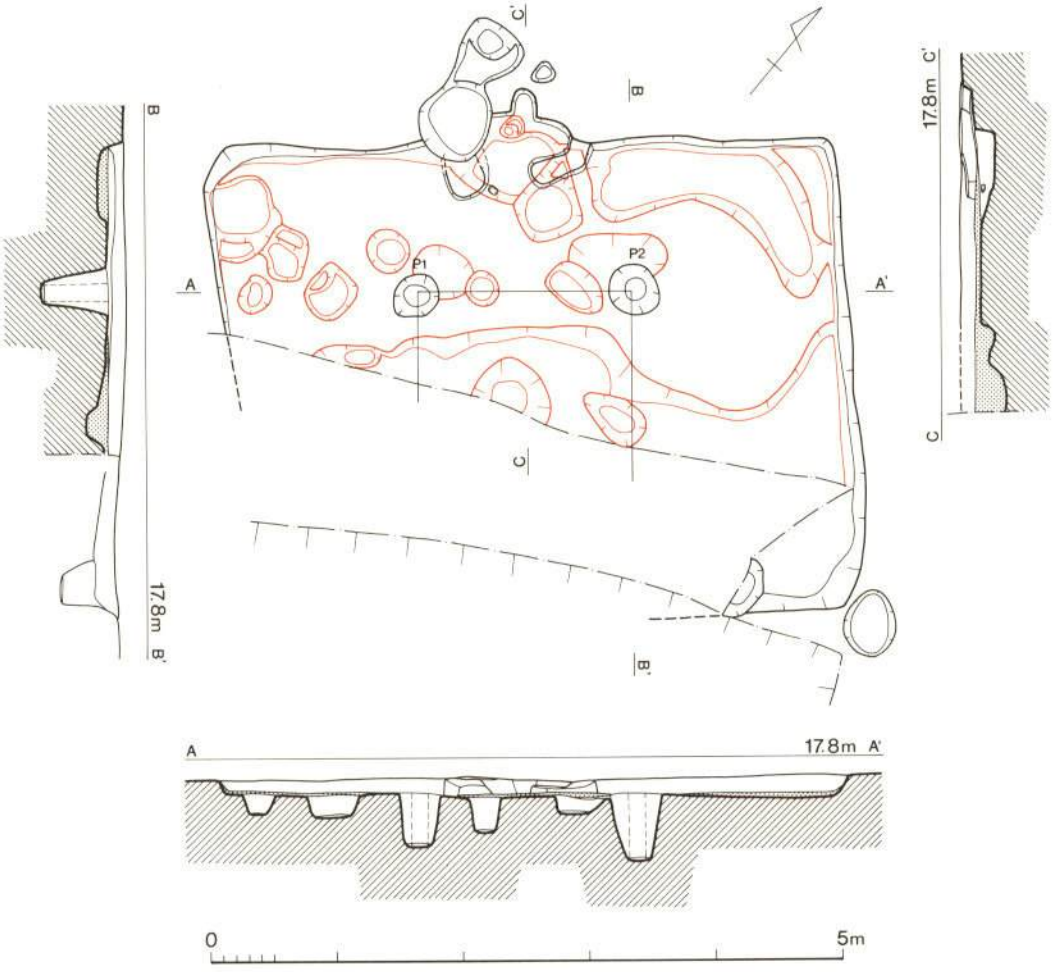
第67号住居跡（図版82，第169図）

C群の調査範囲の中では北端に位置する。北半は調査外になり，明確でない。南東端は近世高松家墓地を囲む溝35に切られている。

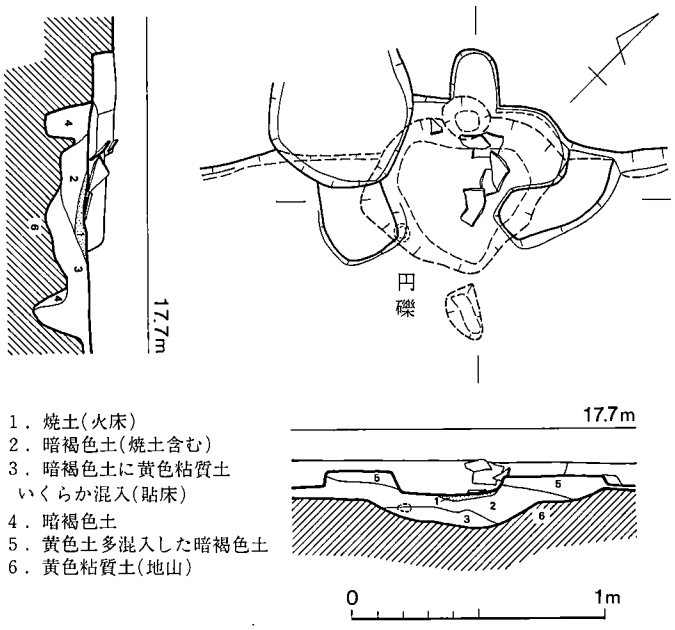
床面下は，東・西・南側の壁沿いに大きく掘り込まれており，全体に貼り床がいくらか施されている。主柱穴は南側の２穴が検出されたが，北側の２穴は調査外になる。また，西側と南壁際の西半には周壁溝が認められる。これらは壁板材打ち込み痕であろう。

カマドは，調査範囲内では検出されず，設置されて

第170図　第67号住居跡出土土器実測図（1/3）



第171図　第68号住居跡実測図（1/60）



1．焼土(火床)
2．暗褐色土(焼土含む)
3．暗褐色土に黄色粘質土いくらか混入(貼床)
4．暗褐色土
5．黄色土多混入した暗褐色土
6．黄色粘質土(地山)

第172図　第68号住居跡カマド実測図（1/30）

いたとすれば，北壁中央であったろうと考えられる。

出土遺物（第170図）

須恵器杯身１点である。復原口径10.3cm，器高は３cm強となろう。外面は灰かぶりしており，底部外面の調整はわからない。立ち上がり部も短かくなり，底部も平たくなっており，蓋身が逆転する直前の形態をなす。

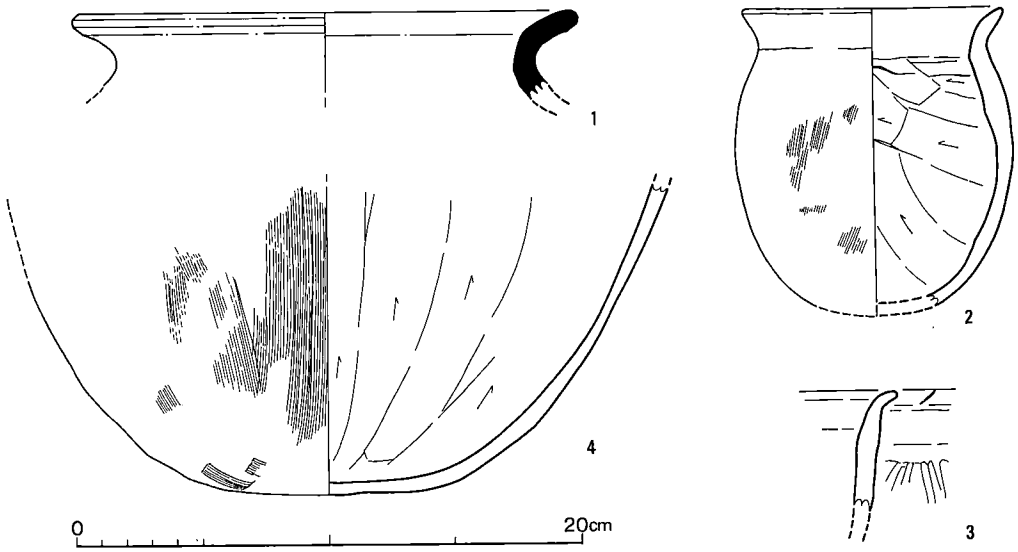
出土土器が上記１点のみで，当住居の年代を決定するには危険を感ずるが，周辺のC住居群の多くが古い時期のものであり，多分，似たような頃に営まれたものと推定される。よってこの第67号住居は７世紀前葉の所産と考えられる。（中間）

第68号住居跡（図版84，第171図）

調査区の西側で検出した住居跡で，第63号住居跡の２m東に位置する。また，当住居跡の南には側溝工事で破壊された第１号住居跡があり，出土遺物からみて当住居跡がそれを切っているようである。住居の南半分は側溝工事の際に破壊されているが，辛うじて残った東側コーナー部により西壁長4.94m，北壁長3.70mを測る横長の長方形プランを呈する。壁高はカマド側で12cmと浅く，かなりカットされている。

主柱穴は４本と考えられるが，南側２本は存在しない。深さはP.１—44cm，P.２—54cmとかなり深く，柱間は1.74mを測る。床面は暗褐色土と黄褐色土で貼床しており，貼床を掘り下げたところピット・落込み等を検出した。遺物は埋土中から土師器甕の小片が出土した。

カマド（図版85，第172図）　西壁の中央に付設しており，住居壁から方形に突出させた掘方を有するタイプのカマドであるが，奥行き18cmと突出度が弱い。天井部は崩落し，袖部のみ残る。右袖は長さ47cm，最大幅24cm，残高６cm，左袖は長さ41cm，最大幅34cm，残高７cmを測る。また，袖部は暗褐色土・暗黄褐色土を盛っていた。奥壁から飛び出たピットが煙道である。幅19cm，長さ22cmと短いのは，削平によるものであろう。火床面・壁体はよく焼けていた。支脚



第173図　第68号住居跡出土土器実測図（1/3）

は遺存していない。カマド内からは土師器甕・甑の小片が出土した。カマド主軸はN40°Wを示す。

出土遺物（第173図）

1～4は土師器である。1は甕の口縁部破片で，大きく外反する。4は甕の底部破片である。調整は内面ダイナミックなヘラケズリ，外面ハケ目による。胎土に長石・石英・雲母を含む。焼成は良好で，赤褐色を呈する。2は小型甕である。口縁部は外反し，内面のヘラケズリによる稜は鋭い。胎土に長石・石英・雲母を含む。焼成は良好で，茶褐色を呈する。3は口縁部が小さく屈曲するものの直線的に胴部に移行することから鉢になろう。調整は口縁部ヨコナデ，内面ヘラケズリ，外面ミガキ状のケズリによる。

当住居跡の時期は，7世紀前半頃であろう。（小田）

第69号住居跡（図版35，第53図）

E住居群中央に位置し，第17～19号住居跡と5段階に切り合う部分に営まれている。西側の第19・20号住居跡を切り，東側の大半を第18号住居跡に切られ，更に近世溝の第16・5号溝に切られており，残存する部分は僅かである。4主柱穴やカマドも全く残らない。床面は第20号住店跡床面より高く，第18号住居跡床面より低い。床面下層の状況もよく判からない。

出土遺物も皆無で，時期の確定は困難である。ただ，切り合い関係から第20号住居跡が8世紀前葉で第18号住居跡が8世紀中葉であることから，これらの間の時期と考えられる。（中間）

第 2 表　薬師堂東遺跡竪穴式住居跡一覧表

No	平面形	たて × よこ (m)	面積 (㎡)	主柱穴	主柱間 たて×よこ (m)	カマド 位置	カマド 形態	主軸方位	土器以外遺物	備考（古→新）	群	時期
1	?	?×4.95以下	?	?	?	?	?	?		土層断面のみで確認	A	上限 7C初
2	縦長方形	5.0 × 4.4	22.0	4	1.95×1.6	?	?	N38°E		住2→住3→溝39	B	7C初
3	特小型方形	2.6×2.8~2.4	6.8	なし	——	北東	B	N31°E		同上	B	7C後葉
4	縦長方形	4.4+α×4.2	18.5+α	4	1.65×1.85	北	B	N 5°W		住4→住5→溝39	B	6C末
5	縦長方形	4.7 × 4.3	20.2	4	2.0 ×1.55	北	B	N17°W		住4↘住5 住6↗	B	7C初~前葉
6	小型方形	3.5 ×(3.4)	(11.9)	4	1.5 ×1.6	?	?	N 3°E		住6→住5 ↘住7	B	下限7C初~前葉
7	方形	4.8 × 5.0	24.0	4	2.2 ×1.9	北西	B	N55°W		住6↘住7 溝52↗	B	上限 7C前葉
8	縦長方形	4.6 × 4.3	19.8	4	2.35 2.0 ×1.65	北西	A	N33°W		住9と切り合う，新古不明，周壁溝	B	6C末
9	方形?	?	?	?	?	?	?	略南北		同上	B	
10	大型方形?	? ×(5.9)	(33.0)	(4)	? ×2.93	北西	A	N30°W			F′	
11	小型縦長方形	3.4 × 3.0	10.2	なし	——	北西	B	N35°W			E′	
12	小型方形	3.2 × 3.3	10.6	4（2柱は壁際）	2.1 ×1.35	北西	B	N25°W	滑石紡錘車	住13→住12→住14 ↘土15	E	7C中頃に近い後葉
13	方形	3.7 ×(3.7)	13.7	4	1.5 ×1.5	(北西)	?	N29°W		同上	E	下限 7C後葉
14	小型方形	3.0 × 3.0	9.0	なし	——	南西	B	S31°W		住12→住14 周壁溝	E	7C末に近い後葉
15	小型方形	3.4×3.0~3.4	10.9	2+?	? ×1.2	北	B・C	N 2°W			E	上限 8C前葉
16	小型縦長方形	3.1 × 2.7	8.4	なし	——	北東	A	N48°E		住16→住17	E	7C中葉

No	平面形	たて×よこ (m)	面積 (㎡)	主柱穴	主柱間 たて×よこ (m)	カマド 位置	カマド 形態	主軸方位	土器以外遺物	備考（古→新）	群	時期
17	小型方形	2.9 × 2.9	8.4	なし	———	北西	C	N30°W	土製紡錘車2，瓦	住18→住16→住17→溝5	E	8C後葉
18	方形	3.9 × 3.8	14.8	4	1.8 × 1.5 / 1.8	北西	B・C	N47°W	瓦	住69→住18→住17 一部周壁溝	E	8C中葉
19	方形	4.1 × 4.3	17.6	4	1.8 × 1.8	北西	B	N23°W		住19→住20→住69	E	7C末
20	小形方形	3.1 × 3.3	10.2	なし	———	南西	B	S59°W		同上 一部周壁溝	E	8C前葉
21	方形	3.9 × 3.8	14.8	4	2.0 × 1.8	北西	B	N30°W		土壙24→住21→土壙23	E	8C末
22	小型横長方形	3.2 × 3.7	11.8	4（2柱は壁際）	2.15×1.65	北	B	N15°W		住23→住22	E	（上限 7C初）
23	横長方形？	(3.5)×(4.5)	(15.8)	4？	1.6 / 1.95 × 2.6	？	？	N14°W		同上	E	
24	方形	3.8 × 3.7	14.1	4か	？×1.65	北西	B	N39°W	鉄留金具	住25→住24→溝35	C	7C後葉
25	縦長方形	(4.4)× 3.85	(16.9)	4	2.0 ×1.75	北西	A	N53°W		住25→土壙26・住24	C	7C中葉
26	方形	3.7 × 3.6	13.3	なし	———	北	A	N22°E	瓦	住27→住26	C	7C後葉
27	方形？	3.7 × ？	(14.1)	なし	———	？	？	N22°E	滑石製紡錘車	同上	C	7C中頃
28	大型縦長方形	6.1 × 5.4	32.8	4	3.85 / 3.05 × 2.45 / 2.25	北西	A	N63°W	鉄鏃	住32→住28	A	6C末～7C初
29	大型縦長方形	6.1 × 5.3	32.3	4	2.7 / 2.9 × 2.6	北西	A	N49°W			A	6C末～7C初
30	台形	3.8 / 3.0 × 3.7	12.6	なし	———	北西？	A？	N28°W			B	
31	方形	3.6 × 3.5	12.6	4	1.65× 1.6	北	B	N23°E		住58→住31→土壙31→溝39	C′	7C前葉前後
32	大型方形？	？ × 5.2	(27.0)	2＋？	？×2.45	北西	A	N63°W		住32→住28 住28の拡張か	A	6C末？

No	平面形	たて×よこ (m)	面積 (㎡)	主柱穴	主柱間 たて×よこ (m)	カマド 位置	カマド 形態	主軸方位	土器以外遺物	備考（古→新）	群	時期
33	方形	4.4 × 4.5	19.8	4	2.2 / 2.4 × 2.1	北	C	N 4°W	鉄器		G	7C後葉
34	小型方形	3.1 × 3.1	9.6	なし	——	——	——	N10°E	瓦	住35 →住34 建物8 ↗ カマドなし	G	8C後葉
35	縦長方形	4.0 × 3.6	14.4	4	1.8 ×1.25	北	C	N 4°E	瓦	切り合いは同上	G	7C後葉
36	方形	4.8 × 4.6	22.1	4	1.8 ×1.95	北西	A	N25°W		住37→住36	G	8C前葉
37	方形	(4.3)× 4.3	18.5	4	1.55× 1.8 / 2.0	? (北西)	?	N27°W		住37 →住36 ↘住38	G	7C中頃に近い後葉
38	方形？	2.3+α ×2.7+α	18前後か	4か	?	?	?	N50°W		同上	G	(7C末〜8C初)
39	特小型 横長台形	2.4 × 2.4 / 3.1	6.6	なし	——	——	——	N20°W		建物19→住39	E	7C後葉
40	小型方形	2.9+α×3.1	(9.6)	2+?	? × 1.2	北	B	N14°E		住41→住40	D	7C後葉
41	小型方形	3.2 × 3.2	10.2	4	1.2 ×1.35	北	B	N 6°W		住41→住40	D	7C中葉
42	方形？	?	?	?	?	?	?	N 6°E		住42→住43	D	7C末
43	方形	3.7 × 3.7	13.7	4	1.55 / 1.75 ×1.35	北	B	N11°E		住42→住43→住44	D	8C初
44	小型方形？	?	?	?	?	北	B	N 3°E		同上	D	8C前葉
45	小型方形	3.0 × 3.0	9.0	なし	——	——	——	N23°W			D	(7C末？)
46	方形	3.5 × 3.5	12.3	なし	——	北	B	N 4°W		住48 →住46 住47 ↗	D	8C前葉
47	小型方形？	? ×(3.3)	(10.9)	なし	——	?	?	N 5°W		土壙46→住47→住46	D	7C中頃に近い後葉
48	小型方形？	3.2 ×(3.2)	(10.2)	2+?	? × 1.6	西	B	S85°W		住48→住46	D	7C末

No	平面形	たて×よこ (m)	面積 (㎡)	主柱穴	主柱間 たて×よこ (m)	カマド 位置	カマド 形態	主軸方位	土器以外遺物	備考（古→新）	群	時期
49	小型横長方形	2.7 × 3.2	8.6	4	1.3 × 1.85 1.0 × 2.05	西	B	S73°W		住50→住49	D	(7C後葉?)
50	方形	3.9 × 3.8	14.8	4	1.6 × 1.5	西	B	N83°W		同上	D	(下限7C後葉)
51	大型方形	5.0 × 5.0	25.0	4	2.1 ×2.25	北西	B	N22°W		建物18→住51	F	7C中頃に近い後葉
52	大型方形	5.2 × 5.1	26.5	なし	——	なし？	？	N30°W		井戸2→住52	F	上限7C後半～末
53	大型方形	5.4 ×(5.3)	(28.6)	4	2.4 ×2.25	北西	A	N22°W		住53→土壙47	F	7C前葉～中頃
54	方形	3.7 ×(3.7)	(13.7)	4	1.5 × ？	北西	C	N25°W			C″	7C初～前半
55	方形	3.6 × 3.7	13.3	4	1.5 ×1.65	北西	A	N45°W			C″	7C初前後
56	方形	3.8 × 4.0	16.0	4	1.85 1.5 ×1.75	北	A	N19°W			C″	不明
57	横長方形	4.7 × 5.1	24.0	？	？	北西	A	N37°W		住57→土壙52	C′	7C初～前葉
58	方形	4.1 × 4.4	18.0	4	1.75 2.0 × 1.8	北西	B	N59°W		土壙57→住58→住31→土壙31	C′	7C初～前葉
59	縦長方形	4.2 × 3.7 4.7 × 4.3	17.8	(4か)	？	西	A	N69°W			C	6C末
60	方形	3.8 × 3.7	14.1	(4か)	？	西	B	N78°W	瓦		C	7C前半
61	方形	(4.2)× 4.2	(17.6)	なし	——	北西	？	N56°W		住61→住62	C	6C末～7C前半
62	横長方形	3.4 × 4.0	13.6	4	1.4 ×1.75	北西	？	N68°W		同上	C	7C前半
63	方形か	？ × 4.4	(19.4)	4	？ × 1.6	北西	B	N36°W	打製石鏃		A	7C後半
64	方形	3.7 × 3.7	13.7	4	1.4 1.2 × 1.5	北西	B	N31°W		住64→溝39	B	7C中葉

No	平面形	たて×よこ (m)	面積 (㎡)	主柱穴	主柱間 たて×よこ (m)	カマド 位置	カマド 形態	主軸方位	土器以外遺物	備考（古→新）	群	時期
65	小型縦長方形	3.4 × 2.7 / 3.1	9.9	4	1.25× 0.8	北	B	N 8° E		住65→溝39	B	7C後半
66	縦長方形	4.1 × 3.7	15.2	4	1.95 / 1.7 × 1.7	北西	C	N33° W	瓦		B	7C後葉～前後
67	方形	？ × 4.2	(17.6)	4？	？ × 1.8	？	？	N16° E		住67→溝35 周壁溝	C	7C前葉
68	横長方形	3.7 × 4.9	18.1	4か	？ ×1.75	北西	B	N40° W			A	7C前半
69	方形	？ × 3.8	(14.4)	？	？	？	？	S47° W		住20→住69→住18	E	8C前葉～中葉

B　掘立柱建物

本遺跡では，確認し得ただけで計21棟の掘立柱建物を検出した。（第３表）これらの配置は大旨遺跡全体に散在するが，A～Gの各住居跡群にそれぞれ共存するかのようである。特に２×２間の総柱の倉庫と考えられる建物は，各住居跡群に万遍なく１～２棟づつ配置されている。

規模の上からみると，大きなものでは２×３間の南北棟の建物がD・G群にみられ，周辺のものも含めて４～６棟で群をなすが，邸宅とでも言うべき大規模なものではなく，またそのような配置を示すものでもない。ただ，F群の第18号掘立柱建物は２×３間の総柱東西棟で，本遺跡例としては大規模であり，大型竪穴式住居で構成されるF群のものとして特殊な性格を示すと考えられる。

２×２間総柱の建物が全体で６棟みられるが，中でも第１号掘立柱建物は掘方が一辺１mの大きなしっかりしたもので，柱痕から想定される柱の直径は30cm弱程度とみられる太いものである。また，この建物はE・G群の各住居群からも離れ，独立占地している。これらのことから何らかの特別の性格を想定せねばなるまい。また，A群北東端の第４号掘立柱建物は，南北方向に柱間基礎を掘り継いで，所謂布掘りを施している。

本遺跡の掘立柱建物は，以下に図示・解説する21棟のみではなく，深い柱穴状ピットの夥しい検出状況を見ると，他にもいくらか存在したと考えられる。即ち，E住居群の北西端の第10～12号掘立柱建物の西側周辺，またF住居群の西方周辺では小ピットがあまりにも密集し，建

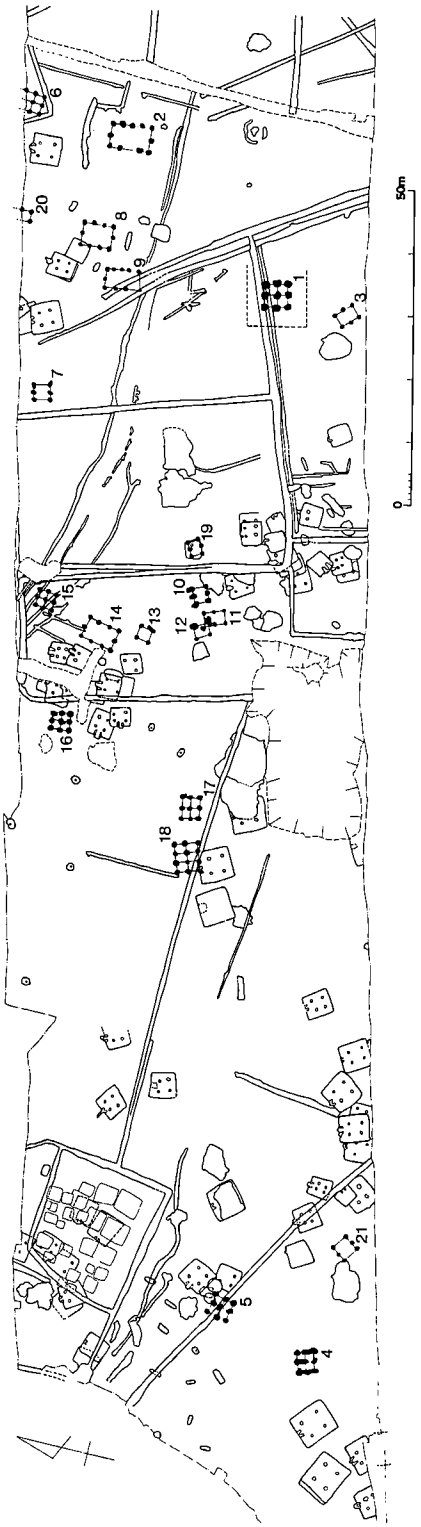
物想定すら難かしい状況であった。

個々の掘立柱建物の各住居群での位置付けは，個別の説明で行うこととして，全体としては南北方向棟が多く，近隣の竪穴式住居跡方向と同様のものも多く，各住居群と密接に関連するものと考えられる。また，各建物のうち，時期が明確にされるものは極めて少ない。ただ，数例，竪穴式住居や土壙と切り合っている掘立柱建物がみられ，それらのほとんどが，掘立柱建物の方が古いことを示している。これは，それぞれの住居群の中で，掘立柱建物のうちの多くは，竪穴式住居のうちのより古い段階のものと共存配置されていたことを想定させる。

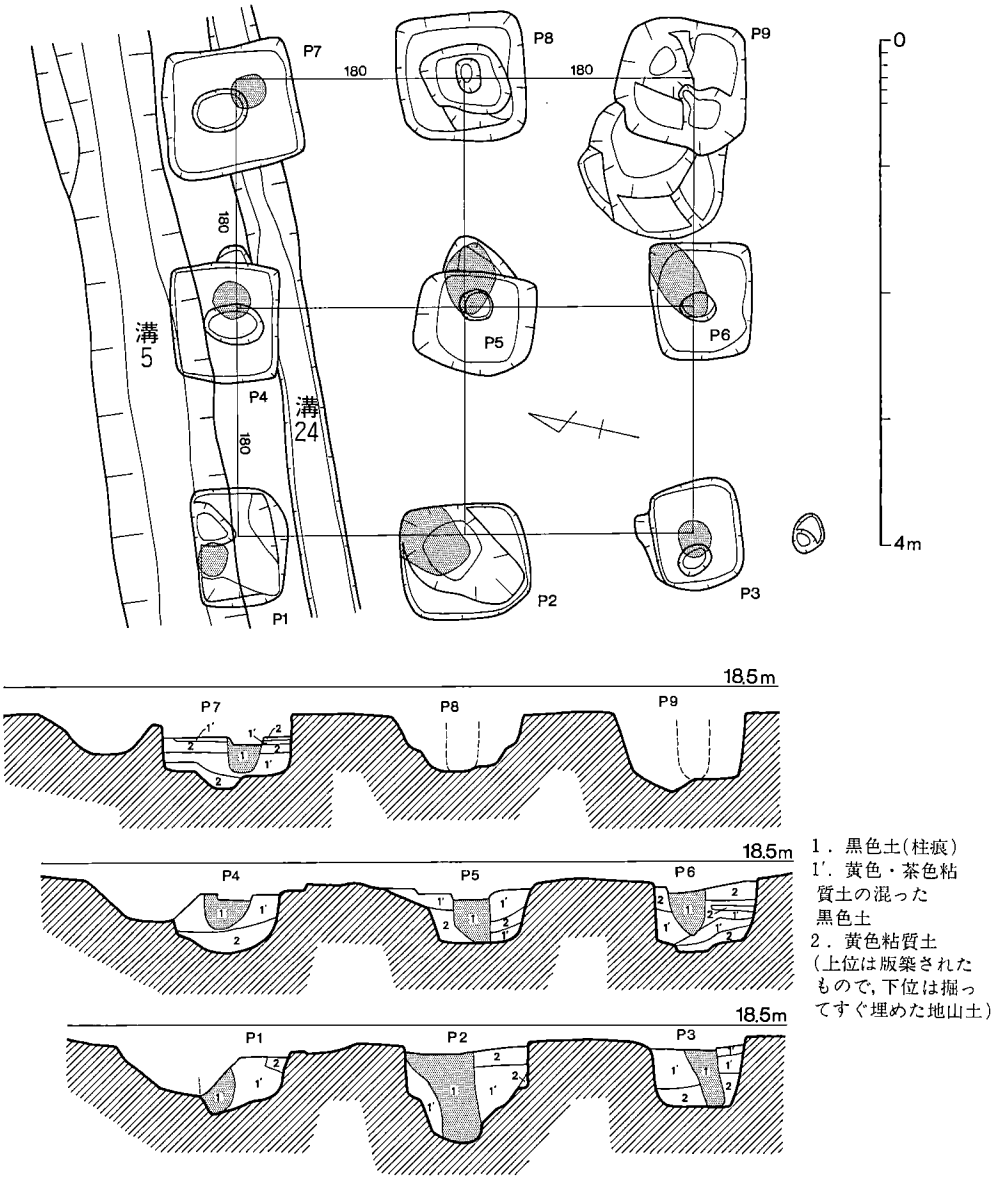
以上の他に，柱間距離や，使用尺の問題等もあるが，まとめの項で検討することとして，以下各個別について述べてみたい。詳細の寸法等は，図・一覧表などを参照されたい。

第１号掘立柱建物（図版85・86，第175図）

E住居群の東方，G住居群の南方にぽつんと独立して占地している。北側を第５号近代溝に切られている。一辺１ｍという大きな方形掘り方を有し，２×２間の総柱建物である。推定柱径は30cm弱もある。掘り方内埋土は黄色粘土（地山土）と黒色土を交互につき固めた丁寧な版築を施している。P.２，P.５・６では柱の抜き痕がみられる。P.８・９は，当初この部分だけ遺構検出した際，プランが大きいので土壙(墓)と誤認して掘り上げてしまったため，柱痕等確認し得なかったものである。心々柱間距離はすべて1.8ｍの６尺等間と復原できる。ただP.１はやや北西へ片寄っている。主軸はN12°W とやや西に振っている。



第174図　掘立柱建物配置図（1/1,200）

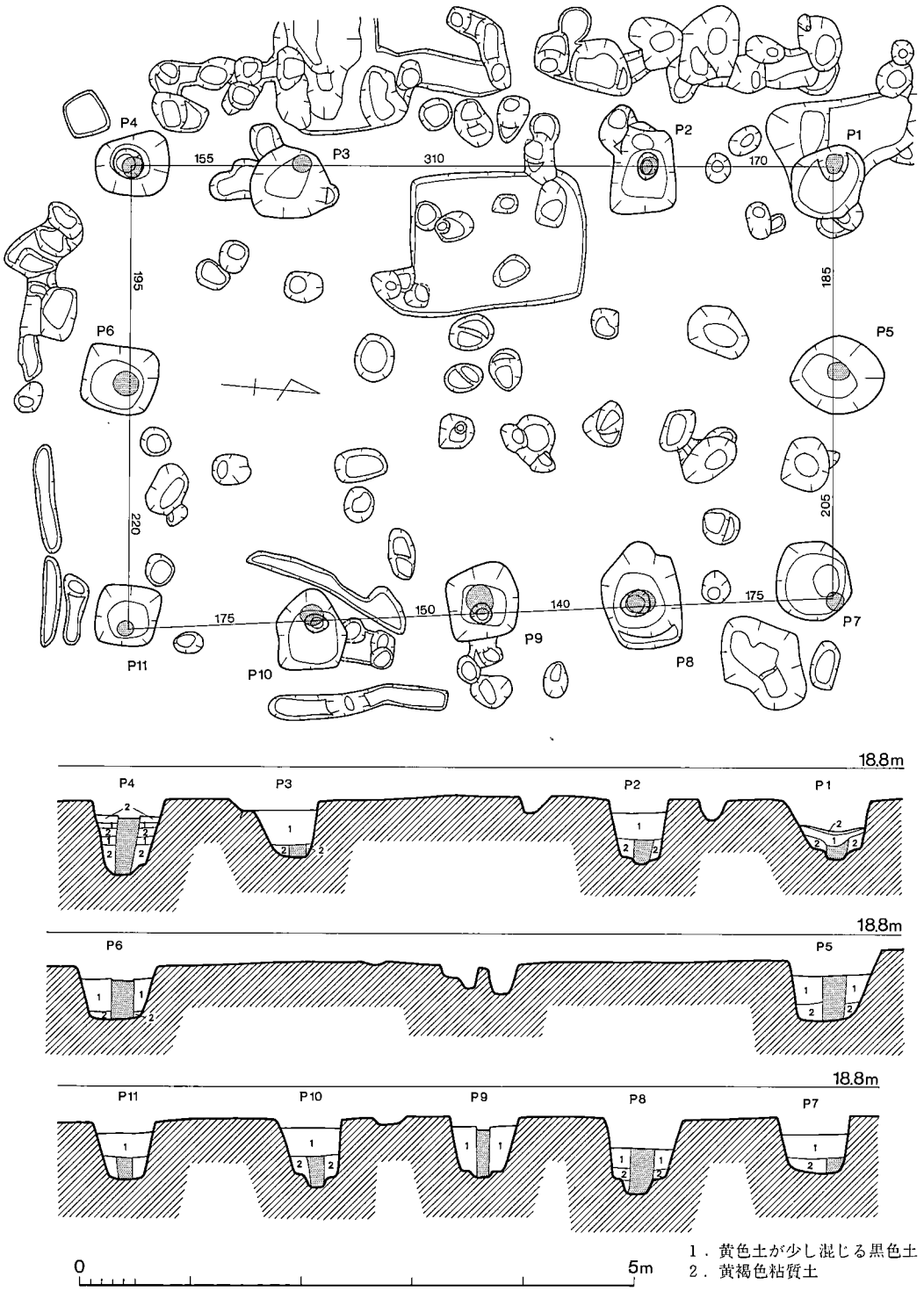


第175図　第1号掘立柱建物実測図（1/60）

この掘立柱建物は上述の如く，独立して占地しており，掘り方も本遺跡中で最大であり，推定柱径も大きい。このことより，本集落の中でも他の倉と異なり，特別に重要なものを収蔵した，或いは公けの性格を有する倉と考えることも可能であろう。

出土遺物（第190図1）

須恵器杯身で，復原口径11.2cmを測る。口縁外端がわずかに突出し，体部下半で屈曲して，



第176図　第2号掘立柱建物実測図（1/60）

これよりかなり内側で高台が付くものとなろう。焼成良く，内外面灰色を呈する。P.4掘方内埋土より出土したもので，本資料から本掘立柱建物の上限は7世紀後葉とされる。

第2号掘立柱建物（図版87，第176図）

G群の東南端に位置し，主軸をN7°Wにとる南北棟建物である。北側梁行長が南側よりやや短い。西側柱列は中央の柱穴が検出されず，東辺でもP.7～8の間，P.10～11の間の心々距離は6尺等間であるのに対し，P.8～9，P.9～10の間は各々約1尺分短かい。梁行方向の心々距離も等間ではなく，全体にかなりずれが多い。東辺中心のP.9は他柱穴と比べやや浅く，当初計画以後に加えられたものかと考えられる。柱穴掘り方は小さめではあるが方形プランをなし，柱痕から推定される柱の直径は20～15cmを測る。掘り方埋土は，P.4が丁寧な版築のつき固めを行なっているものの，他は下位に黄褐色粘質土を充塡しているものの，中位以上は雑である。

本掘立柱建物で重要なことは，東西及び南の柱列外方に雨落ち溝と考えられる小溝が検出されたことである。幅35～15cm，最大深さ10cm弱の小規模なものであり，柱列線より70cm外側に平行に走る。軒の出方はそれほど長いものではなかったことがわかる。本遺跡例での雨落ち溝の検出例はこれだけであるが，既に削平を受けてはいるが，本来，他の掘立柱建物にも付随していたものと考えられる。

出土遺物（第190図2－1・2・3）

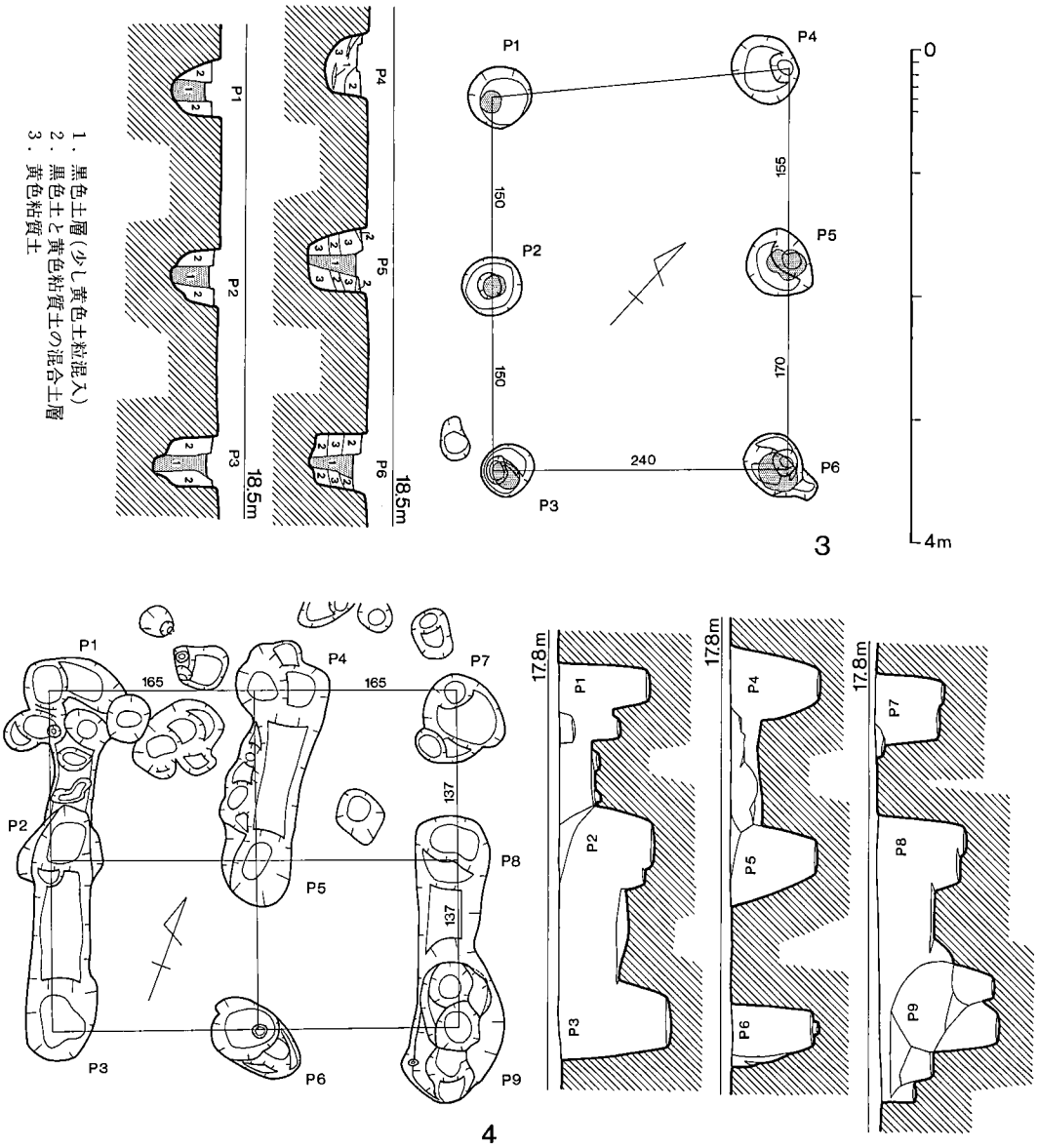
いずれも東辺中央のP.9埋土より出土したものである。1は，土師器杯で体部中途でいくらか屈折して開く。口縁内端はいくらか内側寄りとなる。外面屈折部以下はヘラ削りを施し，他はナデている。2は，土師器小甕口縁片で頸部内側がやや厚くなり稜をつくる。復原口径14.0cmを測り，内面はヘラ削りを施す。3は内面に稜をつくらず，短かく薄い口縁へと開く。外面は縦ハケ，内面は削り上げている。2は古相を示すが，3は新しい特徴をみせる。

この新しいものを採用すると，この第2号掘立柱建物の上限は7世紀後葉でも末に近いと考えられる。

第3号掘立柱建物（図版88，第177図）

E群の東側の第1号掘立柱建物の南側，第11号土壙の東隣に位置し，既発見の住居群のいずれにも属さない。第1号掘立柱建物同様，他の群と離れて，独立占地を示すが，両者は規模・主軸方位ともに全く異なり，同時共存の可能性をはじめ，有機的関係を求めることは困難であろう。

主軸方位をN43°Wにとり，北西－南東方向に長い棟で，1×2間の小規模な建物である。柱痕は明瞭であり，15～20cm弱の柱直径を推定できる。柱穴掘り方は小さめの円形プランを呈する。埋土は，P.5・6などは丁寧に互層につき固めるが，他は黄色粘質土（地山土）と黒色土



第177図　第3・4号掘立柱建物実測図（1/60）

の混ざった土を埋め込んだだけである。

P.1～3の柱間距離は5尺等間であるが，反対側のP.4～6では各柱間がやや長く，計半尺分北側へP.4が片寄っている。このように不規則な配列は本遺跡においては，かなり普遍的で，官衙にみられる規格性の様相とはかけ離れた状況を示している。

出土遺物（第190図３）

土師器甕あるいは甑の把手部分で，やや小ぶりの器種に付くものであろう。器表は全体に指オサエナデ調整で，断面は円形に近い。７世紀後半代のものであろう。

よって，この第３号掘立柱建物は，７世紀後半を上限とする時期の，小規模な物置き，或いは作業場的な性格を有するものであろう。

第４号掘立柱建物（図版88，第177図）

A群の北東端に位置する。２×２間の総柱建物であるが，東西方向がやや長い。各柱間心々距離は東西方向で5.5尺等間，南北方向で4.5尺等間となる。柱穴は円形プランを呈し，その深さは90cmほどのかなり深いものである。

本建物の特徴は，柱穴間を連結させる所謂布掘りを施していることである。ただP.１～３，P.４～５，P.８～９のみで，P.６とP.７とは連結されていない。しかもP.２～３間とP.８～９の間は50cm前後と深く掘られているが，P.１～２間とP.４～５間とは20cm強と浅く，不規則である。本遺跡建物でこのような基礎構造を示すものは他に無く，極めて特異である。

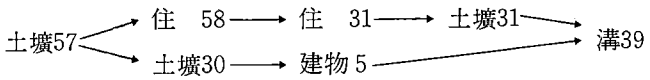
出土遺物（第190図４）

P.９より出土した須恵器高杯脚端部小片である。復原端部径8.9cmを測り，接地部下端が突出しており，外端面は浅い凹線が巡らされている。胎土精良で淡灰褐色を呈する。この手の小径で，脚柱が細くなるタイプの高杯は，７世紀中頃までのものである。

以上のことからこの第４号掘立柱建物は，７世紀中葉を上限とする時期の，極めて丁寧に構築された特別の性格を有した倉庫棟と考えられよう。

第５号掘立柱建物（図版89，第178図）

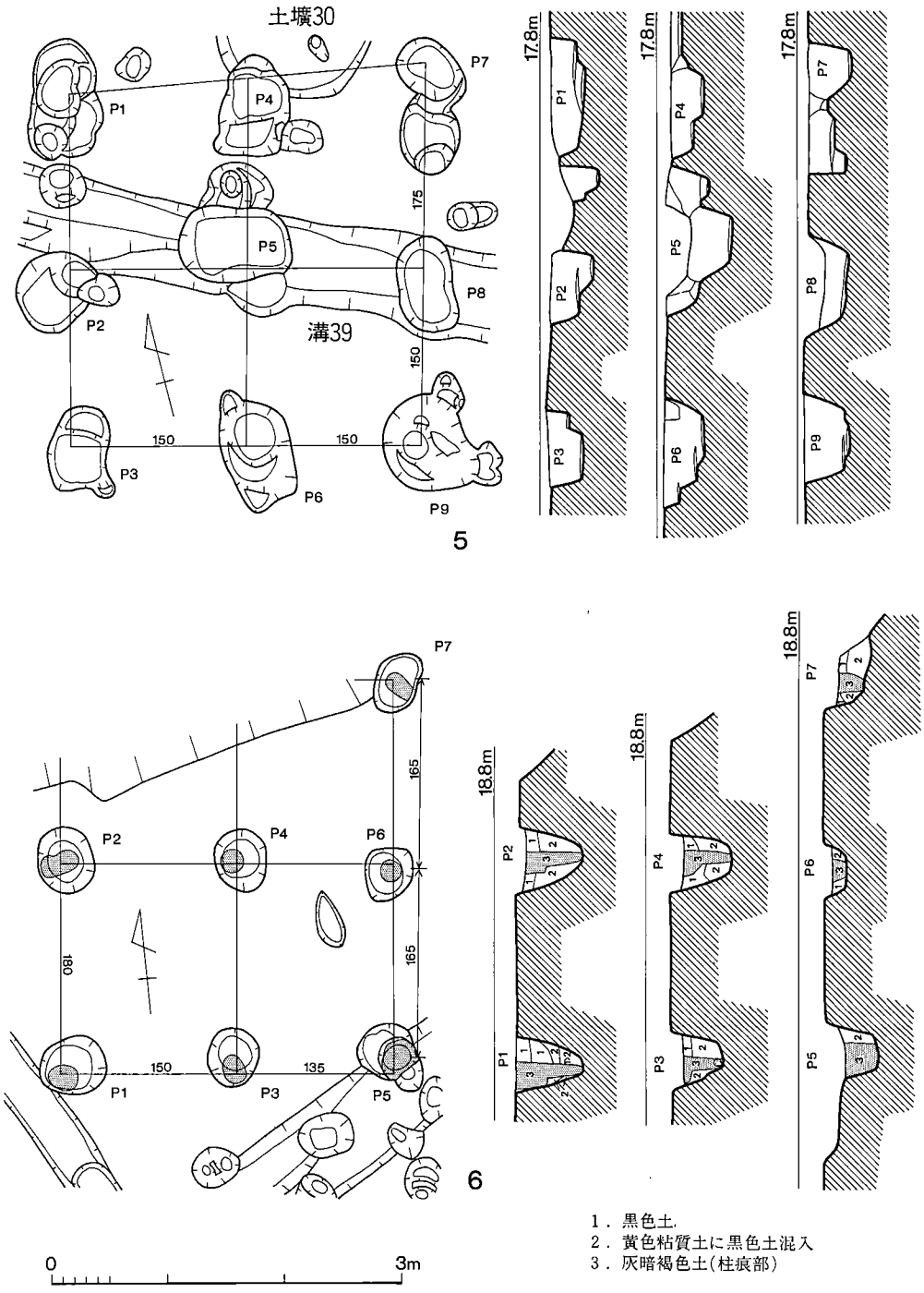
C′群の西南端に位置し，これと関連する遺構の切り合い関係は以下の如くである。(古→新)



位置的に第４号掘立柱建物に近いが，両者は主軸方位も大きく異なり，柱間心々距離なども違っており，時期も異なるものと考えられる。この第５号掘立柱建物の主軸方位は，D群やG群の掘立柱建物の向きに近い。

２×２間の総柱建物で，柱穴は円形プランを成すが，その深さは30～50cmとかなり浅い。各柱穴の中心間距離は，正確に測るとかなりまちまちであるが，全体としては５尺等間が基本のようである。

少量の出土遺物のうち，時期の判断できるものは無い。溝39は室町後期であるが，第30・57号土壙からは時期の判かる遺物が出土していないので，切り合いからも時期の判定は難かしい。



第178図　第5・6号掘立柱建物実測図（1/60）

孰れにしろ，７世紀～８世紀代の倉庫であろう。

第６号掘立柱建物（図版89，第178図）

Ｇ群の東北端に位置し，北半は調査範囲外となり，全容は定かではない。東西梁行は２間であり，南北桁行は２間分は検出されているが総柱であることから，他例からみて大きくても２×３間程度であろう。南北にやや長い２×２間総柱である可能性も強い。

柱穴は小さい円形を呈し，柱痕は直径20cm弱で，埋土も丁寧な版築等は施されていない。柱間心々距離は，P.１～２間とP.３～４間が６尺，P.５～６間とP.６～７間が5.5尺，P.１～３間が５尺，P.３～５間が4.5尺と各々ばらばらとなる。

出土遺物の中で時期の判定できるものは皆無である。Ｇ群のいずれかの住居と併存した７～８世紀代の倉庫と考えられる。

第７号掘立柱建物（図版90，第179図）

Ｇ群の西端に位置する１×２間の小規模建物である。全体では南北にやや長いが，東西柱筋の中間に１柱を加えて，柱間距離を1.25m と極めて短かくしている。主軸方向は第１・２・８・９号掘立柱建物のそれに近い。

梁行方向柱間は2.65m と極めて長く，９尺(１尺≒29.4cm)が推定される。柱穴は円形で，深さは 0.7ｍとかなり深い。桁行柱間が短いことより，形式的には総柱建物ではないが，一種の倉庫棟的な性格のものと考えられる。

出土遺物（第190図７－１・２）

１は，P.３より出土した須恵器杯蓋である。復原口径15.4cmを測り，短かい返りを有する。天井外面は回転ヘラ削りを施す。２は，土師器皿でP.６より出土したものである。体部外面一部にハケ目が残り，底外面はヘラ削りを施す。

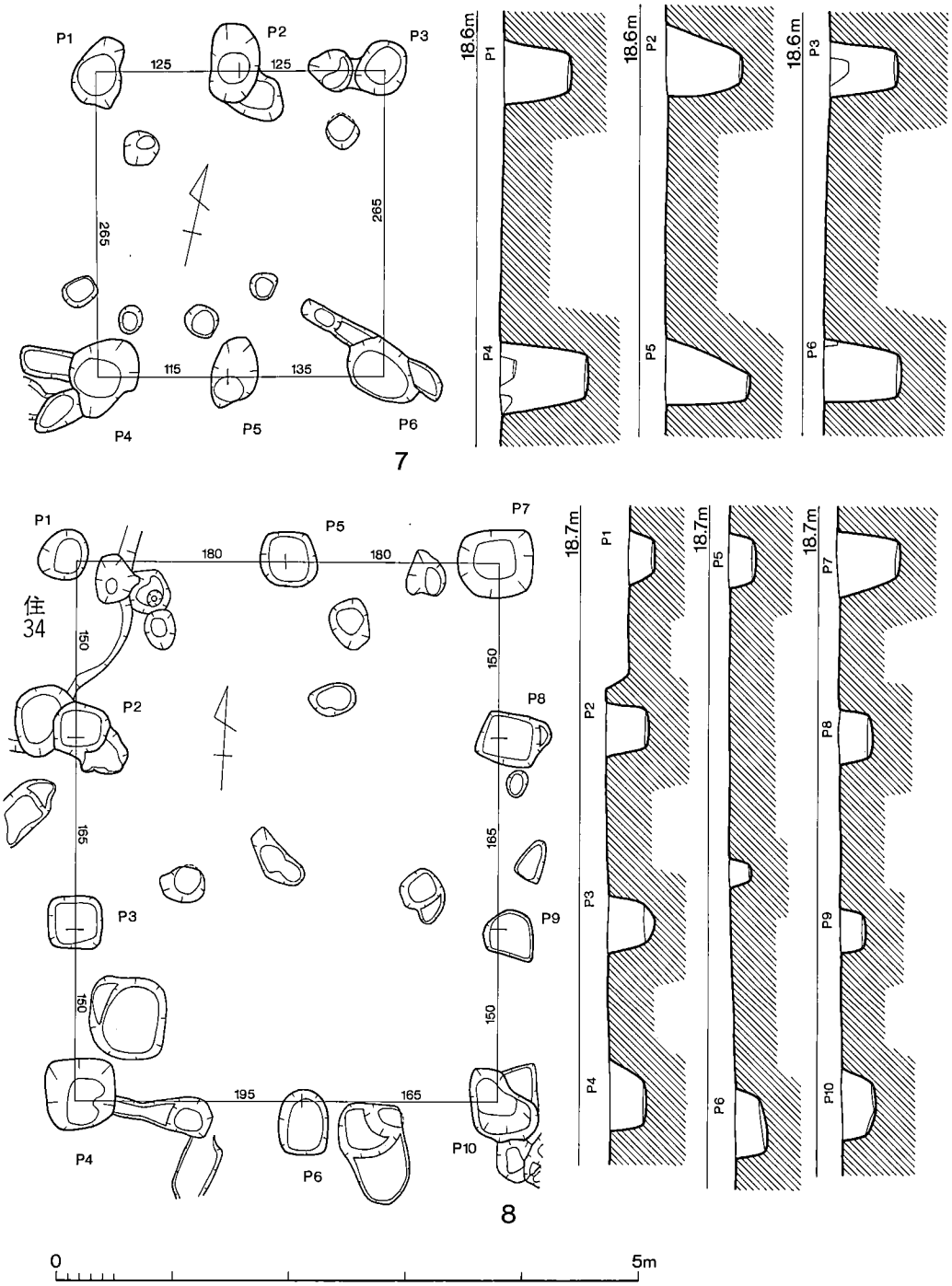
以上の遺物より，この第７号掘立柱建物は上限を７世紀後葉に求め得る時期のものと考えられる。

第８号掘立柱建物（図版90，第179図）

Ｇ群の中央南寄りに位置する。２×３間の南北棟の建物で，北西端は第34号住居跡に切られる。主軸方位がN4°Wで，第２・９号掘立柱建物に近い。

南北方向柱列の桁行各柱間の心々距離は，中央の１間分が5.5尺で，両隣柱間の５尺より長くなっている。これは東・西柱列とも対称的に計画されている。梁行は北辺では６尺等間であるが，南辺では5.5尺と6.5尺となり不均等となっている。

各柱穴掘り方は，小さな方形プランを呈し，その深さは最大でも50cmと極めて浅い。柱痕は



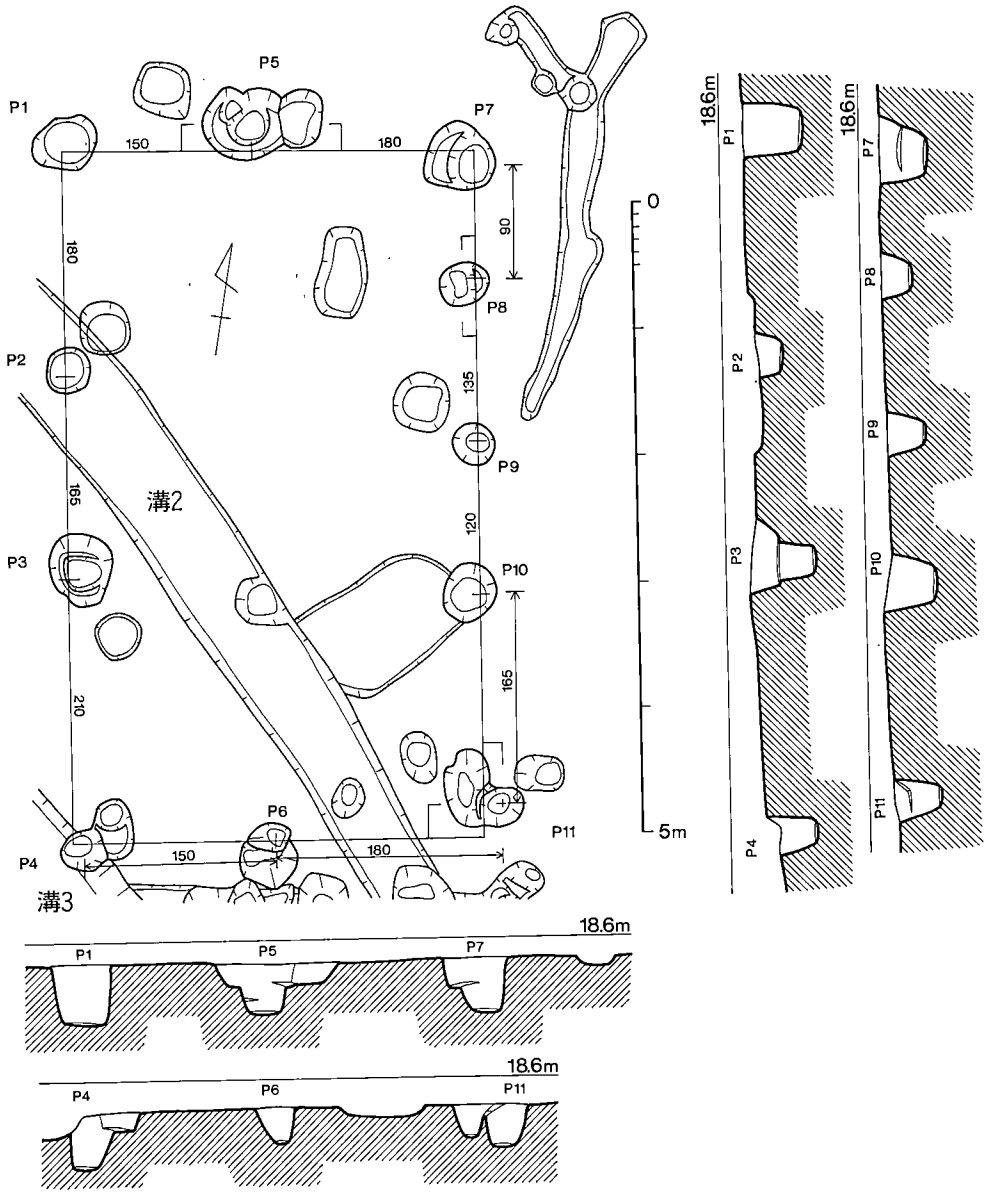
第179図　第7・8号掘立柱建物実測図（1/60）

検出していない。

出土遺物（第362図P.945）

P.2埋土中より出土した須恵器の高台付杯底部片である。復原高台部径8.6cmを測り，平たい底部の内側寄りに低い高台を付ける。

以上の遺物から，この第8号掘立柱建物は，8世紀中頃～後半代を上限とする時期の所産と考えられる。また，この建物を切る第34号住居跡が8世紀後半代の所産と考えられるので，このことから，本建物の時期は8世紀の中頃に近い後半代と判断できる。

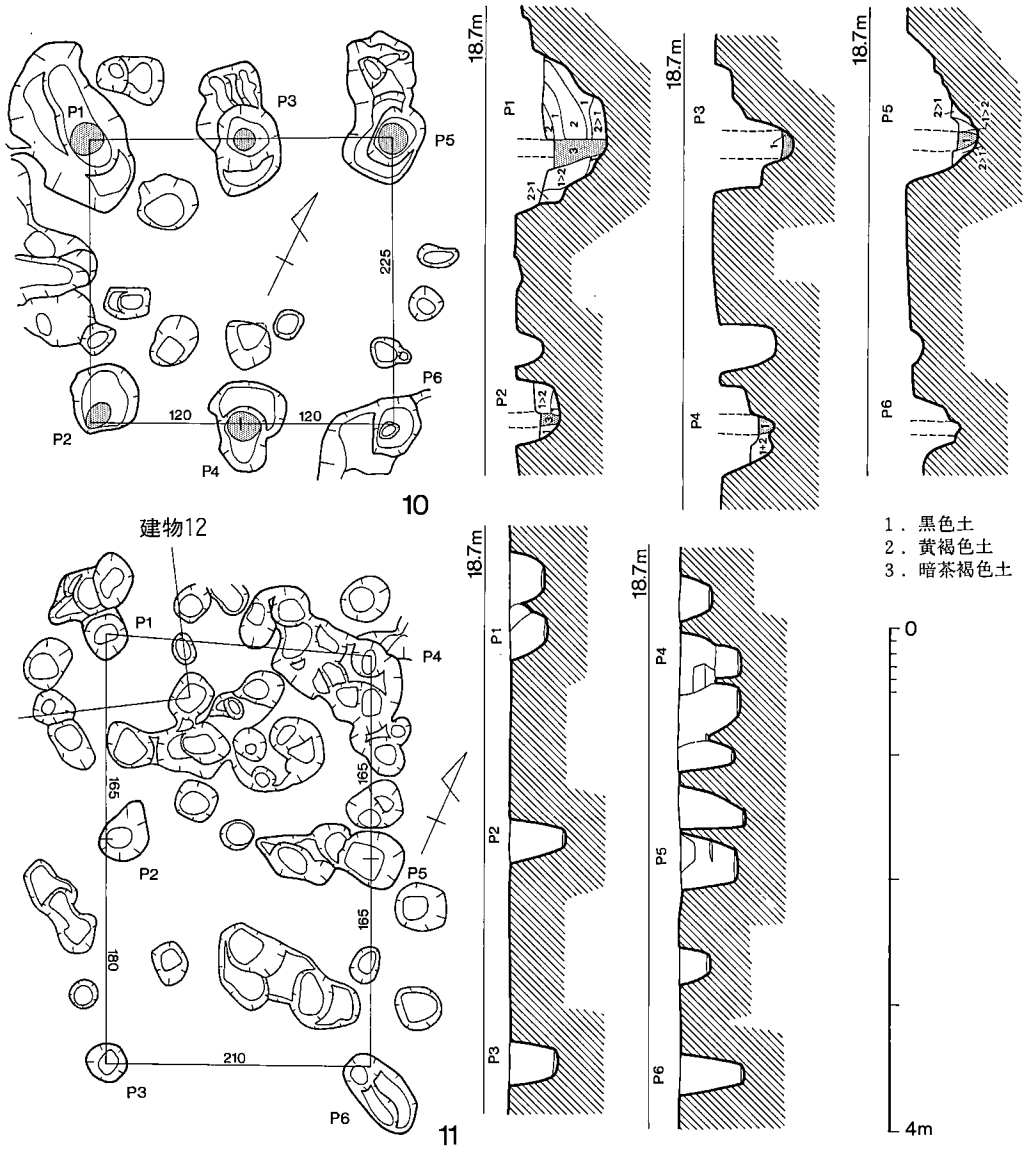


第180図　第9号掘立柱建物実測図（1/60）

第９号掘立柱建物（図版91，第180図）

G群の中央南端に位置する。２×３間の南北棟であるが，東辺では不均等な４間の柱列配置となっている。主軸方位はN9°Wで，同じG群中の第２・８号掘立柱建物のそれに近い。

柱列配置は全体にかなりずれがみられ，柱間心々距離も，図に示した如く，極めてまちまちである。桁行柱間心々距離は，平均すると６尺を基本としたものと考えられる。柱穴は小さい円形プランで，深さも30～50cmと浅いものが多い。



第181図　第10・11号掘立柱建物実測図（1/60）

本建物の北東側外方に，細く浅い溝がみられる。柱列から70～30cm離れており，雨落ち溝かとも考えられるが，他の部分に無く，明確には判断できない。

出土遺物（第363図P.964）

P.7の埋土中より出土した須恵器高台付杯である。体部下半で屈曲し，長く外方へ踏ん張った高台を付ける。底部外面にはヘラ記号の一部がみられる。

この遺物の年代観からみて，当第9号掘立柱建物は7世紀後葉を上限とする時期の所産と考えられる。ただ，同じG群中の近くに配置されている第2・8号掘立柱建物と主軸方位が近似することや，柱列配置がかなりいい加減なものである共通点などから，この3棟はわりと近い時期のものと考えられる。そうすると，この第9号掘立柱建物も8世紀代まで降る可能性も強いと考えられよう。

第10号掘立柱建物（図版92，第181図）

E群の北端中央に位置する。1×2間の小規模な東西棟である。南東端のP.6が第24号土壙に切られる。

主軸方位をN26°Wにとり，南北方向の梁行7.5尺，東西方向の桁行柱間心々距離は4尺と極めて短かい。柱穴は，北側のP.1・3・5は縦長の平面形を呈するが，南側のものは円形に近い。柱痕から15cm前後の柱径が考えられる。

この第10号掘立柱建物の東西方向軸線上を7.4m東へそのままこのプランをずらすと，第19号掘立柱建物と重なる。つまり，両者は同主軸方位，同規模で，その間隔を5.0m離して対として計画構築された建物なのである。

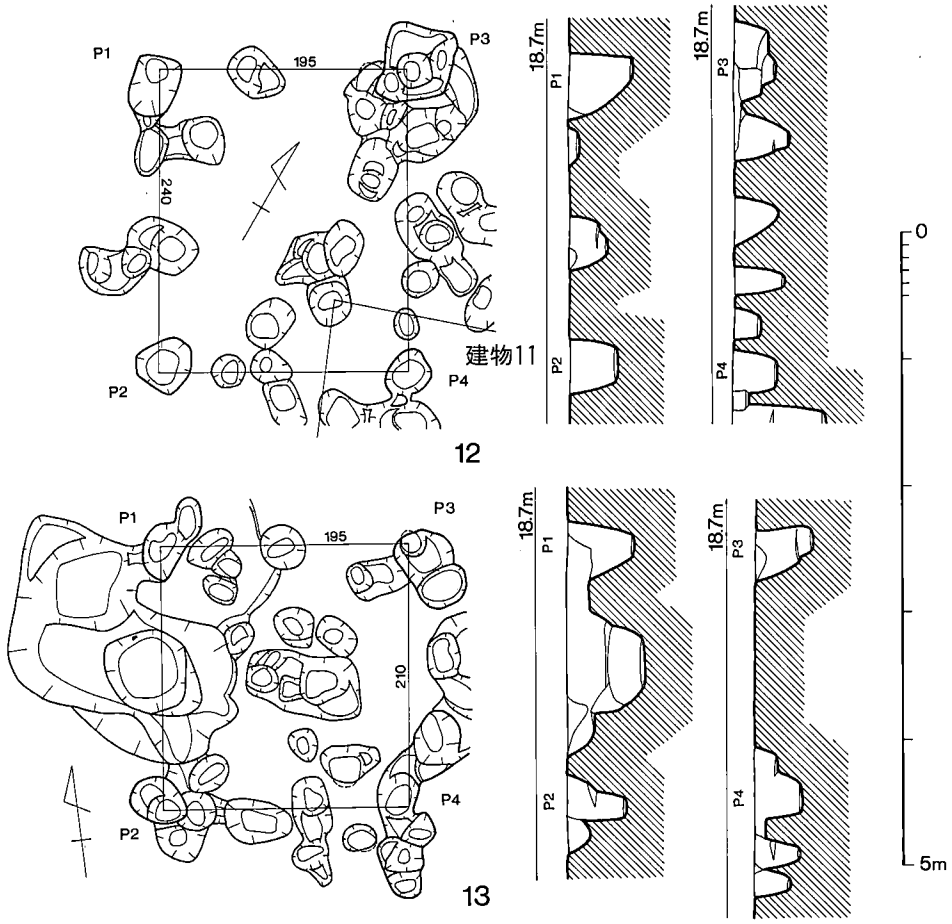
出土遺物で時期の確定できるものは無い。ただ，この建物を切る第24号土壙からの出土遺物の中に8世紀末頃のものもあり，第10号掘立柱建物は少くともそれ以前の所産ということになる。また，同時併存と考えられる第19号掘立柱建物が，それを切る第39号住居跡が7世紀後葉であることから，それ以前の時期と考えられる。よって，かなり間接的推定ではあるが，本建物も7世紀後葉以前の構築と想定できる。

第11号掘立柱建物（図版91，第181図）

E群の北西端近くに位置する。第10号掘立柱建物の西隣で，第12号掘立柱建物と北西端で一部重複するが，両者の前後関係は明らかでない。主軸方位をN24°Wにとり，南北に長い1×2間の小規模建物である。

梁行7尺，桁行各柱間心々距離はP.2～3の間が6尺で，他は5.5尺とやや不均等である。柱穴は小さく浅いものもみられる。

出土遺物のうち時期の確定できるものは無いが，主軸方位が東隣の第10・19号掘立柱建物と



第182図　第12・13号掘立柱建物実測図（1/60）

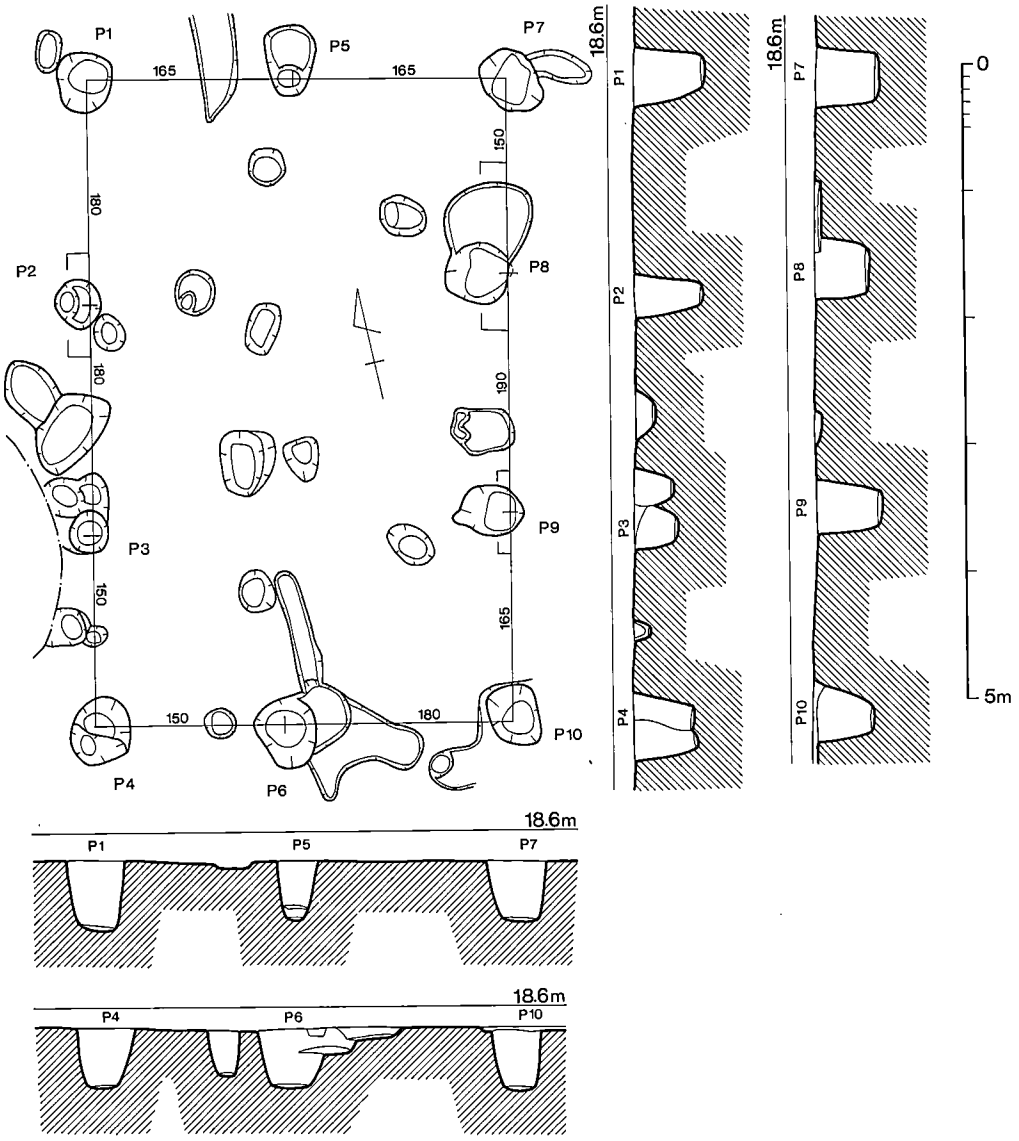
近似するので，これらと同様の時期（下限を７世紀後葉と考える）の小規模な物置き程度の建物であったと考えられる。

第12号掘立柱建物（図版91，第182図）

Ｅ群の北西端近くに位置し，第11号掘立柱建物と南東端で一部重複するが，両者の前後関係は明らかでない。

主軸をＮ31°Ｗにとり，南北方向に長い１×１間の小規模建物である。柱穴は小さく，やや浅いものもある。柱間心々距離は東西に6.5尺，南北に８尺をとる。

出土遺物中に時期の判断可能なものは無い。ただ主軸方位が，Ｅ群中の住居跡の多くや掘立柱建物と近いことから，同じＥ群中のいずれかの住居跡と同時共存していたことは間違いなかろう。また，本建物の北に位置する第13号掘立柱建物以北のＤ群遺構群の殆んどが主軸をＥ群



第183図　第14号掘立柱建物実測図（1/60）

と全く異なる東寄りにとっていることから，各住居群内における主軸方位の規制はかなり強かったと考えられる。このことからも住居群をグルーピングする意味があると考えている。

第13号掘立柱建物（第182図）

D群の南端に位置し，１×１間の南北に長い小規模建物である。主軸方位をN7°Eにとり，東西柱間距離が6.5尺，南北が７尺となる。

柱穴は小さく，それほど深いものはみられない。第12号掘立柱建物の北側７ｍ弱の近くに位置するが，両者を境として北側のＤ群と南側のＥ群とは竪穴式住居跡をも含めて主軸方位を全く異にしており，このことが本建物をＤ群に帰属させる所以である。

出土遺物（第190図13－１・２）

１は，土師器小甕口縁小片である。頸部が肥厚せず，内側にも稜を作らない。内面はヘラ削りが施され，外面は磨滅している。２は，土師質焼成の移動式土製カマドの焚口上方の廂部分である。指の強いオサエ痕がみられる。

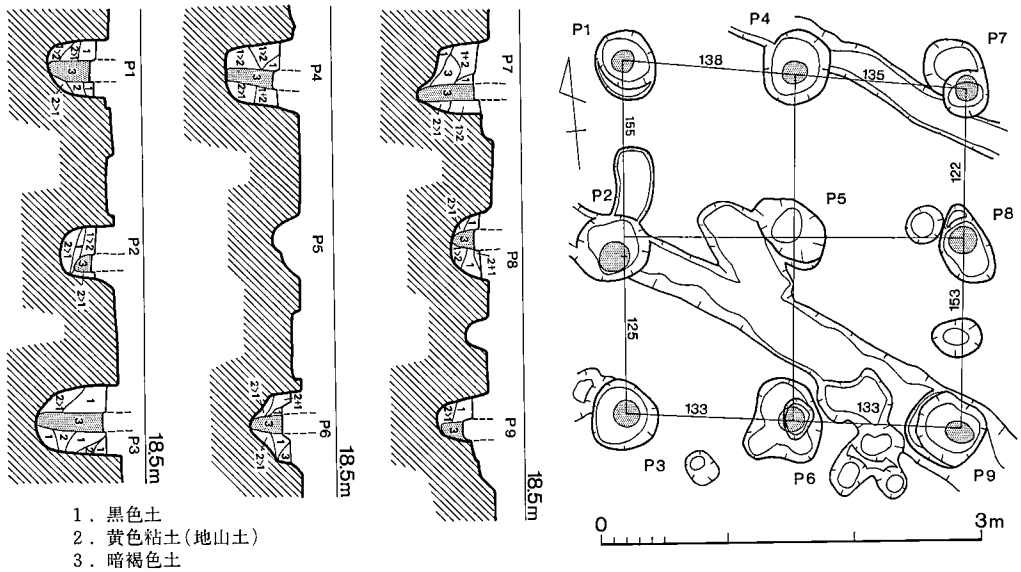
以上の遺物からこの第13号掘立柱建物は７世紀後半を上限とする時期の所産と考えられる。また，北隣の第14号掘立柱建物の東辺軸線の延長上に，本建物の西辺軸線が重なることから，両者は有機的に結びついて同時共存の可能性が強いと考えられる。

第14号掘立柱建物（図版92，第183図）

Ｄ群の東南端近くに位置し，主軸方位をＮ12°Ｅにとる２×３間の南北棟である。全体の規模はＧ群の第９号掘立柱建物と近似しており，同様の性格を有するのであろう。

各柱間心々距離は，かなりバラバラで，５，5.5，６尺のいずれも用いられており，桁行柱筋の中央の柱間はその両隣の柱間距離より長い特徴を示す。これはＧ群の第２・８号掘立柱建物と同様で，２×３間の南北棟建物の共通点と考えられる。

柱穴は小さめで，深さ30～60cmと浅いものもある。出土遺物は無く，時期の判断が困難であるが，南隣の第13号掘立柱建物と主軸方位が近似しており，同時併存の可能性が考えられることから，ここでは７世紀後半を上限とする時期と推定しておきたい。



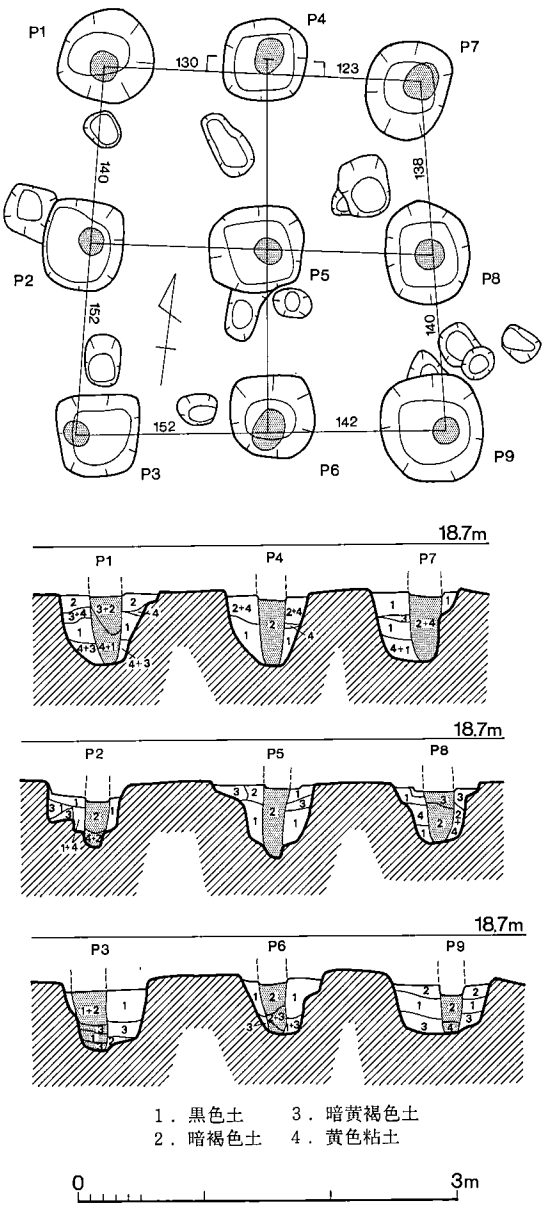
第184図　第15号掘立柱建物実測図（1/60）

第15号掘立柱建物（図版93，第184図）

D群の北東端に位置するが，本来D群は調査範囲外の北方へ拡がっていると考えられ，そうすると，本建物はD群の中央部に近い東端に位置すると想定できる。

主軸をN7°Eにとり，僅かに南北に長い2×2間の総柱建物である。柱筋は全体に菱形状にゆがんでおり，各柱間心々距離も極めてバラつきが多い。南辺の133cm等間を基本だとすれば，4.5尺（1尺=29.5cm）等間となるが，他の各辺柱間の平均を4.5尺等間とすると，1尺=30.3～30.6cmの尺を使用したことになる。孰れが正しいか判断しかねるが，南辺以外の数値例の多くが後者であるので，基本的に1尺≒30.5cmを使用したかと考えておく。

柱穴は円形でそれ程大きくなく，深さは中央のP.5が浅いのが特徴的な他は，わりと深い。柱痕は直径17～13cmで小さい。同じD群中の総柱建物である第16号掘立柱建物と比べると，掘り方も小さく，推定柱径も見劣りし，かなり貧弱である。出土遺物のうち時期を確定できるものは無い。



第185図　第16号掘立柱建物実測図（1/60）

第16号掘立柱建物

（図版93，第185図）

D群の西端に位置する2×2間の総柱建物である。主軸をN8°Wにとるが，ただこれは中央のP.4－P.6の軸線であり，北辺がかなり短かくなるために，東・西各辺は方位が異なる。つまり，全体に北辺を短辺とした台形を呈したプランとなっている訳である。

各柱間心々距離は，見事にバラつきがみられ，５尺等間で計画されたと仮定すれば，南辺の数値では１尺＝29.4cmが使用されたことになる。他の北辺に近い柱間では，仮りに4.5尺であったとすれば１尺＝31cm前後の数値となる。孰れか判断し難い。

各柱穴はプランが方形に近く，規模も第１号掘立柱建物に次ぐランクの大きさである。深さも60cm前後と安定している。柱痕から推定される柱径も20～25cmとやや太い。これらの点からはかなりしっかりした倉庫棟と考えられる。出土遺物のうち，時期を確定できるものは皆無である。

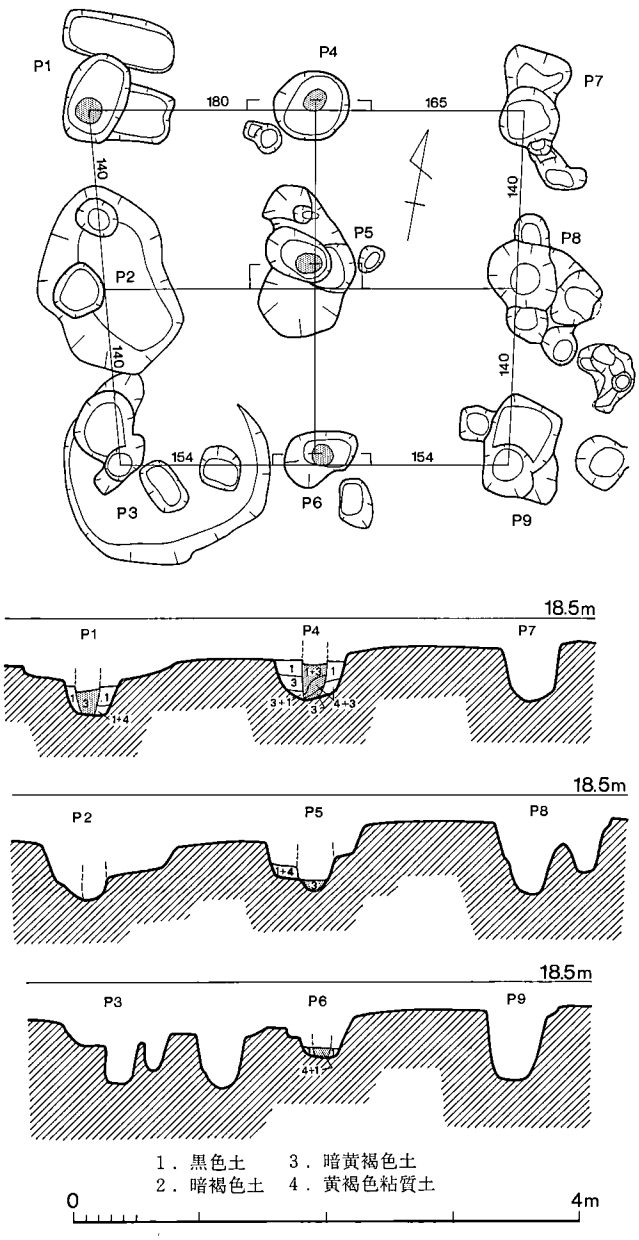
第17号掘立柱建物

（図版94，第186図）

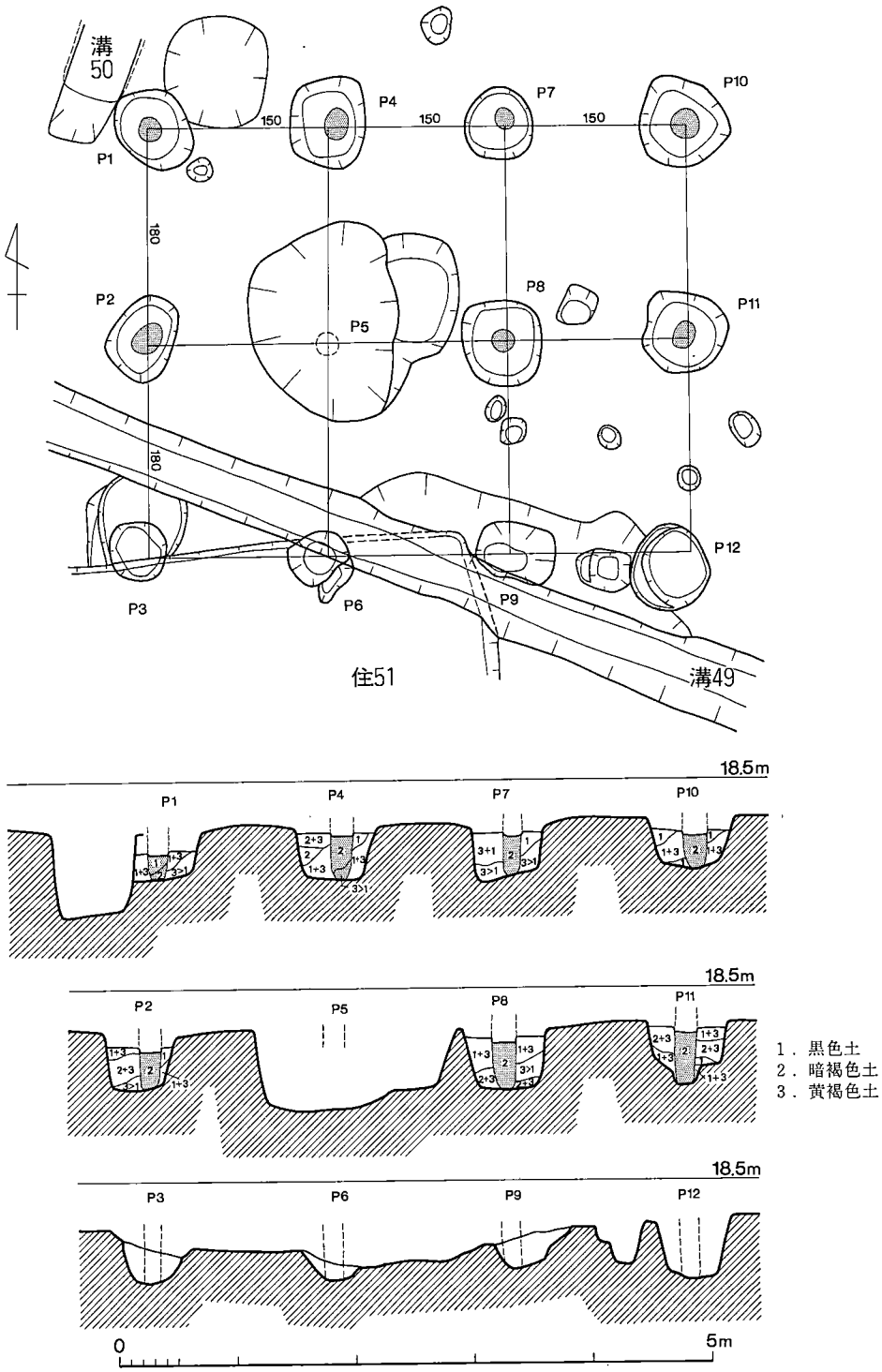
Ｆ群の北端に，第18号掘立柱建物と並ぶように占地するが，両者は主軸方位が異なる。東西に長い２×２間の総柱建物である。

主軸をN11°Wにとるが，これは中央のP.４—P.６の柱筋での計測であり，東・西各辺はそれぞれ北側へ拡がるので，方位は異ってくる。つまり，南辺が短かく，北辺が長い逆台形のプランをなす訳である。

梁行柱間距離は，１尺＝31.1cmとして4.5尺等間となり，南辺では１尺＝30.8cmとして５尺等間となる。北辺では各々６尺･5.5尺となるが，平均すると１



第186図　第17号掘立柱建物実測図（1/60）



第187図　第18号掘立柱建物実測図（1/60）

尺＝31.4尺で5.5尺となる。以上のことから北辺だけみると１尺＝30cmを使用しているようであるが，他の殆んどは１尺＝31.0cm強が用いられたようである。

各柱穴は，それ程大きくなく，上半を新しい小ピットに切られるものが多い。深さは50～60cmと平均している。出土遺物のうち，時期を確定できるものは無い。

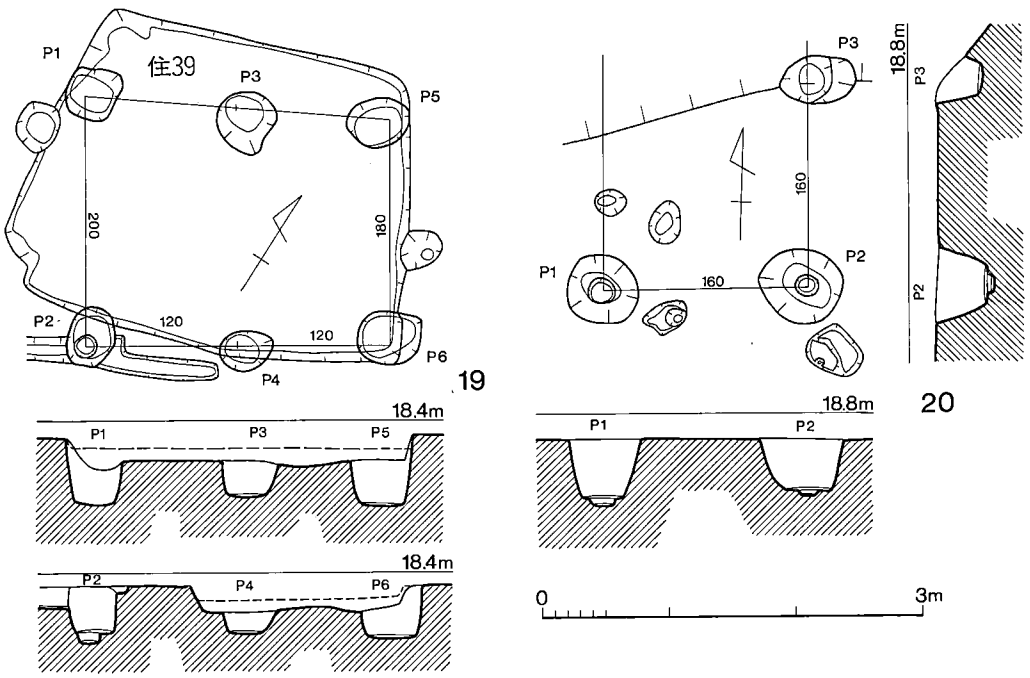
第18号掘立柱建物（図版94，第187図）

Ｆ群の中央北端に位置する２×３間の総柱東西棟建物である。南西端を近代の第49号溝と，第51号竪穴式住居跡に切られる。

主軸をＮ19°Ｗにとり，柱間心々距離は梁行６尺等間，桁行５尺等間となる。柱穴は方形プランに近いものもあるが，大旨円形プランが多く，深さは60cm前後と一定している。Ｐ.５は新しい攪乱壙により消失している。

掘り方埋土も密という程ではないが，一応互層をなす程度に搗き固めている。本遺跡の中では全体に掘り方も大きめで，しっかりした構築といえる。柱痕から推定される柱直径は，18～25cm前後である。

出土遺物のうち，時期の確定できるものは皆無である。ただ，本建物を切る第51号住居の出土遺物のうち最新のものが７世紀後葉の所産であるので，この第18号掘立柱建物は７世紀後葉を下限とする時期の構築が考えられよう。



第188図　第19・20号掘立柱建物実測図（1/60）

第19号掘立柱建物（図版51，第188図）

E群の北東端に位置する１×２間の小規模な東西棟の建物である。第39号住居跡と重なるようにして切り合うが，本建物の方が古い。

西側に7.4ｍ離れた第10号掘立柱建物と対になって計画されたもので，規模・主軸方位とも同じである。北端に並び置かれたE群集団のための高床倉庫と考えられよう。

主軸をN27°Wにとり，東西４尺等間，南北６尺の柱間距離をとる。各柱穴はやや小さめで浅いものが多い。

出土遺物のうち時期の確定できるものは無い。ただ，本建物を切る第39号住居跡が７世紀後葉と考えられるので，この第19号掘立柱建物は下限を７世紀後葉とする時期が示されよう。

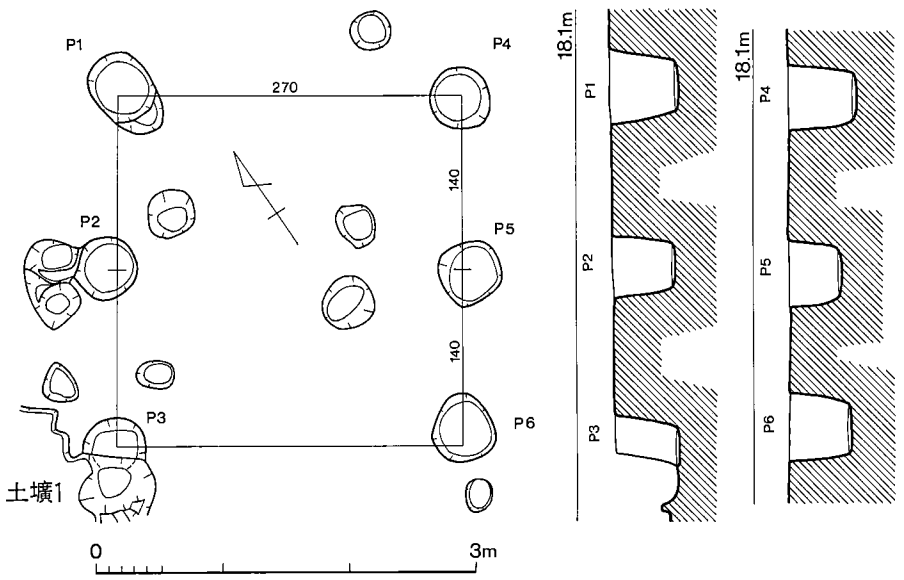
第20号掘立柱建物（第188図）

G群北端中央に位置する１×１（＋α）間の小規模南北棟建物である。北半は調査範囲外となり，全容は定かでない。

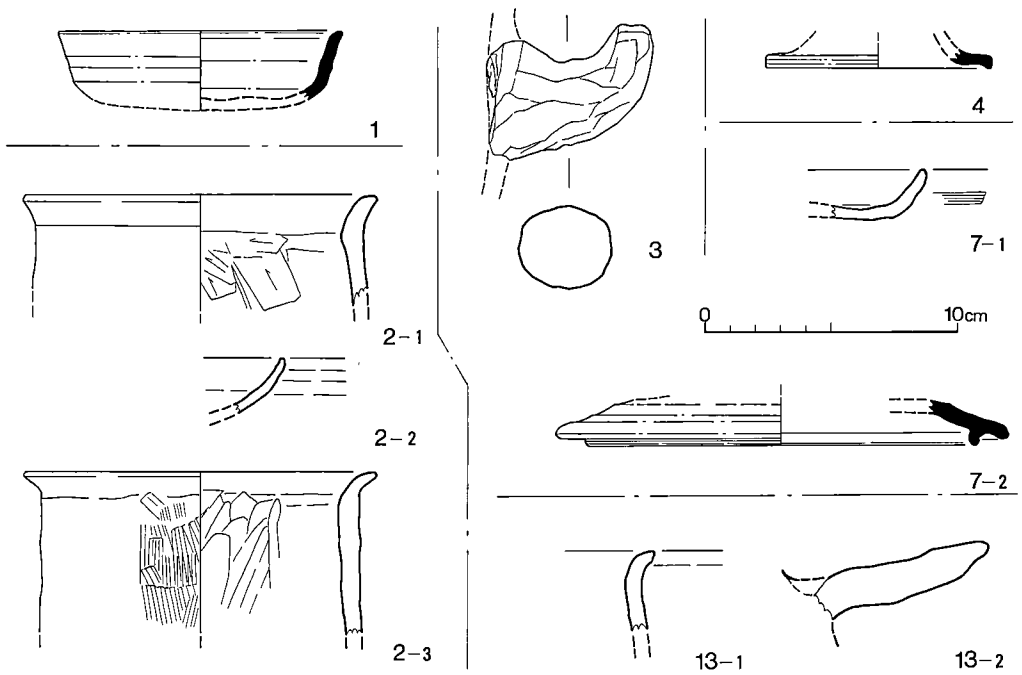
各柱間距離は5.5尺等間であり，北側へ延びたとしてもせいぜい南北２間の規模どまりであろう。柱穴もそれ程大きくなく，深さも60cm程度である。

出土遺物のうち時期を確定できるものは無い。　（以上中間）

第21号掘立柱建物（図版95，第189図）



第189図　第21号掘立柱建物実測図（1/60）



第190図　各掘立柱建物出土土器実測図（1/3）

調査区の西端に位置し，1号土壙の西側に隣接する。梁行1間(2.73m)×桁行2間(2.73m)の建物で，桁行の柱間は各1.36m (4.5尺) である。また，柱穴を結ぶ線は方形を呈する。柱穴は径・深さとも50cm前後を測り，かなりしっかりしている。桁行方位はN34°Eを示す。柱穴内からは土器の小破片が出土しているが，図示し得るものではない。　(小田)

第3表　薬師堂東遺跡掘立柱建物一覧表

No	主軸方位	棟向き	間数 梁行×桁行	規模(m) 梁行×桁行	柱間距離(m) 梁行(尺)×桁行(尺)	掘方(m) 径×深さ	その他 (周辺施設・遺物等)	切り合い関係 (古→新)	住居群	時期	推定尺 (cm)
1	N12°W	東西 (正方形)	2×2	3.6 × 3.6	1.8 (6) × 1.8 (6)	1.0 × 0.7 0.8 × 0.5	総住	建1→溝5	Eの東	上限 7C後葉	30
2	N 7°W	南北	2×4	4.2 3.9 × 6.3	1.95 2.08 × 1.6	0.8 × 0.7 0.5 × 0.5	雨落溝		G	(上限 7C末)	29.2～30
3	N43°W	北西～南東	1×2	2.4 ×3.25	2.4 (8) × 1.5 (5)	0.5 × 0.5 0.4 × 0.35			Eの東	上限 7C後半	30
4	N22°W	東西	2×2	2.74× 3.3	1.37 (4.5) × 1.65 (5.5)	0.7 × 0.9 0.5 × 0.55	布掘り総柱		A	上限 7C中葉	30
5	N15°E	東西 (方形)	2×2	3.0 × 3.0 3.25	1.5 (5) × 1.5 (5) 1.75	0.8 × 0.5 0.5 × 0.3	総柱	土壙30→建5→溝39	C′		30

No	主軸方位	棟向き	間数 梁行×桁行	規模(m) 梁行×桁行	柱間距離(m) 梁行(尺)×桁行(尺)	掘方(m) 径×深さ	その他(周辺施設・遺物等)	切り合い関係(古→新)	住居群	時期	推定尺(cm)
6	N 6°E	南北	2×2 (+α)	1.85×3.3 (+α)	1.35 (4.5) 1.5 (5) × 1.65 (5.5) 1.8 (6)	0.6×0.5 0.4×0.2	総柱		G		30
7	N12°W	南北	1×2	2.65×2.5	2.65 (9) × 1.25 (4.25)	0.7×0.7 0.4×0.6			G	上限 7C後葉	29.4
8	N 4°W	南北	2×3	3.6 ×4.65	1.8 (6) × 1.5 (5) 1.65 (5.5)	0.6×0.5 0.4×0.2		建8→住34	G	8C中頃	30
9	N 9°W	南北	2×3 (4)	3.3 ×5.55	1.8 (6) 1.5 (5) × 平均 1.8 (6)	0.5×0.5 0.3×0.3			G	上限 7C後葉	30
10	N26°W	東西	1×2	2.25×2.4	2.25 (7.5) × 1.2 (4)	0.6×0.7 0.5×0.4		建10→土壙24	E	(下限7C後葉)	30
11	N24°W	南北	1×2	2.1 ×3.45	2.1 (7) × 1.65 (5.5) 1.8 (6)	0.5×0.5 0.3×0.3		建11←?→建12	E		30
12	N31°W	南北	1×1	1.95×2.4	1.95 (6.5) × 2.4 (8)	0.5×0.5 0.3×0.3		建12←?→建11	E		30
13	N 7°E	南北	1×1	1.95×2.1	1.95 (6.5) × 2.1 (7)	0.4×0.5 0.3×0.4			D	上限 7C後半	30
14	N12°E	南北	2×3	3.3 ×5.1	1.65 (5.5) × 1.5 (5) 1.8 (6)	0.5×0.6 0.3×0.3			D		30
15	N 7°E	方形	2×2	2.66×2.85	1.33 1.22 1.38 × 1.6 (平均4.5等間)	0.8×0.7 0.4×0.3	総柱		D		29.5 30.3～30.6
16	N 8°W	方形	2×2	2.85×2.94	1.38 1.52 1.4 × 1.23 (5あるいは4.5等間)	0.85×0.6 0.65×0.5	総柱		D		29.4 31
17	N11°W	東西	2×2	2.8 ×3.45 3.08	1.4 (4.5) × 1.54 (5) 1.73 (5.5)	0.7×0.6 0.3×0.4	総柱		F		30.8～31.4 (30)
18	N19°W	東西	2×3	3.6 ×4.5	1.8 (6) × 1.5 (5)	0.8×0.6 0.6×0.5	総柱	住51→建18	F	下限 7C後葉	30
19	N27°W	東西	1×2	2.0 1.8 ×2.4	2.0 (7) 1.8 (6) × 1.2 (4)	0.5×0.5 0.3×0.4		建19→住39	E	下限 7C後葉	30
20	N 3°W	南北	1×1 (+α)	1.6 ×1.6 (+α)	1.6 (5.5) × 1.6 (5.5)	0.6×0.6 0.5×0.4			G		30
21	N34°E	北東～南西	1×2	2.73×2.73	2.73 (9) × 1.36 (4.5)	0.5×0.55 0.45×0.4		建21→土壙1	B	下限 7C後葉	30.3～31

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 ６２	登録番号 7

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告

— 13 —

上　巻

昭和63年３月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園７番７号

印刷　福岡印刷株式会社

福岡市博多区東那珂１丁目10－15

付　図　薬師堂東遺跡遺構全体図（1/400）